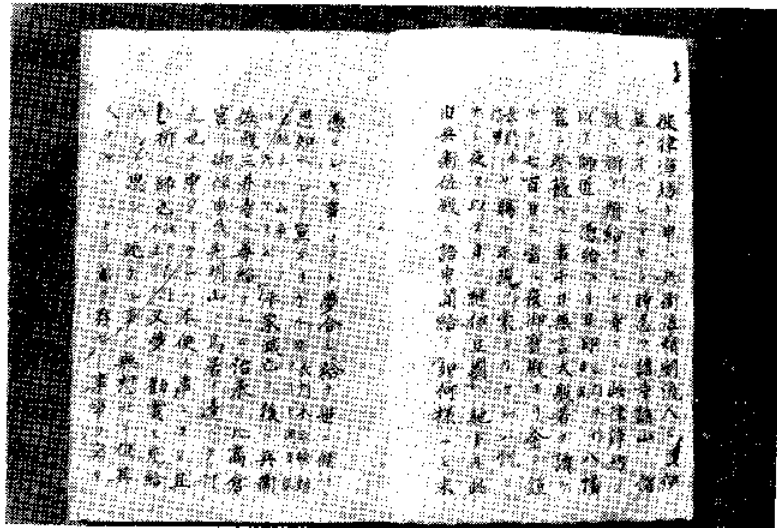
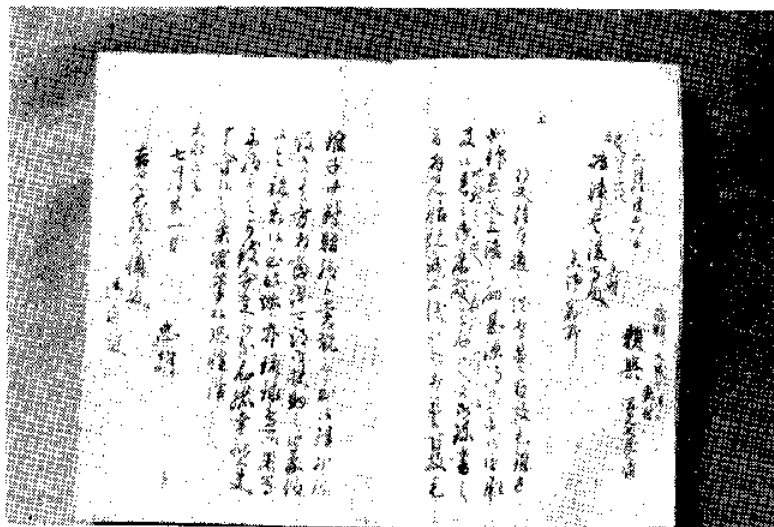


鹿兒島県史料集(Ⅳ)

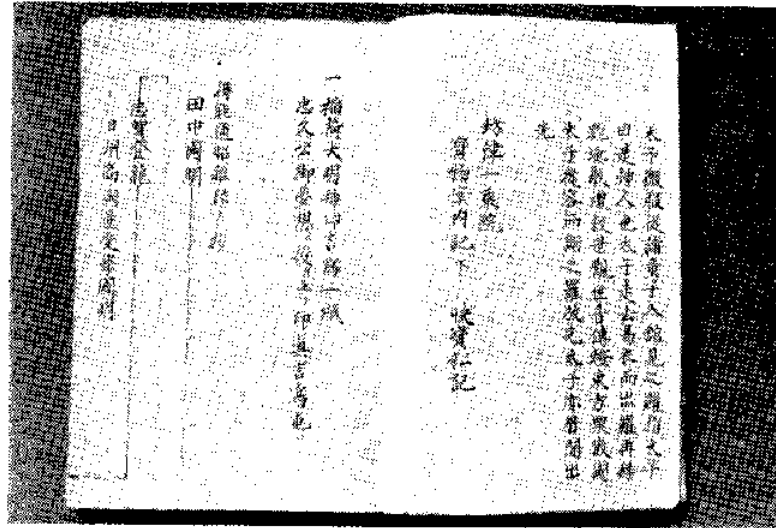
備忘抄・家久公御養子御願一件



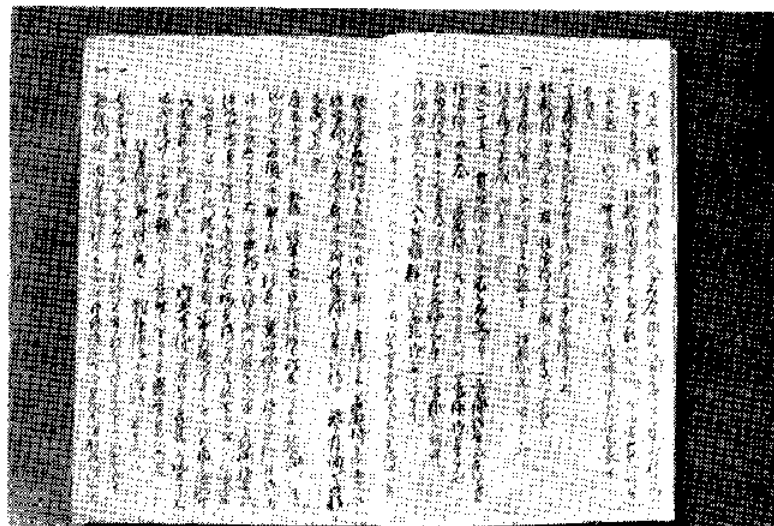
備忘抄 上巻 卷首部分 鹿児島県立図書館蔵



備忘抄 中巻 卷首 鹿児島県立図書館蔵



備忘抄 下卷 鹿兒島県立図書館蔵
卷首



家久公御養子御願一件 鹿兒島県立図書館蔵
卷首

刊 行 の こ と ば

鹿児島県史料第十五集として、ここに「備忘抄・家久公御養子御願一件」を発刊いたします。

本集は、本館所蔵本を原本として、県史料刊行委員五味克夫先生が筆写され、編集・校訂・校閲のうえ刊行のはこびになったものであります。御多忙のなかで、お骨折りくださいました五味先生に対し、心から感謝の意を捧げたいと思
います。

県史料の刊行は、資料の保存ならびに研究者の利用に供する趣旨のもとに、県立図書館の事業の一つとして進めてい
るものであります。また地方史研究をさかんにするための一助ともなればという願いがこめられています。皆様方の
研究に少しでもお役にたてば幸いに存じます。

昭和五十年三月

鹿児島県立図書館長

芳 即 正

解題

備忘抄

備忘抄は鹿児島県立図書館所蔵の和綴三冊本である。上・中・下からなる。内題に上では「備忘抄上三冊」とあり、中・下では「備忘抄中・下」の如く記されているから正確には備忘録抄といふべきであろう。題名によれば何かの作業に携わっているものが、その関連の必要性から書き留め、ためていたものの中から、さらに拾い出し書き記したものであることにならうか。しからばその作業とは何であろうか。それは抄記がすべて島津家の歴史関係史料であるところからみて、島津家の歴史調査ということができよう。史料の内容は系図・文書・記録・著書編纂物等多種であるが時代は幕末で止っている。また史料の性質は一般に流布しているものでなく、特定の場所に収蔵又は蒐集されたものであることがわかる。当時島津家にかかる作業を担当したのは藩記録所であるから、恐らく備忘録とは記録所職員の手になるものとみてよいであろう。年代のもっとも降る史料は、下の巻末の一乗院宛の文書等の借用状で文久甲子三月十三日とある。同じ下巻の middle に加治木新納家文書数点を採録しているが、その前文に次の記載がある。

「安政五年戊午正月持参被為見候間、忠清君忠秀君御名見得候分、拔書置惣而ハ六十通内外も候半、
加治木新納仲左衛門家蔵文書ノ写抄

伊地知季安

伊地知季安は著名な薩藩の史家、子の季通と共に二代に渡って編纂した『薩藩旧記雑録』については今更のべるまでもない。(鹿児島県史料『薩藩旧記雑録追録』) 解題、及び鹿児島県史料集(Ⅻ)『管窺愚考・雲遊雜記伝』解題参照) 当時季安は長年の在野の漢学者・史家としての勞苦がむくいられ、藩主島津斉彬の知遇を得て記録奉行の地位にあったのである。勿論彼は記録所に仕官するまでも多くの障礙をのりこえて老大な史料を書写していたが、記録奉行に就任してからは御文庫の書籍・文

書・記録等を閲覧調査することが可能になり、いよいよその史料の集積は夥しくなつたと思われる。また地方旧家の古文書の借用書写も容易になつた。右の例は加治木の新納家の文書を借写した際のものである。

同家は島津義弘の近臣新納旅庵の嫡系で近世初期の文書数十点の他多数の文書が現存している。(所蔵者前県立図書館長新納教義氏) そして季安が書写したものはそのほとんどが旧記雑録に採録されている。このことからこの備忘録は季安と深い関係ありとみななければならぬ。島津家の始祖を考証する仕事に晩年の季安はもつとも力をいれていたが関係史料系図等が多くせられていられることもこの推測を裏付けよう。勿論筆跡は季安自身のものではないし、季通のものでもない。しかしその内容は季安書写の史料を抄写したものといつてよいであろう。記載順もとくに整っておらず、断片的に史料の一部をかきとめたメモ風のものも多い。漢字と異体字を書き並べたものや、下書き乃至は落書ときえ思われるものも一カ所入っている。(本史料集では省略) しかし載録文書中、旧記雑録に収められていないものもあることに注意しなくてはならない。中巻所収の市来北山新兵衛文書は島津庄日向方北郷弁済使國師職の相伝関係文書で現在未刊の島津家文書中に含まれているが、旧記雑録には採録されていない。(拙稿「島津庄日向方北郷弁済使並びに國師職について」備忘録抄の所収北山文書の紹介) 日本歴史一七〇号参照)

家久公御養子御願一件

伊地知季安の著述の中、未刊のもの一つに県立図書館所蔵「家久公御養子御願一件伊地知季安考按」がある。同書には末尾に天保六年二月二十六日の年月日と平季安の署名があり、末文の一枚には彼の所感を要約して記してある。天保六年とは季安が文化朋党事件に連坐して流刑となり、許されて帰藩の後、逆境にありながら在野の学徒として史料の蒐集と考証にはげしい情熱を燃やしていたころである。彼はここで近世初期の島津家の継嗣争いに視点をあわせ、家統が義弘―家久―光久と相続され、安定をみるまで、或は家久以外の義久の女孀の統を相続者にしようとする動きがあり、(ことに彰久―信久―久章の統) 家久の嫡子の誕生が久しくみられなかったことが一層不安に拍車をかけていたことなど

嫡子光久の誕生後もなお不安定な状態であったことなどをあげ、光久以後島津家本宗の家統の固定、状態の安定をみるに至ったのは当時の名家老伊勢貞昌の奔走、苦肉の策がみられたのだとしてその忠誠をたたえ併せて秋水先生山本正誼が「島津国史」に貞昌の徳川秀忠の第二子を家久の養嗣子に迎えようと奔走したことをとりあげて非難しているのを正論とし、これまた誠忠の識見にして後人をして忠を尽させる因なりと称揚する。本文の書出しはまず名家老貞昌の取遣とされる右の一件についての疑問を季安はいかに考えるかということに始まり、貞昌の真意は家久・光久の統の確定にあったことを説明しているのである。後段は家統の確定をおびやかす以久・彰久・信久・久章の統の動きと、その圧殺の経過を史料をあげて説明している。ことに終りの部分は大和守久章の失踪事件の史料が大半をしめている。季安がこの継嗣問題をとりあげたのは単なる懐古趣味、興味本位の立場からではなかった、と思われる。貞昌の誠忠は一時は誤解されてもやがては明らかにになるとみた季安は丈夫は誠を以て事に当り右顧左眄を意に介すべからずと白らの遊境の身に言い聞かせたのであろう。そして正誼の正論はまたそれなりの価値のあることを認め、固陋偏狭な論断をさげ、寛容現実的な彼の史観の片鱗をのぞかせている。そして何よりも豊富な史料の引用は実証史家としての彼の面目を示している。これらの史料は後に薩藩旧記雑録にも採録されて、尠大な島津家々政史料を形成するのである。

なお県立図書館本は写本で原本ではない。原本の所在は明らかではない。題名を異にするが、同内容のものが磯尚古集成館にある。

磯集成館本は表題が「琴月公御継嗣考 全」となっており、最初の書出しに「琴月様御養子ニ国若様御願ニ付伊勢貞昌・伊集院久元御使者一件」の小題が付してある。また末尾に「此一冊者弟木尾澄明か蔵書ヲ以明治二十年七月廿八日六十九歳之老翁筆をもて写し置ぬ」の奥書があり、写者の名は墨で塗抹されている。内容についてみればほとんど相異するところはないが、県立図書館本の方が行かえ、漢字を和字に、正字を略字にかえている部分が多く、共に写本としても磯集成館本の方がやや古体を存した恰好となっている。本史料については既に桃園恵真教授が鹿児島

大学法文学部紀要において取りあげておられる。(文学科論集一「持明夫人」参照。)

また拙稿「新城島津家と越前島津家―末川家文書の紹介―」(鹿児島中世史研究会報31)同一「新城島津家々譜所収文書」(同32)参照。

五 味 克 夫

例 言

- 一、本史料集には鹿児島県立図書館所蔵、(1)備忘抄並びに(2)家久公御養子御願一件伊地知季安考按を載録した。
- 二、底本に本来句読点はなく、(1)には返り点送り仮名の付したのもあるが、便宜上前者を私見により付し、後者を省略した。
- 三、誤字と思われるものについては若干正字に改めたものがあるが、当字・俗字はつとめてそのままの形に止め、一々正字に訂正はしなかつた。
- 四、印刷の都合上、漢字については当用漢字に改めたものが少なくない。又変体仮名もすべて通用体の平仮名に改めた。花押も省略せざるをえなかつた。
- 五、誤謄、欠脱等の他註記すべきものについては右傍に括弧を以て私見を記し、不明箇所は□を以てあらわし、或は右傍に(ママ)の如く記載した。
- 六、本史料の編集、校訂を担当したのは鹿児島大学五味克夫である。

備忘抄上抄三冊

備忘抄抄三冊

上抄三冊

宮中流失事

宮ノ御首ヲハ取テケリ、悲ト云モ疎也、寺法師律淨坊日印 本書十四卷 作日胤下微之
 ノ弟子ニ伊賀坊乘四坊慶秀カ弟子ニ刑部房殘留テ命モ惜ス戰ケリ、白刃
 ヲ拭ニ隙ナシ、爰ニシテ飛驒判官カ郎等多討レニケリ、律淨坊日印モ討
 死シテ失ニケリ、心ハ猛思ヘ共小勢ハ力及ハスシテ伊賀房刑部房奈良ノ
 方ヘ落ニケル、彼律淨坊ト申ハ兵衛佐頼朝流人ニテ伊豆ニオハシマセン
 時忍テ諸寺諸山ノ僧徒ニ祈ヲ附給ケルニ寺ニハ此律淨坊ヲ以テ師匠ニ憑
 給ヘリ、日印 長門本作 日胤 八幡宮ニ參籠スル事千日、無言大般若ヲ讀ケルニ
 七百日ニ当ル夜、御宝殿ヨリ金ノ鏡 長門本 作甲 ヲ賜ト示現ヲ蒙タリケレハ愧
 ヲナシ、夜ヲ以テ日ニ繼、伊豆国ヘ馳下リ、此由兵衛佐殿ニ語申聞給テ
 如何様ニモ末憑モシキ事ニコソト夢合シ給テ世ニ候ハ、思知ヘシト意タ
 リケルカ 長門本云騒動アリト聞日胤急馳 上リ此事ニアヒテ死ニケリ云々 平家滅亡ノ後ニ兵衛佐殿三井寺ヘ
 尋給ケルニ、治承ノ比高倉宮ノ御伴申テ光明山ノ鳥居ノ辺ニテ打死也ト

申タリケレハ不便ノ事ニコソ、且ハ祈ノ師也 此下長門本注于下 又夢ノ勸賞モ充給
 ハント思シニ死ケル事ノ無慙サヨ、但其人ナケレハトテ兼テ存セシ事争
 カ空カルヘキトテ伊賀國山田郷ヲ三井寺ヘ寄ラレテ 長門本云夢ノ勸賞ニモ 孝養スヘシ是律淨坊
 カ故ナリ 律淨坊カ孝養報恩退転ナシトソ聞ユル、
 トテ云々

右參考源平盛衰記

東鑑治承五年五月八日条云、圍城寺律靜房日胤弟子僧日慧 坊師 參著于鎌
 倉、彼日胤者千葉介常胤子息前武衛御祈禱師也、仍去年五月自伊豆國遙
 被附御願書日胤給之、一千日令參籠石清水宮寺無言而令見讀大般若經六
 百卷之夜眠之内自宝殿賜金甲之由感靈夢、潛成所願成就思之処、翌朝聞
 高倉宮入御于三井寺之由詔武衛御願書於日慧、奔參詣御方遂同月廿六日
 自給承二年九月至四年五月十五日高倉宮密々入御三井寺 島津本師公
 於光明山鳥居為平氏被討取訖、而日慧相承先師之行業、果千日所願、守
 遺命欲參向之処、都鄙不静之間于今延引之由申之云々、

廿二卷三十五 忠久御下向之日記表後紙一軸也、
 鎌倉若宮八幡宮別当八月一日八幡御宝殿之トヒラ開カントシ玉ヘハ日來
 ナカシ虫食トヒラニ出來リ玉ヲ、能々立寄り奉見ハ右大將頼朝ノ姫君ニ
 テアリト顯レタリ、自ラ死テ七日ト申ニ都率ノ内院ニ迎ヘラレマイラセ
 候ト虫食ニ顯レ候上ハ無面目御事にて候ヘ共、自カ男ニテ候木曾ノ義隆
 ヲ無情モ殺玉フ事無面目子細ナリ、故ニ依テ命ヲ捨テ、義隆來世マテ契
 ヲ成スヘキ故ニ命ヲ捨ルナリ、頼朝卿朝臣於テハ七代マテノ崇ヲ成スヘ
 シ、中ニモ頼家・実朝コソウラメシク存候ヘ、返々モ自力願ヲ遂テタヒ
 玉ヘト、北条四郎時政ハ九代マテ可守ト若宮八幡ノ御宝殿ノ戸ヒラニ顯
 玉フヲ、別当ハ是ヲ奉見テケニノ事アリ也ト思玉テ、聽テ此由ヲ右大
 將殿ニ申サレケリ、其時頼朝則若宮八幡詣リ御宝前ニ參籠シ玉フ、時ニ
 頼朝別当ニ仰ケルハ立ヨリ虫食ヲ見ニ都率内院ノ迎程ノ物ナレハ丸カ子
 孫ヲ崇ルヘキ事不可有疑、姫カウラミモ事アリヤト仰レテ涙ヲ流シ玉イ

ケリ、其時別当モハケ國ノ大名モ上下万民ニ至マテ哀極泪ヲ流ス許也、
 良有頼朝仰ケル事ハ別当何ニ丸カ子孫ヲノコシ置クヘキ由仰ケレハ、別
 当ハ尺取直シ愚僧カ申ヘキ事ハハ、カリナレ共、平重忠ヲ召尋ソロヘト
 申玉ヒケリ、其時頼朝重忠ヲ召シテ仰ケルハ云、何カ重忠承レ、丸カ子
 孫ヲ崇ルヘキ由申所道理ナリ、然ニ三郎ヲ重忠ニ任スル也ト仰ケレハ重
 忠承テ恐ニテ候ヘ共、若君ノ御事請取申候ト申ケル、頼朝聞食シ大ニ御
 歎嘆シ玉フ、重忠重テ申ケルハ同ハ今日若君之御ニテエホシヲキセ奉ラ
 ント申ケレハ、大將殿聞食シテ菟モ角モ重忠法弟也ト仰有ケレハ、其時
 重忠聽テ名乗ヲ忠久ト申奉ル也、其時ハケ國之大名ハ一同ニ重忠ヲウラ
 ヤマヌ人コソナカリケレ、其時頼朝又三郎ニ所領ヲ取セント思食シ重忠
 ニ仰ケレハ何國ソト御尋アリケレハ北國ニ越前國・若佐之國・伊勢國・
 信口國コソ未守護モ定候トアリケレハ、其時頼朝四ヶ國ヲ取スルト仰ケ
 ル重忠重テ申ケルハ同ハ大隅薩摩日向ヲソエテ七ヶ國給リ候ケリ、忠久
 ・薩摩へ下シ申サント申サレケレハ頼朝ハ菟モ角モ重忠法弟也ト仰ケリ
 六十六ヶ國內ニ七百七十七津ハ忠久ニ取スルト仰ケル、承久元年八月一
 日相馬藩改文治宜改元歷而十八歳之時云則合矣
 日忠久七ヶ國ヲ給リ御知行定候、此モ重忠ノ申状ニ依テ也、承久三年六
 月一日下着候畢、
 丹後ノ御局ハ惟宗ノ卿カムスメナリ、忠久ノイモセコノハ殿ノヒメナリ
 於樹佐木之朝臣是ヲ堅固ニ可用物ナリ、能々可秘々々、
 宗 親

百練抄七

從三位平盛子 故撰政北政所
前太政大臣女 被下準三后勅書、

治承二年七月十五日白川殿 故撰政室 書写金泥一切経奉納春日社、

三年六月廿日從三位平盛子 中撰政室 有贈位、
 去月十七日薨去、今日被仰廢朝、

十一月十五日 今日関白前太政大臣云々、解官以二位中将基通卿可為関
 白内大臣氏長者之由宣下云々、
 四年五月十五日法皇第三宮 廿三条宮、新院御舎 配流土佐国云々、
 山槐記
 全二年閏六月十六日癸卯天晴卯時、右二位中将基通室家入道大産女女子去
 産男但
 彼兒

全三年二月八日丙申天晴、今日春日祭也、近衛使右少将兼侍九人 左衛門
尉成清

左兵衛門尉久方、忠久、左馬允公定
 親綱、高清、内舍人清美、景基、宗広
 承元三年己巳十二月十五日乙亥、近国守護補任御下文備進之、其中云々
 小山左衛門尉朝政申云、不港下御下文、曩祖下野少孫豊沢為当国押領使
 如檢斷之事一向執行之、秀郷朝臣天慶三年更賜官府之後、十三代數百歳
 奉行之間、無片時中絶之例、但右大將家御時者建久年中亡父政光入道、
 就讓与此職於朝政、賜安堵御下文許也、
 元禄十五年五月金嶽寺書出
 一嘉禄三年丁亥癸卯月十二日

丹後之御局郡山於厚地御逝去御年八十二、御廟所厚地ニ有之、
 政佐 初清重
 鎌田小藤次修理亮

忠久主文治二年丙午六月朔日發駕關東、同八月一日下着薩摩国山門院
 政佐在供奉之列也、
 一卷 忠久公より忠宗公迄

一卷 武久公まで
 一卷 忠昌公まで
 一卷 勝久公まで

丹後御局 丹後ニハアラス
 是モ近衛殿御家人也
 一卷 勝久公まで
 一卷 貴久公まで

一卷 義久公義弘公まで

一卷 義久公義弘公まで

一卷 久保公まで

一卷 光久公まで

古系図十卷

式 島津相馬系図 垂水町田七郎兵衛
不写カ

諱真明 口ナシ
一元利

○正文在島津筑後 内之浦坂本主左衛門同本
右大将

○頼朝

頼家親王 左大臣 母遠江守時政娘也

実朝親王 右大臣 征夷將軍

忠久親王 大政大臣

白河法王ヨリ為種子定置禰字征夷將軍ト宣旨ヲ下シ給フ也、

代イ 延喜イ之イ 御袋八國祇御門三代末惟宗卿比幾判官藤四郎義教カ娘也、忠久十八歳之御時高

倉イ 祝イ玉也 也イ 藏宮ニイハレ給フ

忠久御下向ニ付、子細白河法王ヨリ宣使ヲ成給フ、九州ノ諸士忠久ヲ可用ト被仰

王イ 食イ テ三玉祇殿ヲ被召テ西園ノ勅使之由ヲ宣使出シ泉ル、三宝祇殿承リ隨宣使九州ニ

下給フ、去程ニ九州ノ諸士宣使ヲ戴テ中国安芸國ニ忠久ノ打迎ニ參泉ル、黒木義

所ヲ作雜償ヲ上申御目懸リ候、敏參テ御目ニ懸故、仍敏參上ト号ス、九州ノ物共

者イ 敏ク參テ御目懸故仍テ敏參上ト号ス、是ハ同忠久ノ被仰状也、鎌倉之若宮八幡宮

ノ別当八月一日ニ八幡ノ御宝殿ノ扉ヲ開カントシ給ヘハ日来ナカリシ虫食有リ、

屏ニ出来能ク立寄リ奉見ハ、右大将頼朝ノ姫君ニテ有トテ死テヨリ七日ト申

ニ都率ノ内院ニ被迎參セ候ト虫食頭レ玉フ、無面目申事ニテサウラヘトモ自カ

男ニテ候本會ノ義隆ヲ無情殺シ給事無念之子細也、故ニ命ヲ捨テ義隆ニ來世ニ

及テ契ヲ成ヘキ故ニ仍命ヲ捨也、頼朝ノ子孫ニ於テ七代ニ及テ崇ヲ成ヘキ、中

ニモ頼家、実朝コソ怨メシク存シ候、返モ自カ願ヲ遂テタビ給ヘト北条ノ四

郎時政九代ニ及可守、若宮八幡ノ御宝殿ノ扉ニ顯シ給フ、別当ハ是ヲ奉見現々

々、是モ理也、此由ヲ右大将殿ニ申サレケレハ、其時頼朝モ別当モ若宮八

幡ニ參詣被召御宝前ニ參籠シ給フ時、頼朝別當ニ仰ケル、立寄テ見レハ都率ノ

内院ニ進程ノ者ナレハ丸カ子孫ヲ崇ルヘキ事不可有疑、姫カ申モ理ナリト有仰

テ泪ヲ流シ給イケリ、其時別當ハ八ヶ國之大名上下万民ニ至リテ哀ヲ極、涙ヲ流

ス計ナリ、良有テ頼朝仰ケル事ハ、何丸カ子孫ヲ殘置ヘキ由ヲ仰ケリ、其時

別當芻取直シ申シ泉ル、愚僧カ申ヘキ事ハ憚ノ事ナレ共、平ノ重忠ヲ石サレ

テ御尋候エト仰ケル、何重テ承リ候コト恐ニテサウラヘトモ、若宮ノ御事請取

申候ト申ス、頼朝聞食火ニ御敬感シ給フ、重忠重テ申ケレハ、同今日若宮之御

前ニテ鳥帽子ヲ着セ奉ラント申サレケレハ、大将殿聞食テ死モ角モ重忠法弟ヨト

仰有ケレハ、其時重忠鄭テ名乗ヲ忠久ト申奉ル也、其時八ヶ國之大名一同ニ重

忠ヲウラヤマン人コソ無リケリ、其時頼朝又三郎ニ所領ヲ取ラセント思食、重

忠ニ仰ケレハ、何所カ吉國ノ有カト御尋有ハ、北國越前・若狭・伊勢・信濃ノ

國コソ未タ守護モ不定候ト申ス、其時頼朝四ヶ國ヲ取スルナリト仰ケル、猶重

テ申様、同ハ大隅・薩摩・日向ヲ削、七ヶ國ヲ給リ候テ忠久薩摩ヘ下申サント

申サレケレハ、頼朝宛モ角モ重忠法弟ナリト仰ケリ、其時六十六ヶ國ノ中ニ津

ハ七百七十七津也、是ヲ忠久ニ取スルナリト仰ケル、文治元年八月一日ニ忠久

七ヶ國給リ、所領之御知行定候、是モ重忠ノ依申状ニ也、

忠久十八歳之御時、文治元年六月一日関東ヲ立都ニ上洛有テ内裏ニ参籠申シ、西

園ニ御下向ノ由ヲ奏聞ス、君ハエイラン有テ宣使ヲ下シ給フ、一年モ宇治ノ平等

院ニテ打レタル高倉ノ宮ニ似タル事ノナツカシサヨト被仰テ源ヲ流シ給イテ西国

へハ下スマシ事也、丸カ子ニセント宣使ヲ成給テ高倉宮ニ十八日即位シ給フ、此

ノ由ヲ頼朝聞食、廿一度ノ御託事有テ内裡ニ奏聞シ給ヘハ君モニイラン有テ宣使

有ケリ、頼朝カ申モ事ハリ也、サアラハ西国ヘ下スヘキトノ宣使有、攝宇征夷

將軍ト示シ給フ、然ハ將軍ノ騎馬ハ二千騎之物也、二十三騎ノキハラ打セヨトノ

宣使有テ使ヲ蒙ニ依ル、故ニ卅三騎ノ騎馬ヲ打セ候、去程ニ西国三十三ヶ国ヲト

ラスル也トノ宣使也、

本田ハ幡之奉行、酒匂ハ杏ノ役、猿渡ハ御劔之役、左近尉ハ幡指ノ役也、鑑之

彼ハ渡野辺、甲之役ハ左實、剝精ノ役ハ立山、籠手之役ハ二ノ宮、腹当之役ハ

蓮・香・難・波・瀬・能・長野・石碓・福崎、何モ此人々ハ西国ノ軍奉行ニテ

候也、

イ 建久六年乙卯始テ薩摩エ下向ス

大将大臣大夫判官諱ハ徳弘イ

○忠久親王

法王 イナシ 政イ 自白河鳳皇忠久之親王大將大臣ト示給候、

右正文島津筑後島津之継凶

一当家之幕之文事蓬萊之龜ニテ候、龜之上ヲ十文字ニ縫セ候、彼十文字ト

申ハ天地ヲ表タル物也、是ハ天下之總文ニテ候、自頼朝給候家ニ統時口

伝ヲ相伝ス、

本朝帝皇凶ト選シテ天神七代ヨリ系起シ、忠昌公ニ訖ル、系凶ノ拔書也

但右ノ中義仲ノ子義隆ノ伝ニ

義隆御台頼朝娘也、夫ヲ打ル、カ故ニ仍崇ノ神ト成給、七代マテ可崇ト

ノ誓願也、故ニ仍忠久ヲ西国ヘヲトシ給フ、是ハ重忠カ計事也、

○島津筑後忠直格義

文書系凶写

御兄弟争位ヲ候テ御兄弟ニ 云々

清和天皇

右系起中略

頼朝 正治元年正月十二日五十三死去

範 頼 十四歳テ伊豆国ニ流罪 蒲之御曹子 三川守

義 経 源九郎伊与守正位 牛若沙名王丸 平家十六万騎云々

頼 家 山城守 右大将 從二位 西將軍

実 朝 相州大守 從二位東將軍

能 亮 御分國七ヶ国和泉州・信州・越前・伊勢・大隅州・日向州・薩摩州

○忠 久 從四位判官位豊後守 童名法師房丸

○忠 義 豊後守ト号 左衛門三郎

近衛之姓ヲ賜テ始テ藤原ト号、此由ハ頼朝之子孫可絶ト云 虫食ノ正八幡宮

柱ニ□ヲ於源氏ノ始還テ九州下向候テ鎮西之將軍ト申也、

重法沙丸

右系切ハ忠昌公、伊集院ハ瀬久、川上ハ忠豊子ノ虎五郎等ニ絶筆ノ

本也、

○同忠置格護

仁王五十六代
清和天皇下系出中略

賴行

治承四年庚子四月高倉宮御謀

源三位賴政

寮時打死也、

女二条院讃岐

伊豆守仲綱

源太夫判官

伊豆藏人兼綱

判官代

二条藏人

賴茂

仲家

藏人

義仲弟ニテ養子

又一本当家御系図清和ヨリ貞久迄

賴朝

忠久 号始島津家母後御

延久六年八月一日薩摩三ヶ国下着御年十五歳

衛門兵衛佐豊後守大夫判官

○川上上野久尚系図文書写

本ノママ

島津者繼凶源家也、賴朝之為三男故如此候、雖然然八文字殿一節奉養候

故ニ先者惟宗氏也、其後近衛殿御養子故藤原也、又承久之比光明峰守殿

御子天下之為関白、其時実基公之御養子トシテ藤原氏給ラセ給ケル事然

者尚度也、御エボシ親ハ畠山・秩父平重忠也、然モ彼重忠之御聲トシテ

建久七年丙辰三ヶ国へ御下向也、又丹後之局者比城藤四郎ノ姉也、惟宗

卿之御娘也其故也、

○正文在伊集院善太夫

人王五十六代云々

清和天皇下系出

賴家

賴朝

美朝

豐後守 号島津判官法名得仏
弘安九年丁亥三月廿一日薨去

忠久

承久三年六月為近衛殿養子改惟宗氏号藤原、其母丹後ノ御局也、

忠季

島津太郎 若狭守

忠經

次郎御母本田次郎親經女也、
平朝臣義時退治之時
為京方於宇治川戰死

抑留

出水川保平右エ門同系

○正文在長島士四本嘉左衛門 見写

貞觀元六一日御即位

清和天皇下系出

忠久

左衛門頭 分国七ヶ国日向・大隅・薩摩・越前・若狭・伊勢・信濃

豐後守

母儀丹後御局承久三年六月一日右兵衛佐大夫判官内裡ニテ元服、近

衛殿之姓を借号藤原ト法名得仏

○正文在島津備中

五品

大學少允

四品掃部頭

孝親

詩作

基言

使五品豊後守

豊後太郎兵工尉
法名生

同三郎
法名

忠久

忠高

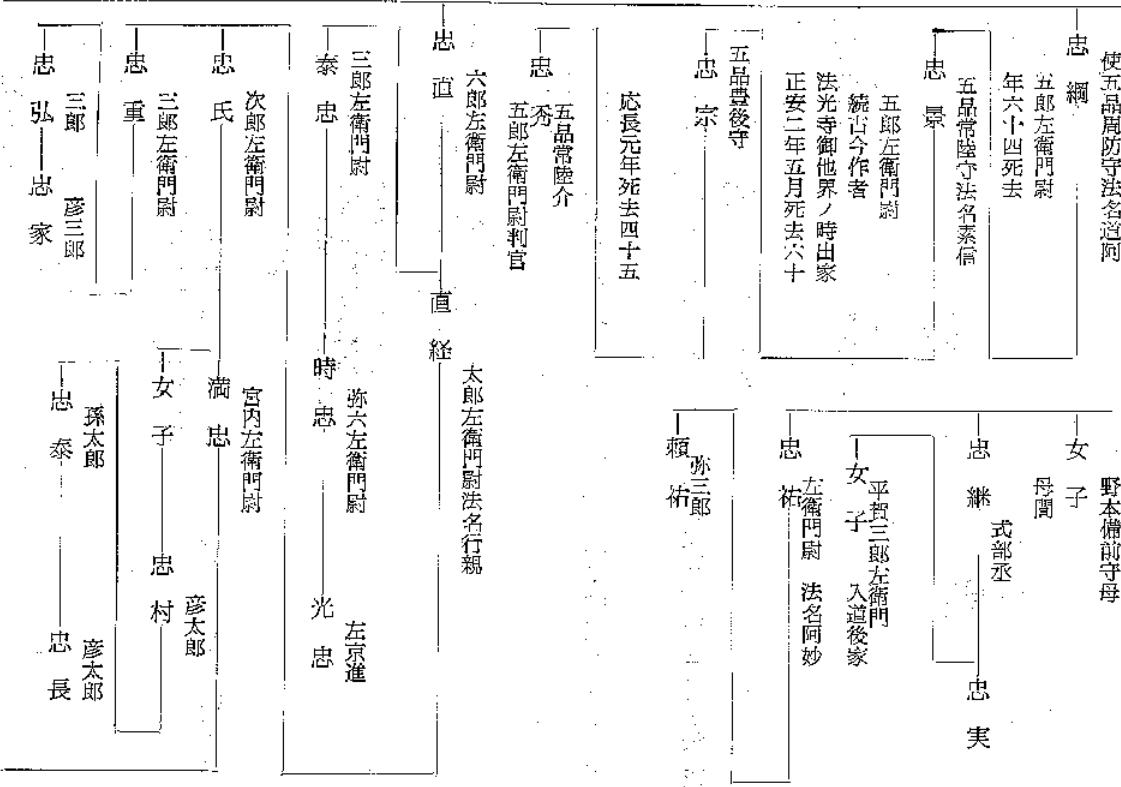
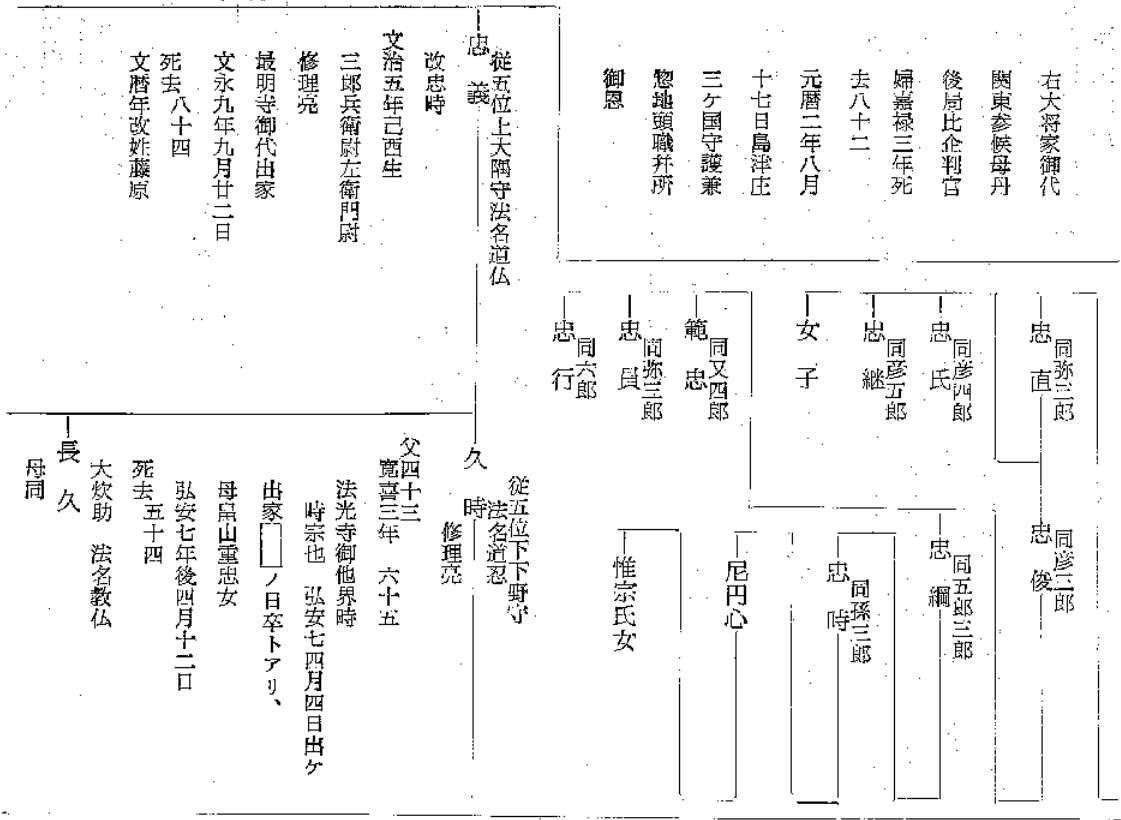
忠春

左兵衛尉

左衛門尉

同八郎

忠澄



次郎
忠經

九郎藏人

置村
十郎左衛門尉

梶原源太左衛門尉妻

小田常陸前司母

女子

又イ
三浦大太郎式部妻

女子

美濃局御所官女

女子

元禄十五年閏八月日帳

閏八月十九日晴天

忠光
九郎藏人

景村
十郎左衛門

梶原源太左衛門妻

女子

小田常陸前司

女子

三浦大太郎式部妻

女子

美濃局御所官女

女子

右之人數御前ニ被召置候折本御系図ニ忠久公御子忠時・忠綱・忠直と小
ニ為龍下由候て今日当座へ被致持參候事
田常陸介室と有之候女子と之間に系り入善ニ先年諸系図撰前ニ伊地知助
右衛門役儀之節古系之内より見出、押札いたし御前江被差上置候ニ付、
系り可入儀歟、考候而可申上由御意候、是ハ御文書箱之内江有之候十卷

計之古系図之内ニ卷右之人數為系入有之歟と覺申候、其許ニ而御見合
御考御兩人思召之程究而急便ニ可被仰越候、我等存候ハ龍伯公御代御究
被遊候黄地紙之御系図ニも見へ不申候、尤御記録ニも系り入無之候、川
野六兵衛書調被差上候御系図ニも無之候、然者此節系り入候儀ハ不入事
之様ニ存候、殊ニ梶原源太左衛門など御縁中之儀日記ニも見得不申候、
各御了簡究而可被仰越候、恐惶謹言、

八月廿五日

田中五右衛門

国明判

市来源右衛門殿

肥後仁右衛門殿

覚

御前江被召置候御系図忠久公御子忠時公・忠綱・忠直女子と有之候、然
処ニ先年古系図の内より被見出候忠久公御子之次第相替候付、御系図ニ
御系入被成度之旨先役人伊地知助右衛門御方御同役之節被申上置候、右
付此節忠久公御子之次第古系図之写御遣致拜見候、右之通ニ忠久公御子
系り入候御系図御文書箱之内見合申候処ニ、右通ニ系候御系図迄も無
御座候、依之越前島津之系図写島津節中殿へ有之由候故、取寄見申候処
ニ御方より被書候忠久公御子之次第不相替候、且又志布志衆中山田七郎
右衛門当座ニ被差出置候老枝古系図ニ忠時公御兄弟之次第委敷系候而有
之槌成古系図と相見得候故引合せ見申候得者、其方より被遣候書付ニ相
違之所も御座候、左候得者此節御系入可被成儀不入儀歟と存中候、為御見
合右七郎右衛門古系図之写遣申候間、其元ニ而御引合せ可有御覽候、被
仰聞候通御系図之儀ハ先役人被究置、天下ニも被出置候御系図之儀ニ御
座候得者、此中之通ニ被召置可然存申候、乍然御家ニ付差立候訳も有之
隨成証書出申不被系入候而不叶儀ニ御座候ハ、御穿議之上を以可被系入
事御座候得共、其通ニも無之、七郎右衛門古系図ニも不致符合候得者、
御方より被仰越候通此節御系之儀者不入儀と御同意ニ存候、我々了簡之
通可申人之旨承候故、如此ニ御座候、以上、

九月二日

御記録所

市来源右衛門

田中五右衛門殿

肥後仁右衛門

向之鳥萩原介大夫

五年若菜の巻ニ

出家して西山ニうつりすませ給ふ

此間

本云元亨三年癸卯八月日

第二本云正中二年十月下旬

第三正平廿一年丙午卯月一日任本書付了、

応永卅五年卯月一日

正長式年己酉二月五日

平等王院

奥切

小坂古川村百姓喜次郎由緒壽ノ中

從清盛時代迄頼朝之代王即位之次第

白河院云々中間略ス

後白河院

人王七十六代廿九歳即位、治三年、建久三年
子三月十三日崩御、六十六歳

二条院

人王七十七代十六歳即位、治七年、永万元年乙酉七月廿一日崩御、廿
三歳此時南都与延曆寺額打ノ論アリ

六条院

人王七十八代二歳即位、治三年、安元二年丙申七月十七日崩御十三歳

高倉宮

無即位、治承四年庚子五月

任三日宇治橋合戦之時、南

都へ落給フ処ヲ奉打

高倉院

仁王七十九代堅泰門院御腹八歳即位、治十三年清盛入道智也、廿歳ニ
シテ位ヲスヘテ後藤鳥ニ御幸アリ、治承五年辛丑正月十四日崩御、廿
一歳王子四人

一宮安德天皇

仁王八十代禮禮門院御腹三歳即位、治三年、文治元年乙丑三月
廿四日於長門國二位尼奉懷入海中、十八歳也、

二宮 無即位

三宮 無即位

四宮後鳥羽院

六歳即位、治十五年、此院ハ木曾左馬頭以來ノ為王、木曾ニモ
頼朝ニモ義経ニモ北条四郎時政ニモ頼朝ニモ頼朝ニモ頼朝ニモ頼朝ニモ

偏後白河法皇御計也、仍頼朝逝去之以後成頼朝之代、承久三年兵
乱之時隱岐國へ被流、後鳥羽院下、延暦元年己亥三月廿二日崩

御、三十六歳也、

元龜三年壬申卯三日於高山寺薨政等

島津ノ豊後守頼朝ヨリ前ハ平 氏 頼朝ヨリ後 家ノ子ハ伊藤つちもち也
岩ヲニ松 白十文字 頼朝ヨリ後 家ノ子ハ伊藤つちもち也

頼朝ノ御時島津ニ実子ニ付テ頼朝ノ二男ヲ島津ニ被下、其ヨリ源ト氏チ白

十文字是也、大原やおしおの山の下云にたつハすミのけふりけりトあそ

はし候、島津は頼朝ノ正すち、將軍ノ家ト申伝ル事也、島津越前國厨浦ニ

居住有事今にいたるまで十六代也、当國在々所々ニ島津七頭トテ有之、今

ハ一人も御座なく候、頼朝・義経・高氏將軍代々御かん状拜見候、今ハ

方々ニさんさひ候て高氏將軍ノ計あまた御座候、涯分調法仕進上申度心中

迄候、厨浦ニ寺を造立し西徳寺トテ一字立、我等ニ今ニ弟子ヲおき申候、

島津殿もしハ皆々浦人ニ成如此にて候、次ニ越後房しなのいつなへまいる

へきよし申され候へ共、方々とりあひにて候、料足志貫文あつかり申候、

いつまでなりとも御くたり時渡申候へく貴殿様此越後房へ御目かけられ候

者大慶申尽かたく存候、諸事重而可申上候、

右松山平田有堅坊より抑留之古書也、

外題光久公千時尊齡七十三元禄元年也

一 御宝鑑帖 十五折疊一尺四寸六分

横二尺一寸五分

頼朝御御袖判元曆二年六月十五日伊勢國波出御厨御拝領之御下文ヨリ

高武蔵守師直康永三年十二月廿二日奉書迄五十三通

一 同巻帖 折數腰儀寸尺同上

足利直義貞和四年正月十二日証判ヨリ將軍義昭公二月廿六日御内書ま

て五十四通

右三帖精裱紙下繪有、金袖裏十文字御紋摺赤銅金物紫縮緬給巾包之、

全
一同老帖 十三折堅唐尺七寸横二尺三寸二分

家康公十月十一日御書より秀忠公十月廿九日御内書迄三十三通
右三帖御番所御格護

外題無

一同二帖 十三折堅一尺四寸六分 横二尺一寸五分

袷裝金欄裏金十文字御紋大小摺交四方
金物赤銅八双淺黄股紋包之

御文書六十四通

伊作家一帖御文書五十三通イ五十一通

右三帖岩崎御文書藏御格護

一御卷物一軸 長一尺七寸五分 袖絹織物
袖裏金砂子若松棧様軸箔磨啄木

右高麗唐島御戦功ニ付御朱印御感書五通

外題白紙

一御軸物一卷 長一尺六寸袖絹織物袖裏金地十文字
御紋大小摺交軸箔磨啄木

右御檢地後御拝領高之御朱印二通

全

一同老軸

右撰州播州御拝領高之御朱印五通

一同一軸 長ヶ唐尺六寸袖絹同上
袖裏金砂子もやう

右義久公御文書三十四通

一同一軸 寸尺等同上

右義弘公御文書五十二通之内

一同一軸

右義弘公・久保公朝鮮御在陣ノ御文書式十六通

外題白紙

一同一軸 寸尺等同上軸なし

右家久公朝鮮御在陣御文書九通

一同一軸 長一尺一寸五分 袖絹同上裏金砂子
無軸塚本 三之卷

右淡川右兵衛佐滿頼裏判之御文書古写六十三通

一同老軸 二之卷 寸尺等同上

右今川伊予入道了俊裏判之御文書六十三通

一同一軸 一之卷 紺棧紙塚本

右忠宗公御裏判之御文書二十五通

外題無シ塚木アリ

一同一軸 六之卷

右御文書三十通

外題ナシ塚木アリ

一同一軸 五之卷 袷裝同上

右御文書二十九通 接目裏判名不詳

一同一軸 四之卷

右御文書二十六通

但御家老酒匂入道貞阿裏判

申六月七日

式拾六通と下札ニ書記候卷有之、内相改候処、四拾通及以上候、尤酒
匂入道貞阿也也之候時代等引合候へ者式拾六通と有之、下札之卷ニ相
違有之問敷相見得候付、右之卷ニ究竟候事

外題藤色模様砂子菊水

一同一軸 長一尺三寸二分 紺棧紙袖裏白紙軸ナシ塚木

右貴久公 義久公御文書式拾七通

師久公一流外題無シ 袷裝同上

一同一軸

右貞久公并伊作家御文書拾八通

一同一軸 一之卷 同上

右伊作家御文書三拾式通

一同二軸 二ノ卷 右同

右伊作家御文書二十三通

一同一軸 三ノ巻 右同

右同四十一通

一同一軸 四ノ巻 右同

右同三十一通

外題金紙 啄木赤白浅黄斑打

一古御系図一卷 長一尺一寸六分 袖紙紙吹掛砂子裏金紙蓬菜ノ絵

右自清和天皇義久公迄系次

外題右同

一同一卷 長一尺一寸二分袖箱金入織物裏砂子

右自清和天皇右馬頭忠将迄系統

一同一卷 長 九寸袷袋同上

右自清和天皇武久公迄

一同一卷 長九寸七分袷袋同上

右自清和天皇勝久公迄

一同一卷 長一尺一寸袷袋同上

右自忠久公忠宗公迄

但下野彦三郎左衛門尉と神代郷相論之時被差出候ものと見へ一枚紙也、

一同一卷 長一尺八分同上

右自淳和天皇忠昌公迄

一同一卷 長一尺六分余同上

右自清和天皇光久公迄

一同一卷 長九寸五分余同上

右自清和天皇義久公迄

一同一卷 長八寸八分袷袋同上

右自忠久公勝久公迄

外題藤色金砂子ニ松

一同一卷 長一尺六分 袖絹浅黄地金砂子蕃薇文裏金紙緒付金

右自清和天皇義弘公迄

持明様常々御襟ニ被為掛候御系図之由

廿四番

一御正統御記録箱

百十三册 十一帙

廿五番

一統編家久公御譜

七十九册 八帙

廿六番

一御支流御記録箱

九十六册 八帙

廿七番上

一島津正統統譜

百三十一册 十三帙

廿七番中

一全

百四十八册 十四帙

廿七番下

一同

百六册

廿八番廿九番

壹荷

録倉流 犬追物并 入一番二番両箱入付帳
弓馬記録

一番箱

六卷一結「十五卷一結 五卷一結」
廿一卷ト有トモ廿卷アリ

十行一結 十二行一結 八行一結
四行一結 十四行一結 他流

右総七十一行 一番箱二入

二番箱

十行一結 十四行一結 八行一結

八行一結 三行一結 七行一結

- 二行一結 二行一結 二行三冊
- 右總テ五拾六行二番箱入
- 三行一箱 内黒漆鞆一 天保四日八月五日虫三不見
- 右元禄十三辰正月七日田中五右衛門・阿多
- 太仲改入付帳ノ通
- 三十番
- 王子村桜田邸犬追物図三轄
- 三十一番ヨリ三十四番迄
- 元禄年間御調進
- 御絵図并御用書付目録写
- 繪図箱一番ヨリ四番迄
- 繪図箱一番入日記平箱
- 一薩隅日々扣三枚 一琉球国々扣三枚
- 一薩隅日并琉球国郷帳扣六冊
- 元禄十五年八月廿七日国絵図御奉行
- 若御年寄井上大和守様へ被差出候分
- 二十三行
- 繪図箱二番入日記平箱
- 三十四行
- 繪図箱三番入日記
- 三十四行
- 全四番入日記 長持
- 一薩摩国諸外城繩引帳九十五冊 内横折 二冊
- 一大隅国繩引帳七拾六冊
- 一日向国諸郡郡繩引帳八十二冊 今一冊
- 一薩摩国村里札帳四十三冊
- 一大隅全四十四冊
- 一諸県全三十冊

- 一諸外城論所書付二百廿九通
- 一七行
- 元禄十六年未十一月六日鳥津帯刀より被相渡候、
- 天保九戌十月
- 三十五番
- 御絵図五番入付目録扣
- 三十五行
- 第十四
- 写有之
- しまつの三郎さまもんたゝよしかくんこうにたまはりたる所
- 貞久公譜ノ目録ニ
- 二位殿御書とあり 十一月十三日
- 第十五
- 写有之
- 仰給候事こまかにうけ給候ぬ、さい京して御心さしの
- 文曆二乙未 在判
- 閏六月廿九日 泰時
- 豊後修理亮殿
- 第十六
- 写一卷
- 將軍家政所和泉国和田郷住人
- 仁治三年二月廿二日
- 第十七
- 正文在隈之城有馬休右衛門
- 薩摩国新田宮所司神官尋申、神王面破損下手人間事
- 七月二日 前大隅守忠時 証文
- 第十八
- 正文同前
- 大番已被勤仕候畢、其上者被帰国之条
- 建長六年四月八日 在判
- 宮里郡司殿

第十九
在比志島左京

薩摩国満家院比志島河田

正嘉元年八月廿二日

比志島太郎殿

第二十
写在指宿助左衛門忠鏡

京都大番事権具薩摩国御家人

弘長二年七月十日

島津大隅前司入道殿

武藏守

御判

第二十一
同上

京都大番勤仕事

弘長二年八月十一日

薩摩平十郎殿

沙弥

在判

第二十二
正在比志島左京

右同文

弘長二年八月十一日

満家非志島太郎殿

沙弥

御判

第二十三

在財部延時藤左衛門

右同文同

同年同月同日

薩摩郡平三郎殿

沙弥

第二十四 大隅殿さいらくの状

右同文写限之城有馬林右衛門

年月日同し

宮里郷郡司名主御中

第二十五
正在其家

京都大番役事

弘長四年正月二日

比志島太郎殿

道仏

御判

第二十六

正文在延時藤左衛門

右同書出

弘長四年正月十三日

成岡二郎殿

道仏

御判

第二十七

写在山田七郎右衛門久通

薩摩国名主等令対捍

文永二年五月七日

島津大隅入道殿

相摸守

御判

第二十八

前文欠裏判残接目

しなのゝくに太田庄内こしまのかう

文永四年十二月三日

御用但写ヲ可被下也

沙弥道仏

御判

○正文在志布志山田七郎右衛門五通ノ内

島津判官

豊後守

忠久

修理亮

大隅守三男

忠時

厨入道 嫡子所領尉

女子 二女 所領常陸国小田四郎左衛門尉

周防守

忠綱 四郎 常陸守 豊後守 五郎左衛門尉

所領下長沼郷 六郎左衛門尉

忠直 三郎左衛門尉 時忠 弥六左衛門尉 左京亮 光忠

口引返し

豊後殿御子孫系図

備前邑久郡有長沼郷

○町田木 島津相馬系図

貞久

頼久 河上

宗久 播磨國ノ赤松殿ノ住縁十九ニテ逝去

師久 上總介法名道範伊久時代父子弓

箭始メ忠明ハ甥ニ守護ヲ渡ス、故ニ

伊久 同伊久仰セラル堀房丸ニ守護渡シサウラヘト仰ケルニ仍父子中不

久安

安ニナリ候、去程ニ氏久頼兵乱ヲ取越、元久・久慶父子三人同心有り、堀房殿

氏久 抱取玉テ同伊久御同心有り、渋谷当伊東ハ堀房殿ニ至敵ヲ忠明ヨ

光久 使候也イ

氏忠 里従山東ノ事ハ伊東ニ遣シ候也、

守久 久世 大太郎丸

貞久ヨリ伊久ヘ宝ヲ渡申候、飛婦太刀ニ血

久照 北殿法名

吸シ骨ハシ并ニ大小文小十文字鳥切船丸松

森久 道言

風下謂琵琶岡弥陀三尊小袖ト云太刀以上十

上野 塩千代丸

一渡申候、

九郎藏人 所領上淺野郷 五郎太郎

忠光 四郎久道 定光

所領今井郷 三郎右衛門尉 孫三郎

志村 十郎左衛門尉 景村

所領上長沼郷 林局

女子 夫三浦又太郎 式部丞 式部三郎太郎

所領下淺野郷 女子 夫大隅二郎右衛門入道頼佐 馬三郎 下淺野当知行

相馬ノ家ノ事島津殿ヨリ分ル也、伊久時代ニ相馬ノ家嗣代スルニツイテ上野ヲ名乗コト、

法名道真仏 二代也、其後貴久代ニ上野石見守

相馬ノ家ヨニルサレ名乗来ル也、

忠久ハ頼朝ノ三男也、忠久藤原ノ重忠ノ猶子ニ

ナルアルニツイテ富山ノ姓ヲ名乗ル也、故ニ藤

原ノ朝臣也、

久朝 相馬石見守

久重

久兼

兼門 上野大膳亮

女房上

右系ノ中 内之浦坂元主左衛門藏 相馬氏系図モ同之

為義 義朝

木曾殿頼朝

ヲ曹元曆元年二月廿日ニ木曾殿打ル、頼朝

誅對領ヲ

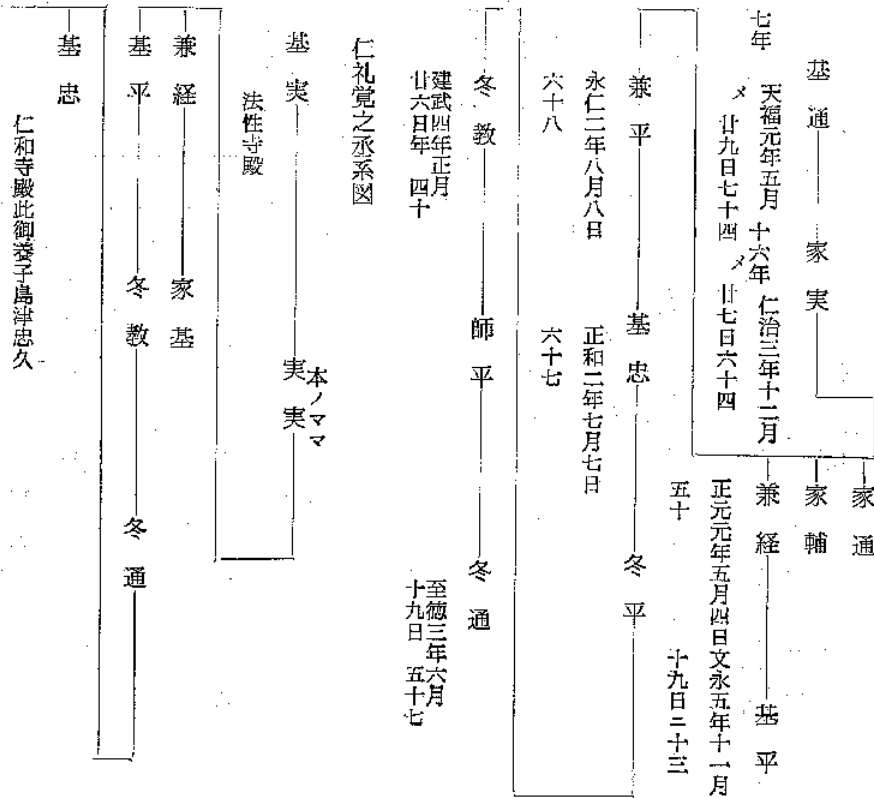
仲家

義仲

義隆

義隆御台頼朝娘也、夫ヲ打ル、カ故ニ仍崇ノ神ト成玉フ、

イ志水冠者雖為頼朝公之誓、依義仲之謀叛元暦元年申辰四月廿四日薨
 七代マテ可崇ト誓願也、故ニ仍忠久ヲ西國ヘヲトシ玉フ、
 次親家郎從藤内光澄等於入間川原誅之、此事、武衛姫君尺簡而斷水穀
 是ハ重忠カ計コト也、
 二位政子殊以哀傷云、
 大系図



了晚僧正

仁和寺

島津判官七歳ニテ在京了晚僧正之御門弟藤原姓ニ改也、

忠久

建久九年御下向也、

忠義

見于加世田土仁礼覚兵衛古文書

忠久公ハ他腹たるニより鎌倉龜かやつ、長江ノ江太常陸介ニかくし守護
 諸家大概大江姓江田氏忠久公御廻文などへ小野太郎家綱と有之云々、又花尾社御神
 し奉る、御年七歳ニテ御上洛有て仁王寺ノ了晚僧ノ門弟ニ成せ給ふ、了
 体ノ鏡ノ裏ニ当國守護所惟宗忠久并小野氏添地成就ノ為メトアリ、小野姓江田氏カ
 晚僧正ハ前関白基忠公ノ御舍弟なり、依之忠久公改源被任藤原ノ姓、被
 可紀ス也、
 補薩隅回三ヶ国守護式、其時ニ前ノ大橋中將殿ハ於日州富田生涯させそ
 れより三ヶ国一統ニ忠久公ヲ守護と奉仰、法名得仏云々、

○正文在阿久根土伊地知權左衛門

此御看ハ宮看と申也云々、
 又御当家に門屋をきらひ候ハ門屋なき所に御宿をめされ候て十三の年ま
 て御せいしん候之間、其御佳例を引也、
 さるほとにわかミヤの戸ひらにむしくいしけることあり、そのゆへハよ
 り朝の御むすめきそのよしたかのかミさまにならせ給ふを、より朝よし
 たかハのちにむほんやあらんとて御むこなれともちうし給ふ、そのうら
 ミにかのひめきもはやくせ給ふか、わかつまのよしたかうたせ給へ
 るそのうらミにはをやなからもより朝をうらミ申さん、きやうたいなな
 からもよりいへ、さねともうらミ申へし、さりながら三郎御さうしハその
 うちミやうしかへ給ふへし、さあらはなかくより朝のかう子とならせお
 わすへし、そのならすハ先三郎とのかいのちをめされ給ハんとの虫くい
 とそきたしける、別当このよし申給へハ、より朝ハ大きをとるき給いて

わか身同クよりいへ、さねとものミのうへを御ちかへあり、さまくの御きねんめされけり、そのことくわかみやに御参りありてむさしの國のや□はたけ山ちふとのめしよせ、此三郎にゑほしきせ御ミの子となつて候へとのたまへハ、かたしけなく候とてやがて御ゑほし奉りその御なを又三郎とのとかうしたり、御なりのもしけたの忠と云字をかたとり、たゝ久とさため申されけり、その時よりともいまたしかくのぬしきたまらぬ國なればとて、ゑちせん・しなの・伊勢・わかさ四か國を給はらせ給いてやかてあつま御打立とさたまりけり、その時ちふとの・ほん田二郎ちかつねかむすめをちうあいし給ふかその腹にひめ君一人おハし給ふを、かの又三郎とのに奉りとりむこにこそ山させ給ふ、そのまゝ又三郎との御とし十三にてあつまの御大将めさるれハ、はたけ山とのふく將軍にて御ともし給ふ、又その時より朝菊とち一つけそへさせ給へかしとのたまへハしけたゝ申されけるやうハこのゑとのとめ給ふハすなわちかすか大明神の御とめ給ふに是をなし、ことにあつまのいくさもあまりもうせい打ニみなれハしせんちかへなと申さん時此菊とちをしるへに御ふさた申ましけれハとてものことくにてたゝせ給ふ、それよりいくさうさるゝもそのことし云々、

○野田暖口上書写

口上覚

野田屋地村若宮大明神由来之儀
忠久様初而御入部之砌石在所へ被遊御座候、御屋地其紛無御座出候、然者御供仕被罷下候市来崎之何某、忠久様御尊形建立仕、若宮大明神と奉安置候由申伝候、依之右市来崎氏神之由唱来候、御尊形之様子者冠鬘束ニ而被遊御座候、右座主西前寺と申候、則御宮之脇へ有之、天正年来迄者右寺境ニ為有之由候へ共、只今者御蔵入ニ罷成候、右申伝之儀別条無御座候、以上、

丑六月廿七日

野田暖

古満善左衛門印

右同

橋口清左衛門

肥後仁右衛門殿

鹿嶋神田千六御留

○島津御家記上

抑薩摩ノ因ノ太守島津殿ト申云々、日向ノ國へ流サントテ撰津國住古ノ原迄烈下リケル、比ハ養和元辛丑ノ歲十二月大歳ノ夜ノ事トカヤ、彼住古ノ松原ニテ俄ニ腹氣ニ付セ給フ間道ノ辺ニ平ク大キ成ル右ノ有ケルニ御興ヲ掛云々、

○カコ松下七郎右衛門御家記録上ノ抄

頼朝仰ニ西國へ忠久可下着出仰出サレ十三騎馬ヲ給リ都ニ御上着ナサレ參内シ給ヘリ、法皇宣旨有ケルハ先年宇治平等院ニシテ被討シ高倉宮ニ似タリシ事ノ不思議サヨト思召、高倉養子ト宣旨ヲ蒙リ給フ、已ニ高倉宮ニ備給フ、頼朝被問召大ニ傾リ給ヒ、急キ可有下向ト被仰問、則奏聞アツテ西國御下着アリ、
忠久御供ノ人衆云々

慶安五年壬辰三月初九写之

隣州國府之産藤原忠貞

○同人藏

島津御先祖代々次第

島津判官忠久者源頼朝之三男丹後之局之御子也、畠山重忠カ申伏ヲ以テ近衛殿之猶子トシテ藤原ノ姓トナル、子細ハ頼朝ノ御家ニ近衛殿ノ崇アリ、春日ノナギノ葉ニ出タイアリ重忠異見ヲ以テ忠久ヲ其家トシテ此三ヶ國ニ坂東四ヶ相加テ七ヶ國之太守トシテ下向アリ云々、
慶安五壬辰十月廿有二写之

主松下四郎兵衛久常

○正文在市来八左衛門

同本在加世田市来次郎兵衛

島津殿 惟宗氏時之御系圖

元祖蘇我大臣

孝 親

施藥院侯

就茶要路往代分也

吉記 治承五年三月廿三日

三亥

奏 除目事申彈正忠

大學少允惟宗孝親初高

宮井造 千載集作者

賀茂舍

功 殿

長久四年九月惟宗孝言

張紙

文学伝

大江管人子

澄江孫在国頗善詩文、長久四年与惟宗孝言、源時綱等試於校書

殿百鍊抄 扶

從五下

從五下

從五下

從五下

陰陽頭

伊賀守

陸陽守

掃部助

是国分執印
市來方之系図

具 膳

正 邦

孝 親

忠 言

紀中納 宗大納言

忠 方

知 国

国 広

忠 友

忠 康

忠 久

忠 季

当宗惟宗氏時者国分方之系図ヨリ御出候之間、非同姓ちかくまいりて候
よし被申候、既ニ奉行所へ忠康・忠久ト被出候、又当国之守護代阿蘇谷
久助雖為惟宗氏、別名之由被仰、奉行所ニ被出系図蘇我大臣下より広言
・忠久と御出候、わかきの三方殿方ニ此系図アリ、
口上書朱也、加世田本

掃部助 日向守
孝言 基言

筑後守 忠久
広言

忠季

後楽院使從四下

○全

惟宗氏系図当家市來さうらのけいつ也

醍醐天皇第五王子

康平六年丙申始賜惟宗姓畢、

惟宗親王

慶頼王

頼房

五上伊勢守
母中納言朝成卿女

重賢

朝明

字名奥州三郎

教親

字名奥州四郎

孝言

日向守同国司

基言

八文字民部大輔 島津庄往イ 和歌之達者
日向守之國司從

広言

頼朝將軍丹後ノ局ヲ給

忠久ト一腹之兄弟一人アリ

忠久

又三郎 法名得仏 御分國七ヶ国越・若狭・伊勢・信濃・薩摩・大隅・日向
太夫判官衛門兵衛尉御母儀丹後局

忠康

息男忠綱分國
越前若狭

母チ、部父
畠山重富女 承久三年六月一日改惟宗氏号藤原氏
重忠姉タリ

忠季

若狭守 於宇治戰死 若狭国三方郡ヲ給テ三方ト号ス
母丹後局

忠経

若狭兵衛尉
於宇治戰死

女 友成 市前御前

女 友成 勢空御前

政 家 左衛門尉 敬道之達者
笠懸之上手

法名道証

以下略ス

〇都城相馬長存坊藏

義 経

女子

文治五年閏四月卅日泰衡討義経云々入持仏堂先寄妻子
妻河越太郎重頼女十時
廿二才、女子四才

仁安三年戊子生 文治二丙午生

千歳丸

母磯禪師女靜前文治二年丙午五月廿九日誕生、棄于由比浦

廿二番箱

四御当家始書 到天文十

撰州イ御当家一卷書

当国住吉にて御産氣出来と見へ給ふ、其あたりニ御宿をかられければとも
社領ハふしやうをいむよし申て一宿をたてまつる所なし、さて有へき事
ならねハ御輿をとある石の上ニ撥居エ宿を求給間御産の紐を解給ふ、則
チ男子にておハします、かくて一夜を明給ふニ大雨しきりニふりて深夜
のいぶせき限なかりしに一狐来て火を灯其アタリヲ奉守護シ風情也云々

五御当家始書 到尊氏世
撰州イ
当国住吉ニテ御産近付タリト申御一宿ヲ可奉無所、角テ可有ニ不叶者御

旅宿を尋問ニ御輿ヲ為有石上に立奉レハ則御産紐ヲ解給フ、則忝男子ニ
テ御座ス、已ニ一夜ヲ明シ給フ、折節大雨頻降テ闇夜之難忍、乍思兼者
一之狐来て火ヲトホシ其当リヲ守護シ奉ル風情也云々、
財部百姓 朱 古今要用之記 平田純正ノ集ナルベシ
波田野太郎 広御供

島津忠久西国下向事

承久三年六月一日忠久立鎌倉西国御下向之時騎馬之衆

本田代々持所轄之奉行ト大島殿書物ニ有之

一先陣之衆

總領騎馬奉行国綱ト大島殿本ニ有之

佐々木 三尾屋 玉作 達手 結城 小山 宇都宮 志和屋 難波

酒匂 本田 猿渡 斎藤 佐武 毛利 曾我 長野 豊司河原 豊島

榑崎 田代 岡崎 伊藤 二宮 岡辺 奈古屋 布施民部 雲野

望月 中条 大宮 那須 鹿島

頼朝仰ニハ西国へ忠久可流ト仰出シ十三騎ノ々馬ヲ給テ都へ上リ、大裏

ニ参籠シ玉へハ、法皇宣旨有リケリ、先年宇治ノ平等院ニテ被打シ高倉

ノ宮ニ似タル事ノ不思議サヨトテ肥シク思食、養子被召御子ト定置玉、

既ニ高倉ノ宮ニ備へ玉臯ルヲ鎌倉殿聞食シ、大ニ傾リ給イ西国へ急キ命

下向仕候へト仰セケリ、頼朝ノ御意ヲ背カス大裏ニ御暇ヲ御申玉へハ、

法皇左モ右モ忠久ホウタイト宣旨ヲ出給へハ忠久大裏ヲ罷出ント仕レハ

暫シ有レト宣旨アリ、忝ニ法皇曰、西国三十三ヶ国ヲ取スル也、西国ノ

將軍ト成ルヘシト宣旨ヲ蒙リ復征夷將軍ト定玉還々モ九州ノ諸大名忠久

ヲ用ヘシトノ宣旨成テ馳テ西国へ下向ス、

以下大島長二郎殿本ニテ如此 廿 下ナシイ

一承久三年八月吉日ニ築紫ノ諸侍七百騎ニテ安芸国東西条マテ御向ニ参、

次四

同八月廿三日薩州山門ニ着セ玉フ、

朱大島殿本

一御供奉之衆 元龜式年戊午印月十六日書之也

伊作宗兵衛尉慶久忠房 本ニ校合シテ廣ス

鎌田 国綱 鮫島 達手二郎 佐武 神崎 雲野 三浦 武石 渡辺
 甲斐 土井 岡崎 玉手 和田 葛木 森 塩屋 藤井 奈古屋
 二宮 鉢屋 蓮我 矢部 進藤 惟宗氏八文字民部大夫 寺尾 山内
 東条 安達 隅出 漆崎 横山 遠山 市木崎 用藤 鳴海 中山
 大井 井上 長尾 佐藤 鳥取 大石 高橋 岡辺 海老原 立山
 佐沢 愛郷 岩下 藪田 有馬 伊梁瀬 村上 入間河 奈須 佐野
 宇那上 築瀬 西郷 勢野 白河 達手 町ノ鼻 玉作 安藤 後藤
 四名一本
 能イ 仏崎 豊島 白鞍 加藤 白川 難波 貴島 奈古谷 海老原 森山
 純友 谷山 別府 野辺 三俣 大寺 矢木 若松 藤沢 星ノ屋
 科河 野間田 穂辻 兼沢 岩崎 成田 篠原 天階 志田 日高
 白井 美豆間 官崎 瀬ノ下 大田 天明 熊谷 小野 阿野 佐藤
 田古浦 小林 大野 森崎 井俣 辺見 小杉 安部 下山 鳴尾
 久木崎 能施 江口 釵持 弓削
 能瀬治部大夫 日高 平木間 惣以上
 二百五十騎イ 廿八
 大島殿本ノ写 古今要用之記ニアリ 平田純正ノ集ト見ユ
 一丹後御局ト申ハ冷泉天皇ノ御末維宗ノ御孫ノ藤四郎ト人ノ御子也、頼朝
 大臣之思人也、無程懐妊ノ身ト成給事ヲ二位殿聞食、御身ヲ料玉ヘキ由
 ヲ仰有ケル、頼朝聞食、サテハトテ仰ケルハ丸カ天下ノ將軍ト成事モ時
 政家ノ故ソカシ、去ラハ一節丹後ノ御局ヲ西国ヘ流スヘシトテ流シ玉ヒ
 ケル、其時御局住吉ニ御參籠有ケレバ住吉ノ御前ニテ大歳之夜ノ事ナリ
 イニ住吉ノ御前ニケルニ平石ノ有ケルニ其ヲ産屋ト誘ハ御産ノ紐ヲ解玉フ、去程ニ明神驚
 玉イテ八句計ノ翁ト現レテ覚悟ノ事ヲ仰有鼻リ、其時八人ノ女房達何ク
 ヲリトモ不知出未タ無屏風障子置ヲ敷キテ炭火ヲ起シテ念比ニ加貴シ玉
 フ先ツ産ノ腹ニハ粥コソ薬ニテ候ヘトテ粥ヲ煮サセテタヒ玉フ、八人之

女房達各々色々ノ薬ヲ以テ得サセ玉フ、程无ク夜モ明ケレハ明神ノ神主
 出仕申玉ヘハ夜ニマキレテ女房達ハ何方トモ不知矢玉フ、正身ノ稻荷ニ
 テ在ス、巳ノ時ニモ成鼻ハ車軸ヲ流ス様ナル雨降テ住吉ノ庭ヲ清メ玉フ
 神主御座ノ子細ヲ申テ鎌倉ヘ注進中ケレハ頼朝聞食テ仰鼻ルハ男子ナラ
 ハ能覚悟スヘシトテ八文字ノ民部大夫ニ仰付ラレ住吉ニ罷下丹後ノ御局
 ヲ覚悟申候此
 一三郎若君程ナク成人有鼻ハ其後頼朝丹後ノ御局之事民部太夫ニトラスル
 ナシ 也ト仰ケレハ悉モ仰ヲ蒙リ丹後ノ御局ヲ覚悟中ハ程無ク男子一人出来リ
 玉フ、此山ヲ將軍ヘ申ケレハ聞食テ臆テ民部大夫ニ所知ヲトラセント仰
 アリテ若狭国三方郡ヲ給テ三方ト号ス、忠久ニハ一腹ノ御兄弟也、去問
 丹後ノ御局粧所六十六ヶ国ニ一所充給ル、是ハ三郎若君ノ謂也、忠久ヨ
 リ已来惟宗氏ヲ名乗玉フ事丹後ノ御局ノ謂也、去程ニ審判官ハ市来郡給
 テ居住ス、維宗ノ御ト申ハ冷泉院御門之三代之孫也、
 張紙
 一忠久下向已後久恒之弟、口六ヶ国ニ手付テ島津ヲ滅サントセシ時、肝付
 ニ打入テ山城ヲ始テ取り二年半ニ運ヲ開事如何ト云、三月十八日十五六
 計ナル女三俣ヨリ来テ島山礼部只今太ニ噪事候、其ヲ如何ト云ニ三ヶ国
 ノ岡田帳ヲ披見シテ喜フ所ニ霧島ノ嶺ヨリ鷹一飛来テ島山重代太刀并岡
 田取り、本ノ如ク飛取ケリ、礼部大ニ力ヲ落、迷惑スル事限リナシ、是
 ハ只今ノ事也、久恒急ニ庄内ノ如クニ御出候ヘト云攪ケス様ニ失ニケリ
 彼女ノ訓ノ儘久恒去ハトテ打出ケレハ萩案ニテ程无ク三千余騎ニナル、
 高木ニ付ケレハ八千余騎ニ成ニケリ、終ニ礼部戦負テ喪ニケリ、其後忠
 宗ノ御時二齡ノ頼長三ヶ国ヲ手ニ付テ二年半知行致、此時モ山城ニ籠リ
 打出テ大慈寺ノ山門ニ二齡腹ヲ切ル、惣シテ肝付緩急致六度也、其後高
 氏之御下向ノ時伊作ニテ腹ヲ召サンセシ時急キ忍落玉テ大宰府ノ小式ヲ
 徳玉ヘハ小式程ナク憑マレケリ、是ハ貞久ノ御時也、臆テ高氏対治中ヘ
 キ為甲三百廿〇人殺六万八千人也、終運ヲ開キ玉テ西国ノ將軍ト喚ハル

其已後大宰小式カケケ國ヲ手ニ付テ三ヶ國ヲセハシメケレ共、肝付ノ山城ニ閉籠リテ運ヲ開テ小式ヲ攻隨ヘテ運ヲ開事偏ニ稻荷ノ御計イ也、我等カ家ヲ伝ルヘキ者ハ稻荷ヲ能々信仰可申也、第七度マテ肝付緩急ヲ致ス事アリ、是ハ貞久之御時也、

八十五才

季安補帖ス

右張紙酒匂氏古写有リ

丙寅正月廿五日

一忠久下向ノ已後云々

朱カキ

右承久三年八月吉日ト有之裏ニ有

一東西条ト号ル謂ハ忠久御下向之時九州ノ諸侍早ク御向ニ馳參タル所ナル

故東西条ト号シ候事也云々

右者御本ハ朱書也、

在口裏

島津殿御下向時御供次第

廿二箱三千五

忠久様御下向騎馬日記青枝紙
巻物

廿一

忠久公御下向御供人數帳

伊作忠房古本ヲ写ス

○一東西条号ス謂ハ九州ノ諸將早ク御向ニ參タルニヨツテ○忠久之仰ナ

リ

○一承久三年六月一日立鎌倉ヲ○忠久西國ヘ御下向之時騎馬之衆

一先陣之衆 佐々木 三尾屋 玉作 達手 結城 小山 宇都宮 志和屋

難波 酒匂 本田 猿渡 斎藤 佐武 毛利 曾我 長野 豊司河原

豊島 篠崎 田代 岡崎 伊藤 二宮 岡辺 奈古屋 布施民部 雲野

望月 中条 大宮 那須 鹿島

○頼朝ノ仰ニハ西國ヘ可流ト仰出シ十三騎ノ騎馬ヲ給リ都ニ上リ大内ニ參

籠シ玉ヘハ、法皇宣旨有ケリ、先年宇治ノ平等院ニテ被打シ高倉宮ニ似

タリシ事ノ不思議サヨトテ昵シク思食シ養子ニ被召御子ト定置玉イ既ハ高倉宮ニ備ヘ玉イ鼻ルヲ鎌倉殿間食大ニ贖リ給イ西國ヘ急ニ御下向仕候ヘト仰ケリ、頼朝ノ御意ヲ不背大裏ニ御暇ヲ申玉ヘハ法皇左モ右モ忠久ホウ退ト宣旨ヲ出給ヘハ忠久大裏ヲ罷出ント仕レハ暫其有ト宣旨有リ忝モ法皇云西國ヘ三十三ヶ國ヲ取スル也、西國之御將軍ト成ヘント宣旨ヲ蒙リ復征夷將軍ト定玉フ、還々モ九州ノ諸大名モ忠久ヲ用ヘント宣旨也ト雖テ西國ヘ御下向ス、

○承久三年八月吉日ニ築紫ノ諸侍七百廿騎ニテ安芸國東西条マテ御下向ニ

參同ク八月廿三日ニ山門ニ着セ玉フ、

一御供奉ノ衆 鎌田 國綱 鮫島 達手二郎 佐武 神崎 雲野 三浦

武石 渡辺 甲斐 土井 岡崎 玉井 和田 葛木 森 塩尾 藤井

奈古屋 鉢屋 蓮我 矢部 進藤 此宗氏 八文字 民部大夫 寺尾

山内 東条 安達 隅田 添崎 横山 遠山 市來崎 用藤 鳴海

中山 大井 井上 長尾 鳥取 大石 高橋 岡辺 海老原 立山

佐沢 愛卿 岩下 藪田 有馬 村上 奈須 入間河 佐野 宇都上

築瀬 西郷 勢能 白河 達手 町鼻 豊島 白鞍 加藤 難波 貴島

奈右左 海老原 森山 能友 谷山 別府 野辺 三俣 大寺 欠木

若松 藤沢 星屋 科河 野間田 穂辻 兼沢 岩崎 成田 篠原

天階 志田 白井 美豆間 宮崎 瀬下 大田 天明 熊谷 小野

河野 佐藤 小林 田古浦 大野 森崎 井俣 辺見 小坂 安部

下山 鳴尾 久木崎 江口 劍持 弓削

○一丹後御局ト中ハ冷泉天皇ノ御末維宗卿崇藤四郎ト云ヘル人ノ御子ナリ

頼朝大臣ノ思人也、程ナク懷妊ノ御身ト成給事ヲ二位殿間食、御身ヲ計

フヘキ由ヲ仰有リ、頼朝聞食、去ハトテ仰ケルハ丸カ天下ノ御將軍ト成

事モ時成ノ家ノ故ソカシ、去ハ丹後ノ御局ヲ西國ヘ流スヘシトテ流サン

トシケル、其時御局住吉ニ御參籠アリケレハ住吉ノ御前ニテ大歳ノ夜ノ

事ナルカ、住吉ノ御前ニ平石ノ有ケルニ其ヲ産屋ト誘ヘ産ノ紐ヲ解玉フ

去程ニ明神齋玉イテ八句計ノ翁ト現シテ覺悟ノ事ヲ仰有ケリ、其ノ時八

人ノ女房達クヨリ共不知出來リテ未無ク屏風障子タ、ミヲ敷テ炭火ヲ覺

悟シ玉フ、先産ノ腹ニハ粥ヲコソ葉トテ粥ヲ煮サセテタヒ玉フ、八人ノ

女房達各々色々ノ薬ヲ以テ得サセ玉フ、程ナク夜モ唄ケレハ明神ノ神主
出仕申玉ヘハ夜ニマキレテ女房達モ何方トモ不知矢玉フ、正身ノ稻荷ニ
テ在ス、巳ノ時ニモナリケレハ車ノ軸ヲ流スヤウナル大雨フリテ住吉ノ
庭ヲハ清メ給フ、神主御産ノ子細ヲ申テ鎌倉ヘ進人ヲ頼聞食仰ケルハ、
男子ニテ有ハ覚悟スルヘキ也トテ八文字ノ民部ノ大夫ニ仰付ラレ住吉ニ
罷下、丹後ノ御局ヲ覚悟申候、三郎若公ホトナク成人アリケレハ、其後
頼朝丹後ノ民部ノ大夫ニ取スルナリト仰ケレハ、忝モ仰ヲ蒙リ丹後ノ御
局ヲ覚悟申候、程ナク男子一人出来リ給フ由ヲ將軍ニ申ハ聞食テ聽テ民
部大夫ニ所知ヲ取セント仰テ若狭ノ国ヲ三方郡ヲ給テ三方ト号、忠久ニ
ハ一腹ノ御兄弟也、去問丹後ノ御局粧所六十六ヶ国ニ一所充給ル、是ハ
三郎若公ノ謂也、忠久ヨリ此方維宗氏ヲ名乗玉フ事丹後ノ御局ノ謂ナリ
去程ニ幕判官ハ市米院ヲ給テ居住ス、維宗卿ト申ハ冷泉御門ノ三代之孫
也、

○一忠久御下向ノ以後久經之帶口六ヶ国ヲ手ニ付テ島津ヲ滅サセントセシ
時肝付ニ打入テ山城ヲ始テ取りテ云々

○一忠久ノ御下向ノ後テ云々、忝モ稻荷大明神当家ノ家ヲ守フルヘキトノ
御チカイ也、稻□ハシメ奉事、忠久ノ御時御勸請也、

承久三年十一月吉日

○一久經御時アイラノ庄二百八十町并ニ男山八幡大菩薩御寄進也云々、
○一九州之運奉行之事

難波 石塚 長野 福崎是四人也

藤原朝臣 伊作宗兵衛尉慶久

忠房

永禄元年

元龟貳年戊午卯月十六日書之也、

写在市来衆北山調左衛門

下 高津御庄政所

補任 北郷弁濟使職事

日置兼秀

右以人依今度奥入御共之奉公所補任彼職也、御庄官等宜承知更不可違失

之状如件、以下、

文治五年十一月 日

前左兵衛尉惟宗 御判

右忠久公兼留守職之故□サレン下文ノコト元久二年七月日ノ言上ニ
アリ

土着權兵衛家來富次右衛門

富山刑部丞子息小童母相具可上洛ノ由可令申也、早件小童ヲハ付母堂可
被上洛也、仍執達如件、

五月九日

花押

島津左衛門尉殿

写

薩摩郡内山田村木領王大蔵氏所進折紙獻之、如状者右近將監友久狼藉無
道方歟、早相尋子細所行若突者可令召進爾東給候、仍執達如件、

十月廿七日

右京權大夫 在判

島津左衛門尉殿

建保六年十月廿七日給了

(忠久)

(花押)

薩摩郡内山田村の名頭職事、大蔵氏女帯証文等可令安堵由依訴申、任文
書之道理可令領知之由所成賜外題也、早無其煩件村に大蔵氏を可令為居
之状如件、

建保六年十一月廿六日

中務丞忠俊 奉

薩摩方地頭代官

可令早左衛門尉惟宗忠久為信濃国太田庄地頭職事

右人可為彼職之状、依仰下知如件、

七月十八日一本

承久三年五月 日

陸奥守平朝臣 在御判

可令早左衛門尉藤原忠久為越前国守護人事

右人任先例可致沙汰之状、依仰下知如件、

承久三年七月十二日

陸奥守平判

廿九之内

坊泊之一乘院

一忠久十八歳之御時西国之將軍ト成給事、白川ノ法皇ノ御院宣ニヨリ後政
夷將軍ト号ス、殊ニ高倉院ニ忠久似サセ玉フトテ御養子有リ集リ

大口土會木正右衛門本

一大隅国斐州郡曾木之繼因

大政大臣法性寺

忠通

正一位近衛殿

基実

三実院

慈鎮

松殿正一位

基房一師家

正三位

忠良

正一位月輪公

兼実一良経

在若松十左衛門

清和系出ニテ 頼朝

頼家

二位

貞晴

法印

忠久

信州、越前、泉州、伊勢、四州、日州、薩州守護法顯房得仏、大夫判官、豊後守、奥山皇女御台

忠季

宇治川打死、忠久一腹非頼朝子、

豊後守

母島津判官法名得仏
弘安九年丁亥三月廿一日薨矣、

忠久

永久三年六月為近衛殿養子改惟宗
氏号藤原、其母丹後御局也、

右伊集院善太夫系因

全

寛喜二年十一月十三日庚子

經高卿給大陣因元用房知之、又給東北院庄、近日悦喜馳走云々、日来清貧由

謳五噫之間、有此事歟、按察弥忿怨歟、

明月記 寛喜三年三月大

三日己丑風適休朝間小雨已後止、未時天晴、今日聞貞曉法印鎌倉右大将息年四十六

ニナリ乙酉也

去月廿八日逝去、及廿年籠居高野山、不食病臨終正念云々、母禪尼依被

悲歎、又待時行覚扶持件禪尼共云々、在撰州云々、

在平山次郎右衛門ハ

忠久

御母丹後局參詣住吉、於神前忠久御誕生、其場稻荷依灯火于今稻荷大明神崇氏神給也、丹後御局三浦介息女也、比岐藤四郎姉ナリ、三浦ハ

義朝御最期時自害、依之藤四郎ハ頼朝公御近習也、

乍秋申上候、私元祖八文字民部太輔惟宗広言事

忠久公之御母堂丹後局を白頼朝公広言江被下候ニ付、忠久公於広言宅奉

養育御成長候、因茲惟宗忠久公と奉申候、然者御幕之御紋者、広言幕之

紋蓬萊舞鶴ヲ被遊御付之由候、後迄二十文字之御紋ニ蓬萊山ヲ被遊御加

之出候、広言者日向国司之由候、広言初之妻八畠山重忠姉ニテ御座候、此腹ニ出生之子忠康と申候、宇治川ニテ、戦死仕候、忠久公一腹之御舎弟忠季ニハ忠久公ヨリ若狭国守護ニ成御中候而島津称号迄被成御免候、忠久公御二男忠綱ニハ越前守護被進御三男、忠直ニ者甲斐国波加利庄被進候之由候、忠季其子忠経皆々承久乱致戦死候故広言一族之国分友成ヲ養子ニ仕市来院尾道阿養娘ニ嫁、政家ヲ出生任、外祖之讓ヲ以市来ヲ領知仕左候而惟宗ニテ罷居申候、政家事阿蘇谷氏ト家争之事旧記ニ有之由候、元弘・建武之比市来太郎左衛門氏家ト申者軍労仕候事、証書歴然ニ御座候、其上氏家ハ、蹴鞠之名譽在之ニ付自後醍醐天皇被召出、於禁庭御相手ニテ鞠ヲ仕候、持明院法皇・近衛殿・徳大寺殿・花山院殿・難波殿・高武蔵守師直以上八人、其圖下今在之候云々、

巳七月九日

市来太郎左衛門印

執印久馬系圖

康友
太郎 執印殿
次男 国部守殿

判官忠久母義母後御室之兄康友也、頼朝御子忠久養子仕候而薩摩国議中太郎ヲ号ス、執印二男ハ号国部ト、

○加世田十若松十左衛門殿

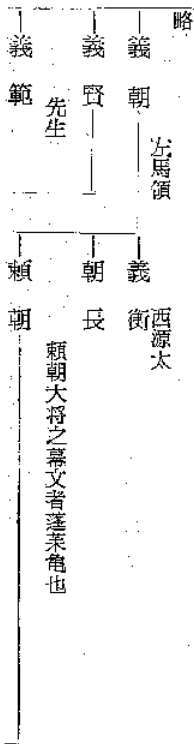
一藩之文事

惣領者五布懸也、庶子ハ三布懸定也、

同所士西掃部兵衛本

人王五千代御門

桓武天皇 此間略ス



頼賢 鎮日八郎

範頼 蒲冠者
判官

義経 左衛門督征夷將軍

行家

頼家

實朝 征夷將軍

龜若

白河皇御時

忠久

西氏本ニ承久元年八月一日

家綱

院宣ニテ高蔵院西国ノ征夷將軍ト示給十

仲家

八歳成給御時

義仲

基 清和系ニ 義隆 頼朝皆元暦年正月廿日頼朝御璽被誅

母今并四郎兼平女

鎌倉若宮八幡別当八月一日八幡御宝殿ノ扉ヲ開カントシ給エハ日衆無リシ虫食有リ、扉ニ由テ来リ能立寄り奉見ハ右大将頼朝ノ姫君ニテ有テ頭タリ、自死テ七日ト申ニ都率ノ内院ニ被迎參セ候ト虫食頭無面目申事ニテ候エトモ自カ男ニテ候木曾義隆ヲ無情殺シ給事

一相繼之事日月表頼朝

忠久系ノ文給事、蓬来ノ龜ノ上ヲ十文字ト總セテ其糸月ヲ幕文給ハル、相繼日神居定給、

母遠江守時政娘也、右大臣 左大臣

忠久御知行七ヶ国定候、忠久十八才御時西国下シ給、六月一日ニ関東ニ立給、都ニ上洛有テ内裏ニ參内申シ御下向ノ由ヲ奏聞ス、君ハニイランアツテ宣使下シ給フ、ヒト、セ宇治ノ平等院ニテ打タル高倉ノ宮似ル事ノナツカシサヨ被仰テ、ナミタヲ流シ給テ西国エハ下スマシキ也、丸ガ子ニセントセント宣使ヲ成給テ高倉宮二十八日即位給フ、此由頼朝聞食廿一度ノ御ハヒ事アツテタイリニソウモンシ給御門モニイランアツテ宣シ有ケリ、頼朝モ申モ事ハリナリ、サアラハ西国下スマシトノ宣使有、不空征夷將軍ト示給フ、西国卅ニヶ國ヲトラスル也ト宣使ヲ蒙ル、サルホトニ内裏ヲ御イトマ中西國ニ御下向薩摩國山トノ郡ニ八月廿三日ト申ニツキヨハン、

無念ノ子細也、故ニ命ヲ捨テ義隆ニ求
世及契ヲ成ヘキ故ニヨツテ命捨也、頼
朝ノ子孫ニ於テ七代及崇ヲ成ヘシ、中
ニモ頼家実朝コソ怨メシク存候、返モ
自願遂テタヒ給エト北条四郎時政九代
マテ可守ト岩宮八幡ノ御宝殿ノ扉ニ頭
シ給フ、別当是奉見現々々理也、扨行
テ歸テ此由右大將殿ニ申サレケレハ其
時頼朝則若宮八幡ニ詣リ御宝前ニ參籠
シ給フ、時ニ頼朝別當ニ仰ケル、立寄
テ見ニ都率ノ内院ニ進ル程者ナレハ丸カ子孫ヲ崇ルヘキ事不可有疑、姫カ恨モ理
ナリト仰セテ涙ヲ流シ給ケリ、其時別當ハ八ヶ国ノ大名モ上下万民至テ哀ヲ極メ涙
ヲ流ヌ計也、良有テ頼朝仰ケル事ハ別當何ニ丸カ子孫ヲ殘置ヘキ由仰ケレハ別當
笏取直シ愚僧カ申ヘキ事ハ憚リナレ共平重忠ニ御尋候ヘト申玉イ其時頼朝、重忠
ヲ召テ仰ケルハ云、何カ重忠テ恐ニテ候ヘトモ若君之御事請取申候申ス、頼朝聞
食、大ニ御敬感給フ、重忠重テ申ケルハ同ハ今日若宮ノ御前ニテ烏帽子ヲ着奉申
大將殿聞食テ兎モ角モ重忠法弟也仰有ケレハ、其時重忠馳名乗ヲ忠久ト奉申也、
其時八ヶ国ノ大名一同ニ重忠ヲ裏病シ人コソ無カリケレ、其時頼朝又三郎所領
取セント愚食、重忠仰ケレハ、何レノ国カト御尋有ニ、北国ニ越前国・若狭国・
伊勢国・信濃コソ未守護モ不定候ト申ス、其時頼朝四ヶ国ヲ取スルト仰ケル、重
申様同ハ大隅・薩摩・日向ヲ副テ七ヶ国給候、忠久薩摩エ下申サント申サレケレ
ハ頼朝兎モ角モ重忠計フヘシト仰ケリ、六十六ヶ国中ニ七百七十七津ハ忠久ニ取
スルト仰ケル、承久元年八月一日忠久七ヶ国給リ御知行定候、是モ重忠依申状承

西氏本 下着

久三年六月一日御着下上候畢、

丹後ノ御局ハ惟宗ノ御ノ娘メ也、忠久妹婿近衛殿姫也、

遠江守又三郎得仏

西国ノ副將軍 豊後守 左衛門

○忠久

分國ハ七ヶ国越前・若狭・伊勢・信濃・薩摩・
大隅・日向御母儀丹後御局之本領

大夫判官得仏衛門兵衛尉

忠秀 若狭島津

○忠義 三郎左衛門 大隅守 初心時島山

重忠息女 中間ニ 左近尉 法名道仏

本日八幡之奉行酒匂書役猿渡
御劔之役幡指左近尉

○顯姪中島仲左衛門本

良文 忠道 三郎 生輔

頼將 伊佐平次 良基 平大進 忠道

鳥津御庄建立

万寿三年丙寅年

日向大隅薩摩也

兼 輔 平五大夫

○顯姪士山口弥市兵衛藏

山口之系図

忠久不空征夷將軍御下向時御供申候、是ハ初テ西国ニ御下向ニテ候、于
時文治二年丙午六月一日立関東御供申候、八月廿三ロト申ニ薩摩国山門
郡ニ着畢、去程ニ將軍ヨリ給リ候本地之事坂東武藏国由留間河三千貫ノ
所ヲ給候、其以後豊前国菊郡二千五百貫ノ所ヲ給候并ニ筑前国多々良ノ
ハマノ合戦ノ時高名仕候故、依テトキ吉ノ郡長野庄五百貫ノ所ヲ給候、
是ハ総州貞久將軍ヨリ給候、代々將軍七代間伝リ申候、

○顯姪開門社家上野筑兵衛

宮原千謙何モ兄弟末也、宮原系図

一頼朝大臣ヨリ仰事忠久當征夷將軍御供之由依被出仰西國御下向御供申
候、承久三年六月一日ニ関東立八月廿三ロト申薩摩国山門院ニ着畢、將
軍ヨリ給候本地之事、河辺郡神殿十八町給候、并古殿五丁、宮下八丁給
候云々、

○加世田大山増右衛門系図

忠久征夷將軍ヨリ給候本地之事、日向国三間郡南郷三百町、同国之郷之

内柏原七十五町給候畢、

幸綱子

尾張守、本八佐々木兵部少輔

実綱

御供 文治二年丙午下向

本城 藤田曾右工門持御系図

忠久

安貞元年丁亥正月廿一日薨御年六十八

長島士四本嘉左衛門

忠久

母藤丹後御局承久三年六月一日右兵衛佐大夫判官内裡ニテ元服、近衛之姓ヲ借号藤原下法名得伝

能寛

一法師

牛根二川氏

頼政

号源三位
入道

仲綱

伊豆守

兼綱

大夫判官

宗綱

前肥前守

着領彼土

広綱

駿河守

有綱

左兵衛尉

宗義

兵庫三郎

仁礼寛之丞系図

元禄十六年癸未二月六日夜自宅類焼ニ盡ス、依願再写史局本、五月廿七日肥後盛齊・市来家母以副書授寛之丞

基実

家実

法性寺殿

兼経

家基

按藤司家ノ人

同

基平

冬教

冬通

法性寺殿

同

基忠

東鑑建久三年壬子四月十一日子 若公 七歳御母 常陸入道女 乳母事、今日被

仁和寺殿此御養子島津忠久

仰野三刑部丞成綱・法橋昌寛・大和守重弘等、而面々固辞之間、被長門江太景国畢、仍求月濟奉相具可上洛之由被定云々、他人辞退者御台所御嫉妬甚之間、怖畏御氣色之故也、

了暁僧

仁和寺

忠久

島津判官七歳ニテ在京、了暁僧正之御門弟

藤原姓ニ改也、建久九年御下向也、

東鑑建久三年壬子五月十九日庚寅若公令上洛給、是為仁和寺隆曉法眼弟子為入室也、長門江太景国并江間能範・土屋弥三郎・大野藤八・中井七郎等感從云々、自常陸平四郎由井宅進発給、去夜幕

下潜渡于其所奉御劍給云々、六月廿八日戊辰由井七郎自京都参着、十六日若公渡御于弥勒寺、法印隆曉仁和寺坊一条殿 詔宗 被奉具之於彼坊有御贈物、参河律師隆邊取之、

忠義

末吉貴島氏系図

仲綱

伊豆守与父於同所戦死、

兼綱

頼茂

左馬權頭

大夫判

与父俱戦死

承久元年隱謀露頭於大内自害、

頼兼 藏人

文治三年下向于出雲國住宅、許島郷由是始号書島、

頼忠

若狭守 法名道阿

建久七年丙辰 島津左衛門尉忠久公 日隅薩三州之為太守而入部

也、頼忠亦有其供奉之列而後居住于日州矣、

加世田市来次郎兵衛

此御着ハ官着と申也、其謂あり、忠久住吉にて御産の紐をとき給時所も住吉にて候へは臙而官着にて御儀式ありけるあひた、その佳例を引て今ニ此方ハ古体に用用らるゝ也、

一頼朝之御時ひきの藤四郎か娘御宮仕申而居たりしを内々御寵愛ありける、名ハ丹後の局と申たりけるを御てうあひにて纏而くわひたいになり給ふ、左候あひた八文字民部太輔と申て、是ハ御奉公申てありける

(新カ)

か、頼朝御意候けるハ局いつかたへも、局いつかたへもくして民部太輔御供申候へと承給て撰津国住吉ニまかりつゝ、松原に局ハかくし申御産のひもをとかせ申さんために、あたり宿をかり候へとも、さんを火を殊にいむかたなれハ、人ノノ宿をまいらせすかへり候て松原を尋見申候へハ大きにひらく候石の上にて御産の紐をとき給ふ、大輔めて

たにおもひ男子にてわたり候へ共とりて捨をき宿をかりうけおき申、能々いたハリ申ける程に十三の御年までハ隠しのはせ給ふ処に、其比奥州秀平と申者緩意あり、是を頼朝御せいほつあらんと思召候へ共、大将にきためられん人もなし、崩山しけたゝに御尋有けれハ重忠申されけるハ今口の御座敷ニひたりをりのまほしきたりけるわか人か御大しやうと申、頼朝不審の事を申物かなとおほしめして臙而御らん候へハ重忠申やうに是ハ何ものかと御尋ありけれハ、其時しけたゝ申けるハ、是こそ丹後の局の懐たひにてわたりし時、民部大輔か預申てなかしまいらせ候しとき、住吉にて御産のひもをと給ふ御子にて渡り給ふと申せハ、頼朝大きにめしたしと御らん候てやかて重忠を父と号給

(仰)

へと御意下り候程ニ重忠の忠と云文字をまいらせ忠久と申たり、其後丹後局ハ八もんし民部大輔ニ給てさいあひをなし、男子二人出来たりけるニ、忠久うち川を渡シ時御供申河をわたし候ける、御馬弱くて河ニうつもれうせしあひた子孫なし、其時鞍の文ニ桜のもんを仕りけるあひた、当家嫌候、又御当家ニ門屋きらひ候ハ門屋なき所ニ御宿をめされ候て十三の年まで御せいしん候之間その佳例を引候、

一三日まで松原の中にひらくしで大きな石有、其上に此御子捨をき申三日すぎ候て八もんし民部大輔今ハともかくにもとならせ給ふらんと心におもひ参候て見申候へは白き狐か二あり、このきつねか乳を参せて居たりし見事候て臙而御宿へ懐かへり、十三まで住よしニ御座候これにより申事あり、八もんしかうちハ惟宗氏也、市米殿先祖ハ八文字也、ひところ市米殿申され事ニ我等か家より島津殿御出候ほとにこれむね氏にて候と申され候、惣してミなかミをたし申きは源氏にてこそあるへけれ共、此方へくたされ給ひし時氏しけたゝか養子として氏をハ近衛殿ニ御申請給ふ、御家の名乗の字ハ重忠のたゝと云もんしをまいらせ忠久と申也、つくしニ御下り候程ニ御幕の文何にて候する哉と重忠頼朝に申されけれハおもしろ御台時分にてありけれハ箸を座敷ニ御なけ候てこれかごとくにてあるへしと御意下る時御箸十文字ニなる間、今にかくのことし、人ノノ十文字と心得候へ共十文字にてハなく候、御はしのちかふ物也、しきの十文字のやうに筆の勢はねたるもんしのすかた努ノあるへからず、御ミぬひと幕の文ハ此方へ御下り候しるし也、人々かやうなる御当家の御事ハくはしくしらぬ也、御まほしハ前へ書付おく、

一忠久此方へ御くたり候、日向国島津庄と申所ニ御下り候ほとに所の名ニ応して島津と号也、

一忠久御はハ始ハ丹後殿と申御すゑかたの人なりしを頼朝御てうあひありしニよて、後ハ局ニなり給ふと言名付候故ニたんの局と今ニ爰もとのいはれ人しらぬ也、

加世田市来次郎兵衛藏

御一家中の様又は殿中外様のえんきむかうていの昔よりめしつかはれて候やうとも存知之分書付候て參候と去年鹿兒島にて承候云々、忠久もはしめハ惟宗氏承久三年姓を御かへ有て藤原と号、民部大輔八日向ノ国ノ司にて候ける間、庄内之内島津に居住候間、島津民部大輔と云忠久も其故を以三ヶ国に御下、已後島津に御住居候間、島津殿と申奉也云々、

仲政 兵庫頭

頼政

仲綱 伊豆守

実齋院次官

国平子也、

仲綱弟

山県三郎

国政

猶子中宮少進
使左衛門尉

兼綱

実者頼行五男

治承四五宇

治自書、

大内守ゴ
頼兼

歳人五
下

藏 肥後守 清和系二
左衛門尉 從五下

使

治承四年父同時自言于宇治、

有 綱 左衛門尉 清和ケンシ本
政所家司連署人

同二年六月十九日被害

天治二六十九於伊賀国名張

那為時止被害了、

頼 成 和泉守
田代冠者

成 綱 左衛門尉

猶子太田祖

広 綱 駿河守

ナシ

隆 綱 右衛門尉

加世丸

太田 綱 右衛門尉

太田 綱 右衛門尉

太田 綱 右衛門尉

太田 綱 右衛門尉

太田 綱 右衛門尉
法名道清

從五下
駿河守
廣 綱 太田祖

山 頼 尊 阿闍梨

山 散 尊 同

女子 二条院讃岐局
歌人隠岐石讃岐是也イ

女子 隆保御室

女子 中務大輔経業妻

頼政弟母同
頼 行 藏人五下 五兼 綱 使左衛門尉
為叔父頼政郷子

女子 光 賢
治承四字治戦死

猶子深栖三郎
光 重 女子 宣秋門院丹後
歌人

忠通弟 陸奥守
志 頼

上総介号千爽、上総ノ祖
忠 常 建佐州
秩父別当

秩父 一作常
武 基

将 恒 武 基

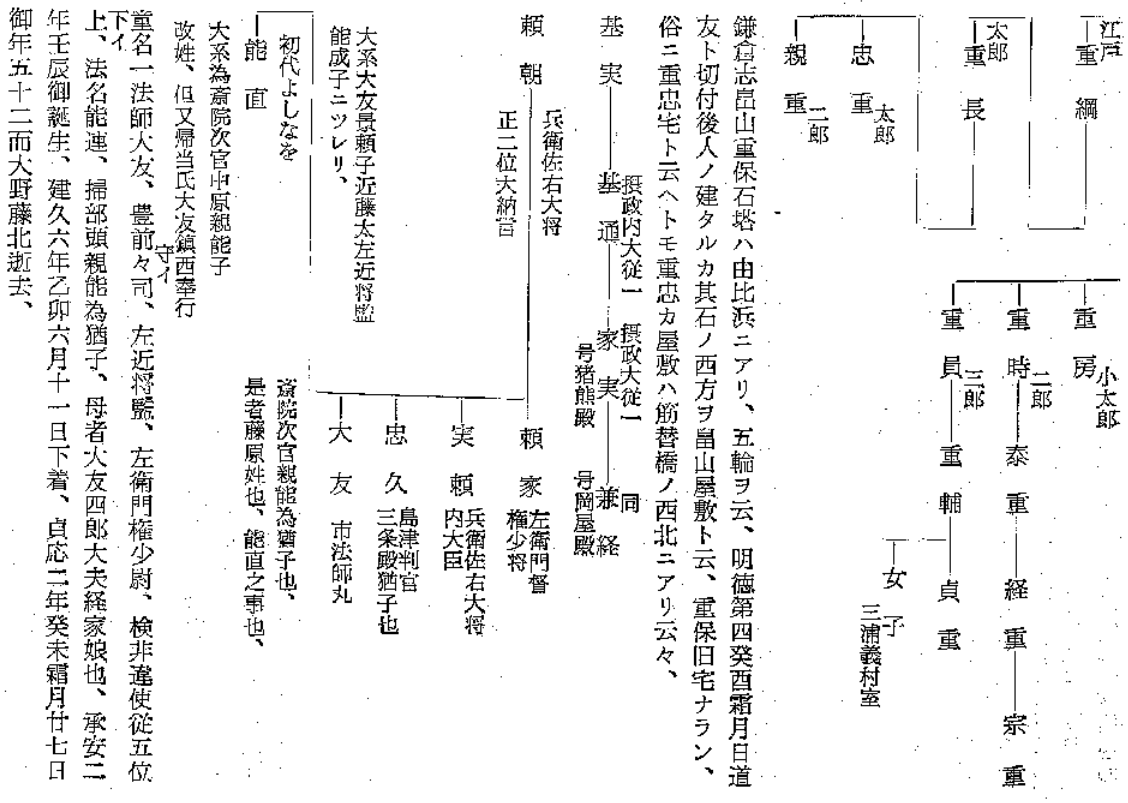
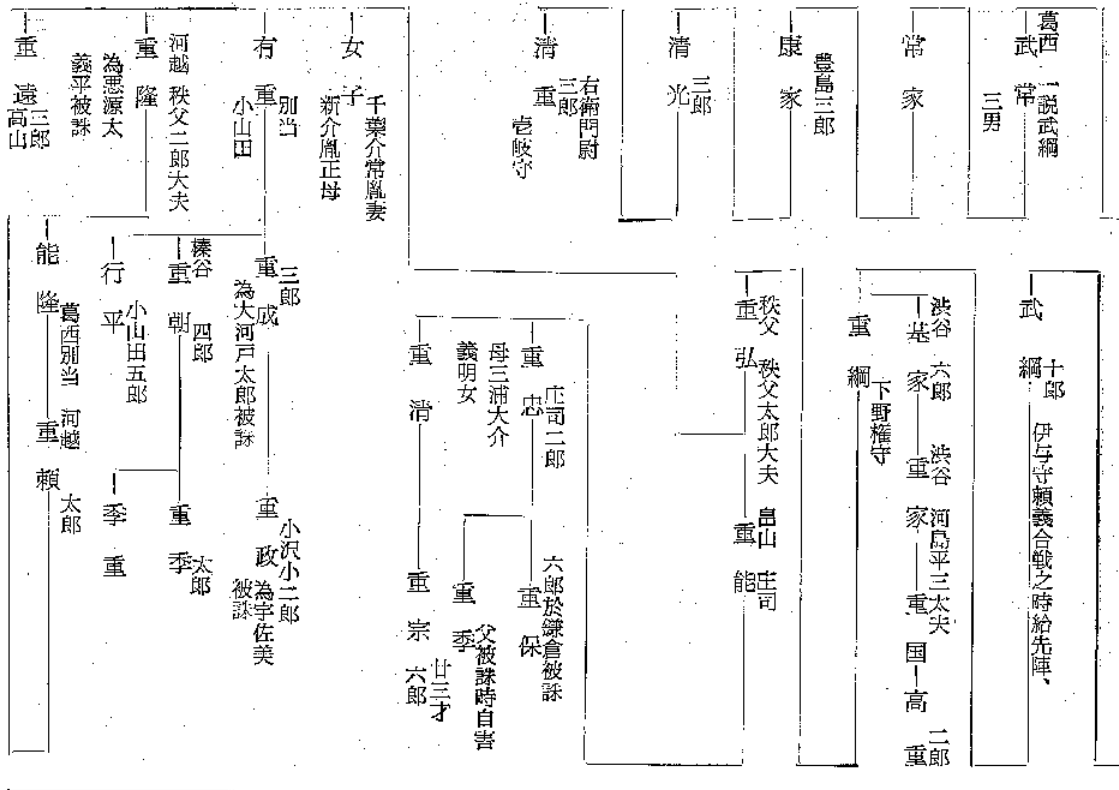
廣 直 刑部丞
廣 方掃部助

七条院藏人
宣陽門院判官代
頼 季 頼 有 七条院判官代

兼 隆 兼 政

頭 綱

群書一覽ニ頼政家集一卷あり、父仲正また子仲綱娘讃岐殿の丹後いつれも名ある歌よミとあり、作者部類に讃岐は勿論、宣秋門院丹後と載セ散位源頼行女と出たり、日本史比企伝の丹後なるへし、
季安考也



二代親秀幸イ利根次郎大炊助出雲路殿、号淑秀、宝治二年十月廿四日死去、母者高山四郎入道女也、

三代頼泰、軍名葉師丸、大炊助、式部大夫、初号丹後守、山羽守、法名道忍、母者三浦肥前々司家遠女也、

日本史大夫小武伝大友貞宗豊後人也、五世祖能直、其母大友氏、持源頼朝得有、龍身出嫁藤原親能生能直、能直因母母姓大友氏、及長為左近衛督、從頼朝討藤原國衡有功、又從猶富士野、會我祐成弟、復父職營中大權、頼朝欲親出莊、能直畏缺爭而止之、頼朝嘉其忠誠、恩眷加渥、授豊前、豊後守護、又任左衛門權少尉兼檢非違使、子孫襲其守護、世雄西士云々、

右垂水島津玄蕃忠直家臣内之高利兵衛蔵大友氏古系、肇自貞純親王迄于廿二代左兵衛督義統、古本ノ写但死去去年月ハ初代・二代ノ分ニ見ヘ、余ハ廿代義鑑ニ四十九ニテ二月十二日親子五人同横死也、同庚戌下アル耳、他ハナシ、

魚名二男驚取

山 蔭

從二

作者 前丹後守 秋田城介義房子 藤頼景 千八遺一五十一

但馬守 玄孫 遠江守 三男 秋田城介祖從四下 有頼 相任 相繼 上野介 備前守

玄孫

城介 安達六郎 小野田藤九郎

母備前守 平忠盛妹也

盛 長

鎌倉実記 永曆元年頼朝御流時盛長二十六隨仕、子長盛初為門脇養子、追進后記

正治二年四月廿六日卒六十六

イ 盛景

從五下 出羽權介

景 盛

秋田城介

城介從五上評定衆

義 景

建長五年六月三日卒四十四

母武蔵豊前守頼任女

母門脇少将女丹後内侍 見武家系圖元 建保六二月六日任出羽介、同七年正月廿七日出家、法名大蓮、宝治二年五月十八日於高野、

評定衆 大曾孫 次郎兵衛

時 長 法名能蓮

母同景盛

女 子 清參河守 母 範頼室

清和天皇十人 三川守 從五下 号浦生冠者

範 頼 母遠江守池田密遊女、文治二於伊豆北条依舍兒源二位命被討了、

範 円 母藤原藤九郎盛長女 慈光寺 順天寺等別当 二位僧都 曉イ 源 昭範

評定衆 吉見中納言 順天寺四圍梨

政所下文 建治二年八月廿七日久時補伊作庄日置庄地頭職、廿八日城介泰盛為我拜命以書報之、十二月十日報公書賀之、

鎌倉実記三 頼朝姪兒鳥御館事

頼朝の配所蛭兒島云々、およそ海遠十五ヶ国高名の家多けれども、誰か佐殿の郎従ならざる、下野国住人安達藤九郎盛長ハ口藤のわかれにてハ所領も多く、母ハ備前守忠盛の女なれば入道相国の為には従弟なり、又盛長かおさなき子を門脇殿の養子とせられければ、鎌倉殿の御代となりて秋田城介景盛トハ是也、

平家にはふかき縁絆なりしかとも、先祖たりし者の八幡殿への契約をわ

時氏室 号松下得尼 経時々頼等母

曾孫 城介 正五下 正嘉三年正月十七日 一 泰 盛 陸奥守 甘繩宅火

弘安七年四月四日出家 同八年十一月十七日被誅、

義景女北条時宗室ニテ 貞時母也、弘安七年幕屋為尼鎌倉ノ東慶寺開山志道和尚也、

すれず、頼朝左遷のはしめ盛長二十六才より丁僕のことくにつきそひま
いらせ云々、

安達藤九郎盛長者太政大臣房前五男正二位魚名五代後胤山陰中納言子從
五位下上野孫相国、其子出羽介国重、其子小野田三郎兼広子也、母備前
守忠盛妹・也、右大将頼朝卿配流時生年二十六、随仕忠義勲功竟二頭、
鎌倉吉吉始也、六十六歳卒、子息景盛初為門脇養子事、頼朝自出羽權守
移秋田城介鎌倉評定衆頭也 右依准 准后親房記トモアリ、

鎌倉実記四

頼朝八牧月代兼隆を討事

其比都に散位康信といふ者あり、康信か母ハ頼朝の乳母なりければ頼朝
に志ふかく月に三たひつゝひそかに人を下して洛中の子細を告しらせ申
されけるか、治承四年六月康信か使来りて今度高倉宮御謀叛につき令旨
を給ハる、諸国の源氏悉く追討あるへき朝議一定せしよし告まいらせけ
れハ頼朝さこそあらん、今ハやみかたき時こそ来れ、猶予あるへからず
と藤九郎盛長を以て累代の家人を催し時政をはしめ狩野・宇佐美・土肥
・佐々木・岡崎・千葉・三浦の輩一人ツ、閑所にめされ御密談あり云々
印本日本史

範頼ノ伝 二子範田・源昭共為僧範田娶安達盛長女生為頼、為頼依外家伝
其領邑、居武蔵吉見、称吉見二郎、子義春称太郎、永仁四年三月謀起、
兵為北条貞時所殺子義世称孫太郎 尊卑 分脈 亦以十一月見殺、保曆間記

○本書以義世為範頼玄孫頼氏子、然拠尊卑分脈及吉見系凶頼氏、範頼曾
孫而義春弟也、故不取、按将軍執權次第以義世之死為永仁五年五月、

子導頼仕吉野行宮為中務大輔 尊卑 分脈 義経 壇浦之戦建礼門院在義経舟、頼
朝疑与之姦、初頼朝以河越重頼女配義経、而義経又納平時忠女、三年二
月与妻河越氏及従士為修験者、経北陸道至陸奥、又依秀衡云々、
保曆間記下

義世謀反事

永仁四年十一月廿吉見孫太郎義世 (日録) 三河守範頼四代孫 吉見三郎頼氏男 謀叛ノキコヘ有テ召取
良基僧正同意之間遠流セラル、義世ハ龍ノ口ニテ首ヲ刎ラレ畢ス、
重忠列伝

文治三年伊勢神人ニテ頼朝命復其木領、但奪伊勢沼田御厨賜吉見頼綱、
能貞伝

頼朝遺禅尼最澄屢至其家、謙飲 東鑑 命以盛長女嫁範頼、重頼女配義経、祐

清妻再藤平賀義信 吉見 家譜

三浦泰村謝曰、宗族甄別官爵、兼数国守護、領莊園数万町

相良三郎長頼延久九年下向玖摩、生六男一女、季曰頼村、号上村七郎、

養和二年壬寅五月廿七日為寿永元年

三月大

九日己卯 御台所御着帶也、千葉介常胤之妻依殊仰以孫子小太郎胤政為
使獻御帶、武衛奉令結之、給丹後局候陪膳、

八月

十二日庚戌 西剋御台所男子御平鹿云々、戌剋河越太郎重頼妻 比企 依 尼女

召參入候、御乳付、

十八日丙辰 七夜之儀千葉介常胤沙汰之云々、以胤正母 秩父大夫 重弘女 為御前
倍膳云々、

寿永

三年四月五日

園富庄日向 十所之一也、

以上八条院御領

麻生云々

右庄園拾陸箇所注文如此、任本所之沙汰、彼家如元為有知行勅狀如件

寿永三年四月六日

元曆二年七月小 廿二日壬寅日向園住人富山二郎大夫義良以下鎮西輩之

可為御家人分者他人不可令煩之旨今日所被成遺教通御下文也云々、
文治元年乙巳九月小 一日辛巳延尉公勅使參當中、二品對面云々、彼宿
所比企四郎東御門宅云々、
建長二年庚戌三月小

一日丁卯 造閑院殿雜掌事、為彼進覽京都、云本役人、云始被付分、今
日悉被注絹之、深沢山城前司俊平、中山城前司盛時等為奉行云々
其目錄錄

後日被注入分

霜台東 備後前司

掃部寮戶屋 綱島左衛門入道

閑院殿造宮雜掌

紫宸殿 相摸守

清涼殿 印斐前司

仁壽殿 修理權大夫跡

廿ヶ条略

北弘御所 高津豊後前司跡

同西屋 周防前司入道

鎌倉万年山正統院円覺寺所安奉仏舎利、即実朝將軍遣使宋国所乞求也
自其所産舍利子數十粒、累々如貫珠東武増上寺五十一大僧正教管、乞其座

子三粒於円覺寺、供養于銀多宝塔、追文政元年戊寅八月齊興公訪寺閑談、
僧正感公信心、分獻二粒、葉王寺十二人一雲快忠記事、

建保五年五月実朝遣葛山顯成雪下良真等齎金銀貨財材木、渡宋国假仏舎
利而帰京師、順徳帝問召鳳闕、供養于内道場、不授之使者空販鎌倉、実
朝大怒自身上京欲贈礼、藤九郎強請使者遂反命安置勝長寿院、後移火慈
寺、

重忠列伝

頼朝論功行賞、三浦義村等賞賜頗厚、賜重忠葛岡郡、

下河辺行平伝

文治中河越重頼坐源義経事、政義為重頼婿以故收食邑、
頼朝伝

八田知家云々 称四郎 本書曰、知家本源義朝子為宗綱養子未知、孰是実戸系因曰、知
家母宗綱子朝綱女称八田局、平治之乱知家匿宗綱家宗綱養為

子、然保元物語有下野人八田四郎、則先是知家既在下野可知、而宗綱女嫁小山政
光、為頼朝乳母、疑系因由是致誤、故今不取、

首藤経俊云々、助道生親清、生義通号山内云々、経俊称流口三郎云々
経俊母頼朝乳母也、
寿永元年安德紀

五月十九日戊子以延曆寺僧永雲・顯真送、以仁王子及源仲綱子於源義仲

所流永雲於薩摩、顯真於土佐 源平盛

養和元年辛丑五月六日辛巳吉野僧徒峰起、有称以仁王子者、法皇勅奈良

僧徒索捕之 玉

頼朝下

文治元年十一月又請為繪地頭 保曆 法皇心難之、公卿皆憚違頼朝意、遂

頼朝下

應之 平家物語 頼朝既為繪地頭、諸国地頭皆以家臣為之 參取承久 国司之

權移於守護、領家皆喪其地而朝廷愈衰矣 神皇正統記、參

建久元年初朝廷往々遣追捕使於諸国糾察姦盜 朝野 頼朝亦嘗

以家臣為繪追捕、按檢近畿諸国 東 至是請為天下繪追捕使、廷議許之、

係是年據繪、保曆間記○平家 元久元年実朝娶婦重忠長子重保与北条政範

等往京師迎之、重保候平賀朝雅、重忠、朝雅俱時政女婿而重忠妻其前妻

子也、重保与朝雅飲而忿争、坐客和解而止、朝雅猶著余惡重保父子、

於妻母牧氏、牧氏衛之云々、

建久六年七月遷鎌倉、武藏地頭平賀義信有治績下書褒美、
安達盛長称藤九郎云々、正治二年死、子景盛時長云々、初景盛女適北条

時氏生時・時頼、及時頼執政最見尊礼

泰盛稱九郎、及父死襲秋田城介、為評定衆關東評、以善騎名於也徒然、弘安

中兼陸奥守請解秋田城介以子宗景代聽之、尋祝髮改名覺真、泰盛素与北

条氏連姻女、又適時宗生定時、及貞時執權、特勢肆横、貞時幸左衛門尉

平頼綱亦驕、繼頼弄威福、与泰盛相軋、而宗景狂疎奢侈甚於父、自謂曾

祖宗盛実頼朝之子也、遂改姓源氏、頼綱因説貞時曰、宗景私懷覬覦之心

改姓一事最不可掩、貞時信之遂殺泰盛父子滅其後云々、

保曆間記下

弘安比ハ藤原泰盛権政ノ仁ニテ陸奥守ニ成テ雙ナシ、其故ハ相模守時宗

ノ舅ナリケレハ也、然ル処ニ弘安七年四月四日時宗三十四歳ニテ出家

法名道泉 同日西ノ時ニ死去ス、嫡子貞時于時左生年十四歳ニテ同七月七日

彼跡ヲツイテ將軍ノ執權ス、泰盛彼外祖ノ義ナレハ弥ヲコリケリ、其比

貞時カ内官領平左衛門尉頼綱 不知先祖法名泉ト申者アリ、又権政ノ者ニテ有ケ

ル上ニ驕ヲタクマシクスル事泰盛ニモ劣ラス、同八年四月十八日貞時相

模守ニ任ス、爰ニ泰盛・頼綱中アシクシテ互ニ失ハントス、共ニ種々ノ

讒言ヲ成程ニ泰盛カ嫡男秋田城介宗景ト申ケルカ驕ノ極ニヤ曾祖父景盛

入道ハ右大将頼朝ノ子也ケルナレバトテ俄ニ源氏ニ成ケル、其時頼綱入

道折ヲ得テ宗景カ謀叛ヲ起テ將軍ニ成ント企テ源氏ニ成由訴フ、誠ニ左

様ノ氣モアリケルニヤ、終ニ泰盛法師法名 息宗景弘安八年十一月十七日

ニ誅セラレタリ、兄弟一族ノ外刑部卿相範・三浦対馬守隠岐入道・伴野

出羽守等志アルサルベキ侍共彼方人トシ亡ニケリ、是ヲ霜月騒動ト申ケ

リ、

吾妻鑑二十七

宝治二年戊申

五月小

十八日乙丑秋田城介入道号高野入道 卒于時在、從五位下行出羽権介藤原朝

臣景盛法名覺地 藤九郎盛長男、母丹後内侍、

建永二年月日任右衛門尉、建保六年三月六日任出羽権介、可秋田城介

城務由宣下、同四月九日叙爵、同七年正月廿七日出家、

御恩御下文通令進之候、御拜領之条悦存候、恐々謹言、

丹後局安貞元年卒シテヨリ四十九年目ナリ

建治二年丙 八月廿八日 秋田城介判 泰盛

丹後内侍ト東鑑ニアレハ景盛ハ忠久公異父ノ御弟ナラン、

諱上大隅修理亮殿 久時

忠久公 忠時公 久時公

景盛 同イトコ 同再従兄弟 泰盛

伊作庄井口置庄御拜領之条、御面日之至悦存候、故如此仰給之条、尤本

意候、恐々謹言、 張紙

建治二年 十二月十日 弘安八乙酉十一月十七日 秋田城介入道泰盛被誅了 秋田城介判

建治二年 建上大隅修理亮殿 御政事

建治二年ヨリ延徳二年忠廉ノ上洛ハ二百十五年ナリ

三箱巻

くわんとうちんせいひの御

けうそこの正文ともなり

くわんとうちんせいひの御けうそ

らのもくろく

一つ さまのかうのとの、

御けうその正文 いさく

の事 嘉元三六廿

一つう 御申しやうのあんもん

一つう さいせうおんしとのへ

しんもつ望らるゝ時の

御返事の正もん

一つう ちんせいかつさの入道殿

御けうその正もん 正安二 十一廿六

くわんとう御けうそのあんもん

ありふこのくにのけんたん

うへの御つかいの事

一つう しやうのすけとのゝ状の

御くたじふミ申なさるゝよしの事

一つう 同人のしやうの正もん

いさくへき御給のよろこひ

申さるゝ状なり

一つう 大殿御さけ御めんのかわん

とう御けうその正文

一つう ちんせいむさしの

すりのすけ殿 御し

きやうの正文

一つう 御申しやうのあん

御をん御所まうの事

元亨三五十

新板 大系 平氏廿三

清盛 重盛

基盛

宗盛

知盛

重衡

維俊

知度

清房

清貞

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

女子

高倉院后中宮徳子
国母安徳天皇母后
建礼門院

準三后高倉院準母
準国母從三位盛子
六条院政北政所号白川殿
イ基実公室

大納言隆房卿室
イ治泉

準三后從三位子
普賢寺關白北政所
イ近衛基通公室

修理大夫信隆卿室

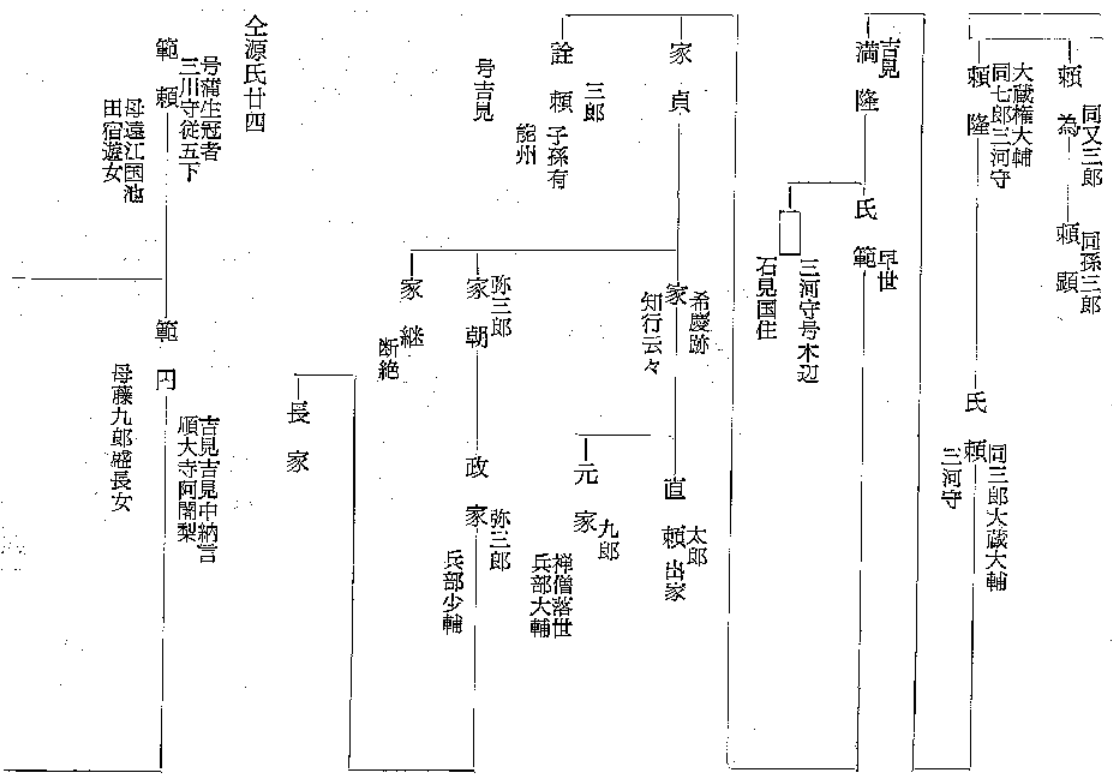
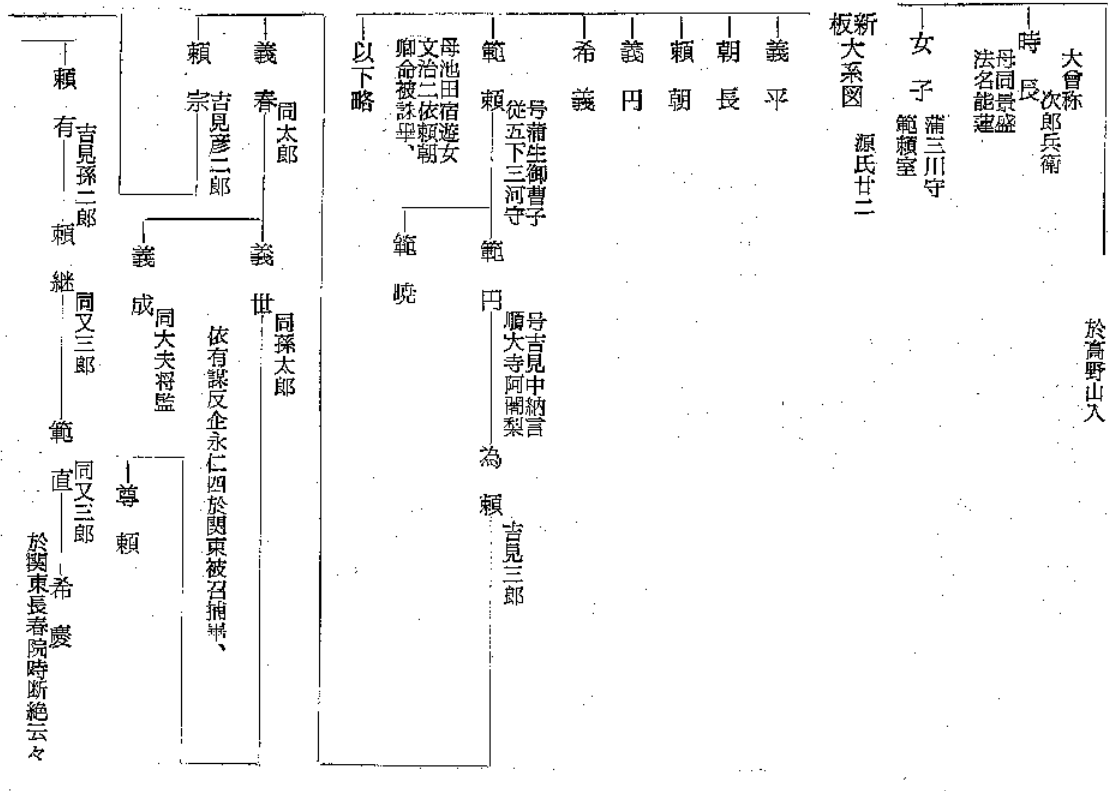
後白河院女房
イ更衣

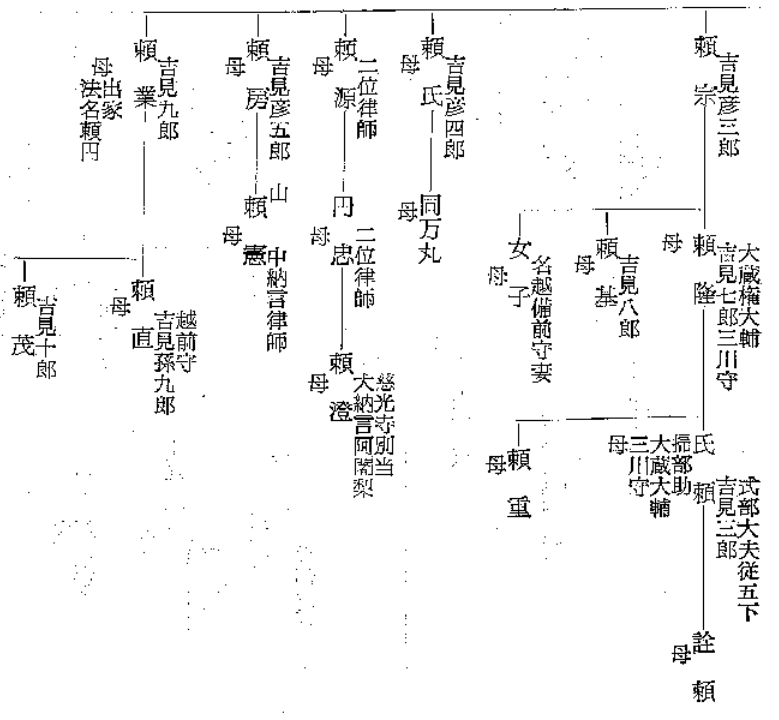
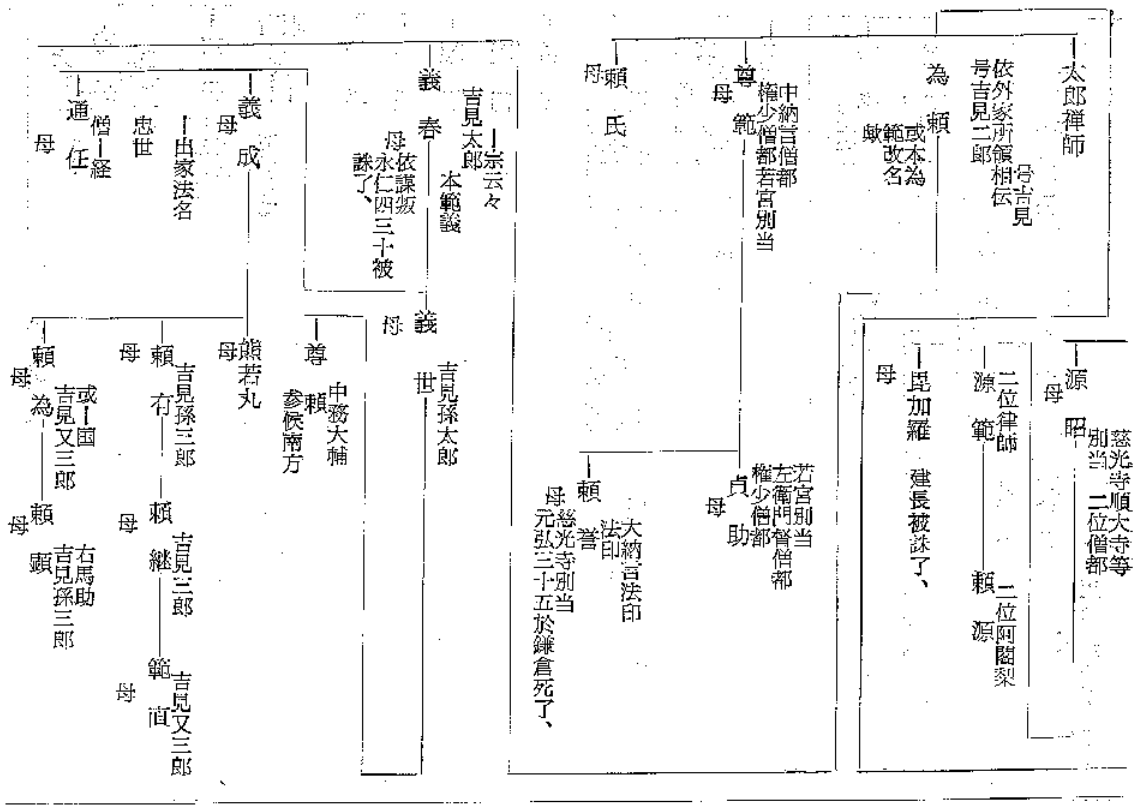
イ早世

秋田城介 從五上
評定衆

長盛 景
母門脇少将女
為門脇養子堀準后記
建保七正廿七
出家大蓮
宗治二五十八

義景
承元四年庚午生
母武藏守頼任女
建長五六三卒四十四
女子 經時母
女子 尚松本禪定





「
母 仁

「
母 頼 吉見又三郎
母 頼 吉見孫三郎

「備忘抄録中」とあるのは
「備忘録抄中」の誤りです
訂正致します

備
忘
抄
録
中

備忘抄録中

將又雖左道之儀打曇百枚毛錐子卅对令進入候、表祝言計候、
 如仰愚父上落之砌、甚深得御意候由承及候、連々御床敷令存候処、御珍
 書之旨拜見、怡悅誠不淺候、并打曇百枚毛錐子卅对贈給候、賞奮之至
 候、殊於向後者其方相当儀可得御扶助之由蒙仰候、令祝着候、至此堺并
 琉球辺御用等示給候者可致奔走候哉、心緒幸福大夫申合候之条閣筆候、
 恐惶謹言、

大永三年

七月廿一日

忠朝

吉見大藏太輔殿

御返報

在川越民部左衛門

口略

葛貫別当

能隆

在豊州忠朝伝

案文在都城野辺総右エ門

雖未中通候、連々御床敷存候、殊御親父様於京都異に他申承候之間、不
 相替得御意度心中候之条、乍次令啓候、遠慮事候共、自然相応之儀蒙仰

大永三ヨリ十年後ナリ 三河守頼興享祿五天文元年四月十二日卒

可致馳走候、於向後者無指題目候共、細々可申承候事本望候、猶此仁令

大輔隆頼
 申候之条省略候、恐々謹言、

延徳二年ヨリ二十四年日

丹後内侍ノ外孫源昭ヨリ十四代目
 三河守頼興コトナラン其子ノ
 隆頼事大蔵少輔トアリ

二月廿六日

忠久公ヨリ十一代目 忠朝

島津豊後守殿

参御宿所

同

頼興 吉見大蔵大輔
 裏付

河越太郎

重房 小太郎

重時 小山田

重員 掃部介

二条家三代 俊忠

權中納言 本名親家

保安四年七月九日薨五十二

大炊御門

治部大輔

民部大輔

少納言正五下

忠成

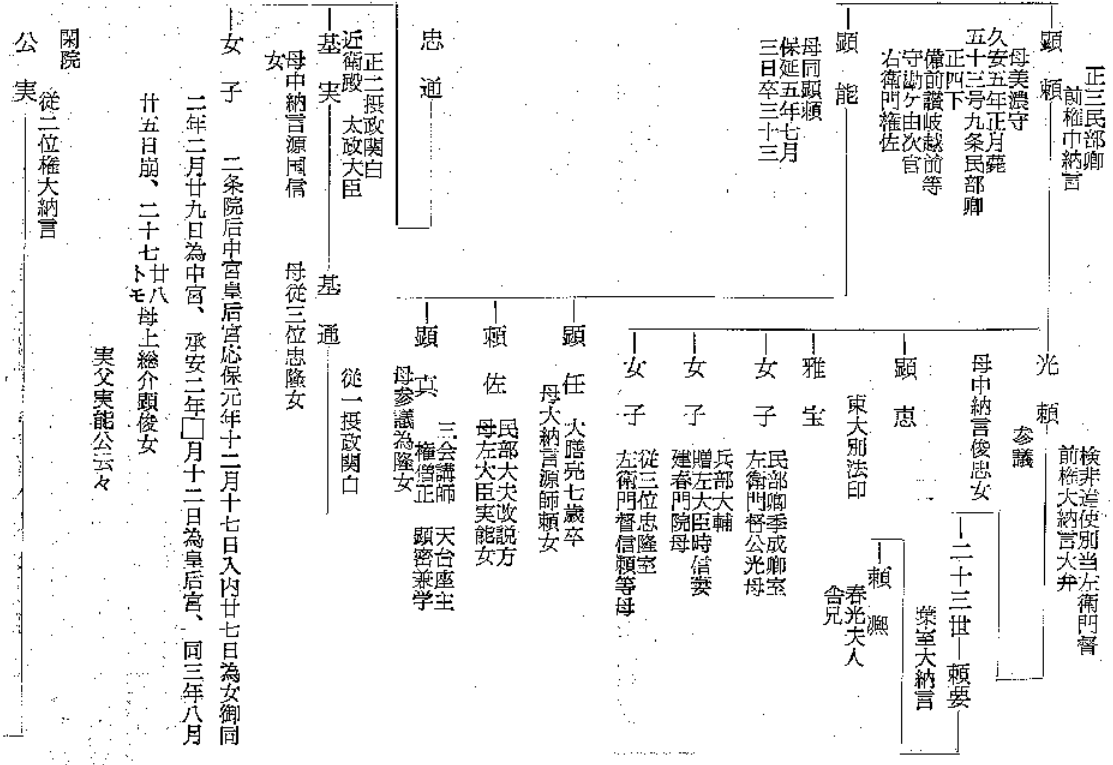
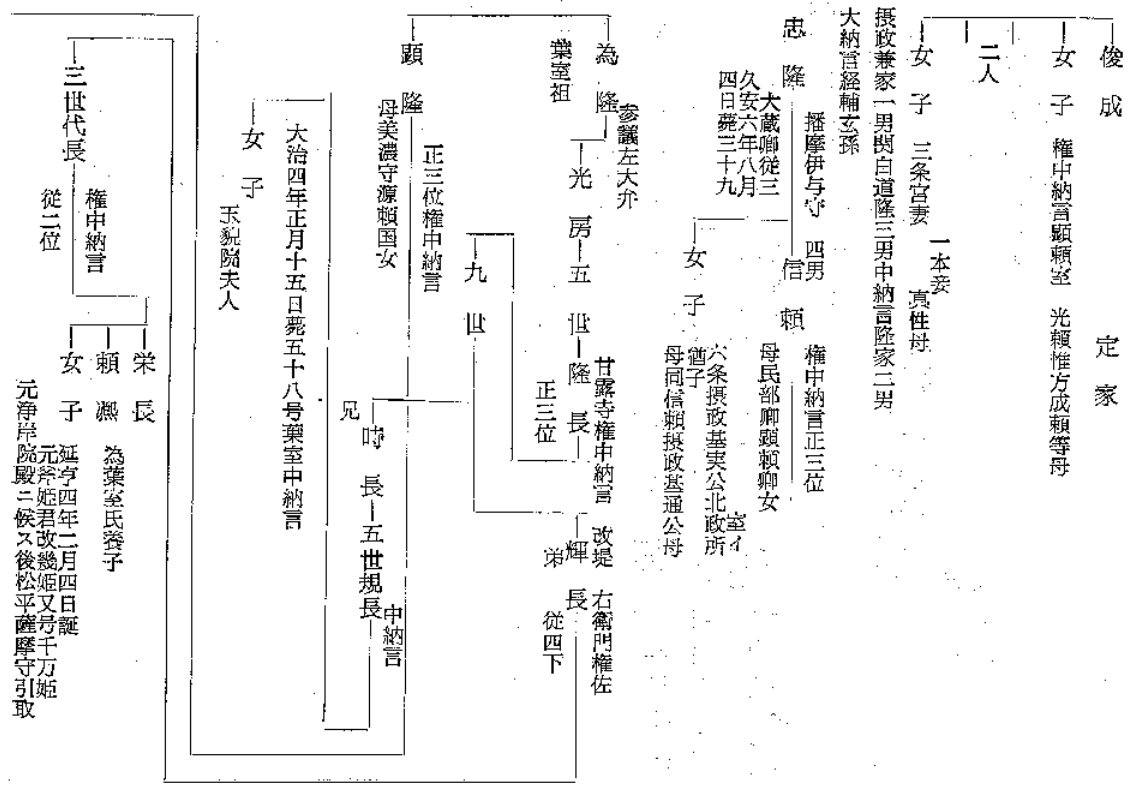
光能

女子 高倉以仁妻

僧正真性母

分脈図

作成侍



德大寺 從一位左大臣
実能

母伯馬守隆方女 謙光子為堀川鳥羽
十六日薨 帝乳母保安二年四月
年六十二

女子 皇后育子六条院母后無子
及六条院生取育之

閔白忠通養為子

五 童殿上 民部卿權大納言正二位大納言時兼加賀守之時
男 成 世号加賀大納言
母右京大夫通家女
永万元年二月一日薨年六十四

公 光 中納言正二位左衛門督檢非違使別当
母民部卿頼女

公 長

女子 從三位成子 後白河院妻高倉宮母
曰高倉三位局

生守覺法親王

以仁王殿宮門院式子内親王好子内親王休子

内親王

女子 散位信成從五生女為殿富門院大輔
民部大輔在良女
位下母高倉王妾生遺意

覺 天台座主法務僧正

仁 実 母從二位光子

女子 国母

中宮皇子 崇徳後白河院院母后曰侍賢門院
久安元年八月崩于三条高倉殿年四十五

母伯馬守隆方女 光子 一作隆光女

吉井友利方扣書写

一御官位被仰出候儀者林大學頭殿江も御問付有之由候、去戌年御下向前芝
御屋敷江大學頭殿御見廻之節、忠久様ハ頼朝卿之御子と申儀証拠有之候

雅禮

哉と石野八兵衛殿御同座ニ而御尋候付而為兵衛罷出、御文書写等ニ引
合、段々申達候得者、右之中分書付候而有之候哉と被仰候ニ付、申披きた
めと申候而書付置候ハ無御座候由申候得者、書付候而被召置候方可然存
候、書候而被遣候ハ、此方よりも内証存寄可申候由被仰候ニ付、於因元
書せ候て可被遣由太守様より御挨拶御座候、依之右草案御記録所ニ而調
被仰付、御前へ被差上置候得共、いまた大學頭殿御方不被遣候、然者証
拠有之候哉との御不審ニ口達ニ而者何角申候得共、書付と被仰候にこま
り候而延引之様ニ被為思儀も可有御座候、就夫ハ出羽守様御方江被差出
候御由緒之書付ニ頼朝卿之血筋と書申候所ニ付、不審之様被為申儀も候
へハ如何敷候条、御国元ニ而相調候書付之趣大學頭殿江被遣度奉存由孫
左衛門殿迄為兵衛より申入、被達貴問候處、御国元江被仰付候草案御見
出し不被成候間、太抵覺候由筋目を以伊兵衛草案相調候様ニと被仰付候
ニ付、御国元ニ而被相調候太概、丹後御局頼朝卿ニ幸して懐胎、住吉ニ
而御誕生之事、誕生石之事、八歳ニ而三ヶ國を御拜領之事、東鑑脱漏ニ
忠久公御卒去之事見得候儀共書記候而孫左衛門殿より被備御覽候處、右
之草案八兵衛殿入御内見候様ニと御意候ニ付、八兵衛殿へ孫左衛門殿御
出、為兵衛も被召列致参上候而草案懸御目候處、公義江差出候書付ハ此
様ニ調候而將明申儀ニ無之、此筋を以御推量候様ニと申筋ニ而ハ公
儀ニ而極り申儀ニ無之候、大抵疑敷儀ニ而も此方より極而此通と書出候
得者、夫ニて納り申儀ニ候、丹後局頼朝卿幸して懐胎など、書候様成
儀、何共公儀ニ而ハ不極申不審ニ罷成候間、丹後局ハ頼朝卿之密妾也、
懐胎すと書候而可然候、左候而証書ニ可罷成御下文等を此証拠ニハ是と
申様ニ引合せ写入候而可然候、惣而是ハ証拠ニも罷成と存候儀者、其
為之大學頭江内談ニ候間、不殘置書入候而可遣候、大學頭見届被申、是
ハ除候様ニと被存候儀者可被致差圖候間、其心得可仕候、忠久ハ頼朝卿
之御子と申儀、御系図并御家伝ハ其通可有之候得共、東鑑并其時代之書
籍ニも不相見得、二条家ニ有之候系圖・伝書ニも不見得、日本通鑑ニも
見得不申候へハ、御家ニ有之候伝記迄ニ而者、さきく猶以疑出申儀ニ
候条、此節段々之儀不殘置書付、被追大學頭、存奇をも申、草案將明候

て軸物ニ書調、二卷ニ被成被遣候ハ、一卷ハ頼朝卿之御子と申儀落着仕候由、大學頭致奥書遣之、今一卷ハ御蔵江納置候様仕せ可申之旨被仰候付畏候候由中候而罷滞候得共、段々之儀為兵衛右人之見立ニ而書候儀ハ無功ニ有之、往々之詔書ニ候得者、勞難仕之由孫左衛門殿江も申入被達貴聞候處、八兵衛殿江御城ニ、前御逢被遊候而委細八兵衛殿存寄被聞召、尤之儀ニ候故、御書を被成可被道由御約束被成候、外より詔摺を求候儀ニ無之、御系圖御文書ニ有之候儀を以書申事ニ候間、為兵衛見立次第下書相調備御覽候様ニと御意候旨孫左衛門殿被仰候付而此上者奉畏候由申上、御文書写等中下ケ候而相調候草案左ニ記之、

本田信次郎文書
一三ヶ国御下向之時者大將依御意御台様之兄右衛門對貞親御当家被副申候し、然者御下三年前以前先ニ罷下山門院ヲ打明罷上御供申候て下着候、
同次郎左ニ問系図
貞親
二郎 左衛門督

奉頼朝卿命為忠久主後見先下薩州令属三州治内翌年歸于鎌
一畠山庄司次郎重忠ニ本田二郎親重イモウトニサイアイ候忠久ヲ頼朝より重忠ヤウシ申候て取立申候へと被仰候程ニ重忠ノ忠ヲマイラシテムコニ取被申候、さるにより候て本田次郎親重ハ忠久御下ナキ前ニ三ヶ国兩度下候けるよし古人被申候、忠久ヲ重忠ノ養子申候ムコニ取申候歟、
式番箱志

頼朝公御袖判
御宝鑑巻帖御文書条目左ニ記之
○一元暦二年六月十五日伊勢国波出御覽
諸載第一
御拝領之御下文
同第二
○一同年月日伊勢国須賀御庄御拝領之御下文
同第三
○一同年八月十七日島津御庄下司職庄務之御下文

近衛殿十一月十八日下文写在二三之卷
日向大隅薩摩三ヶ国惣名也与古張札有之
同第五
○一文治二年正月八日信濃国塩田庄御拝領之御下文
頼朝公御袖判第六
○一文治二年四月三日嶋津御庄地頭職拜任之御下文
同第七
○一同年八月三日御下文
嶋津御庄
宮等之事
同第八
イ未三月重澄寄達四月十五日垂通政所下文
○一同三年五月三日
大泰元光
之事
卷通
同第九
○一同年九月九日嶋津御庄押領使拜任之御下文
一四年戊申十月立券状
三月十四日給土持冠者
同第十
○一同五年二月九日御下文
四月十三日土持与八代氏
第十三
十月二日写
○十一月日北山氏
第十三
十一月廿四日
盛時奉
第十一
一七月十日奉書
北条時政判年号
無シ文治五年款
張紙
○写在市来衆北山調左衛門
在御判
北郷弥太郎兼秀誘うる弁濟職事にハ子細を
不知召聞解状をつかハオところ也
文治五月三日
盛時
宗兵衛尉殿
○一建久二年十二月十一日
写二三
第十七
○一同三年十月廿二日
写二三

張紙
第十五
二二三卷
薩摩国救仁院平
摺切
五月九日
宗兵衛尉殿
卷通

張紙
第十五
二二三卷
薩摩国救仁院平
摺切
五月九日
宗兵衛尉殿
卷通

張紙
第十五
二二三卷
薩摩国救仁院平
摺切
五月九日
宗兵衛尉殿
卷通

張紙
第十五
二二三卷
薩摩国救仁院平
摺切
五月九日
宗兵衛尉殿
卷通

第十九

○一建久八年十二月三日政所御下文書通

同廿四日内裏大番

第二十 二月廿二日 遠江守

九月 久米次郎

一承元二年九月 基通政所御上文

第二十四

○一建曆三年七月十日鳴津御庄薩摩方

建曆三年六月廿七日 基通政所下文

御安塔之政所御下文

写在二三之卷 ハリシ 写敬

第二十一

○建仁三年十月十九日台明寺

第廿三 四年正月十八日全

第廿二

○十一月十日 神田橋氏

第廿五

○一五月九日奉書 北条義時判 建曆年間款

富山刑部丞云々 宗兵衛尉殿

○五月十四日 盛時奉

第廿八

○一建保六年十月廿七日御下知状写

山田村本領主云々

第廿六

○三年十月四日内裏大番事

第廿七

○十一月廿一日かな文

第廿八

○一同年十一月廿六日 忠久公御証判 薩摩郡 内山田村

名頭職之筆

○一承久三年五月八日同年月十三日御下知状

第廿九 御譜一通五月日あり 大田庄地頭

写

公 総下司於重澄

第三十

○一同年七月十二日御下知状 越前国守護職事 北条義時判

第卅一

○一七月十二日假名文 北条泰時判 承久三年款

第卅三

○七月十五日 武藏守

第卅五

○同四年正月 神田橋文書

第卅四

在四卷

第卅六

○七月十八日写

第卅七

○一貞応元年十月十二日御下知状 越前国守護職事 北条義時判

第卅八

八月基通政所下文

第一在四五写

第二上 写上四五

忠義公。五月十九日。七月十二日

承久三 第二下

追申わかき

第三

○承久三年八月廿五日御下知状 右同 判 卷通

卷通

卷通

卷通

卷通

手鏡

全

第四

○一同年閏十月十五日御下知狀 北条義時判

老通

全

第五

○一貞応二年六月六日御下知狀 右同判

全

第六

○一同年八月六日同 右同判

同八月基通下文

全第七

老通

○一同年十二月八日奉書判 右同

全第八

老通

○一同三年九月七日御下知狀 北条泰時判

老通

第九○元年七月三日写在五

第十

一嘉禄三年六月十八日 忠久公御正判薩摩國御讓狀

老通

第十一

○写又卷通神代郷

同八月十四日基通下文

頼経公御袖判 第十二

一同年十月十日嶋津御庄并越前・信濃御安堵之御下文

老通

第十三

写又一通 大田庄神代津乃

一文永六年十月廿三日御下知狀 北条相模守判 同左京権大夫判

老通

一文永八年十二月廿四日御安堵之御下知狀 右同

老通

御家東鑑目錄以金沢文庫御本書之トアリ、関東執権次第トアル中ニ貞願 嘉暦元年四月十六日出家号金沢殿、

東鑑考

東鑑一部五十有二卷、自治承四年至文永三年合八十有七年此中寿永二年 正二年庚申

丙辰 丁巳 戊午 乙酉 丙戌 丁亥 己未 戊申 己酉 庚戌 辛亥 壬子 癸丑 甲寅 乙卯 丙辰 丁巳 戊午 己未 庚申 辛酉 壬戌 癸亥

建久七年八年九年嘉禄元年二年安貞元年元年無之、此間広常伏誅、頼朝卒去、敦子死去、頼経元服等事蓋脱落、

東鑑未詳詳撰蓋北条家之左右執文筆者記之歟、此中北条殿請文下知書狀

等皆書平姓、而不書誥、又其広元邦通俊兼等之筆記亦当混雜而在歟、三

十四十卷以後者其文多略、且有重複誤出者焉、

禪僧義堂在鎌倉時、町野氏采令義堂見吾妻鏡、此事在空華日工集、然則

吾妻鏡者町野家之所說習也、御成敗式目亦町野之所伝授云、

吾妻鏡名者指東国云吾妻日本紀日本紀日本武尊東征時悲橋姫死而向東曰

吾婿吾婿与吾妻相同、又以鏡名書者、我邦有水鏡・大鏡・増鏡等、今此

書為關東之鏡成故号焉蓋是相似温公之通鑑、范氏之唐鑑張氏之帝鑑等之

名歟、

我邦自神武至光孝有書紀実録、然于多醍醐以後無書記、繼有假名草子及

接歌書而國家之治乱君臣之興廢不知十之一二、中間雖扶桑略記出然多涉

浮屠氏之妄說、不足視之、独東鑑文章雖誠古之書記実録、然其事為有実

平校之源平盛衰記、平家物語而彼真偽亦可見矣、

黒田筑州刺史令佐谷五郎大夫来就予説東鑑不日而終合部及其將掃求予

贈言於是不獲已書其少概以与之、

元和三年秋九月上諭

板本東鑑跋抄

夫人之処世也云々、東鑑一書者自治承四年至文永三年八十七載之間傍羅

曲探以大抵記之、不知記者名為遺憾、久歴年代其名湮滅耶、深隱山林、

其名埋没耶、抑又謙退、以不著其名耶見、此書則言行之美惡如指掌也、吾大將軍源家康公治世之暇甌弄此書云々、今也刻梓以壽其伝云々、

慶長十乙巳春三月 前 龍山

見鹿苑承兌吏

全 播州菅玄同トモアリ

土師氏玄同携其舍弟聊卜来而語余曰、方今世之見東鑑者滔々皆多也、而郡郷村里之号氏族姓尸之字官家僧道之目古今名物之称方言俗談往々未易說也、況又其間文字紕繆、書写脱略乎、見者病之、今聊卜点候訓于其旁、其或所未安者、乃闕疑而俟後之是正、因附劄刺氏新鑣於梓云々、

寛永甲子之春

羅洞散人林道春書

右寛文元辛丑年極月吉辰

烏丸通下立売下町

野田庄右衛門板行

東鑑五十二卷

鎌倉代々の日記なり云々、日本武家の記録ハ東鑑を初とす、治承四年以後八十七年の記録也、此書そのかみは上杉家に伝へたり、編者の説ハ羅山文集に見えたり、慶長十年刊行す、南禅寺免長老の跋あり、寛永元年播州菅玄同弟聊卜和訓をくはへて重刊す、林道春跋あり云々、

東鑑脱漏 一卷

東鑑の全本を以て刊本の第四十五卷の調たるを補ハんか為に別に刊行するところ也、

百鍊鈔 写本 十七卷

此書の記者いまたつまびらかならず、大治承安文曆の比の事ともを記して第十七卷建長より正元に至る〇奥書に云、嘉元二年正月十五日以大理定房卿本書写校合畢、貞願〇毎卷金沢文庫の墨印あり〇金沢文庫の事ハ法名宛寺正惠 正安三年辛丑三月廿八日卒法名惠日金沢越後守、平貞願ハ北条越後守実時カ孫越後守頼時かなり、共に武藏

国金沢に住する故、家号を金沢といへり、文永六年五 尊氏奉弔後醍醐天皇 願文殿 在武州金沢称名寺文庫、鎌倉志北条越後守平頼時文庫ヲ建テ、和漢ノ和漢の群書をあつむ、金沢文庫といへる印を押たり、儒書には墨印を仏群書ヲ納ム云々、印文ハ楠字ニテ金沢文庫ノ四字ヲ擊三書ス、後ニ上杉安房守憲書ニハ朱印を用ゆ、その旧跡今に伝はれりといへども蔵書ハ元弘の兵乱ニシテ、執事ノ時再興ス、日本一所ノ学校ト為ル、管領源成氏ノ時也云々、頼時貞願にうせてわづかに存するもの二百余部といへり、石塔モ北寺ニアリ

東鑑蘭東菟灌次第

貞願 嘉暦元年四月十六日出家号金沢殿、

東鑑脱漏

元仁二年之酉四月廿口為嘉暦元年

正月大 十六丁

同二年丙戌 正月小 十七丁ヨリ 廿六丁迄

同三年丁亥 十二月十日為安貞元年

正月大 廿七丁ヨリ 四十五終

寛文八戊申歲仲秋

江戸神田鍛冶町

中野孫三郎板行

二階堂氏本

御状之趣委細令披覽候、誠今度者不存寄、遂参会申承候、本望候、仍度々光臨殊主宝拜受、旁以祝着候、為表御礼先成参中候処、既御下向堺由候間申置候了、定被伝中候哉、抑御先祖之儀吾妻鏡以下旧記明鏡之次第依御所望写進之候間、得其便献瓦礫候処、金玉送給候、殊勝権其興候、於向後者以便宜必可申承候、相応之御用更不可有疎略候、恐々謹言、

季春三日 烏津修理亮人道殿

行(花押)

薩摩国阿多郡南方地頭鯨島孫次郎光宗法師法名蓮覚謹申

欲早被停止非分押領、任御下知以下証文、蒙御成敗、被糺返年々得分物、為同郡北方地頭隱岐三郎左門入道々忍今者死去跡輩等、令押領南方内田畠在家以下所々無請事、
副進

一通高祖父家讓与宗崇狀、建保六年十一月廿日
一通關東御下知狀、貞永元年十一月廿八日
右当郡者、高祖父駿島四郎宗家建久三年八月廿五日令押領之後相分子
二、於南方者、讓与宗景遺覺至北方者、讓与家高嫡子畢云々、

内藤作右衛門本
醍醐元皇第五王子 康平六年

性宗親王
三品兵部卿
本名保明親王
丙中始賜性宗姓

慶頼王

保頼
朝明
重賢

教施藥院使
字名奥州三郎

孝字名奥州四郎

基日向守国司

忠八文字民部大輔
島津庄在

久千載著作者
島津親父頼朝

忠息男忠彌分国越前若狭
康母チ、部父島山高女重恩姉タリ

忠御母丹後局

郡之城相馬藤左衛門

島津之繼因

文治元年八月一日ニ忠久七ヶ国給テ所領之御知行定候、是モ重忠ノ依申状也、忠久十八才之御時、文治貳年六月一日關東ヲ立都ニ上洛有テ内裏ニ參籠申シ云々、

本田ハ幡ノ奉行酒匂ハ香ノ役、猿波ハ御劍之役、左近尉ハ幡指ノ役也、鏡之役ハ渡野辺、甲ノ役ハ左曹刻、栢ノ役ハ立山、籠手之役ハ二ノ宮、(行歸当ノ役連否・難波・瀬能・長野・石墓・福崎何モ此人々ハ西国ノ軍奉脱カニテ候也、

正文在島津筑後忠實

御判

自近衛殿被仰下島津庄官訴中為宰府背先列今年始以押取唐船着岸物事、解状遣之、早停止新儀如元可令付庄家也、適為被仰下事之上如状者道理有限事也、仰旨如此、仍以執達如件、

十二月十四日

盛時奉

伊豆藤内殿

山田聖采自記

一総州山城守殿馬劍所と而鹿兒島和泉崎ニ佐多殿近所江御入遁世候而法名道聖と申子息彦三郎殿同居住、夫よりて屋形も就折節御志し候也、伊集院彈正も当家之一道を山城守殿細ニ御存知之事候程増候事ハ常々參候、聖采若時者鹿兒島へ參上仕御奉公之隙々和泉崎ニ參り山城守殿へ御意を受御恩を蒙る、如此雜談ニ付候而も御物之所を申候也、
御留軸物 古系阿

清和天皇 人皇五十六代ノ帝

此間略ス

為義

義朝

義衡

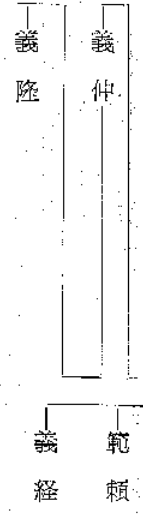
朝長

義賢

仲家

頼朝

十二名
略ス



義仲ハ頼朝ヲ背テ元暦元年二月廿日
被談、義隆ノ御内頼朝ノ娘也、夫ノ義隆ヲ打ルルカ故壽ヲ捨テ崇ヲ成シ玉
イ七代崇ルヘシト誓願也、故ニ忠久ヲ西国ヘ下シ玉フ事ハ畠山重忠ノ御計
事也、

頼家
実朝
忠久

鎌倉若宮八幡ノ別当八月一日ニ御宝殿扉ヲ開カントシ玉ヘハ口来無リシ虫食
有リ云々、文治元年八月一日忠久七ヶ国ヲ給リ、御知行有リ、是乃重忠ノ依
申状也、
後白河ノ院王忠久大將大臣ト示シ玉フ、象後守ト号シ法名ヲ号得仏ト、
忠久十八歳ノ御時又治二年六月一日ニ関東ヲ立玉イテ、京ヘ若セ玉イ内裏ヘ
参内有テ西国ヘ下向ノ由ヲ奏聞シ玉フ、君ハ敬賢有テ一年宇治ノ平等王院ニ
テ打レタル高倉ノ宮ニ似タリト被仰テ御涙ヲ流シ玉イテ西国ヘハ下スマシ、
丸カ子ニセント言旨ヲ成シ玉イ、高倉ノ宮ト十八日即位シ玉フ、此由ヲ頼朝
聞玉イ三十一度ノ託言ヲ内裏ニ奏聞申玉ヘハ、君モ敬賢有テ西国ヘ下スマシ
トノ言旨ニテ征夷將軍ト示シ玉フ、三十三騎ノ騎馬打ラセヨトノ言旨ヲ蒙リ
西国ヘ下向アリ、本用・酒匂・猿渡・左近衛此ノ人々ハ御劍齋武具ノ役也、
中藥略ス、

忠昌

永正五年戊辰二月十五日自害、治世三十五年

忠治 又三郎、法名津友、道号幽密、母藤大友政政親ノ息女、永正十二年八
月廿五日死去、治世八年

忠隆 又六郎、法名帝盛、道号興岳、永正十四年、二月十二日吉田召向テ同十
四日畷城軍、此歳宗頼下向、同十六年四月四日死去、治世五年、
初ハ
忠兼 後 勝 久 又八郎後ニ修理大夫
法名源輝
天文四年十月鹿兒島御退出

益房丸

在岩崎文庫廿一号匣

態合啓入候、然者御書物之内ニ書本之東鑑一部有之候、近キ比迄者平田
清右衛門方江御文書為引合被預置候、若返上被申候ハ、白德里村造酒介可
被存候間、早々被仰渡、此方江一刻も急可被差上候、右者酒井讚岐守様
より隱岐様迄被仰遣候ニ付被召寄御事ニ候、多分是者御城之御用ニ而可
有之哉与被思召之由候、少も遅參不仕様ニ誰ぞ輕キ衆をも被召付、中途
も聊示無之様比可被申付由、上意ニ而候間、其御心得を以可被仰渡候、
乍重言彼之御本不相知候ハ、平田清右衛門被召出、委細御尋候而可然存
候、凶書方よりも清右衛門迄状遣候間、其御心得可被成候、恐惶謹言、
慶安三年寅
卯月十一日
新納右衛門
久詮判
伊勢兵部
貞昭判
島津図書
久通判

- 島津筑前殿
- 北郷佐渡殿
- 録田源左衛門殿
- 人々御中

猶々清右衛門方江者披状ニ仕遣候間、其趣を以被成御覽御心得御尤存
候、右之本大坂江參着次第隱岐様御蔵元より継飛脚ニ而爰三元江被召寄答
二候、それほと御急用ニ而候間、以其御心得早々被召上肝要ニ存候、以上、

猶々出雲殿よりも預御音問御返書被遣可被給候、以上、

追而東鑑之儀ニ付度々御断畏入候、何事も期面上候、以上、

一昨口者御書物場ニ罷有、隙入候砌ニ而早々及御報候、先以今度之御下
向午御太儀日出度存候、然者御見せ候ニ冊一覽候、さてく、隨成御証文
共驚入候、殊ニ此方江可被遣置之由別而過分不淺候、何様御隙明之節以
而談御礼可申達候、先年御越候御家之記録ニ而貴久以來之儀今度之御書
物ニ書入申候、恐惶謹言

寛文十

三月廿九日

鳥津図書様

弘文院春斎

春判

忠久 承久三年六月改惟宗氏号藤原
法名得仏、其母丹後御局也、

弘安九年三月廿日薨美丁亥年也、

末ニ歴代歌写載アリ、

寛永諸家系図伝 丙一

清和源氏

義家流

為義流

鳥津

嘉禄二年三月廿一日卒す、

享年四十八法名徳仏

鳥津図書文書

覚

六月十三日林春斎補正世録記七巻賜之、

久通譜正保二年之西応公召十二月筑宮城、三年丙戌三月十九日至江戸、四
月十五日公及久平公臨客舎、二十六日公帰國、久通留守、○一覽云、正保

中羅山奉命、撰本朝史未成而止、寛文中藤峰又受命、置史館於忍岡、繼
其志上始于神武、下迄後陽成慶長十五年

一近年日本通鑑集、春斎友見江被仰付候、然処ニ去年江戸へ御供ニ而相詰

候中、我等方へ春斎被為見廻候間、其礼ニ參候刻、右通鑑為見被申候、
最早此方御家之儀も從頼朝薩摩・大隅・日向御給之由被為書候通被仰候
而見被申候、左候而被申候ハ前ニ洒井讀岐守殿より被仰、御家ニ有之
吾妻鑑被写置候、今少見合入儀候間、本書を可差出由承候へ共、不奉得
御意ニハ不罷成付、大方ニ返詞仕罷居候、今些御家之儀見せ申、通鑑ニ
載候様ニと可申儀御座候、御望ニ而も御家上代之趣通鑑被載申儀不成事
ニ候条、吾妻鑑御見せ候ハ、其序ニ此度通鑑ニ被書載候分書写被遣候様
ニ可申入候、ケ様成好仕合者無御座候儀歎と存候事、

外ニ三ヶ条略ス、

寛文十年

成八月廿三日

(ココニ「予作与」以下漢字及ビソノ異体字ヲアグルモ省略ス)

元禄十年丑日帳

二月三日雪天

一 中神内藏丞殿より御用之由申来候ニ付罷出候得者豊前老より御用之由ニ
而被為申上候処、御評定後之御座ニ可參由承參候云々、又序ニ而も候間申
上候、御書物蔵江有之候書本之東鑑ハ御家ニ伝米申候書ニて板行之東鑑
より一冊多御座候而忠久公御卒去之年月日等其冊ニ相見へたるニ而候、
依之前ニ圖書久通老より林道春方江右之写被遣候而板行被致東鑑脱漏と
申候而板行之書之外ニ壹冊有之事ニ御座候、右之書本之写前々道春より
ニて候哉、又ハ稻葉美濃守殿より之御用ニて候哉、世鑑抄と申を一部御
写被遣たる儀有之候、吉井為兵衛其時東鑑写ニ被仰付罷出候由申候、委
細覚可罷届と存候、御家ニ伝り来申候東鑑ニ而鳥津家ニ有之候本と申儀
ハ他所ニも知為申物ニて候処、去年焼失仕惜キ儀と存申候、然者美濃守
殿御息丹波守様御方江歟弘文院家江歟御聞合被成、御写させ被成、彼御
方より証文御取被成候ハ、正本同前之儀間候、左様ニ被成度事と申上候
得者、是も書付差上申候ハ、御相談可被成よし被仰候間、重而書付可差
上事、

丑二月十二日

寛

書本東鑑一部

右御文庫へ御座候而去年四月焼失仕候、惜キ御本ニ而御座候、是ハ定而前代より御家ニ伝リ為申御本ニて可有之と存申候、其故ハ從嘉祿元年安貞元年ニ至リ三年之間一冊板行之本ニハ無之候、右御本ニハ御座候つる、此卷ニ社 御元祖忠久公御逝去之儀も相記御座候、ケ様ニ從成東鑑杯ハ 頼朝公之御子孫様故御所持被遊候と証拠ニも罷成御家弥以與有事ニて御座候、然共御歳へ為被人置迄ニ而ハ世人不存候故、天下ニ普御知らセ可被成との儀ニ而も御座候つる哉、前々林道春老へ写為被遣之由候、夫ハ右一冊計ニて候哉、又喜部惣様ニて御座候哉、存不申候、只今ハ右一冊計道春老談を被書添、開板ニ而東鑑脱漏と申候て御座候、且又廿四五年前之儀ニて御座候ハ、稻葉美濃守様より世鏡抄と中書御家ニ御座候ハ、写被遣度旨申来候処、幸御文庫ニ御座候而写被遣候、其時右ル目録ヲハ寛永十一年甲戌八月被書タル中ニ世鏡抄三卷トアリ是ナラン東鑑之儀も写御所望之由ニ而同時ニ写為被遣様ニ承伝候ニ付、此内吉井為兵衛ニ申合見申候得者、為兵衛杯其節被仰付候而東鑑写調ニ罷出候由申候間、右両所之間ニ写本可有御座候間、本書焼失之段被仰断御写させ被成候而其上御家ニ相伝候正本を以被写置候処、本書焼失之由候ニ付而被写遣候、本書ニ相替儀無之由証文を御取置被成候ハ、木書焼失不仕候同前ニて御座候、其儘ニて被召置候ハ、右之御本御家より出為中儀後代ニハ相知申箇敷と存候ニ付午俾申上候、以上、

御記録所

丑二月十二日

田中五右衛門

在山田氏

寛

- 一 忠久御代之書物卷ツ 但卷本
- 一 氏久御代之書物卷ツ 右同
- 一 久豊御代之書物一ツ 右同
- 一 欠開之書卷ツ 右同

一 御犬追物之書一ツ

右同

一 高氏之御判道鑿ノ御判、彼是書物六ツ

但書ツ次立候而有之候、

一 樽邊之書物卷ツ

一 高指朝臣之書物卷ツ但八人之名判あり、

一 三条殿御判之書物卷ツ

一 氏久御判之書物卷ツ

一 久豊御判之書物卷ツ

一 頼朝御判儀之書卷ツ

合書物數十七

午ノ八月十四日

山田次郎右衛門尉花押

昌寛

元祿十四年

一 頼朝卿教書殿、御譜略序、林大学頭信篤被書進候御札 干鯛一折 昆布

一 折 御樽一荷 太平布拾疋 白銀五拾枚 巳四月十日被遣并太刀一腰

馬代銀老枚 田中五右衛門より進上 同五月廿一日縮緬廿卷干鯛一箱被

遣候事、

京極関白記 師実 後二条関白記 師通

四知足院関白記 忠実公 公記

法性寺関白記 忠 猪隈関白記 家実

一法成寺撰政記 道長公 二京極関白記 師実公

三後二条関白記 師通公 五知足院関白記 忠実公

徳大寺相国記 七阿闍闍白記 兼経公 長元元年より 後中記 兼室中納言

大納言頼頼卿記

四法性寺関白記 忠道 中納言頼長卿記

裳室頼頼ノ三弟

全

全

全

全

顯頼ノ從弟

中納記顯時卿記

猪隈関白記家実公

建仁元より承元二迄

作者五位

伊豆守

源仲綱 從三位頼政 千六 新千一

筑後守

惟宗広言 日向守基言子 千五 玉一

使常陸守

惟宗忠景 周防守忠綱子 今二 遺三

使豊後守

惟宗忠宗 常陸守 方一才一

号島津使常陸介

惟宗忠秀

島津民部大夫 豊後守忠宗 才一 統後一

惟宗忠貞

六位 風一 新千一

大隅国司

拾一

島津

忠綱子

惟宗 景一 忠宗一 忠秀

道義

上總入道々々 駿貞久 風 同

行蓮

民部入道俗名 才一 新千一

定寛

宗八左エ門入道 才一

民部内侍

金一

二条院内侍三河

宜秋門院丹後

散位源 千三新九勅五統二 頼行女 遺二 四玉五才一

三河内侍 統二 新千二

政佐

鎌田小藤二修理亮

当頼朝公之治世以薩隅日三州島津庄与忠久主時、三州御家人等可為忠久主人云々、因茲忠久主文治二年丙午六月一日發薦、関東八月一日下着薩摩山門院政佐供奉、

朝景初奉仕于頼朝公、賜相州酒勾庄、称酒勾終奉仕于 忠久主、公補薩隅日守護職、文治二年八月一日下向于薩州山門院、子景貞亦從下着又在曾於郡士後藤五右衛門

鎌足 中三世 鸞取 藤詞 十一世

政明 政時

後藤二良 先父死去

基明

後藤太

右大將家御代始

助明

墓崎安堵

重明

宗明

政章

後藤筑後守

政章

同名

八条院御時冷泉大納言家奉公之時日向州国富庄惣奉行給テ国富郷下着、其時諸県八代庄司師光ムコニ成政章子息室子始テ八代名讓得テ知行国富号筑後四良章氏

章氏

国富号後 八代 藤筑後四郎

母河崎裏世子大夫トモ云

章俊 児師田野大夫手ヨリ得テ讓始知行

一 章宗 寿院師田國富三郎

一 章光 八代二郎 章永 八代國富二良ト云々

在有馬勘助

撰州有馬之平氏系図

忠久將軍三ヶ国ニ御下向之御供之事

文治二年丙午六月一日ニ關東ヲ立テ同八月廿三日ニ薩州山門院ニ御下着候事、於代々 島津殿御家ヲ可守、有馬申代々ニ可伝ト云々、

正文在會於郡士後藤五右エ門

下日向大隅薩摩等御家人所、可令早隨土持冠者栄妙惟各參進事、本ハ一行右三箇國御家人等隨彼栄妙之儀、國中携弓箭之輩不論庄公、不云老弱、不日可令參上之状所仰如件、若彼國之御家人宜承知、悉之故下、

元曆元年十二月 日

追討使參河守源朝臣 在御判

口裏ニアリ 御教書案

為奥州追討并京都守護可催上由就今年三月十四日御教書先度触申候処、于今運々無勿体候、急企上洛可被勤仕、若無其儀者可注申候条、恐々謹言、

卯月十三日

八代二郎殿

口裏ニアリ 御教書案

奥入料ニ六月内可令參上

田部 在判

鎌倉殿給仰也、兼又島津御庄官之外残の御家人の人ノを^{ママ}は京の守護料

ニ可催上之由御定候也、早存其旨各可令触備給也、仍於披見廻文書進之候、急々御出立候て六月内可令參給候也、今明罷下候へは委旨不申候、下向之時可令申候、恐々謹言、

三月十四日

藤原 在判

土持冠者殿

口裏ニアリ

御奉書案

とるとの、状とかや至候、

東鑑元曆二年乙巳二月十四日戊辰參州日米在周防國之時武衛被仰遣云、

令談于土肥二郎・梶原平三可召九國勢、就之若見歸伏之形勢者、可入九州、不然者与鎮西不可好合戰、直渡四國可攻平家云々、

写在

二三卷

又件領内於 追仰

他領相交者 件所領内卷所者可

不能知行者 宛給備覚弁者、

薩摩因住人阿多四郎宣澄所領谷山郡伊作郡日置南郷同北郷新御領等名田等事、彼宣澄者平家謀反之時張本其一也、仍令停止件職了、早可令知行地頭職者、依仰執達如件、

建久三年十月廿二日

平 在判

宗兵衛尉殿 忠久

民部丞 在判

五番箱 壹竿

紙張ニテ

至申由千見得ず、紙得候上可納管、

一 島津家正統之御系図 二卷

内 卷者新田足利等之流を繋加、
張紙
申年虫干之節不相見得、可糺、

一同草案 二通

内巻通者壹枚物巻通者貳枚物

右式行巻結坊津一乘院縫藏之内ニ右之品有之候処ニ、元禄十一年五月被
差上候ニ付、御文書方江相納ル也、
右目録之五番箱巻竿と有之、下ニ張紙左之通、
五番箱之内ニ御任官ニ付書付六通と相記、六通巻結ニいたし入付有之候
得共、番付無之候故同様共不相分候、已後糺得候上番付等可致也、
文化九壬申七月九日

御文書入箱貳拾貳番
一古系図内巻巻ハ紺表紙 七巻
享保三年戊戌九月十一日

一 番 御長持入附目録 相良角兵衛

一 江戸置付之品
一 忠久公并忠時公二代古系図 越前島津系図写一冊

包紙ニ張紙
一 島津家正統之御系図式巻
内巻巻者新田足利等之流を繋加
一同草案式通

但巻通ハ壹枚物
巻通ハ貳枚物

右者自前代坊津一乘院縫藏ニ有之候処、去々年肥後仁右衛門彼表文書系
圖見分として被差廻候節見当候而当座江文書と同被差越候を此節奉備綱
貴公之御覽候処、一乘院へ必有之替之物ニ而も無之、御系図行散候而者

不可然候間差上候得と御意候ニ付、其旨申渡被差上候、是ハ御用ニ立物
ニテハ無之候へ共、右之思召ニ而被召上候、御記録所方へ納置可申旨御
意候ニ付此四番箱へ入置也、田中五右衛門存、
元禄十一年己卯正月廿五日

一 右二巻之内巻巻ハ新田足利之流を繋加、左之通、
源氏系図 口裏一乘院

貞觀元
人皇五十六代

清和天皇と書出し

忠隆 又六郎
興岳

御合第
忠兼

一同巻巻ハ口裏廿九之内 坊津一乘院
島津御系図

清和天皇 五十六代
王子十四人と朱ニ而書出し

高倉院ニ忠久似サセ玉フトテ御養子有リ臬リ杯見ヘテ尾ニ
立久 陸奥守 忠昌 陸奥守
法名節山

一 右式通ノ内巻通ハ坊津一乘院ト張紙アリテ一枚物
久經一忠宗 下野守法名道義

十代 立久
修理亮陸奥守法名節山

十一代 忠昌 又三郎殿

一同式枚物 張紙ハ剝タレトモ左ノ通

口裏 島津忠久
源氏將軍十二人 上五人 下七人

仁王五十六代
清和第六孫ト書出シ

久豊 修理亮
法名存忠 尊久 又三郎

尾ニ

于時応永廿六八月廿二夜子魁斗向燈前老後ノ耻ヲカヘリミス如鳥跡令
書□了外□悲哉染斟酌シテ且ハ世上ノ穢ニ絶トシテ又勇進テ白紙ヲ□コ
サン□レハ惡筆ト云トモ嗚呼□□面皮厚三尺雖然一河ノ流レ一
藤同末葉落ト思暫忘□□一毛如此云々、努々□他一見蜜箱底先籠
候、

按察久三第 久俊——実久——永俊法師草

秀久 豊後守 民部太輔仲久 法名 永俊也 二十八

出家

式拾式番箱入百系図七巻之内ニ可有之、左之通、

一口裏張紙

御家之系図 少々セツノ内

大皮箱ヨリ出ル 朱ニテ

清和天皇

武久 陸奥守

二 一同張紙

御系図一部 日州衆榎木崎丹後守より被召上候、但島津図書頭殿より白

石仲兵衛尉を以御渡被成候、

セツノ内

人王五十三代

天長元

淳和天皇

陸奥守 修理大夫

又三郎

忠昌

初武久

忠治
忠隆
忠義

三 一同張紙

御系図一部 七ツノ内

平田主殿助請取ヨリ出

仁王五十六代 貴久まで

四 一口裏張紙

御系図一卷 文箱より出
七ツ之内

人皇五十六代 天文二年癸巳二月九日御誕生也、

○ 清和天皇 義久

五 裏小張紙 朱ニテ 廿一 七ツノ内

勝久 益房丸

桓武天皇

三郎左エ門尉

貴久 道号大甲

義久

忠平 又四郎 兵庫頭

歳久 又六郎 左エ門尉

家久 又七 中務太輔

按承応二癸巳六月

廿七日平田清右衛門

古系図七巻内相州系図ト被書候ハ此ナルヘシ、

六 一口裏張紙

寛永十九年壬午七月晦日

此御系圖横川衆中猿渡弥八郎所持候を猿渡新介殿へ被持来候由にて下野守みせさせられ候、かやうなる物は脇ニ至候者如何ニ候由各被申候ニ付御物ニ加へ置申候、弥八郎へ者鳥目百疋任先例遣候、使野村大学助殿、

又小張紙

横川より参候、

朱ニテら打済 猿渡新介殿御取成之由候、

御系圖一部 七ツ之内

人皇第五十六代文徳第四王子云々

家久まで

元禄十六年末二月比

一平田清右衛門より被差出候古帳之内ニ左之通、

癸巳圖六月廿七日

志ツ相州系圖

志ツ阿蘇谷殿と市来殿争論

右通見得候者承応二年癸巳閏六月ニ有紛間敷候、

川上上野久尚系圖

島津者繼圖源家也、頼朝被為三男故如此候、雖然八文字殿一節奉養候、

故ニ先者惟宗氏也、其後近衛殿御養子故藤原也、又承久之比光明峰寺殿道家ニテ玉

御子天下被為閑白、其時実基公之御養子トシテ藤原氏給ラセ給ケル、然

者而度也、御エボシ親ハ山田秩父平ノ重忠也、然モ 重忠之御誓トシテ

建久七年丙辰三ヶ国へ御下向也、又丹後之局者比城藤四郎ノ姉也、惟宗卿之御娘也、其故也、

○台記 宇治左大臣頼長公

○玉海 月輪撰政兼実公

○吉記 吉田大納言経房卿

○玉藥 光明峯寺閑白道家公

○明月記 京極中納言定家卿

御坐源平盛衰記

○参考源平盛衰記

○参考保元平治物語

長門本平家物語

御坐東鑑

日本史

一豊州家軍記 瀬戸口

一伊集院忠棟上落日記 天正四年二月二日

新納五左衛門文書 至八月十二日

一代々御元服之事三ヶ国之各御存知之方有へく候条巨細不及記載、此儀に

てハ難述短筆子細候、

一左折之烏帽子之事、御当家御被官衆者何も可為右折候、但河上道安、山

正十八年七月十四日死去也、時忠勝年二十八ノ時也、

田大年参会之時此条々物沙汰候シ、御当家みぬいの菊とちをとかれ候上

ハ御被官衆者被入肩候、人々皆左折を被着候てもくるしかるまじきにて

など、被申候キ、又其家々折様共さまり候する方家々之折之烏帽子を

可被着候、其謂者於九州者大友折之烏帽子とて候、公方様之御前にてハ

皆家々之烏帽子を被着候、迫其法者島津殿御前にても家々之折を可被着

事尤ニ候也、島津折申候者、御所折の烏帽子同折にて候、

道安門人也、近江守、栖風齋、延徳三辛亥生、天文十八年卒、五十九

右新納忠勝筆記ニあり、外七ヶ条略す、

川上義久入道

寛正六年三月五日

忠国公授手簡伝義久弓馬書、

大永元年辛巳七月十四日卒八十四

一敦瀟 名大夫 去建保元年五月二日三浦和田左エ門尉義盛追討之時義盛追討

大縁 之時義盛子息新左エ門尉以下敵陣三人射取之大事疵數ヶ所負

負之間、同三日死去了、

安弁 法乘坊藝島座主

敦久

祐満

大隅国税所職押領職云々、

号税所兵衛薩摩国満家院郡可職

同院内厚智山座主職

義祐

大介税所三郎

敦胤

大介兼
税所

右代々厚智山座主職

宝永六年日帳

尚々書付之留ハ無御座候へとも粗御覽も御座候ハ、其分ニ而も御書付候而御遣被成度存候、以上、

鎌倉ニ而何と欺申候在所之内ニ忠久様御座候を神位ニ奉崇、于今郷人共別而致導敬、祭等も仕候而踊なども興行仕候体之事有之候由、其儀江戸町人菱や清左衛門と申者、盲人ニ罷成、近年相州大山辺ニ引込、其者承伝候儀有之候、委細ニ書付赤松其右衛門殿江差出、家村平八殿御取次ニ而赤松氏為被差出之出候、此書付此節御用付而相札候へとも有所相知不申候、尤書留候所も見得不申候、平八殿御取次之事候へハいか様御家督以

後之事ニ而可有御座候、仁右衛門殿御在旅中被聞召候儀共ハ無御座候哉、各様へ尋越候様ニと島津帯刀殿被仰付候間如此御座候、追而御返答

可被仰聞候、於此方ハ早左衛門殿へも相尋候へとも御記録方江不相知之

由御申候、以上、

宝永五年ナラン

十二月廿二日

田中五右衛門殿

肥後二右衛門殿

大山平右衛門

右大山平右衛門より之書状諸座問合之紙袋ニ入付置候事、

十二月廿二日之御状正月十四日ニ相届得其意候、然者於鎌倉、忠久公御

廟奉崇神位、郷人共別而致尊敬祭祀等有之候由、江戸町人菱屋清左衛門

と申者承伝候儀有之、先年赤松其右衛門殿江右之趣書付差出、右書付家

村平八殿御取次ニて為被差出之出候、右書付御用ニ付而御札候へとも有

所相知不申候、依之我々共江御尋之趣委細承知仕候、右忠久公御神廟鎌

倉へ奉崇候儀不承候、尤菱屋清左衛門差出候書付当座へ無御座、右之趣

初而御紙面ニ而得其意申候、去々年二右衛門事、相承院へ参会仕候御被

為咄候者、頼朝公御廟所より東之方江島津殿御先祖之御廟所と申伝有

之、夫より又東之方東衛門と申所江島津殿屋敷御座候由申伝候通相承院

より承置申候、此外忠久公被崇御神位候儀承不申候、右之通ニ御座候条

宜様ニ御申頼存候、恐惶謹言、

宝永六年 肥後二右衛門 盛雄判

二月二日 田中五右衛門 国明判

大山平右衛門殿

右大山平右衛門へ之書状二月六日平田右衛門御使便ニ頼越候事、

新編鎌倉志卷之一

筋替橋ハ雪トヨリ大倉村へ出ル道ノ橋ナリ、鎌倉ノ十橋云々、筋替橋ノ

全七右山重保石峯ハ山比兵ニアル五輪ヲ云フ、明徳西祭西曆月日大願寺遺友ト切付

フ、恐クハ非ナラン、重忠カ屋敷ハ筋替橋ノ西北ニアリ云々、アリ、

全二

○頼朝屋敷ハ鳥合原ノ東也 鳥合原ハ八幡宮ノ東ノ鳥居ノ外ノ地也、

東鑑ニ治承四年云々、同十二月十二日上総介広常カ宅ヨリ新造ノ御亭ニ御移徙ト有ハ此所也、広八町四方バカリ云々、南ハ行路、西ハ大道、東ニ河アリ、北ニ鶴岡、南ニ海水ヲ流ト云々、

○法華堂 附頼朝并義時墓

法華堂ハ西御門ノ東ノ岡ナリ、相伝頼朝持仏堂ノ名也、

頼朝墓ハ法華堂ノ後ノ山ノ上ニアリ、

○西御門ハ法華堂ノ西ノ広キ谷也、頼朝卿ノ時西門有シ跡ナリ、東御門ト報恩寺ノ旧跡ハ西御門ノ西ノ谷ニアリ、又其西南ニ保寿院ノ旧跡アリ、高松寺ハ報恩ノ向ヒ東北ノ谷ニテ西御門ノ内ナリ、

云所モアリ、南北ノ門モアリ、東鑑ニ見ヘタリ、今其跡不知、南門ハ鳥山屋敷ヲ以テ考レバ大倉村ノ辺ナラン、北門ハ和田合戦ノ時尼御台所并

実朝ノ御台所等皆中ヲ去リ北門ヨリ鶴岡ノ別当坊へ渡御シ給フドアリ、

○東御門ハ法華堂ノ東隣ナリ、頼朝卿ノ時東門アリト云フ、西御門ノ条下ト照シ見ヘシ、

覚恩寺

在柄天神

東御門

高松寺址 頼朝屋敷 池

報恩寺址 西御門

躰塚

鶴岡八幡宮

北

西

南

一拙者より被召上候御文書拾通内巻通者嘉祿三年丁亥六月十八日於鎌倉、忠久公御逝去之日御自筆ニ為被遊と申伝候御当国御守護職御讓状老通、

戊

十一月十四日

御記録所

在藤井休右衛門

人皇五十六代九歲天安二年戊寅御即位

清和天皇

龜山三郎兵衛

頼家

実朝

忠久

島津判官延久七年八月一日十八歳

治承四年己亥忠久誕生

三ヶ国下向

法名得仏三ヶ国ニ御下向

御歳十八歳ト云々

中世略

忠治

又三郎延徳元年己酉正月十七日御生

永正五年戊辰御年廿歳ヨリ永正十二年マテ八年治国、同年乙亥八月廿五日

廿七歳御遠行アル也、道号蘭窓、法名津友、母儀大友正親嫡女、

忠隆

又六郎明心六年丁巳御誕生、永正十二年乙亥十九歳ヨリ永正十六年己卯歳

マテ五年治国、同年己卯四月廿三歳御死去、

島津忠久公日向大隅薩摩三ヶ国致拜領、建久七年八月一日三ヶ国ニ御下向、十八歳ナリ、永正十二天迄三百廿七年也、

分国者七ヶ国越前・若狭・伊勢・信濃・薩摩・大隅・日向

源朝臣頼朝之三男、治承四年己亥忠久誕生、永正十二天迄三百四十五年

也

比金尼

丹後局 忠久公 忠時公

判官能員 若狭局 一幡君

賴家妻 竹御所

賴隆御台所

在都城相馬藤左エ門

文永六八生 貞治二 七卒

上總介 法名道聖願三三七死去

貞久

貞久御代大載小式三ヶ園下緩怠ヲ致候小式ヲ責還テ六ヶ園責上小式ヲ退云々
御代大友殿ノ姫也、高崎ハ大友殿舎弟也、願ソヘ左役、小当良ハ右ノ願ソヘ母三池道智女

賴久 河上上野守 法名 大田道寛

宗久 播磨国赤松ノ住縁十九ニテ死去、元々ニ誕生 曆応三正月廿四卒

○師久 法名定山道貞
上總介母大友女、正中二八十生、永和二三十卒、大友兵部親娘女云々、上總守法名久晋道親

伊久 伊久御代父子弓筋始ル、忠明ハ甥ニ守護ヲ渡故同伊久仰ニ塩房守護渡サラヘト仰ケルニ仍父子中不安ニナリ候、去程氏久頼兵乱ヲ取起、元久・久豊・久父子三人同心有、塩房殿抱取給同伊久御同心有リ決当伊東八塩房殿ニ致敵ヲ忠明ヨリ従山東之事伊東二使、

久安 三郎左衛門尉 嵯山侯也

○氏久 緑州

嘉慶三十四 生嘉慶 元四卒

光久 氏忠 氏忠 氏忠

貞和三朔生 永十四卒 春秋六十一

守久 播磨守大夫判官 從五位下法名義山道仁

久世 法名維馨久徳 大太郎丸 法名大義道裕

久照 北殿法名道言 初母忠明、山城守、応安二年己酉八月三日誕生、永永十五年戊子正月三日於薩川内平佐安之城自害、春秋四十、母、慈雲院殿

○忠朝

道真 忠安二八生 永十五正卒 初忠朝 彦二郎 從五下 山城守

忠安四年辛亥三月八日誕生、永享五年癸丑十月十二日卒年、号慈雲寺又長樂寺、

○忠氏

三郎左三門尉 彦二郎 山城守 明德二生 文安二九卒、法名良翁了性号瑞龍寺

千扇

林幸庵 号上慈禅尼

田通庵 第三代之住持

広清寺住持 送俗忠長 繁藏主

母二階堂法名了慈常知

伊 忠 彦三郎法名頼翁道忠 母向赤松一乱之時戰死

忠 茂 始建山号相忠 永享十一年 永正八四年 法名久慈長椿

○元久 道号 恕翁 福昌寺 忠翁和尚

○久豊 修理亮 道号 義天 女子一人

基通与大祖盟為父子賜姓藤原、由是下文凡書藤原始自此時、

安倍泰親、承家学、善占、法皇之幽于鳥羽殿也、適有鷓鴣、命占之、曰三日內、当有慶、後当有憂、法皇未信、清盛時弛防祭、乃意始安、既而仁以起兵、不克敗死、皆服其術、見泰親伝、

百鍊抄 寿永二年

十二月二日平家領義仲可惣領之由被下院行下文、十日可追討頼朝之由被成院行下文、是依義仲申請、

全文治五年

七月戊寅上西門院崩 春秋六十四

山棟 記治承四年五月十五日丙寅天晴多曇自京下人走来云、高倉宮 一院御倉三位腹新 有配流事云々、

院御兄也

全元曆元年八月十二日戊辰天陰午後雨、頃之止、九郎判官義經兼向伊勢

出羽守信兼男三人、有示子細事之間、件三人或自殺、或被切殺云々、

伊集院善太夫所感系口作

弘安九年丁亥三月二十一日薨

又一本作弘安九月廿一日薨、實丁亥年也、寛永諸家系口曰嘉祿二年三月廿一日卒、享年四十八、法名徳仏

持明夫人所寵繫系口則書福子征夷將軍薨于弘安九年三月廿一日、實丁

亥年也、其他古系圖公諱日同之者有二本、且寛永諸家系口亦書公卒于嘉祿

二年三月二十一日、享年四十八

一忠久十八歲之御時西國之將軍ト成給事、白川法皇御院宣ニヨリ後征夷將

軍ト号ス、殊ニ高倉院ニ忠久似サセ玉フトテ御養子有リ鼻リ、

石坊津一乘院ノ経藏ニ在タル古御系圖ニアリ、右ノ十八歳ハ元暦元年甲辰正月十四日木曾義仲征夷大將軍ニ任セラレシ年ニ当レリ、又加世田若松氏古系圖ニモ忠久公ノ伝ニ白河皇御時院宣ニテ高倉院官西國ノ征夷將軍ト示給、十八歳成給御時ナリトアリ、同ク元暦元年ニ当ル、

正治元年

法印権大僧都隆曉 勝宝院

正月十三日大僧都并長者六十八宣下、依為上臈超印性為二長者

六十宣下、此年亦六十八

正治二年

法印権大僧都隆曉

六月十五日依所勞辨長者并大僧都、寛曉入室受法灌頂資太皇太后宮權

寛源俊隆息嘉応三年五月廿五日叙法橋入東寺修造坊 承安二年六月廿

六日叙法眼、前大僧正禎喜建春門院御折孔雀経法賞議、建久五年五月

廿二日転法印御祈、建仁三年五月十九日御祈賞以定蒙法權叙法眼、元

久三年二月一日卒七十二、保延元年乙卯生、求拜堂所可初參無之、

玉海一

仁安二年丁亥正月至十二月

十日癸亥今日撰政献所移徙也云々、

全二

仁安三年戊子正月

山櫻記

一日甲子天陰終日甚雨欲出之聞聊有相障事、不出無院并殿下拜礼云々、

治承二年正月十七日壬子天晴午刻着直衣冠參仁和寺御室木寺御所云々、御室

有御对面、母儀高倉去年三月被令失御服之由也、然而令着帷鈍色給、不令

玉海三

嘉応元年己丑

正月一日未四点參女院御所、次參院法住、寺殿、十二月廿三日甲辰陰晴不

定、時々小雪云々、廿九日庚戌以使訪時忠・信範等、

嘉応二年庚寅

正月大

一日壬子陰晴屢變、時々小雪、寅刻拜天地四方如恒、

吉記 治承五年三月廿三日己亥

奏除目事 申彈正忠

大學少允惟宗孝親伊勢初齋宮并造賀茂倉屋功

申左右兵衛尉

平重能 真言院曼荼羅并御齋会功

為頼朝乳母子

忠 津々見右衛門次郎 次郎兵衛

○建久七年先是稻庭權頭時定建仁二年二月八日死于西津、為若狹国下司職至是八月頼

朝龍時定職惟賜西津庄而余皆以忠季為守護職、於是季阿弥陀坊為今

富公文至建仁三年八月三日

○建仁三年十二月廿二日割十六所於遠敷三方二郡之地九月廿四日、至八月廿八日領今富名、二所堂行政子為政所執事、賜之藤

民部大夫行光左兵衛尉越前房為代官定勢房為公文、

○元久元年八月廿九日遷賜忠季皆如故、

○建仁三年十二月廿二日割九所於遠敷郡賜左兵衛尉藤原家長既而未幾

還補忠季如初年紀不依、忠季乃舉越中藤内光憲為稅所代後以古津三郎時

通・藤内十郎信広・右馬大夫時文・古津新太郎時經代之、又季辻平

四郎為公文後以靜定房代之、

○承久三年六月十四日迄領之此忠季後日出家法名、從泰時戰于宇治手斬三人若狹兵衛入道

清河戰死、若狹次郎右衛門入道、

忠時

多州

三郎兵衛尉忠季入道嫡子

○承久三年七月襲父職以古津新太郎時經為代官、以了京為公文、

○寛喜元年忠時殺○二年六月収其職邑而稅所今富○三年十二月係武藏

守經時領、乃以忠時母若狹尼御經時家時長子、寛元年除正五位下為武藏守、四年以安讓執權職為御代官、是忠季後家也、尼又以池

於弟時頼朝為代官、了京公文如故、

○寛元四年相讓守時頼朝職若狹尼為代官如故、

足利高経為越前守護、建武

籠 忠

子義將為管領論若狹守護

正平十六年議詮以石橋和義為若狹守護賜今富庄、

三方陣正宏三門尉山城守入道常忻

○應永十三年一色修理大夫滿範法名道範補守護職、十二月十八日以範忠為守護代、以長

法寺民部丞為代官、

○十六年正月六日道範卒、子一色五郎範範襲職時十歲、此日範忠削髮、法名常忻、

居守護代如故、代官民部丞亦削髮、更号道圭、十一月議範任兵部少輔範忠、移守

護代宿所於塩浜若王寺前、

○二十一年二月十八日常忻為稅所今富代官、

○二十三年七月廿八日三方範忠領西津庄、乃遣代官布施大炊助入部治之、

○二十九年九月廿八日有本社冠官式守護代三方山城入道滿範、

修理亮

常忻弟

○二十八年七月四日謁長法寺職十日以常忻弟為稅所今富代官職、

○三十年十二月三方殿遣伊崎中務丞為稅所今富公文、

正文在島津函書久見

一若狹鳴津と申ハ比企判官義員妹腹忠久一腹雖然忠久ハ頼朝ノ子、忠季ハ

八文字民部太輔ニ從頼朝彼母ヲ給、其後為出来子也、氏ハ惟宗、承久兵

乱之時親子宇治川ニ而戦死云々、其子孫三方名乘若狹ニ有之ト申伝也、

一越前鳴津ハ云々

一信濃神代郷云々

右聞合候而可預候、以上、

七月四日

深栖左門殿

覽

一内藤新兵衛判形之書物一通

一若州三方郡之内井崎村と申所ニ九左衛門と申者御座候、此者五代以前迄

ハ鳴津と名乗申候、其後おとろへ申候故ニ三代ハ三方と名乗井崎と名乗

申候由道政ハ五代以前之仁九左衛門先祖之由、

鳴津函書頭

一丸左衛門尉今程者高百石計之所を仕百姓ニ而御座候、年比六拾計ニ見

申候、子共拾人計持申候由、以上、

五月十二日

先年より山田太郎左衛門尉方嶋津道正申結公事之儀宗庵御時雖有落居一

向御糺明不届之由敷申之固於口状者不及分別之条誓断之儀申付候処、山

田方ハ依有失、常倉分倉所共ニ而所共ニ如前々嶋津道正跡嶋津八郎左

門尉仁宛行者也、年貢諸公事無滞愈致其沙汰、永可有知行之状如件、

大永八年八月十九日

内藤新兵衛尉

光広書判

伊達行朝陸奥人常陸介藤原時長後也、時長仕源頼朝食常陸伊佐地有女曰

大進局、為頼朝所幸生一男、以故時長得親近、雅愛曰念西、文治中從頼

朝討藤原泰衡于陸奥、軍次熱借山時長与子為宗等先登敗伊達那敵置為宗

獲信夫庄司、陸奥平、頼朝以伊達那与時長因氏焉、

註 本書曰知家本義朝子為宗綱子未知是非、若戸系圖曰知家母宗綱子朝綱女称八

小田治久初名高知、八田知家七世之孫也、父貞知常陸介世食常陸小田地

田局、平治之乱知家匿宗綱家、宗綱養為子、然保元物語有下野人八田四郎据此知家

為著姓云々、治久家世相伝、始祖知家源義朝庶子為藤原宗綱所養、曰藤

既在下野可知、而東鑑云、宗綱女嫁小山政光為頼朝乳母、疑系圖由此致誤故不取、

原氏云々、

大友能直管為中原親能所子養後復本姓云々、頼朝授豊前・豊後守護為鎮

西奉行子孫、襲為守護奉行、

石橋和義參河守云々、正平十六年足利義詮授以若狹守護若州守

為食邑今富庄守護

建徳二年足利義満以貞世為鎮西探題、擊菊池武光以兵寡不得進、義満命

大内義弘、吉川経見授之、与其進肥後与武政戰于水島、不利又与大夫親

世・大内義弘等將兵數千、攻菊池武朝大戦託問原、殺傷頗多、會將軍官將兵奄至、貞世敗退武朝申狀、天授元年与少式冬資戰于肥後斬之、

元禄十三年庚辰正月十二日綱貫發團、十五日乘船京泊、二十一日発船、二月十九日着船大坂、

同年庚辰島津主計忠雄初久、発江戸、三月四日至京都取謁于殿下之諸大夫進藤修理亮、今大路治部少輔於是書

近衛基通公以來島津家之由致而達之而輩取之、乃備于殿下之御覽、其事見于左、

三月朔日主計事伏見江致参着、翌二日致山京、伊集院主水江申談、近衛様御家老進藤修理亮事、主計兼而近付ニ而候故、緩々出会度旨申遣、折節飯限山先達蓮光院於旅宿今四口之夜致山会候、修理同役今大路治部少輔も修理同道ニ而被參候ニ付緩々出会候となく此御方様御元祖忠久様を近衛基通公御吹等候と申伝候、御出緒を語候得者右躰之儀如何ニも御所ニ而も承伝申事ニ而候、然共委キ儀者始而承候、是ハ承拾ニ者難致事ニ候条右之趣書付候而くれ候得かしと右兩人被申候ニ付御中緒書調致懷中居候付則遣候得者、得与見被申、此書付者早々両公江可掛御目出被申候、依所望右兩人江遣候、書付左記、

○一 表張紙ニ朱 宝永四年亥八月写済 見玉權右五門

一筆啓上仕候、先以中將様御道中益御機嫌能最早疾被遊御参府、且又、上々様方跡御安康可被為成御座と旁以恐悦奉存候、然者拙者事京都江少々御用之儀も有之、將又三日程之御暇被下置候付出京仕候、去年於其御地御繪図之儀付而御家之御由緒書付差出候内ニ、忠久様於住吉御誕生之節、近衛様御社參殿々御懇之訊有之候、就夫御旧好之一筋今以不相替旨書出置申候、此儀、近衛様御方江何様ニ御家伝有之候哉、承置度儀と内々存候処ニ、去冬近衛様御家老進藤修理亮其御地江被罷下候付、幸之儀と存近付ニ成置申候、依之此節京都ニ而出会申、何となく可承合と存候処ニ飯限山蓮光院人峯付而致在京候故、修理亮今大路治部少輔を蓮光院

より旅宿江招候事ニ仕、私儀不凶出会申緩々と語申候内、右御由緒之儀申出候得者あなたも右之趣申伝候儀無別条候、然共拙者物語仕候通ニ委細之儀者不承置候、いヶ様、近衛様御家之御記ニ者記可有之と存候、此御由緒之儀者、御家門御父子様共ニ折節御噂被遊事候得者、少も別条有儀ニ而者無之候得共、右之段々申上御序之節御記を被考、弥御由緒を憶ニ仕置度事ニ存候由ニ而兩人以外之悦被申、左候而私物語仕候趣書付遣候へがしと所望ニ而候故、書付候而遣申候処ニ、関白様御父様江被懸御日候得者、御感心不浅、御閑隙之節御記被御覽合可被仰聞旨御意候由以書状被申越候付、修理亮・治部少輔所迄拙者見舞候而一礼申置候、右之通ニ近衛様御家伝此御方之御家伝ニ無相違候儀猶々結構成御儀と乍憚奉存候、右兩人江出会候節者伊集院主水儀も一應ニ罷有兩人より挨拶も承置申候、又京都へ罷有候河部豊後守様其外御大名様方々より御扶持被下置候、有職者ニ吉益彦太郎と申者私以前より能為存者ニ而御座候、此者江今度出会申候処ニ則之縁語より、忠久様仕吉へ御誕生被成御座候を近衛様御申ニのせられ御帰京候而御取立候出承伝申事ニ候と物語仕候、旁右之件ニ候得者此御由緒之儀者此御方江申伝候通何方ニ而も違説無之儀かと奉存候、修理亮・治部少輔江拙者より遣候書付又者兩人より之書状差越申候、右之段々可被達貴聞置儀と被思召候ハ、何分ニも宜御取成奉願候、恐惶謹言、

三月九日

島津主計

忠雄(花押)

島津図書様

島津勘解由様

新納美作様

○一 近衛様御家老進藤修理亮、今大路治部少輔より依所望遣候書付之扣

表張紙ニ朱 宝永四年亥八月写済 見玉權左衛門

薩摩守家之元祖島津豊後守忠久者石大将頼朝卿之長子頼家卿・夫朝卿之庶兄ニ而御座候、母者比企判官能員妹丹後局ニ而候、密妾懷胎之儀を御台所嫉妬被成候付丹後局上方江遷振州住吉被參掛候節産氣權候故、旅宿

を求候得共許容仕者無之付不得已住吉社辺之於石上男子を被致誕生候、是則右之忠久ニ而御座候、折節御家門様御社參被成候処、社迎見啼相聞得候付御人を被遣被爲見候得者右之次第ニ候故取揚候様ニ被仰付、京都江被召列候、丹後局事其後惟宗氏部大輔広言ニ嫁候付、忠久繼父広言ニ被育、惟宗之姪を冒罷有候、然処ニ承久三年辛巳六月從道公蒙御恩免御氏族と罷成、于今日好之一筋乍憚断絶不仕候、当薩摩守より五六代以前之先祖共迄者任官受領等之節者、御家門様御推挙ニ而御座候、元暦二年忠久七歳之時始而謁頼朝卿候処、爲食禄勢州波出御願、同區須可御庄を下、又翌文治二年忠久八歳之時島津庄薩摩・大隅・日向三ヶ國之被補地頭職、同年八月薩州江下向仕候、右之通幼稚ニ有之候得共頼朝卿御美子之故早速厚祿爲被下置事ニ御座候、頼朝卿之御下文數通于今有之候、以上、

三月

昨日得御使札之処、入夜下宿御報及遲引候、先以琉球之産花籠御投下辱令感佩候、并御目録彼是御懇篤様謝も不能、短筆候、如蒙教先日者克々得御意、殊御両家御由緒之事委細承之、不堪感悦之至候、即達向公御問候處御甘心不浅候、追々御附贈之節、安元・治承之頃又承久三年之御記等御覽之上於有所見者重而可被仰聞之旨御気色候、先夜中請候御書記之物即御前に被留置候、昨夜蓮光院御入來、右之段委夕白談候条不能多端候也、恐惶謹言、

三月七日

進藤修理亮

(花押)

島津主計様

拜復

尚々御用中寛々得貴意欣然之至候、及深更帰家御綴及遲滞候、以上、御札致拜見候、如貴論前夜者始而得賢慮大慶仕候、抑御家伝之事御書記則入而公御覽候処、御感心之御事候、追々御旧記被相考、重而可有御沙汰之旨候、將亦奇物并御目録之通御慮賜辱祝納仕候、恐惶謹言、

今大路治部少輔

三月七日

(花押)

島津主計様

島津主計様

今大路治部少輔

孝在

九月四日林大学頭殿江參候之節、御家之譜略于今石野八兵衛殿より不來之由大学頭殿被仰付、私申候ハいた八兵衛殿迄も參間敷候、只今最中清書之中ニ御座候、其上書写一通りにて能と有御座ニ不被言、装潢等迄段々御念入候様ニ承及候と挨拶中、切忠久公之御事、東鑑之通計ニ而ハ頼朝卿之御子と不善見候条如何と尋候所、大学頭殿被仰候者、兼而被存候よりハ愜成御系圖第一奥州陣之節、頼朝卿より畠山重忠江之下文何方之系譜ニも無之、証文殊旨平坂之文庫ニ御納之上者末代迄相殘ル物ニ御座候故、御家之御重宝不過之、御念入被仰付段尤なる被遊様ニ被存由ニ御座候間、弥以御仕立等迄被入御念被仰付様ニと奉存候、以上、

宋ニテ

元禄十二年

十一月十四日

菊池新三郎

菊池藤助様

文化二年

近衛様江御由緒之儀京都御留守居を以御内々御尋之趣有之候書付写

心覚

御記録類御吟味有之候処、元禄十三年之比御縁組御願之節御由緒之事、公辺江被仰達候節松平薩摩守殿元祖忠久御事者近衛殿先祖普賢院関白基通公御猶子藤氏ニ被成、其後御通路無断絶、惠雲院関白植家公、東求院関白前久公以来御親有之事ニ御座候、以上、

十二月

右之通被書出候而則蓮光院江被仰達、蓮光院より早速関東ニ而薩摩守様江申上候事ニ候得者、後法興院殿政家公文明十四年之比島津家之一族村出肥前守經安國主之下知ニ而御家門江祇候有之候事、御由緒有之ニ付テ卜云々、右等之外時々御通路往来之事共有之候得共、子細者不分明、御記

録者其節々之御主人様御直筆ニ而先は朝廷之儀而可多世俗之事ニ抱候事ハ少ク取難有之事故書被候事も難致御座候、何分御出緒厚キ儀者世上ニも存之通之事ニ而可書被程之事別ニ無御座候、此趣御含被成可被仰上と存候、

木村右京

近衛様於御殿木村右京面会承候趣左ニ申上候、

一此間より度々被仰聞趣余リ及延引候、基通公御日帖之内段々致拜見、住吉社御参詣之儀ニ而も被記置候哉と心掛相札候得共、御口帖之儀者御代々様御直筆ニ而朝廷之事而已御記有之目録之様ニ而御書留一ト通り之事多相見得候、諸大夫中ニも及内談候趣、朝廷御用之外者御日記之写御書出無之候間右京臨見之趣御物語申候而御書留被成候筋ニ致度承候、依之余リ急務不仕、其上御御納戸旁之儀、立野、木村兩人ニ而隔日代合相勤候哉ニ推察仕候、御日記拜見も数冊之事故延引仕候旨存付候ニ付、去年被仰渡置候通其程合ニ応御前より御願之筋ニ而も取計候様承知仕候間、極内々右京迄申試候趣、夫ニ而者却而不宜、内府殿江毛御手前御願之筋ニ而得と御聞濟ニ而諸大夫中ニも承知之事ニ御座候、猶又、三貌院殿御日記杯可相札旨承、其後参殿仕候趣、右京罷出余リ延引ニ相成御氣之毒ニ御座候半と存、段々其外之書留相札候趣ニ、公辺江被差出候書留見当写取候由別紙相渡候、右之序ニ承候趣

一後法興院對白政家公御日記之内ニ下桂姫事、御殿江御出入之者ニ而島津家江御申緒ニ付願出御取持被仰進罷出候筋ニ相見得候、

一信尹公天正之比之御日記ニ島津中納言入米、

一信尋公御元服之御記録ニ島津人質より為祝儀太刀馬代

右様ニ日録同前ニ誠ニ荒々錯記有之、書被も難被致、就中在古戦国之砌之儀者、朝廷之儀而已御記有之候、尚御代々様御記録之内ニ見當候而御見合ニも可相成儀者、追々為御知可申旨承候ニ付、此等之趣申上候、以上、

但右京相渡候書付相添差上候、

十二月廿五日

勘解由様

岩切實藤次

張紙

勝浦姫米証

八十二年 貞昌 久問 重種

中絶 国貞 紹益

元和 已九月四日 貞昌

三カ 神無月十二日 重種 国貞 久幸

紹嘉宛

二月廿四日 国貞 紹益

壬子慶長十七年十月十二日 重種

国貞 久幸

寛永十三年丙子至江戸

寛保二年戊戌六月十三日

山内寺江有由緒神社書出帳

御屋地

一若宮大明神

但忠久公御尊形冠御裝束ニ而御座候、

右棟札之儀者御方留有之由承候ニ付召置申候、神領等無御座候、何比建立之年間相知不申候、何度之御祭有之、十一月十五日計り山内寺より座主御勤ニ而兼而者西前寺門百姓九左衛門代花香掃除相勤申候、札收帳面ニ相知為申儀ニ而無御座候、

右通野田陵等より山内寺へ大体書付遣候帳ニ有之、

在史局

野山屋地村若宮大明神由来之儀、忠久様初而御入部之砌右在所江被遊御座候御屋敷其紛無御座由候、然者御供仕被罷下候市来崎之何某忠久様御尊形建立仕、若宮大明神と奉安置候由申候、依之右市来崎氏神之由唱來候、御尊形之様子冠裝束ニ而被遊御座候、右座主西前寺と申候、則御宮之脇へ有之候、天正年来迄者右寺為有之由候得共只今者御藏入ニ罷成候、右申伝之儀別冬無御座候、以上、

元禄十年也

丑六月廿七日

野田慶吉満善左エ門印

肥後仁右衛門殿

右同 橋口清左衛門

文政七年申六月廿五日

薩州出水郡

山門院野田由緒改帳

下名村之内

一御屋地壹ヶ所

一惣廻り拾八町四拾六間

一惣流五町五拾三間

右御休所より子ノ方拾六間

下名村

御屋地之内

一若宮大明神社壹宇

但御休所より子之方拾五町

御神体忠久公冠御装束御安置

社領御祭米無御座候

二月朔日 六月十八日 十一月十五日

右三度輕キ御祭仕候、

右御屋地之儀、忠久公多年御在城其口跡御屋地と相唱申候、当日若宮大明神御鎮座、座主西前寺御宮之脇江天正年来迄者礎ニ為有之由候得共、

当分御藏入地ニ罷成候、尤水之手口西之御門登掛馬場御植木齒と申所当分相唱申儀紛無御座候、然処寛政二年戌九月寺社御奉行所より御糺方有之、其次第棟札ニ相知申候、

右同帳覽保二年戌六月十三日野田慶書出

一稻荷大明神

右先年者野田之内ニ而御座候処、高尾野と申外城慶長年来被召立、当分高尾野之内ニ而御座候、惟新様より御寄進高五石為有之由候得共、当分無御座候、尤忠久公御入部之砌より御建立之由候、

右同帳覽保二年戌六月十三日野田慶書出

一稻荷大明神

右先年者野田之内ニ而御座候処、高尾野と申外城慶長年来被召立、当分高尾野之内ニ而御座候、惟新様より御寄進高五石為有之由候得共、当分無御座候、尤忠久公御入部之砌より御建立之由候、

右同帳覽保二年戌六月十三日野田慶書出

右先年者野田之内ニ而御座候処、高尾野と申外城慶長年来被召立、当分高尾野之内ニ而御座候、惟新様より御寄進高五石為有之由候得共、当分無御座候、尤忠久公御入部之砌より御建立之由候、

右ヶ条之趣相知候分大体書付差越申候、以上、

戌六月十三日

橋口伊右衛門

窪田新助

中村郷兵衛

石沢四郎右衛門

実相院

文政七年申七月名勝御糺ニ付

改帳

下高尾野村

内野々 段ノ原 横峯 野添 本城 下高尾野

外者不写

地頭飯屋元より午ノ方廿式町廿間

稻荷大明神

一本地如意輪觀音木像座像高サ六寸

一鏡一面金像之地像高サ一寸

但作者相知不申候、

但同断

一御祭り十一月五日 一御神酒

一御祈願

一祭り米貳斗

但所中より差出申候、

一神領高寄附并高懸御座候、

右者勸乘之年号并由緒等相知不申候、尤宝物并申伝等無御座候

郷土年寄

出水源左 印

申七月

右同

穉所宮助 印

名勝再録方 御役所

正文在山内寺

知行目録

高五石

薩州野田村之内

浮免

右之知行稻荷為神領被成寄附畢、全有領知而向後御神事公役無經可被相勤者也、

慶長十九年八月二日

伊兵部少輔

貞昌印

三諸右衛門尉

重種印

比紀伊守

國貞印

町勝兵衛尉

久幸

山内寺

正本在山内寺

在口裏

山内寺領

本尊 五石

薩州出水郡野田村之内知行名寄

一浮免

楠きり丸 一廿一

山内寺ノ

金兵衛尉

上田九畝拾歩 一廿七升四合

麦生田八畝廿九ツノ内 一廿九俵二斗

下々田廿八歩 一廿七合

八弥太

裝の川

下田二畦 一廿四ツ 一廿一升七合

六分 一廿一俵一斗

山内寺

弥右衛門

合寄段二畦十四分

粃大豆拾一俵一斗一升二合

高ニシテ三石七斗七升三合

以上

元和三年正月廿七日

桃山權左衛門尉印

寛保二成六月十三日山内寺江有由緒神社書出帳までハ右目録等未写出なり、

享和二年成三月野田中神社仏閣跡其外諸しらへ帳

下名村之内石走り

一稻荷

但御林所より方角子方町敷三拾五町四拾間程

一正鉢石

一勸請年鑑相知不申候、

一神領并寄附高無御座候、

一祭日十一月十七日

下名村之内枝村

一屋地村

但御林所より方角子方町敷拾六丁程外前後不写、

右之通所中相しらへ帳面相調差上申候、以上、

成三月

社人 木上伊膳 印

郷土年寄 浜田五右衛門 印

郷土年寄 中村長右衛門 印

寛政七年卯十二月十五日

所中小堂社帳 野田

社人 木上伊膳

一稻荷大明神社一宇

但地頭飯屋本より子方三拾五町四拾間

一十一月十七日神事執行仕候、

右下名村之内石走りと申所江建立ニ而候、御神休者御石何年何月建又者

由緒等之儀相知不申候、

外者不写、

右者此節御札方被仰渡旨趣承知仕古帳相写帳而差上申候、以上、
但古帳文字不分明大概写二而御座候、

卯十二月十五日

郷七年寄

中村長右衛門 印

右 清田 鉄之進 印

右 橋口伊右衛門 印

右 石沢大右衛門 印

御記録所
御書役衆中

文政七年申六月廿五日

薩州出水郡山門院野田由緒改帳

下名村石走り

一稱荷大明神一字

別 当

山内寺

正躰鏡 差履 中神像老尊長三寸

御休所より子ノ方三十五町四十間

一祭り日二月初午日

知行目録写

薩州野田村之内

浮免

高五石

右之知行稻荷為神領被成寄附畢、全有領地而向後御神事公役無緩可被相勤者也、

伊兵部少輔

貞昌 判

三諸右衛門尉

重種 判

比紀伊守

国貞 判

町勝兵衛

久辛 判

慶長十九年八月二日

山内寺

右者、忠久公御建立ニ而御座候処、年鑑相知不申候、其後慶長十九年八月二日惟新様より御寄進高五石被成下候処、いつ比より御取揚ニ罷成候哉、
当分ニ者地面無御座社頭ニも寄落仕当分小社ニ而御座候、
右者此節薩藩名勝志再御取しらへニ付細々御ケ条書を以被仰渡趣承知仕細密相札一帳ニ相認差上申候、以上、
但所中廉繪図意枚并御雲屋絵図而相添差上候、

卯申

六月廿五日

橋口清左衛門 印

中村 郷兵衛 印

名勝志再撰方掛

御町奉行

橋口今彦殿

享保九年辰八月廿八日

薩州出水郡野田下名村御檢地字次帳

五冊之内

九百六十

岩番

庄屋

吉留与兵衛

西前寺門

宇兵口

植木園門

与右衛門

山内寺場門

与左衛門

爪田門

長左衛門

同所

中田 志間

卅二間

同所

上田 十六間

十七間

同所

同所

同所

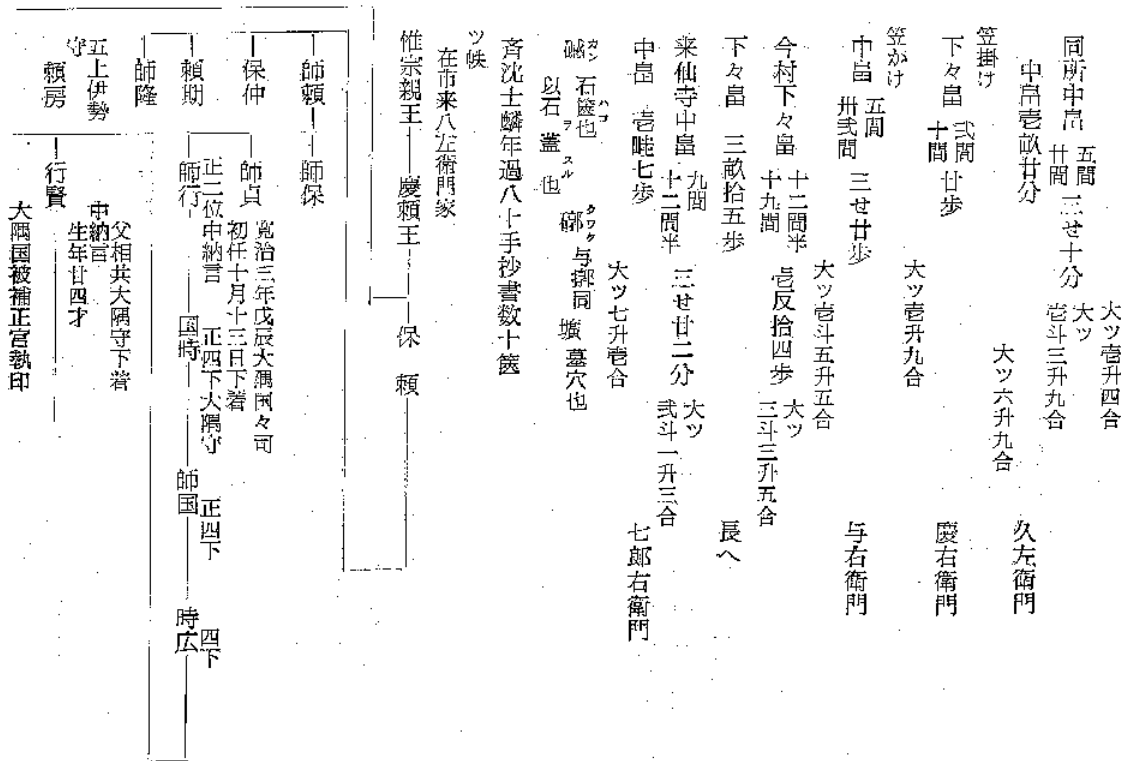
同所

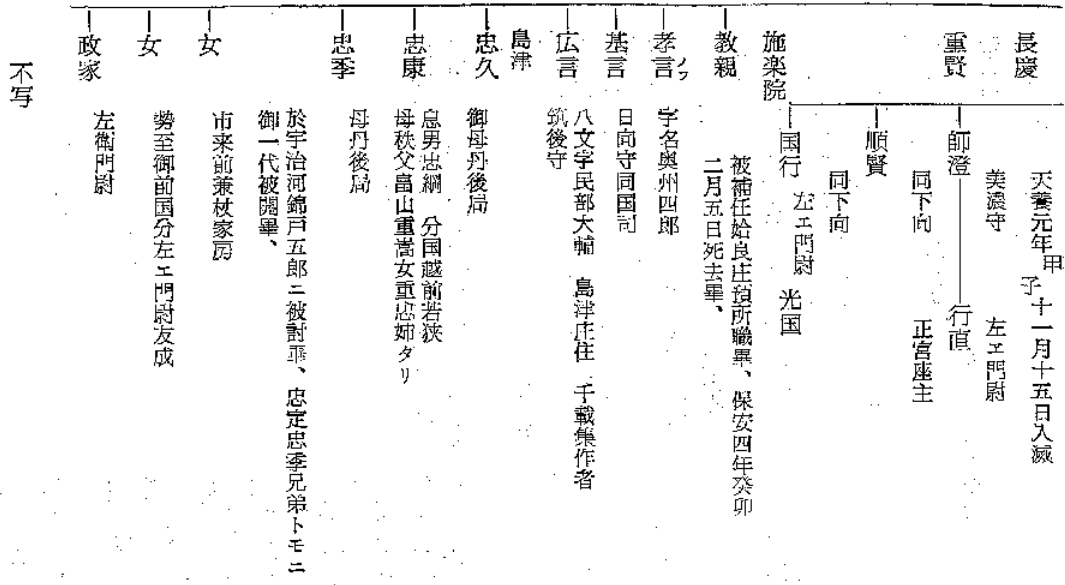
此圖不写

右通五冊之内ニ而壹番ニ候間五番之冊ニ其節々郡奉行名前可有之可差出
旨申渡候処、外之帳四冊核紙も無之古帳差出斐川之門有之分左ニ書拔置
也、

- 拾四番 斐川新門
- 井町 七間 九畝拾歩 廿町七ツ 慶左衛門
- 中田 四十間 赤糶式表三斗四升 次兵衛
- かき掛 四間 八畦 廿町九ツ
- 下田 六十間 赤糶式表三斗四升 斐川新門
- 五十六番
- 麦生田 七間半 四畦八分 大ツ 半兵衛
- 中畠 十七間 式畦四歩 大ツ 斐川門
- 四十四番
- 辻 九間 卅八間 卷反卷畦廿式歩 万兵衛
- 下畠 卅八間 大ツ卷表七升式合
- 麦生田 三間 卷畝
- 山畑 十間

- 竿取 宮田平左衛門 印
- 右同 堀 兵左衛門 印
- 藤見 児島市郎兵衛 印
- 右同 中村 大藏院 印
- 筆算 市来崎権左衛門
- 右同 吉留孫右衛門 印
- 右同 中村 郷兵衛 印
- 郡見廻 石沢唯右衛門 印
- 慶 清田 武兵衛 印





按猿渡古系図藤四郎実信伝載文治二年以劔役從太祖入部於薩山門而降

寬陽公時、義嗣宮内久喜躬掌司職朱書搦之曰、太祖入部為建久七年作文治誤也、子孫猿渡要人信安亦与国明同、其時乃又駭其誤曰、今史說皆決乎、文治入部則是觀之、當時史官猶未識、別可以知、

猿渡喜右衛門系図



右三家辰三月十日 久喜

宮内太輔殿朱書ニ御下向者建久七年之管不審と有之候、宮内太輔殿御文書奉行之時分迄ハ專建久七年之御下向之二説御座候間、宮内殿不審尤之儀ニ候得共、其後文治二年ニ為相極御事ニ候得者系図之表ニ致符合候事、猿渡

村山 村山惣領者猿渡と可被呼也、

外山

忠久御下向之人數代々役人之事

本田御幡奉行

酒匂御番役人

猿渡御劔役人

東条

西条

御幡指左近尉

本ハ御幡指ハ真宰ツツ

ハノノ相京方有シカ

氏久御代国合ノ合職

之時討死、其ヨリ

左近尉御幡指也、

鎌田

山田

御下向之御役人七人也、

永祿三年庚申十月吉日

右之相京方ハ愛甲ニ而御年比衆と聖榮自記ニ御座候、吉松・筒羽野之愛甲方本ハ御幡指為相勤と申事ニ可有御座候、左候得共前文通古系図ニ左近尉者御幡指之役と御元祖様御代より相見得候へハ、其後愛甲方ニ為被仰付歟、何分難決御座候、
建久九年歟之御袖判御文書古写一通

在御判

久米之次郎家願きかい□□候き、其跡をハ子息あらハ相伝すへきに一人の子□□もなきによりて舍弟忠重にたふへきなり、奉公の物のあとをハ御いとをしミあるへき事にてあるうゑ、証文を帯□□れハたふへきなり、いまたわかき物にてもものに心えぬところやあるらんとおほしめせともほろころの者のあとなれハかくおほせつかはすなり、当時者藤内康友知行のよし申なれハ他所をもとらせて家願か跡をハこの□□御下文をもなしたふへけれども、忠久かきたの所也、家願ニも御教書をつかはしてたひたりしかハかくおほせつかハすなりとおほせことなり、仍執達如件、
建久九年歟 散位平

嶋津左衛門尉

右下飯長浜村之百姓早右衛門より被召下候文書也、

四番箱下

日本史註按國衙荘園有國司領家、頼朝奏請初置守護地頭、掌國衙者曰國司、鎮護之者曰守護、領荘園者曰領家、巡按之者曰地頭、自是國司領家日弱、守護地頭日強、天下悉為武家之有、
政佐譜 忠久主文治二丙午六月一日薨總聞、八月一日下着山門院
朝景伝文治二年八月一日下向山門院、
実信文治二年八月至山門院、

宮ノ城柿木原氏本

進上

謀叛人事

豊後冠者義実

大夫義祐

右進上如件、

文治二年正月十五日 日向國真幸院郡司草部重兼上

今月四日御家譜略序文書人之草案一通林大学頭殿江致持參一通前ニ而詔委細之儀申述候、御紋之事御尋候故甲伝候ハ六孫王ニ源姓を始而賜り候時、清和天皇より昇龍降龍を二引に直し源家之紋に賜り候、則頼朝卿之御紋二引ニ而御座候、元祖忠久事頼朝卿之長庶子たるにより二引之御紋を従横に拆て十字とし紋ニ成て頼朝卿より被下、嶋津家之紋に用來候、右之通故文字ニ世上にてハ二引兩と書候へとも家ニてハ二疋龍と書候へとも家ニてハ二疋龍と書候へとも家ニてハ二疋龍と書候由申述候所ニ二引之事始而御聞候、左様之儀ニてあるへく候、これにてよく聞へ候すれハ二疋之龍といふことにて御紋もやはり二疋龍をたてよこになしたると云まで候、次而によき學問したると御申右之御用いまた終不申所へ深尾権左衛門殿被參其席へ被通候而大学頭殿御逢二引之紋ハ昇降之龍にかたるといふこと外にて不知事ニ候、如何様右之趣を聞候てハ二疋龍之状ニ能似中候、それを又たてよこに直して家之紋になりたる之只今致穿繫出し候との物語共ニ御座候右之通ニ御座候へハ御紋ハ十文字と申ニてハなくやはり二疋龍にて候との御口ふりニ御座候、権左衛門殿と申ハ大学頭殿門弟ニ而評定所之御目安役被勤御直衆ニ御座候、以上、
元祿十三年
十一月十六日
菊池藤助

市米北山新兵衛本

嶋津御庄雜掌承信重言上

欲早被停止北郷丹後房亮雅為陳、且依關東御下知、且任条々承伏旨可

為領家御進止由蒙御裁許、日向方北郷國師職即名 并久富・林田・安益松

永・益永・弥吉・法案等名主職事

副進

一通 關東御下知狀要段

右彼亮雅先祖代々乍為御恩補之子孫、近年怒号御家人、違背本所、勳募武威、奉忍緒領家御命之間、因茲召放件所職名田等、雖被宛行別人之、不悔先非、猶以就令蓋妨之、訴申之処、如亮雅偽陳者当名田富在家山野狩倉以下所職等先祖開務私領北鄉弁濟使領之内也、而代々處分之時、雖付各々之假名、元為一領主之跡之條御下知田文顯然也、亮雅任相伝所令知行也、而不顧前々御教書、棄破天福・寬元法、改補員外仁之間、重代御家人佗僚云々此条々之内先以件名々等為北鄉弁濟使領之内元一領主之跡之由亮雅遮而自称、承伏分明也、其上如寬喜二年十一月日關東御下知者、一北鄉弁濟使分名田富事中間加之弁濟職元久元年五月時政朝臣進和与狀之上、建曆元年九月義時朝臣下知狀云、所々名々怒令改定、宛補郎從云々、事実者不隱使、若没収地出來者、言上子細可蒙裁補之処私改補之条如何、就中弁濟使事不及地頭成敗者也云々、亮雅更不可遁御下知違背本所敵對面罪矣、次天福寬元法御教書事、如文章者或給本家領家下知、或以寺社惣官下文令相伝欺、何忽可及御家人佗僚哉、但為本所現奇怪、蒙其咎者勿論可謂云々、而亮雅不顧自身所進御教書現文、率对于本所、及敵論對揚訴陳之上者、前前之不口須足高察矣、次同所進文治五十月三日御教書、文治五年十一月日下文等事、於左兵衛尉忠久者下時

東鑑文治二年正月廿四日賴朝上即大納言書云重家自近衛被兼留守職之條、如同寬喜御下知者、被下忠久許之広元朝臣奉書云、留賜小橋庄所職候云々、亦可例知也、守弁濟使事、自領家被仰付云々、於今者可改定其職之由被觸仰云々、於彼下文者留守成敗之實証也、次十二月廿二日、仁治二年十月十七日、寬元元年十一月廿日、寬元二年六月廿四日御教書等或弁濟使職、或林田・久富名主職共以本所御進止、武家御口入之所見也、全不帶武役勤仕支証而以何之篇可寡申御家人之威哉、凡陳狀之趣雖多子細、所詮關東御下知与亮雅自称無相違之上者、被停止向後敵陳、任御下知之旨可為領家御進止之由為蒙御成敗重言上如件、

元德二年七月 日

全

下嶋津庄内日向方任人等

御条々

一北鄉弁濟使分名田富事

自余文章略之

九月廿一日無年号 左衛門督家假名御返事傳、弁濟使事如何仁毛領家乃御沙汰爾天候倍幾也、是爾波郡司地頭於古曾沙汰須留事爾天候倍、其外乃庄官乃事波御意爾天候倍幾仁候云々以和模漢字 取要略之又被下忠久許之広元朝臣奉書云、留守弁濟使事自領家被仰付云々、於今者可改定其職之由被觸仰也云々、加之弁濟使職事、元久元年五月時政朝臣進和与狀之上、建曆元年九月義時朝臣下知狀云、所々名々怒令改定、宛補郎從云々、事実者不隱使、若没収地出來者、言上子細、可蒙裁補之処、私改補之条如何、就中弁濟使事不及地頭成敗者也云々者、

寬喜二年十一月 日

武藏守平朝臣 御判

相摸守平朝臣 御判

全

日置兼秀證言上

且任証文実、且依御庄例、被召尋其身、任所犯実、欲被行所当罪、為北鄉五郎兼持盜取祖父米西入道証判坪付一通盜人之加筆、或令被見源太目代被加証判、或被見執行刑部丞被勸免、其後永引籠懷中、暗掠申賜弁濟使職并名田等無道子細狀、

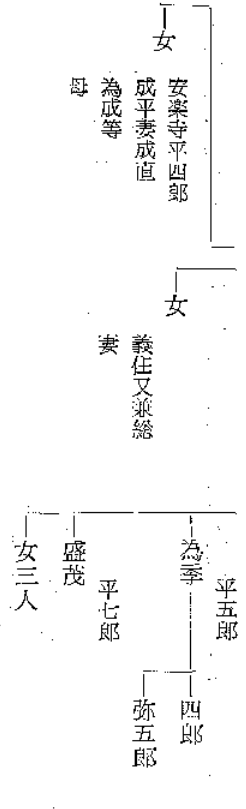
件条粗檢案内、兼秀苟為嫡子之嫡子、宥相伝道理之上、依與入奉公、前地頭嶋津左衛門尉奉行沙汰之時、以去文治五年宛賜弁濟使職下文畢自余 略之

在市來士土山新兵衛

兼秀申狀相副之

在御判

嶋津北鄉任人兼秀申兼持不当問事



右野尻十長善兵衛系図ノ中

嶋津庄薩摩方伊作庄預所安養右衛門尉重宗代盛景法師 淨空 与下司伊作

平四郎則純法師 法名 念西 代孫有純相論条々

一 下司職事

右対決之処如淨空申者、文治三年則純叔父重純寄進問被庄号畢、於下司者為領家進止之処、元久二年守護人忠久稱閉東御勸氣、追出重純、令知行下司職畢、為領家依無逆乱至宝治之比自然走過之処、惣地頭常陸後家忠久令押領之旨有純書送種々狀於預所之間、年来忠久知行者為押領之由領家始被驚思食之処、有純掠給御下知狀違背領家云々、如有純申者、則純幼少之時為重純之沙汰、令寄進畢、重純給御下文押領之問、元久之比重純与則純於關東被召使之、則純給御下知歸國之時、於門司閉令入海之刻、正文紛失畢、承久三年地頭忠久以当庄番生檢非違所并自名田尻・和田・大野三ヶ村万雜事令相伝下司職之間、至嘉祿年中不相違之処、忠久死去之後常陸後家令押領畢、訴申事由之時、可為能登前司光村沙汰之由後家依載陳狀、光村等問子細、就出和与狀則純宝治二年雖蒙御下知不違背領家、元久以前者為領家進止之問所申其由也云々、爰如淨空所進重純文治三年三月寄進狀、同年四月十四日序宣、同十五日政所下文、重純子孫可為下司郡司之旨許之、如有純書送預所七月十九日、八月十六日、五月廿日各不記 年号 書狀者伊作庄下司職數十年常陸後家押領之問、(為領家進止之由) 有純訴申之時可參決之旨被仰下之処、地頭避文云々、如檢注使加判建長元年十一月解狀并有純進領家宝治二年訴狀者、依寄進奉公給

御下文可備向後証文云々、如此狀者(領家)進止之由所見也、如有純所進天永三年國司任符治承元年序宣、元暦二年外懸下文者、為則純相伝所帶敷、如同所進元久二年十二月御下知御教書案者、不帶正文之問所相貽不審也、如宝治二年四月十日御下知者、常陸後家押領之由有純訴申之間、付本職可令則純領掌云々、如狀者雖有子細不帶補任本御下文書与種々大望狀於預所、以地頭濫妨停止之狀令違背領家之条甚奸謀也、且召問常陸後家之処、領家進止之条不論申敷、然者可為領家進止焉、

- 一 惣公文田所兩職事、
 - 一 公文田所給田浮免事、
 - 一 下司管失事、
 - 一 公文給田事、
 - 一 七兄崎并崎田兩坪二町事、
 - 一 富永名事、
 - 一 芋事、
 - 一 桑事、
 - 一 預所日別雜事等事、
 - 一 下司勘取領家下部等作田事、
 - 一 未進事、
 - 一 下司親類縁者未進事、
 - 一 下司下人等盜取収納使代則吉作困否事、
 - 一 百姓三十人内下司抑留七人出事、
 - 一 惡口事、
- 右十五箇条下司職可為領家成敗之上、非沙汰之限矣、
- 以前条々依將軍家仰、下知如件、
- 建長七年十二月廿五日、
- 相摸守平朝臣 在御判
- 陸奥守平朝臣 在御判
- 他家文書写四十四通ノ中
- あすはこふの云々

写 但正文ハ正保四年五月廿五日江戸へ、
羽所勝兵衛尉、児玉作左衛門尉持参、

寄進

先祖相伝所三ヶ所事

在管薩摩内 伊作并日置北郷
同南郷外小野

副進次第調度文書

右件所領田島等者年来嶋津御庄寄郡也、而天下騒動之間、公私為軍地人
民百姓併遊散畢、然問庄園何方課役如何可勤仕哉、於于今者令寄進一円
御庄御領致安堵計畢、有限於年貢所当物等者為重純沙汰追年無懈怠可令
運上京都之状、但為後代証文於下司郡司惣公文職者、重澄以子々孫々不
可相違旨為被成下御下文勅状以解、

文治三年三月 日

平重澄判

十訓抄二

建長四年神無月書

丹後守保昌任国に下向の時よきの山に白髪の武士一騎あひたり、木のし
たにすこしうちよりて笠をかたふけて立たちけるを国司の郎従等いはく
此老翁なむに下馬せざるや奇怪なり、おろすへしといふ、国司いはく一
人当千の馬のたち様なりたるものにあらずと制してうちすきける間三町
はかりゆきて大やの左衛門尉致経教多の従類をしてあひたり、弓取なを
し国司に及しやくの間致経云こゝに老者や逢奉候つらん、あれハ愚父平
五太夫にて候けむ、このる中人にて候子細しられず、さためて無礼を現
せしめ候はんかといひけり、致経すきて後されハこそ致頼にて有けり、
此党頼信・保昌・惟衡・致頼とて世に勝たる四人の兵なり、西虎戦ふ時
ハ死すと云ことなし、保昌かれかふるまひをミしりてさらにあなつらす
郎等をいさめて無為なりければいミしき高名なり、

下 嶋津庄日向方住人等

國師職事

所詮云清法師留守奉行之時、建永元年九月日補兼秀已來至安貞二年成秀
相伝知行訖、可為地頭成敗者彼廿三年之間、蓋致其沙汰哉、重直所申
非其謂欺、仍停止地頭之妨、任本知行之例可為領家進止矣、

寛喜二年十一月 日

武蔵守平朝臣

御判

相模守平朝臣

御判

西国御家人者自右大將家御時守護人等注交名、大番以下課役雖令催動給
關東御下文令領掌藝不幾、依為重代之所帶、隨便宜或給本家領家下知、
或以寺社惣官下文令相伝欺、而今就式目多違乱出米云々、是則承久兵乱
之後重代相伝之輩之中搦奸心族、換新地頭所務、奉茂如国司領家之由有
其聞之間、為断如然之狼啖於本所成敗事者、不能開東御口入之由被定
畢、就是何忽可及御家人作僚哉、但為本所現奇怪蒙其咎者勿論可謂欺、然
者訴訟出来之時各触申本所可被注中罪科之有無於関東也、兼又自今以後
者先被触仰子細者可尋沙汰之由面々可被申置也、抑雖假名於下職、其身
非御家人之烈、守護人更不可催促大番役、若宛催其役者可為本所懲訴之
故也、存此旨可令致沙汰之状、依仰執達如件、

天福二年五月一日

武蔵守

御判

相模守

御判

駿河守殿

日向国御家人北郷五郎入道殺害問事、於池上三郎兵衛尉者不知子細之由
雖載国正法師 夜討結構
張本 白状為在国之間、依其嫌疑被流遣奥州畢、其上不
可免出入之由重加下知畢、次国正法師隠岐国司了息等便宜回如此、所被
配流也、可令存其旨之状如件、

仁治二年十月十七日

相模守

御判

御家人輩、依本所成敗職、致訴訟事、於本所遂対決、被裁許之時、有非
勘者、就御家人愁、速可被執申子細、可被存其旨状、依仰執達如件、

宝治二年七月十九日

左近将監

御判

相模守

御判

兼久 号日承御館 兼則 号日大史	鴨津御庄開発 留守平大監季 基孫算也、知行 鴨津院并北郷、 肝付古系圖兼貞女子飲肥 南郷郡司妻トアリ、兼久ノ妻ナラン、 方日置南郷弁 兼貞ハ季基ノ算ニテ其算ナレハ季 算使也、 基ノ孫算ニ疑ナシ、 右ハ櫛間郡司妻トアレハ尾張守是助妻 ニテ伴仲子コトナルベシ、事ハ櫛間院 本主手繼系圖ニアリ、 号日六郎大夫 兼宗	知行北郷、鴨津院 梅北家ノ古書ニ于今梅北ノ内ニ女子分門ト 申候ハ弁済使職、此外者 梅北家女子ニ配分シ知行之由申伝候トアリ 女子之相伝也、 兼次 号日五大夫 北郷知行、西明寺 建立、此時ニ始有地 頭、然間下作職ヲ 知行シ、名々ヲ譲与 子孫ニ、 号太郎大夫 兼平	兼吉 号三郎大夫、法名法阿 鴨津院弁済使、 同知行、安養寺建立、兼 次次男 兼春 号次郎 鴨津院弁済使 号息水三郎 兼澄	兼房 号三郎大夫 娶肝付太郎兼俊女為妻生弥太郎兼秀 北郷弁済使職 而兼俊大監季基外孫也、 知行 兼盛 号六郎 女子 千与同名知行 磯波山打死 兼房
---------------------------	--	--	---	--

一 櫻院寺同知行 号七郎 兼貞 吉同知行	兼行 号六郎 兼俊 号三郎兵衛 法名阿願 号十郎 兼親 号次郎 兼広 号三郎左三門	兼友 号三郎 兼友 号左近將監 兼頼 兼数 六郎次郎 彦七 号諸三郎 兼益 号弥三郎 兼信 号弥三郎 兼有 号彦三郎 吉同知行	兼成 号弥五郎 兼成 号弥四郎 儀兼 号弥四郎 兼田知行	兼持 女子 号五郎 西蓮 河保太郎行蓮 澄恵 号豊前房 兼末 号日七郎 光兼	金田領主 奥入運參 号智定房 定兼 河保次郎 兼持 女子 号五郎 西蓮 河保太郎行蓮 澄恵 号豊前房 兼末 号日七郎 光兼
-------------------------------	--	--	--	---	---

高尾野土岐五右工門

大宰大監 同大監

貞元 季基

平五 從五下 神崎平太郎

兼輔 兼重 同二郎

季兼

隱岐守

良志

口ナシ

了忍坊

孫口郎入道

一阿弥陀 孫太郎

孫四郎

治部坊玄成

嶋津院西福寺ヲ請取

若狭房重慶

皇水ノ別当ヲ請取

式部房權少僧都澄田

讚岐房円秀

肥後房兼秀

右正文在始良士野添掃部

在鶴田土市采伊兵衛

可令早任親父右衛門尉友久讓狀、左兵衛尉惟宗友成爲薩摩国山田村領主

職事、

右人任承久二年正月友久給關東御下文并同年七月友久讓狀等、友成無相違可爲彼職之狀、依仰下知如件、

貞應二年九月廿九日

前陸奥守

在御判

一通御下知案略之、

一山内寺豪契申狀 慶長廿年正月

一感應寺勸進奉加帳

野田吉滿善左工門

一澄久 半風軒出家源甫

又七遠江守

清久

忠弘 若州五郎三郎

法名榮崇

一厚久 撰津守 右馬頭

又次郎 宮二郎

山内寺

一託摩曼前守源治信申狀

阿久根

一大石市左衛門 古文書專讓狀也

同在采田氏

一黒江九左衛門覚書 慶長三年 酉四月

在高尾野山鹿伝右工門

一菊池系図

高城小田原氏

小田原彈正忠秀良 四十二才 久世殉死

在高城土水引中宿久米市兵衛

一山門市來崎 古系圖

水引小倉浦大字右工門

嘉靖四十七年 戊辰正月三日吉辰

煎硝唐人林一官字置

中文略ス

尚永祿十一年 戊辰正月三日吉辰

右ノ馬鹿之士ヲ取申其土ニモ上中可有之、イカニモ能ク見分ケテ取り候
同イヤワラカナルヲ取り、其ノ上ノ塩氣有ヲ取り可用其土ヲ手籠ニ入如
何ニモコエヲ除ケコエノカタラヌ様ニシテ其土八荷イ、夫レニ水五荷ヲ
以テカケタレ候而其水如何ニモ澄イテ其水ヲ釜ニ入レ半分ニ煎候、以上
其水三釜ニ煎シツメテ亦一釜ニ入レ合セル時藥一文目入而煎候時ニ釜ノ
端ニヒ付ク時亦イカニモ清水三釜入テ煎シ其ノ時分見別ケテ油ヲ立デ上
ニウキアガル時亦水二釜入レテ煎シ油ヲ立ツ時取アケ而イセ候アンシウ
即チ是也、

又秘藥古之ス、ケカヤヲ同前ニコシラエ申候、

又秘藥土屏イノ土ヲ同シ様ニコシラエ申候、

以上三種一様之事故、

近世系圖

一官 利右工門 市之丞

一官者明人也、雖然去大明而遠來薩州水引住小倉子孫及下今矣、

一 字右工門

在垂水肝付約右工門

一 福崎弓五重元檢

在川上式部

下 武藏國多西郡内二官神官百姓等

可令早以日奉直高為地主事

右直高与忠久対決之処、直高者元曆二年六月九日祖父宗弘帶護与嫡男弘
直証文之上、弘直為地頭之条文文治三年十二月十二日武藏前司入道所成
下之國府頭然也、忠久者治承五年十月十日宗弘帶護賜久長之假名状、而
此状判形与直高所令帶之証文判形、依違之聞被尋類判之処、直高之伯父
小河二郎自宗弘之手所分得小河郷讓状之判形与分賜弘直之讓状判形同事
也、仍任文書追理以直高所補任地主職也、神官百姓等宜承知不可違失、
故下、

建曆三年九月一日

遠江守源朝臣 (花押)

全

やまとのゐんのうちかしのうらかはの内のみやのむらのようさくふん
きうふんとしてちきやうあるへき状如件、

十一月廿三日

よりひさ (花押)

嫡男

宗弘

久長

忠久

忠久

忠久

忠久

忠久

忠久

忠久

忠久

忠久

忠久

忠久

忠久

忠久

忠久

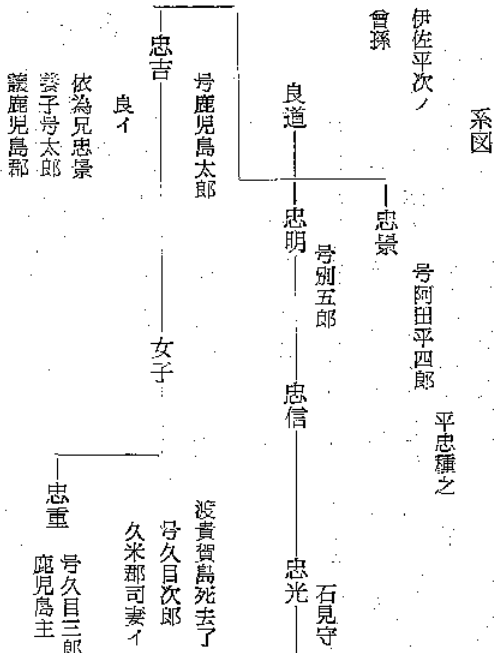
忠久

忠久

忠久

抑忠久為後白川院猶子一節備高倉宮家親王之宣旨事、先年於宇治平等院被討給フ、似先高倉宮故也、頼朝三男母儀祇園御門三代ノ末惟宗卿比鬼判官藤四郎義數娘也、忠久十四歲赴奥州征伐之大將功畢、自鎌倉為西國下向上洛參内之時也、忠久御下向之時、白川院九州諸侍可用忠久被成宣旨、三寶祇殿、為勅使先下向ス、九州諸侍士戴宣旨中國安芸國迄打迎ニ參リ黒木御所造リ雜賞シ御目ニ懸ル、敏參テ御目ニ懸ル故敏參上下云也、於若宮拜殿山重忠ヲ為烏帽子親、元服之故為忠久始者念仏宗而道阿弥陀仏後作禅宗法名傳仏ト申ス、弘安九年三月廿一日逝去、

全 新納殿
 ○忠久云々
 押紙ニ有之、
 文治二年六月一日關東立上洛アリ、内裏ニ參籠申シテ西國下向之由ヲ奏聞ス、然ハ不空征伐將軍ト示給フ、騎馬三十騎打セ下着ス、御年十八
 出水士須田利兵衛本



1 出水谷山氏本文永五箱五月三日平忠能書留置

出水志賀氏

一志賀摩守源親置御奉公狀 慶長十三年
 二月吉日

出水宇田氏

一字多能登入道訴書
 出水士華木彦兵衛本
 大宰大監
 貞元

為賢

致行

河崎平大夫

平少武

四郎

兼輔

兼重

神崎平太郎

同二郎

季兼

隱岐守

良忠

七郎大夫云々

慶長十七年

正月

一福崎伊与御奉公書留
 如折紙狀者、非無其理歟、前々之地頭代々無致沙汰、敢任道理令免除了
 地頭所管判

南郷内門貫山寺齋老所為郷地頭殿被押召難堪愁狀
 件条彼蘭者寺僧之領在之、年序既積矣、所以御庄建立主平大監季兼朝臣之御子息平五大夫兼輔朝臣之時從大宰府奉呼越竹林房給与所渡与給齋也、仍竹林房墓所眼前也、其後彼入室之弟子講衆成覚房快憚大徳八十六

年之間居住其墓所眼前也、其後又講衆成鏡房兼禪大德請次四十二年彼人死後ニハ又講衆快賢香禪房之所領也、快賢大德之墓所也、又以顯然也、其子息比丘尼妙法相伝、彼時件園依有隙藤先生正弘借文ヲ込テ暫居住、借文明鏡也、雖然其後返畢、比丘尼妙法如元居住也、其子息比丘尼相伝、^(天)自其手借智恵令相伝ニハ常樂寺御祈禱勤仕之問宿房ニ定矣、爰以藤先生正弘本主ニ返与之後右衛門殿・大輔殿・藏人入道殿・笠次郎殿代々地頭所之御時、全以無其妨、然當御時被押領之糸難堪之致何事如之乎、仍蒙裁許御祈禱之間宿房卜定之致致本家領家大將軍家地頭家御祈禱之丁寧、錄狀言上、以解、

建曆三年四月 日 僧智恵上

在弁官新右衛門

(源賴朝)

(花押)

薩摩國任人大平基光并舍弟後平二元能企參上、入見參所令帰國也、可被存其旨候者、仰旨如此、悉之、

五月三日

盛時奉

伊豆藤内殿

文治三年右大將源賴朝之御判也、前々在薩摩國牛屎院司太泰元光之代御下文也、

小林土羽嶋主廣

一市來氏家上落時日記

元弘三年二月十八日、康永四年三月十八日、貞治二年五月三日

御鞠之事

岡坂元氏

一坂本清左衛門通信覺書

正保二酉八月十五日

右同

一伊勢貞昌中狀

寬永十七年二月五日

小林ノ森岡氏

一豊後安契約条書

小林ノ柳川氏

一 大脇弥五右衛門利為覺書

一 倉岡土庄内高城居住黒葛原五左エ門御文書 同系圖

頼朝右近家大將

第三 此子

頼家 左衛門督第一

御母遠江守時正御娘也

実朝 右大將征夷將軍第二

忠久將軍 島津判官卜母御歳十八

白河法王御時院宣ニテ高倉院ヨリ西園之征夷將軍卜定メ玉フ、御幕文

八門相之内二十文字ナリ、口伝ニアリ

御母上ハ丹後ノツホネト申ナリ、比企藤四郎判官御娘ニテマシマス、

惟宗卿御娘トモ申ナリ

承久二年六月日惟宗氏被改畢、

忠久ノ妹婿、近衛殿御娘也

右通ニテ伊集院ノ絶筆ハ為久マテ也

小林土 一八重尾土佐介覺書 寬永十三年三月十五日

全 一 柚木崎丹後守正家 元龜三五月四日三十四トアリ

高岡 一 善哉房日記 自天正十年中秋至同十一年四月廿八日

延慶二年三月於鎌倉写之

横山遠江守良久

本名字ハ横山ナリ、立山下名ノルコト越中ノ国ケイノ郡三千二百町知

行申候云々、

小野氏系図 良家 良実

小野小町

如本

野三大夫

成任

成綱

東鑑

建久三年四月十一日若公御母

七才

常陸入

道姉 乳母事被仰野三刑部丞成綱云々

義勝法橋

家長

中条藤左衛門

成尋

東鑑ニアリ

右大將家

御乳母

近衛局

宗綱也

八田權守妻宇都宮左衛門尉

朝 知家ノコトカ 知綱筑後守宗綱母

東鑑建久三年

十二月五日御堂

供養將軍家自奉懷新庭

若公出御給

盃酒女房大式局近衛局取杓持盃云々

八幡殿奥州

セメサセ経兼

先陣云々

八田宇都宮等系図

兼房

關白道兼男權中納言兼隆三男

相模守左少將 應徳二年五月二十日

兼仲

母源高雅女 卒四十九

号八田

備後下野守

宗綱

從五位下

兼禪

阿闍梨

母治部卿經季女

宗房

備後守

從五位下

朝綱

字都宮

又八田

小田祖

山 静範

山 円範

宗田

宗綱

宗綱

朝綱

兼房

朝綱

宗綱

朝綱

宗綱

朝綱

宗綱

朝綱

宗綱

朝綱

宗綱

朝綱

宗綱

朝綱

宗綱

右大将頼朝御乳母
小山下野大掾政光妻小山七郎朝光母

彌寝院志々女弁済使系図

宗義
藤大夫
中郷弁済使
義俊
次大夫
号藤二郎大夫
号藤四郎大夫

義兼
法名觀勢
号藤六大夫
清宗

義良
号富山二郎大夫
法名西行

義行
号三郎大夫
法名行念

義忠
号長谷四郎大夫 紙肥南郷郡司

與本齋為義長子以下二人同之

義光
号彌五郎大夫
彌寝弁済使
号彌寝小大夫
法名仏念

壽永二年六月一日北院道
篠原合殿打死

義任
号七郎大夫
義経

安兼
号富当

義宗
掃部丞 彌寝惣弁済使
法名道意

義房
号彌寝三郎
法名西意
志々女村弁済使

女
觀睿
自祖母法阿之手
讓得志々女村

行円
早世
無男子

右義
早世無子

四郎
同

養子
秀義

大彌寝院弁済使職相伝次第

本主
義明
法名
仏念
義実
道意
義政
定仏
那本浜田大始良
横山村領主
那本浜田大始良
村領主

志々女村領主
横山村領主
清義

義房
法名西意
那本大始良村領主
隆義
法名仏日

業義
兵田村領主
法名心連
左衛門次郎兵田村領主
行義
童名熊一丸

彦熊丸

(如解方) 申状者、非濟使職之相伝三代之□□當時知行之間、御庄内去年大略有□
 作之訴、而(百引村)并濟使被抽勸(忠)之忠、有間益之由(公)風聞之間、御目代殿□
 八中先生加相(忠)檢注之處、加作を以□十余丁許歟、難可有抽賞、不知念
 子細、自上被改易并濟使職畢、難恐意、依難并相伝譜代事歟、但於所當
 米无懈意可令進濟、仍於并濟使□任相伝之文書理、無他妨可令領掌之狀
 如件、

下司代散位平 (花押)

(勾) □当僧安兼解、申請下司殿御裁事

(請被) □殊且任相伝所帶文書理、且依奉公公益(実)、如元裁補百引村并濟使職事
 □進相伝次第文書等

(以來) 件并濟使職者、任相伝文書之理、補任奉行□木無相違矣、爰去年不慮之
 外為傍以御□補、所作田畠濟被刈取、所從存屬皆悉逃出了、難堪之甚何
 事如之哉、且注文進□、抑重案事情、縱進上御房令預、如法結所當物、
 於并濟使職者、任普代族不可相違事歟、而ヲ參洛御庄官成就望、(既) (難)
 之案、亡損之至不可勝計矣、望請因□理、如元賜件并濟使職、於所當物
 者無懈意□運上、言上如件、以解、

文治二年正月 日

(僧安兼) 勾当

大野正右本

豊後守島津判官

忠久 法名徳仏

十八サイノ時文治二年六月一日關東立上洛有、内裏ニ參籠申、西國
 下向由ヲ奏聞ス、不空征夷將軍ト示給、騎馬三十騎打セ下着、

新納書右本

五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 源氏 二代 三代 六十
 桓武 淳和 仁明 文徳 清和 陽成 貞純 經基 滿中

四代 五代 六代 七代 八代 九代 十代 十一代
 頼信 頼義 義家 義親 為義 義朝 義平 朝長
 十二代 七
 頼朝
 都城志和地氏本
 六十八代 島津義祖 六十九
 忠久 忠義

一文治二年六月朔日關東ヲ立上洛過數日ヲ京ニ着有テ大裏ニ參内、西國下
 向之由奏聞ス、然者征西將軍ト成給キ、騎馬、三十騎ウタセ下向ス、生年
 十八御母母後御局御分國七ヶ国此内越前、信濃、伊勢、若狹之事者、近衛
 殿御領ナリシヲ御給候也、日向・大隅・薩摩以上七ヶ国也、藤家ニ成給事
 ハ越・信・伊・若ヲ御相統タル故歟、委細別紙ニアリ、
 得仏又三郎 島津始此時代

忠久

會岡士黒葛原氏系圖

忠久將軍 島津判官ト号御歳十八

白河法王御時院宣ニテ

高倉院ヨリ西國之征夷將軍ト定メ玉フ、御幕文ハ円相之内ニ十文字
 ナリ、口伝ニアリ、御母上ハ丹後ノツホネト申ナリ、比企藤四郎判
 官御娘ニテマス、惟宗御御娘トモ申ナリ、承久二年六月日惟宗氏被
 改畢、忠久妹婿近衛殿御姫也、

起程 上香使 鞆掌 処置

権三島砂糖 好欄

一因分より御相統之御繼図ニハ忠久公称親王云々、楯字征夷將軍或判官或
 大政大臣と御座候、証文見合申度候事、付繪旨可有之候哉之事、

此間略ス

一忠久公頼朝公之御直子たる事記録ニ者見ヘ不申候得共古之御繼図ニハ楯
 ニ御座候、古之御繼図を被差出、むかしより此分ニ家伝候と計も可被仰

上哉之事、

寛永十八年、將軍家光公御代諸家之系圖文書可有上覽と被仰出、光久公御在国之刻同年九月申来り候時御内談之目錄

嶋津彈正久慶書之

在須田□郎左衛門

鎌田者鎌録之王子々孫也云々、

筑紫江下向之事者近衛殿下向之時御供申致下向、其時於庄内梅北近衛殿神柱ヲ勸請アル時、岩河七十五町ヲ給也、又御供申上洛仕候、其後島津殿御下向之時案内者罷下、其時横河七十五町ヲ給也、皆々鎌田本領也、

備忘錄抄 下

備忘録抄下

敏達帝十二年冬百濟日羅說謁拜豐聰王子

十二年百濟日羅來、初日羅名于國、帝遣紀押勝召羅、押勝自百濟歸奏曰百濟王愛羅、於是乎、復使吉備羽鳥召羅于王、王懼以羅從羽鳥來、王子偷眼於羅、羅指王子曰、神人也、具在太子事中、聖德太子者用明帝第一子也云々、初敏達十二年百濟日羅來、身放光神異不測、太子微服、從諸童子入館見之、羅指太子曰、是神人也、太子走去易衣而出、羅再拜跪地敬禮、救世觀世音燈東方粟散國、太子從容而謝之、羅放光太子亦眉間出光、坊津一乘院

宝物案内記下 快宝私記

一稻荷大明神印言写一紙

忠久公御夢想ニ授リ玉ヲ印真言写也、
得能通册雜録ノ抄

田中国明——志賀登龍——得能通册

日州高岡度受字國明

猶々爾來御床敷存候、又五郎殿伝申度候、以上、

三月三日之芳札一昨日相届令披見候、如來意其後久絶音問候、然者舊册御書調ららと一見申候、清和天皇ヨリ頼朝迄諸流之次第大系図にも有之候上ハ跡敷義にても無之候、御家御一分之系図とハ他家ヨリ見候てハ不被存候、併諸流之わかれ御見合之ためニ残シ被置候義ハ諸流内証之系図ニ加様之例も可有之候間、其段ハ是非不被申候、

一忠久ヲ頼家実朝ヨリ前ニ御つり候義御家伝ニ被任候上ハ是非不被申候得共、外見御遠慮も可有之義と存候、

一尊氏家代々ヲハ足利之先祖にて御つりとめ、新田にても義貞之先祖にて御つりとめ、徳川之御流計、当御代迄詳ニ御のせ候義定而各別之御崇敬之御心底とハ存候へ共、此諸家之内へ混雜殊ニ下段ニ御のせ候義、拙者など一見も無勿体候、それゆへ早々返進仕候、右之噂他言仕聞敷候、必々拙者方へ御見せ候とも御沙汰有聞敷候、御家ニ残シ被置候とも、義季公迄にて御つりとめ、徳川之御先祖とわき付被遊可然存候、

一旧好之御事ニ候へハ此内誤も正シ文字ヲモ改進度候へとも、唯一人有之に弟ニはなれ候て何事も無十方体ニ候間、重而被下候義御無用ニ候、右之仕合故何方へも疎略申事ニ候、恐々謹言、

六月廿二日

春齋法眼

春(花押)

鳥津園書様

御報

市来千左衛門家重本

目安

市来筑前守忠家謹申

欲早任守護人鳥津大夫判官入道預状之旨、下賜御教書、弥抽戰功、藤

摩国宮里郡司孫九郎義正同一族等跡地頭職事

副進守護人預状

右所者亡父備後守氏家依抽戰功、所被預置也、忠家又被相統忠節之聞、去年鳥津修理亮參上之時、差進代官有河兵衛尉訖、今親類左近大夫家連令在陣者也、然者早任守護人預状旨、下賜御教書、弥為致忠節、目安言上如件、

応安七年十一月 日

在伊地知郷兵衛
此書立之城々即令下城之、上使衆任存分御いるへき事肝要候、仍如斯、
九月廿九日
龍伯(花押)

所々城持中
さつま
鹿兒 永吉 日置 百次 宮里 山崎 宮里 山崎 比志島 川田
東侯 郡山 藺牟田
川辺 川辺
高城 ミヤ 山口 高橋

就渡唐船之儀、先度委曲令申候、弥預人魂候者可為本望候、猶桂樹院可有
演説候、恐々謹言、
閏六月十七日 高田

島津豊後守殿
在垂水町田六郎右衛門
一文明記 天文五年卯月上旬
書写之、忠堯

岩崎
一廿三番箱、天草城乘帳等入
寛文三御旗本
一水野藤右衛門元吉
ワレタル敷チキリ入ル事
右此チキリノ入様モ伊勢殿殊外秘事云々

義虎

本田信濃守殿

玄 艦兵部左エ門武清事也
一牧庵宗善家訓 元和二年仲夏年七十九題ハ勤究条之
事トアリ、平山内匠允殿ト宛タリ、
一同覚書 同年仲夏朔日
在五左

宗治 那須小太郎右馬允
与市宗高ノ子

文治二年丙午六月島津忠久判官発駕關東薩摩国依下着、宗治当国之家

仰政道、同元年巳九月先陣ニ罷下、其後日州臼杵郡住居畢、

河野玄蕃通親女市来和泉守妻ス
貞清二子

時盛 主水佐 天正四丙子生

寛永九壬申六月廿四日卒
甲辰 天文十三年
四月廿二日大地震

乙巳 天文十四年

此年三月大地震時之内三度、又島津次郎三郎・北郷謙岐守同心ニテ伊集
院へ参上ノ事、三月在所ヲ立ツ、同十三日貴久ヲ奉仰守護正月廿六日伊
東出張シテ飲肥京ノ内水之谷ヲ陳ニ取、同二月十四日鬼カ城ヲ向陣ニ取
籠、同廿四日伊東又出張シテ木城麓猪向、彼鬼カ城廿六日ニ開陣ト云々

丙午 天文十五年

此年貴久鹿兒島ニテ越年、如前々ノ伊地知本田出頭
忠久下向、自建久七年丙辰至乙巳凡三百五十年歟

丁未 天文十六年

六月廿八日大風雨洪水、阿多田布施ノ間ノ大橋落、閏七月廿一日大風雨
同廿八日申ノ處ヨリ西ノ末マテ大風、寺社少々吹摧、

戊申 天文十七年

自二月上旬乱起、本田紀伊守父子崩落、三月廿四日北原衆奔籠日当山、
同廿六日伊集院大和守打越笑限ニ番、五月廿四日清水新城奔籠、八月晦
日北原格護ノ口当山ヲ打落、平良尾張打死、九月三日姫城ヲ切取、同十
二日清水本城渡

己酉 同十八年

三月十一日伊集院大和守鉄肥エ打越、同卯月三日ゴウマイガ辻ヲ切取、
七ヶ所ノ陣敗北ス、同十日大和守帰陣、五月十九日自屋形方黒河崎エ着
陣、六月朔日敵方着向陣、同十一月廿四日敵陣焼失、極月十一日波谷衆
降参、和平解陣、

庚戌 同十九年

此年貴久鹿兒島ニ遷、

辛亥 同二十年

八月十五夜大風吹、福昌寺客殿、諏訪拜殿・御内之寢殿吹崩、

壬子 同廿一年

大飢饉、去年亥ノ歳秋作違ニ依テ今年夏人民多死、同秋ヨリ世間エタカナリ、

癸丑 同廿二年

春已来大旱世間依所ニ懸、

甲寅 同廿三年

自夏初蒲生与加治木隔心、
八月中旬良重帖佐へ打越、加治木口エ手形出、九月中旬ノ比岩劔エ白屋

形方陣三ヶ所被着、同月末合戦ア、良重之人衆多々打死、同十月二日西

俣武藏ヲ始蒲生衆多々打死、其夜岩劔崩落、

乙卯 同廿四年

三月廿七日守護之人衆帖佐儘ニテ合戦、高尾迄責上、同
四月二日ノ夜帖佐・山田捨テ退、翌ヨリ守護格護、同七月廿五日渋谷

蒲生ノ衆帖佐エ衆使切負テ東郷將監白浜ヲ始、東郷衆數多打死、

丙辰 弘治元

此年十月十九日松坂ヲ被責落、祁浦ノ人衆百人討打死、守
護方ニ兩人打死、一人ハ已下ノ者、同霜月廿五日白守護方蒲生之内七山

ノ陣被取、又極月五日馬立ヲ陣ニ取、同月中旬ノ比菱刈為蒲生与力、北村
堺ニ向陣ヲ取、

丁巳 同二年

四月十五日自守護方北村エ衆使アリ、同日菱刈陣被責崩、
菱刈權守ヲ始、祁答院・真幸・東郷・蒲生ノ人衆四百余人打死、同十九

日蒲生城渡、蒲生方祁エ還、

戊午 永祿

己未 同二年

庚申 同三年 隅州正八幡御遷宮、極月十一日貴久御代

辛酉 同四年

此年五月十四日肝付廻ヲ忍落、六月廿七日自守護方大牟礼
・馬立・竹原山三ヶ所ニ陣取、七月十二日肝付攻破竹原山、忠將打死、

同時七十余人奉公、十一月七日代賢福昌入院、

壬戌 同五年

此年三月四日ヨリ於福昌寺為國家太平、有一万部法華經燒
香、代賢・檀那貴久、五月十八日飢肥之平悉ク伊東ニ渡、忠親申問エ退

同九月十八日夜豊後守内ノ者共心ヲ合切返入部、同六月三日貴久以發足

横川切落、北原新介伊勢ヲ始メ人衆多々打死、此年義久栗野ニテ越年、

癸亥 同六年二月十日以守護之人衆三山ニ衆使アリ、ボウカリヤ破テ得勝

利ヲ、敵數多被打、新藤殿下向、

甲子 同七年 此年貴久号陸奥守、義久任修理大夫、

乙丑 同八年 五月十九日義照公房様御生害、松永奔走、隅州吉田若宮乘

神名帳、任正一位檀那貴久

丙寅 同九年 二月彼岸、先公房様当一周忌貴久落髮、号伯圍斎、三月福

昌開山真前作花ニ菫開クコト教枝、花ハ桜也、十月廿六日自守護方三山

エ衆使城悉焼払、城ハ不落、

丁卯 同十年 霜月七日ノ夜福昌寺直歲察計燒、同廿四日伯圍斎・義久有

発足、攻落菱刈馬越、翌日本城ヲ始メ八ヶ所捨去ル、横川ハ儀ニ成テ五

六口シテ渡、

戊辰 同十一年 六月八日伊東エ飢肥渡、福島肝付へ渡、泰心都城へ退、

極月十三日島津口新逝去、法名常潤、道号梅岳、年七十七、先公房様御

舍弟一乘院御入洛、尾張織田陣正忠馳走

己巳 同十二年 此年五月六日羽月大口ノ堺於戸上尾軍戦、屋形衆切勝敵

百六人打取、白初秋比守護相良和平ノ相談アリ、九月十日五人質ヲ取

替也、先自相良東带刀・深見太郎左衛門尉出、自守護方鎌山刑部左衛門

尉・本田新介抜出、同九月十八日戊子巳ノ時大口城エ両殿打入、太平吐

氣有之、彼者鎌山尾張守、

庚午 元龜元年 此年正月渋谷降参、川内那義久知行、今度依忠節高城・

水引河内義虎へ被宛行、

辛未 同二年 六月廿三口伯圍斎逝去、法名良等、道号大中、号南林寺殿

十一月廿日伊東兵船ヲ下、肝付・伊地知・瀨寝取合、百余艘鹿兒島ノ奥

へ漕浮、無何事、婦ニ淵州ニタキガ水ニ倚、平田新三郎ヲ始メ帖佐衆五

十計籠戦、敵切負退、

壬申 同三年正月十九日肝付ヨリ兵船倚来、隅州小村ニテ敵船一艘切取、

岸良將監ヲ始メ入數廿許打取、同十八日飯野三ノ山境ニテ敵八人打取、

二月廿日廻・市成境ニ自守護方野伏ヲ出、肝付越後ヲ始メ廿人計打取、同廿九日又衆ヲ出、境、二河被破、

癸酉 天正元年 七月廿八日改元、六月十九日一乘公房為信長被追落京

都、逃宇治卷島、其亦落給フ、九月廿四日垂水・牛瀨ノ間早崎ニ着陣、

義久御座、此ノ手合ニ被攻落小浜、根占重武離組中ヲ出砌、於横尾合

戦、敵打五十余人、極月十三日平小場ニ着陣、伊東・肝付談合、根占ニ

成勳、合戦討敵百余人

甲戌 同二年 此年正月霧島ノ神火動、天地正月三日茶苑平ニ着陣、同十

九日牛瀨ノ城成儀渡ル、

乙亥 同三年

丙子 同四年 此年近衛殿三月廿九日御下向、六月廿六日御立有、御宿宝

持、八月十九日取日州高原陣、同廿一日城旋、同廿二日小林城ニ掛火落

往、小椿共ニ以上城數八捨去也、同廿三日太守御発向城視云々、四月十

八、十九日自小坂焼住吉天王寺、一向宗(雜傳)齊下ノ孫一奔走、即被打、

丁丑 同五年

戊寅 同六年

己卯 同七年 豊後宗林・同新太郎殿日向州高城ニ推寄陣取數万騎、同霜

月十二日義久陣破、數万人不殘打取、

庚辰 同八年

辛巳 同九年

壬午 同十年

癸未 同十一年 花舜廿五年忌 霜月十九日妙谷寺地引、

甲申 同十二年二月十五日代賢先化、天海新住、

乙酉 同十三年

丙戌 同十四年 七月義久肥後入、筑前・筑後・肥前所成筑紫城落、岩屋

落城、同九月豊後入、

丁亥 同十五年関白三ヶ国ニ下向、河内太平寺陣所、日州高城美濃守數万

人推寄打柵、義久川内太平寺參上、從其和平、義久御料人同心上洛、

戊子 同十六年 十月義久下向播磨州、一万斛之在所御承下向

己丑 同十七年 九月義久上洛、妙谷寺地引、雪月廿八日・九日大雪也、

庚寅 同十八年

辛卯 同十九年 博多陣取、

壬辰 文祿元年正月十二日大地震動、細河殿下向、三月廿八日又一様高麗

立、七月十八日金吾於滝水死ス、

癸巳 同二年 九月八日於高麗又一様病死、

甲午 同三年 城記(三月五日トアリ)三月義久上洛、御家門坊津ニ下向、同十月京衆下向、三ヶ

圍軍打、

乙未 同四年 十月義久下向、浜市ニ家移、同雪月武庫上洛、

丙申 慶長元年 京小坂七震動、家毛崩、人毛數万人死、七月六日御家門

歸洛、從志布志出船、

丁酉 同二年義久上洛、

戊戌 同三年 関白死去、此年於高麗又八父子江南人數万人打取、為其忠

節、加治木・出水兩所安堵、

己亥 同四年三月十四日義久下向、同九日於臥見伊集院幸侃・又八様手打

庚子 同五年

辛丑 同六年

壬寅 同七年

癸卯 同八年

野尻稻元氏 慶五ノ八月六日

一三町肝煎分三石八升

忠昭一

久正二

忠長一

倉岡実石氏 慶十二 十月十五日

一丹生備前守信房

倉岡権屋氏

一丹生新三郎信秀 慶十五 正月

一遠矢下総入道申状 慶長廿年 三月十一日
末吉貴島氏系圖

仲綱 伊豆守

兼總 大夫判官

頼兼

藏人

文治三年下向于出雲國、住宅于杵島郷、由是始号貴島、

頼忠

若狭守法名道阿

建久七年忠久公供奉下向日州、

安樂備前守申状 三月十日

村田肥前守経房

肥前守経安

女子

太守立久公簾中

明応元年壬子五月十三日卒、道号権庭性寿宣徳院

出水

一志賀播磨親重上書 慶長十三月

一丑八月廿五日豎山武兵衛ヨリ和蘭国通商御免ノ折、琉球朝鮮通信ノ困ニ
モ異国ヨリ違變等ノコト忠告スヘキ誓書ノ上ニ許サレシトノ説承問アリ
九月三日糺タル一件ノ一冊^{廿余} 武兵衛ニ呈之、此日山田壯右衛門御取次
ニテ御家吾妻鏡ト板本ト校訂ノ事奉伺通ニシテ原本ノママニシテ分註ノ
筋被仰付候、

一九月六日参著太平記四十、一本山田氏ヨリ被相下ケ拜見之誓候事、

一久安譜補草、去秋之頃早川務殿へ取次出し置候処、内分ニ而子孫へ遺事
苦か聞數旨ニテ甲寅正月十日於御膳番坐被相下ケ持下候時分島津藤馬殿
へ出合成行を以内分相渡置也、

一小西作右衛門□次 慶長八年 児島文書

在鶴田土村田権左エ門

一菊池武朝申状 弘安四年七月日 肥後守

在恒吉遠矢氏

一遠矢下総入道申状 慶長廿年 三月十一日

末吉

一安樂備前守申状 三月十日

栗野士本山市左エ門

一秩父古系圖 延文ノ比ヨリ文龜頃迄ノコト

日当山市来氏

一惟宗古系圖 天正廿霜月十八日 玄蕃允 家房

高山宮里伸右エ門

一長田石見入道梅林 文三年卯月二日水口
ノ内荒田名ノ水田一段

証文宮掃部助宛

在垂水臣權山吉兵衛

一樺山家小浜城落去事 明曆二年二月 伊集院秀庵 久賀写置

元禄六廿十一月廿六日帳

一諸外城より山候文書等惣員數九千八百四十五通寄筆者写方六人

全 櫛椽ノ間 一木定規 長一尺三寸 広一寸二分 厚五分

全十年日キ

一史局十二月廿五日迄正月五日出座

全十五

松元惣兵衛——織部助

初少藏
母追水伊与守 后善 女 名藤
左工門 女 松

長右衛門 一 伝 藏

讓渡所領式箇所事

一所相模国大井庄内吉田島

一所薩摩国阿多郡北方

右相具調度文書所讓渡向女房也、不可有他妨之状如件、

文永三年六月十日

沙弥行日 (花押)

讓渡 領地并倉等事

一所西御門入奥地

一所浜倉半分

右相副証文所讓渡向女房也云々、

文永三年六月十日

沙弥行日 (花押)

左兵衛尉藤原行久 東大寺 功

元亨元年十二月廿九日

可早以藤原氏 行久法師 領知、相模国大井 二女

庄内吉田島薩摩国阿多郡北方等地頭職事

右任亡父前常陸介行久法師 法名 去年六月十日讓狀可令領掌之状、依仰 下知如件、

文永四年四月廿四日

相模守平朝臣

在京權大夫平朝臣

采謁 授旨 採実 繼迹 神其所 未闕 研磨 辨涉 之家所伝聞異辭

吻筆 既得協 明旨蒙浄写命 所可参互 互論瑜瑕 有所指 駁

錯節行語未 易通解 伝語之所遺者窮搜而博訪 不知轍所望還其背馳

口 上 覚

例年十二月十三日於御殿執行被仰付候、疏銘御祈禱之由緒御用被仰渡趣 承知仕、ケ条書之通左申上候、

一 疏銘与書付候儀何様之儀ニ候哉、疏者疏抄之儀ニ而御祈禱疏ニ而御座候 御祈禱者何様之趣意ニ者致候哉、又者時分ニ銘も祈禱も相替儀も有之候 哉、旨趣も銘も相替儀も御座候得共其分十二月十三日於御殿執行被仰付 候、疏銘御祈禱之儀者仏菩薩之尊号、日本国中大小之神祇、諸天部之名 号、不殘書記シ、今上皇帝聖躬万歳、干戈不起、次国君御武運長久、万 民康樂、專祈中事に御座候、銘之内本寺大檀那下書候所ニ太守様御支下 又保祐檀下書候所ニ御実名於御殿御書入有之御祈禱被仰付候、左候而右 之銘於寺正月朔日より七日之間、於正八幡宮御本地堂三時勤行、十五日 大般若転読、十八日儀法執行、御札守武杖、正宮社内ニ納置、正五九月 二日霜月初卯口於正八幡神前御武運長久之御祈禱申上候、

一 何年間、誰様御代より当分之通、於御殿執行被仰付候哉、又已前ニ者於 寺致執行候儀も有之候哉、右之趣委細可申出旨被仰渡候得共、誰様御代 より只今之通致來候儀相知レ不申候段先達而申上置候、段々札方仕候趣 往古より之書付等相見得不申候、寛永年間、寛陽院様御代之銘夫より御 朱ニテ書入 季安按上并伊勢守日記天正三年十二月十三日日常出仕申候、從御前御 代々様之銘有之候、当寺之儀尊氏將軍家義輝公より十利之地ニ定被為置 用之山云々、此日宮内正興寺・邪智院大藏寺等之銘也、右通相見得候間、濟家之法 候寺格ニ而疏銘御祈禱之儀、尊氏將軍之時代より始り候故五山十刹ニ限 式ニ而天正之初より義久公御代大龍寺之儀形にて為被仰付事明証ありと謂へし、大願 寺は繁尾山ニ為有之寺にて破壊して八無之、此寺跡を移され今の南泉院のよし也 之銘写六册程有之、其内に延徳三年二月廿二日將軍義隆公、文龜二年十 二月廿日將軍義澄公、天正六年八月六日將軍義昭公、右之銘者、帝王様 御病惱又者御産月ニ者別ニ出来申候故趣意も銘も相替申儀ニ御座候、左 候而年中之御祈禱只今於御殿執行被仰付候通ニ御座候、銘之内將軍自身 二書調被遊、御祈禱被仰付候も有之、住持江書調被仰付候も有之候、

一 十二月十三日ニ限り候儀取有之候哉、何ぞ差立候訳も相知レ不申候得共 古来より右之日限ニ御祈禱被仰付事ニ御座候、

一 御祈禱古来より臨濟之宗門ニ相付候法式候哉、余宗ニも有之候哉、都而 御祈禱始終之次第委敷可申出旨仰渡、古来より臨濟之宗門ニ相付候法式

二而候得共、当分ニは五山十刹ニ限り被仰付候御祈禱ニ而御座候、余宗ニは当所弥勒院於御殿、同日同席ニ而相勤被申候、其外之宗門ニは承り不申候、右之通相札書付差出申候間、此段被仰上可被下候、以上、

寅三月十七日

正興寺

玄俊印

因分
郷士御年寄衆中

右相良太郎太御記録方見習之節相札、右通郷士年寄助鎌田新藏より申出候書付ニ而候、

正文在曾於郡花林寺

敬白願文

南無宇津瀨大明神仰今度出陣之事、妨国務当役敵防戦之企更非私之所行、然者神慮御感応之儀何疑可有之哉、所庶幾者加冥鑑之威力、耀神徳之威光、即時怨敵退散、武運長久、息災延命、諸卒安穩、殊所銘向、敵城早速属手裏者、可奉御神領寄進也、仍願書如件、

天文廿四年

二月六日

貴久判

常珠寺殿天勇玄機大居マ、友久公

心伝妙宗大姉

元久公嫡女ニテ
仲翁ノ御姉

時頼雅髪二階堂加賀守行泰及其二弟伊勢守行綱、左衛門少尉行忠、結城朝広、三浦光盛等念其旧好、

島田隠岐介

仕于鹿府、食三町五段於吉田本名和田地、移于吉田、
戦死于蒲生之乱

親宗

右近将監

五歳襲父、仕歳久公、於吉田移宮之城、戦死于澁ヶ水

膳左衛門

与左衛門

弟二人

后右近将監移清敷、日置食十七石、従軍高麗、寓于吉松、

従常久君如江戸、

妻府下新納助郎妹

与八左衛門

嘉右衛門

無男

初弥七

妻子実上村権允嫡子食

元禄八年就木田宗氏

七石

呈家状、十年丑五月十日

上村本来日置人

娶海江田勘右三門女

又呈史官

一日州高城へ豊後衆右陣申時、同心衆伊岐筑後守殿・外山備中殿・切通豊前殿・伊地知丹後守殿・上村右近将殿案内者地下之衆一人上村殿と某兩人忍入候、

稻月十一日云々、松山之城追崩、頓而高城へ籠、明十二日豊後衆薩摩衆へ切掛候、

在妻刈次郎兵衛

重種

龜松 四郎、越後、久右三門、九兵衛、九左衛門

慶長十五庚戌六月廿五日生、母町田新左衛門久直女

寛永十五戊寅従光久公婦自江戸途經島原至鹿兒島、十六年己卯公巡封内、

草種奉命、為大口諸士之衆頭、万治三庚子八月奉命移居鹿兒島城下勤仕、

是所兼訴、被侵疾妻老於加久藤者有年、寛文七年丁未十月二日死、法号真

室清見居士、葬徳泉寺之内

女子

高城氏妻同

忠充

真介、才左衛門、仲右衛門、母同、外祖父阿多源左衛門忠利嫡子

女子

荒田氏妻 早世

重利

新四郎 早世

母伊地知弥右衛門重延女
高也

延也

重高

弥右之門 母同前

外祖父伊地知弥右衛門重延妻
高也

女子

川上彦四郎久張室

重興

龜松 久左之門 次郎兵衛

明曆三年丁酉十一月九日生、母同

佐々木新右衛門本

覺

先年久保様高麗江二月廿八日ニ御打立云々、高麗ニ而年八ツとり申候、九年めニはたかに帰朝申事ニ候、爰許にて手仕立候得者、庄内山田ニ罷立候、守田御陣取ニ候、諸人并ニ參候て御普請等相聞目候、長寿院組下ニ候得者、聞之かき仕寄、一入目ニ立被召候付辛勞申候、志和知大手ノ口たれニツ御座候、拙子かやヲせおいひしをぬき忍付ニツ之たれ離落申候、山ノ口へ人数指而申時分、しいの大蔵・谷山次郎右衛門尉・伊地知民部少輔此人衆同心を以鐘合仕候、拙者事ハ其口にて出家はたらき申候ヲつきふせ申候て御奉公申候云々、

慶長十四年

八月十六日

大山稻介

后佐々木幸綱

町田勝兵衛尉殿

覺

一帖佐山田を郊答院より格護者酉ノ年より丑ノ年まで廿九年也、

一又帖佐山田同丑ノ年より御かくこ当年まで五十四年、又蒲生ハ卯ノ年より今年迄五十二年御かくこにて候、帖佐山田從鹿兒島直ニ御格護被成候御地頭平田殿代々の地頭職無其隱候事、
已上

慶長十一年

八十七才

池田出雲守

六月吉日

出水本八田上氏
一武官佐藤兵衛惟為覺書 寛永十四年 五月十日

出水

一阿多六郎左衛門忠昌戦死于有馬、

加世田仁礼氏系抄 甲子四月十三日 季安書

阿多四郎忠景弟別府五郎忠明後胤

右京進左兵衛 法名清林道秀禪定門

景隆

葬於出水庵光寺 景隆 六郎法名一田尊宗居士 葬於加世田口新寺

忠頼

助五郎 覺兵衛 佐渡守

景

初景頼寛永十八辛巳八月晦日病死、

法名言曼常悅庵王葬於日新寺、

右兵衛

女子

伊地知民部少輔少妻母佐多越後守忠増女

助五郎右京亮七郎右之門母同前

時頼

承応二癸巳八月十一日病死、法名一雄宗持庵主、葬于日新寺

小吉母同前

頼真

十代孫

今仁礼七郎之門

慶長十九甲申年二月十六日病死
法名護阿弥陀仏葬于加世田杉本寺

女 子 宮原四郎左エ門繫員妻
母同前

女 子 山下八兵衛妻
母同前

一指猪主税系図 秩父系図トアリ、重光号
庄司太郎トアリ、

宇 一 妹尾六左衛門系図 右同前

宇 一 関七右衛門系図 備後守盛勝女、財部
淡路守室

一 國分平八郎文書

次郎友貞副申ノ中

一通 関東御教書 弘長二年七月十日

一通 守護大隅入道々々奉書 同年八月
十一日

一 同人書下 正月卅日

一 同子息式部丞催促状 二月十四日

天満宮園分寺云々副進ノ中

一通 守護人廻文 永仁七
同年四月一日

一 催促状 正安三年正月十日

一 催促状 同年八月廿五日

一通 守コ代催促状 嘉元二年正月廿三日

一 同三年五月四日

一 慶長十五庚戌九月本郷貞則授教根立頼弓法

一 山路次兵衛種雄

新納五左エ門系図

一 伊勢美濃守母伊東権頭女

一 新納四郎右衛門忠陸目安状 慶長十一
三十二

一 能登守右忠贈梅北氏
關後氏

一 常久關東下向日記 慶長十三年二月廿三日よ
り同七月廿五日まで

在熊谷宥膳 始十文禄二年九月廿六日
至三年二月二十六日

一 高麗入日記 元和八年七月
十一日

一 三原七左衛門訴状 慶長廿年三月
十六日

一 右松安右衛門奉公状 正保中

一 於王子大追物射手支度覚 慶長廿年六月一日

一 有馬三左衛門申状 在土持氏

一 伊集院加賀守忠大入道是心 寛永五年三月十六日

一 河越右近將監申状 全

一 野間孫兵衛政房覚書 慶長十八六月
廿四日

一 池田六左衛門貞秀覚書 慶長七十月
一日

一 指宿門田源右衛門

一 串木野宮之原才兵衛覚書

一 寛文三卯二月八十七

一 永吉臣高崎氏ニ在リ

一 梅天公御代之日記

右同

一恒古与兵衛覚書 正保三年九月十七日

永吉ニあり

一甲斐市之介覚書

烏丸主膳女山田大仙室

国分

一家村源右衛門住永覚書 寛永十二年三月廿一日

国分長崎氏

一伊集院原口治右衛門物語

桑幡尊後守道隆

女子

喜入振津守忠政兄室

元龜元庚午四月廿三日生、母上井筑前守女

慶長元丙申正月廿七日年二十七、法名善隆蓮芳大姉

○永正十五年二月廿一日鹿兒嶋郡田毛名之内式町七反川、重貞・兼親・義治・重周・景元・忠家より栗松軒へ被下候、

一穎娃種子田七左衛門覚書

一国分八ヶ代五左衛門覚書 二通

一右同安菜伊与入道了心覚書

一落合若狭入道兼朝覚書

国分宮内ニあり

一上原孫左衛門尚興覚書

国分

一山崎盛右衛門

一平朝臣徳重書置 寛正五年

国分徳持氏

慶長三十七月廿日

一本村善左衛門実昌

国分松下助八系

一慶長六年辛酉三月廿九日松下番左衛門久治戦死于穆佐、四十八

一有村隼人佐覚書 慶長十八年正月廿四日

一早水豊前守覚書 同廿年三月廿日

大口曾木庄兵衛

一曾木之繼図

知定院関白

忠実

一実通

宗治惠左府

頼長

大口住伊集院将監臣藤田勘右工門

一藤田土佐入道平種定申状 大正十五年八月

大口二宮伊与

一年代記

大村千北原千左二門

一北原次郎右衛門兼秀申状 慶安四年卯二月六日

黒木家中

一柏原源太夫聞書 元七月廿九日

栗野久木元藤右工門本

一富之隈衆記 源七郎以下六十五人アリ 末ハ切ル

出水伊福氏本

伊佐平氏 太宰平 少武

貞時 宗行

貞基 五平太 平判官

宗 次郎大夫

良高

三郎大夫

宗高

始良四郎

宗清

基通

基房

松殿

三宗院

近衛殿

基通

基通

基通

地
仁礼寛左系図ノ中

景晴

安元二年内中太橋左中将平経忠平大納言時忠弟也奉後白河院之勅命、為薩隅日

三州長吏、下国由是景晴辞回上洛、

忠元曾仕込済

天正六年戊寅正月

六口にハ自天草方日州属御安利候、為御使者使書并銀一領進上候、此日新納武藏守迄上津良方より為御勝利之御祝使僧進上、

七日此日从天草方新納武藏守迄天草之事向後可申入之条為其筋官途受領之聞可申請、自身可致参上之事者遠遠大義之様候之条、尤以使節可奉得尊意之由先以内義也、天草方へ雖可被成御直書、仍繁多奉行中より返答也、

同年九月

廿九日従大口新納武藏守書状到来趣者、従相良方至武藏守被申、大友宗麟日向表江雖一行之企候、一口迄ニ而ハ回閉、扱ハ肥州方之衆猶々以被頼思出候て、又々八代迄真光寺使僧下着候、一四難成申候得共、自然白別方没聞得候而者得御意相良之事候之条、如何之由懇立之儀被申事候、右江若御着陣頃初而承候由也、

同十五年六月

一十七日辰刻高田御打立、小川路へ申刻御着也、此晚新納武藏守御会尺被申、新武為御饒金銀間進上殿、

忠元譜へ仕込済

慶長貳年

奥様御上洛ニ付御供衆儀、

二月廿四日

白分

一千石 此立衆廿人

新納武藏入道

此出銀百廿五貫七百七十文

并出米四拾五石但右人数

十式ヶ月半ノ飯米なり

白分

一五百石 此立衆拾人

河上三川入道

此出銀六拾三貫百六十三文

并出米廿式石五斗者但

右人数十式ヶ月半ノ飯米也、

白分

一貳百石 此立衆拾人 伊集院左京亮

此出銀廿五貫百五十三文

并出米九石但右人数

十式ヶ月半ノ飯米なり、

忠増子久連譜へ仕込済

慶長十八年丑六月廿三日 加治木御打立

御實様御供衆贖銀渡方帳

慶ノ十九年十二月限之つもり帳 宛申候

口略ヌ

一銀三貫七百五十七匁六リ

一米三十石一斗四升

新納次郎九郎殿

主從十二人

一銀三貫三百十二匁九分一リ

一米廿六石四斗

江田藤右衛門入道殿

主從十二人

銀子きし引申人衆

口略

一銀百三十四匁二分一リ

新納二郎九郎殿

忠元譜仕込済

謹而令言上候、抑当行之御祝儀千喜万悦、幸甚々々、此等之儀先以去月

下旬至新納武藏守申述候キ、重疊為御礼申上候、仍御太刀一腰御馬一疋
令進上候、可然様御取合可預御披露候、恐惶謹言、
天正十年

式月廿四日

鎮貞(花押)

伊集院右衛門大夫殿

上澤浦上總介

伊集院右衛門大夫殿

鎮貞

以上

其後若不申通候、仍今度拙者罷下砌、從内府公被仰出者、其表御託言之
筋目在之条、堺目等之儀可成其意之旨候、如何被調候哉、就其去朔日ニ
御託言相濟、此表人質可被差上由其方堺目之番衆より預案内之出水俣よ
り申越候、然共其以後様子不相聞候、如何相滞候哉、無心元存候、御託
言筋目ニ付而貴所御上落之出候、此辺於御通者以面可申承候、自然滞儀
候ハ、相慮之馳走可中候間、不被置御心可被仰越候、公儀少も疑敷儀無
之候間、其心得にて聊無御疑心御託言之筋目可被仰調事肝要候、若又御
託言於被打捨者、上意次第堺目等之儀可成ス候、猶追々可中達候、恐々
謹言、
慶長七壬寅

慶長七壬寅

加主計

五月廿三日

スレ

島津函書頭殿

安政五年戊午正月持參被為見候間、忠清若忠秀君御名

加治木

新納仲左衛門家藏文書写抄見得候分披書讀惣而ハ六十通内外も候半、

伊地知季安

以上

一書中候、仍出物や千右衛門四十四歳、帯やの四郎兵衛尉式十二歳、同
下人長五郎十九歳、此三人宮内之八幡へ参度由申候間状相付申候、先書
ニ如申入候在郷なとへ不参様ニ被仰付尤候、恐惶謹言

新納加賀守

正月十四日

忠清(花押)

穎娃長左衛門尉

久政(花押)

新納忠左衛門尉殿

人々御中

以上

一書令申候、仍伊作中之里名之内門内景敷・加治屋屋敷・西中間屋敷ニ人
付之儀ニ付曾木新左衛門尉殿へ御尋可申儀御座候間、急度被成参候様可被
仰渡候、御延引ある間敷候、恐惶謹言、
三月廿八日

山田民部少輔

有榮(花押)

高崎伊豆守

能乘(花押)

新納加賀守

忠清(花押)

市來備前守殿

新納仲左衛門尉殿

人々御中

猶々山民部少殿痛宅にて候間兩人として御返事如斯候、以上、
御書状具令被見候、仍而其許鍛治番斥衆知行槍之儀承候、御老中衆為被聞
召儀ニ候間、為我々不罷成候、被成御中候者直御老中衆へ被仰上候而尤
候、もはや我々支配所ハ罷あかり候、為御存知候、恐惶謹言、

高崎伊豆守

能乘(花押)

新納加賀守

忠清(花押)

比志烏掃部助殿

新納仲左衛門尉殿

御報

猶々刑部殿より御尋被成儀御返事次第申上候て一途可申入候、以上

如來意新年之吉慶猶更不可有忌期候、仍吉松衆中入組共有之ニ付、公儀へ被仰上儀共御座候、此中刑部太輔殿御頼にて候処ニ上使方被為問候条、一人にては首尾難被成由候間、拙子相添候て可申達之由刑部太輔殿委敷御存之儀候間、御下ニ付可申上候、就夫刑部殿より貴翁へ被仰候儀共候間、御返事次第御使可申候、猶期後首之時候、恐惶謹言、

正月七日

同名弥七郎

久正(花押)

新納伸左衛門尉様

参書報

以上四道忠清譜江仕込濟、年間不知場ニ置也、

慶長十九年

正月三日 丙辰晴

一新納次郎四郎年頭之為御礼被參候、進上御酒樽壹荷・鴨式ケ御通被給候、

正月十日 癸亥晴

一馬越衆賣島老岐守・右村隼人佑・宮原主税助年頭之為御礼參上候、

正月十九日 壬申晴

かこしま

一惟新様東郷長門守所江申請御茶進上候、御供三原譜右衛門尉殿・園分但馬守

四月卅日 壬子曇

一新納次郎四郎參上候、但沢原野御馬追見廻被仰候由被申上候、

六月朔日 壬午雨

一江戸江為御使者市成蔵人被參ニ付御進物之事

一緋綾子拾端 沈香十斤

大御所様江御進上

此兩教条略ス

一御書一通

上井次郎左衛門尉

蒲池備中守へ

一御書一通并御手本二ツ

新納次郎九郎

一御書一通 肩衝二ツ

一茶壺壹ツ 水さし一ツ

一茶碗二ツ但万介焼一ツ

仲次焼一ツ

右者松平河内守殿へ被遣候、

右御使之刻方々より御音信物之事

一御文并御音信物箱二ツ

但大小

右ハ国府御かミ様ヨリ御料人様へ被遣候、

一御文一ツ豊後守殿御囊様より御料人様へ被成御遣候、

一御文一ツ豊後守殿御内儀様より御料人様へ被遣候、

已上

八月七日 丁亥晴

惟新様より御言伝之条々

一長崎立ニ付、奥州様川内まで御越御太儀ニ思召候事、

一村尾源左衛門尉入道被參候、但長崎立被仰付、来十二日ニ打立申由被申上候、

八月八日 戊子晴

一新納次郎四郎被參候、明口長崎へ罷立由被申上候、

一下野守殿より使様子ハ明日長崎へ罷立之由被申上候、

八月九日 己丑晴

一長崎立之人數座相替殘敷在之ニ付、以聞取立衆相定候也、

十月朔日 庚辰晴

十月朔日 庚辰晴

一新納次郎九郎為御見廻被參候、

今度幸佩御成敗之砌無御屈故候哉、石治少様御腹立由候敷、依其子細長谷寺御動座之由其間得候、各警入候、乍去幸佩罪科之事者連々治少様御存之儀候之間、定急度被聞召分、物能可罷成候、其御吉左右早々可奉待候、此等之旨宜有御披露事所仰候、每事恐惶謹言、

閏三月初日

新納武藏入道

為舟 判

鎌田出雲守

政近 判

比志島紀伊守

国貞 判

山田越前入道

利安 判

平田太郎左衛門尉

宗増 判

種子島左近入道

久時 判

(一行脇カ)

旅庵 判

伊集院下野入道

抱節 判

町田出羽入道

存松 判

樺山権左衛門尉

久高 判

桂

忠詮 判

伊勢兵部少輔殿

在谷山土東郷長兵衛

曳附

高式拾五石者

右者福永長兵衛尉殿へ此度被下候、但父藤四郎事御成敗以後雖被召出候本知行高百拾七石之内式拾五石被下置候處、ケ様之并之衆本知行皆々被返下候間、御罷之由被中候得共、當時御知行相追候ニ付、今式拾五石被相加、合高五拾石ニ被仰付候間、可有支配者也、
寛永十二年正月十二日

兵部少輔 判

左近將監 同

彈正大弼 同

高崎伊豆守殿

山田民部少輔殿

新納加賀守殿

肥後長次郎殿

參

伊集院谷口村

下竹原崎門 男一人 馬壹疋
女一人

下屋敷七畝十步云々

高ニシテ廿五石

右知行親父藤四郎殿御成敗之刻、高百拾七石持留之内前々廿五石被給、又今度廿五石被遣之由候間、令支配者也、
寛永十二年七月九日

三与

御支配所印

祐

助十郎

從談弘公師于剽鮮、追公猶虎以脇刀刺殺一虎、因名刀曰虎切丸、又公破暗舟、中半弓箭、不能從歸、後創既癒、追及公於伏見、公賞其功、賜田祿二百石、然又從攻伏見城死之、本姓伊集院氏為福永猶子、実抱節季男云、

女子

休左衛門妻

母是枝存良院女

祐	林左衛門 為助十郎後繁其女、為妻、実本田源右衛門親商次男、後回本氏故虎切亦 伝本田氏云
祐次	六右衛門 母池田伊予女
女子	加治木奈良木弥左工門妻 母同上
女子	師士池田六右衛門妻 母師士高橋全兵衛女
祐有	益右衛門 母同上
女子	曾於部士秋庭藤兵衛妻 同上
祐	番左工門 母同
女子	母横川十前田六左衛門女 権平
祐	母師士白浜露兵衛女 左松次 母同

下祐 市十郎
寅 五月八日 歸 福永益右衛門
野村福永米良三氏使山下弥右衛門納款於上原長門遂以其邑降之、戰死安永
功賜山下卯佐尾村於日州内、迨西征収公云見子
横川土
弥右衛門上書
勝久公 修理大夫入道休庵
嫡忠良
良久 念仏寺
永祿五壬戌生壬辰原、母義祐臣福永入道月甫女
女子 柱山城守忠防后室
永祿八乙丑生、母同
正 円 勝ノ
同丁卯生、母同
忠 辰 カメ山
永ノ十二生、母同
御書達而頂戴仕候、仍從小林殿言状懸御目候付而御説之旨奉得其意候、委
奥州様へ申上候て此方御談合之様子従是申上候、道与之言状も此状も
別ニ相替事も無御座候、内膳口上にも同前之御事候、将又昨日五嶋殿被
遊候、殊外之けいこ有たる云とハみえ申候へとも御手前之儀ハ書中ニ難申
上候、今日我等所へ振舞申候、從龍伯様比紀伊迄御内証御座候て明日如國
府被參候、此状可預御披露候、恐々謹言、
五月廿三日 伊勢兵部少輔 貞昌判
曾木五兵衛尉殿
以上 忠清譜仕以済

河野文右エ門通直ノ考号

遠路迄預御状具ニ令披闕候、然者道純御代之儀共、前御取次申候、其為首尾様子承候、吾等事も当分此地へ罷居候間、喜人休右衛門尉殿へ伏進候間、子細被仰入可為尤候、隨而者道純氣相無快氣、貴老御心底存計候者、来月者早々鹿兒府可致祇候候間、何様肝煎可申候、恐々謹言、

新納加賀守

忠清(花押)

十月十六日

河野郷兵衛通政ノ考号

白齋老

正保四月卒 御返報

起工 竣功 成功

告竣 上梁

正文在琉球国司

覚

一御借銀七千貫目余御座候、琉球口より唐之才覚ならてハ御返済不罷成ニ相究候条、其御分別毛頭御油断被成ましき由堅申達候通申上候事、

一其元へ当夏冠船着岸候て勅使へ何とぞ被成才覚、唐へ船數參候而御借銀御返済候様ニ随分可被入御精之由各被為申上候事、付勅使送王舅ニ圍頭

親方大夫喜友石親方被差渡、唐にて御代あるへき由候事、御代条之事

左ニ書記

一三年ニ一度之進貢之事、

一毎年年頭之御礼之事、

一馬硫黄相重之事、

一毎年御誕生御祝言可被申進之事、

一やこ貝之から毎年積渡進上之事、

一進貢船前代ハ三年ニ一度ツ、ニ而式馬十五疋式拾疋八疋充、いわう式方斤之内外參候處、前ニしやな唐へ被渡候而御代被申、馬四疋・硫黄一万斤ツ、ニ罷成、御弓箭以後十ヶ年御免にて不通候、其後色々唐へ御理被仰分候へは、五年ニ一度ツ、ニ相定候處、右五ヶ条之内御代立候へハ船余多差渡儀口能有間敷候間、銀子過分ニ相渡御為ニ可罷成との各被仰由申上候、進貢之儀前代より定たる儀候条、琉球より之矢墜たるへき由候

四ヶ条之儀相調候ハ、船數可參候、取仕立ハ鹿兒島より之御失墜たるへき申談候、進貢三年ニ一度ツ、可渡御代立候へハ一年ニ船一艘充可渡事、其故ハ今年渡唐申候使者北京迄被參候故年越にて候、乗船者其年帰帆、次之年迎ニ參候、於其儀ハ一年ニ一度ツ、之賦にて候事

一勅使当秋帰唐候刻、船一艘ハ王舅之乘船、又一艘ハ武官之衆百人程冠船ニ乘、其元へ被參候由候、船せき候ハん間、馳走ニ此來のせ候而被唐候様ニと談合申候、左候へハ二艘ニ銀子六百貫め程之代糸可乘由被仰候、乍去七百五十貫日程可被渡之由堅申究候、就夫銀ハ以御物可被調之由中候事、

一銀子八拾貫日程ハ其許王位様御物毎年唐へ被遺度之由各被為申上候通具ニ申上候事、

一數年鹿兒島にて糸かけやう計日おもく候て糸之へり王位様御物糸にて被成濟候、其上此中渡唐船取仕立遺物從其元之御失墜にて候付、才府官舎之手前よりも糸之かけへり濟ニ付身上迷惑ニ罷成候通承及たる様子細々披露申候事、

一渡唐船二艘ハ水手等其元にて可相調候、若三艘ニも罷成候ハ、道之鳥之者ヲ水手ニ可被仰付之由被成御中候、是又具申達候事、

以上、

壬申 八月廿七日

最上土佐守

新納加賀守

金武王子様

國頭親方様

勝運親方様

參

久林

助七 左京亮

天正四年丙子五月廿一日生、母關山筑後守実祐女

忠元譜仕込濟

天正十五年丁亥春正月、松齡公在津加牟礼、問家久既入府内、召諸將會議、或言如府内与家久合勢、或言今兵兩難而去不可、秋月種実遣使勸取玖珠郡曰、非特我敵邑之幸、即高橋氏亦得免於難矣、玖珠人亦請之者

屢矣。松齡公乃遣川上久暲・町田久倍・新納忠元將兵入攻珠那。於是小
國・北畠某等望風而下。二十六日松齡公進屯以珠那野上。二月遣諸將攻
下莊某。某請降許之。然猶未下。三月朔日關白親帥大軍討筑紫。初松公
与家久分道擊大友氏。已入豐後城邑皆降。及聞京兵至。皆叛之。初歲
久屯白仁。將家久於府內。疾不能行。又聞所得城邑皆關白逼白仁。
乃議班師。遣長野隱岐告於松公。七日歲久發白仁。大野七郎久高等送
之。松公聞關白前鋒秀長已至豐前。十一日從野上還。分軍為二。自將一
軍適府內。使征久率久倍・忠元等。將一軍從日田過秋月出上筑後。是日
松公宿健軍。明日關白前鋒已至湯嶽与小寺氏。迫聞氏合兵來攻。松公擊
敗之。乃至府內。十四日志賀道益与伊集院三河・大童休意等遂去皆追
城。会忠元等。師豐後瀧川城。鎮將佐多政為敵所攻力戰死之。及家出
死者五十二人。一色昭秀・興山上人到府內說松公与關白和解。諸將弗
聽。議還守要害之地以距關白之師。松公從之。十五日夜從府內如三重
路。歷清田前後遇敵輒擊破之。貞昌等有戰功。伊集院久宜等去鶴崎城遭
伏死。十六日松公至三重会家久松尾城。二十日松公及家久俱發松尾城
撤梓山。家久還佐土原。松公抵高城会。公於都於郡征久之趨上筑後也欲
与。豐後切加布城鎮將伊久信俱得行。聞久信已去而還。会阿城主志賀氏
遣大森彈正屯宮地。開大野久高・弟子丸右京・大童休意等於坂梨城。久
高告急於征久。遣町久倍・新忠元・伊久信救之。久倍・忠元等逐出。久
高等共保津守城。四月六日秀長以二十万至日州。軍於財部・高城之間。
山田有信守高城。使京都善養房等屯根白坂。久倍・忠元在津守。聞關白
年已至肥後。將守隈本。隈本・宇土皆叛。乃還走八代。十七日与松公家
久等擊根白坂皆不克。忠隣陣歿。死者三百余人。一色昭秀・木食上人及
安國寺惠曉復勸公使講和。公乃從之。二下一口忠棟為質遣使。令有信
降。高城不肯。又遣町田駿河充諭之。乃降以了有榮為質。前此松浦筑
前有罪出亡弃京師。遂事秀吉。至是為之先路。据肥后谷山城。忠元・久
信攻陷之。還保開城。而有馬氏叛。乘間縱燒比奈古・高田。鎮將忠永懼
及棄邑奔亡。關白軍至宮之原。舳舻蔽海。而下關八代人見之皆有畏色。
忠元等乃去關城会征久。久倍於八代城。及夜遂相隨俱出。走以麻。比至
坂本東方既白。而關自己至八代。征久等至人吉。於是相良忠房佐我軍在

日向。使其臣深水宗芳守城。称病不出。諸將將遷入城中。以宗芳・行濟
致麻川而後免之。忠棟為質之日忠元還大口。關白乘舟從佐敷至出水。領
主忠永迎降。二十五日舟至川內。從流而上。次太平寺遷鹿兒島十三里。領
五月朔日公与松公發都於耶。公還鹿兒島。松公還真幸。秀長移屯野尻。
關白之至川內也。高城。水引諸邑望風而下。獨平佐城主桂忠防閉城固
守。關白遣小西行長。安治嘉隆攻之。不能克。公使人諭忠防乃降。二日
見關白於太平寺。公遣河野猪右衛門通貞。如太平寺責成通貞反命。六日
公發鹿兒島行至伊集院宿雪窓院。祝髮。齋名龍伯。八日至水引。因佐友
成政。掘秀政見關白。於太平寺關白自腦佩刀二枚賜公。明九日關白下花
押書。使公領薩摩如故。公反自寺比至伊集院追求實子。公以少女龜壽為
質。公還鹿兒島。群臣朝賀。十八日關白發太平寺宿平佐。十九日松公往
見秀長於野尻。又以赤塚三左重政。佐谷田覺右重正為質。二十五日關白
朱記書賜松公大隅。令肝付一郡受忠棟。賜久保諸泉郡。二十六日又命松
公曰。遺久保入侍。且納一人為質。松公見關白於鶴田。拜大隅及諸泉郡
也。初大口地頭新納忠元与祁答院領主歲久謀。擊關白軍。竊言於公曰。
關白提大兵侵我疆。曾莫一人技捨。天下將謂國無一男子也。請邀諸路擊
之。公不許曰。已納女為質。奈何忍棄之二子。重請曰。謀國者不顧家。
且人家男女往々多夭折。願割所愛視。猶天折奈之何。以一女子故廢國之
大事也。公固不許曰。与人講和約已成矣。背約不義。且吾以社稷之故視
髮謝罪。卿等不宜負我二子。乃止。於是忠元投知學寺祝髮。白号拙齋。
往見關白於曾木天竺尾。關白賜長刀一枚。道服一領。再拜而退。關白喚
回之謂曰。武藏汝復与我相距乎。忠元應聲答曰。唯寡君命若使寡君不得
事敵。下則臣無所逃命。關白称善。則口關白赴肥後。忠元送至羽月鄉。關
白之聞。駢馬遣側相送數町。關白遣騎士召之。忠元即至下馬洋。關白親
賜楊篋扇一柄而去。大宮尾地頭館西二十余町 家久往見秀長於野尻。中毒而病
六月五日卒於佐土原。係。與村土人呼曰關白陣

大田氏系 用久二男延久 忠福新三郎中務大 母忠國公安。領川辺平山城。明
應五年七月廿三日母堂卒。法号玉泉智芳大姉玉泉寺殿。在川辺。初日長
興寺。伊作家造立也。迨實木主改寺号云。

永祿四年辛酉 大中公使右泉坊如關東代謁鶴岡廟、二月十日 發行於京師、影刻八幡像三株、

六年癸亥負寄禮于鹿兒府清水今八幡此也、天正三年乙亥六月二日從金吾出船市來、六年戊寅豐州遣使船于南蠻、六月使成覺坊留其婦於種子島、六日赴之、十一月十二日大敗豐帥於高城、十二月忠平公遣使於肥後、十八日出舟于市來、

七年己卯正月四日至松橋、八日至隈本、十五日至三船、皆說之、惟宇都候、城侯聽命、八年庚辰十月十六日真蓮房從上非竟兼如肥後、二十五日使于宇都候・城侯・龍造寺候、秋月候、此日出船米津、此時隆信出兵伐蒲池於築川、鍋島陣于酒見、至佐賀說隆信、不聽、如秋月、就内田助右衛門說、種突聽命、十一月廿二日薩衆伐合志、秋月護送隈本而熾反命、

上壬午九月使于幕府及毛利候、小早川候・吉川氏、長宮昭光・昭秀十日赴之、十月四日至土州浦戶時、長官師于阿州、十八日竣回說之、讚州觀音寺殿護送、十一月二日渡備後鞆、三日詣山田侯、幕府起居陳信長命幕府感喜、四日召見、真蓮賜太刀馬許、公二殿字賜、公内書乃遣布施氏來于薩州、十二月十七日付上使齋吉田至防州山口迎年、

十一年癸未正月十五日至秋月會隆信叛、遮路留帶四十六口由惠利内成助護送得回國、閏八月從中書君伐阿蘇氏、乃与常陸坊使于高知尾、西越後守來為質焉、

十二年甲申二月遣中書家久伐隆信於島原、九月自肥後吉松陣移于高嶺、自豐後戶次道雪・高橋紹運陣于筑後、十月二十二日薩衆引兵回至八代報平田老、又報忠棟於飯野、

十三乙酉十一月十二日蓮長至鹿、鎌田刑部使于京、蓮長使于中國而朝幕府、四月十一日自芸吉田渡于伊予、幕府使布施治部少・多羅尾勘左、賜公與馬二匹、轉宅 藥毛蓮長受之、時因柳沢薦賜武庫公義字、蓮長受之、飯野

六月十一日回鹿

在本田次郎右衛門口略又

一從第二親中納言親峰廿代 本田親豐越後國之本多之庄居住、分國越後・信濃・越前也、去文武天皇

世又仁明天皇葉ニハ伊豆國居時平家都落候以後元曆元年ニ北条四郎義時息女妻合、白川法皇ノ時上鳥羽ニ立家居、文治五年十一月一日ニ息子親恒ヨ從頼朝被召、三宝祇殿為勅使蒙仰条曰、忠久様十五歲ニ而候歟、下三ヶ國江有下向付テ本田ヨ可父、於永々コウケンスヘシ、若島津斷本田可統、又本田斷エハ島津可紹、家中ニ有ハ本田カ領地ヲ可有檢斷、私ニ以上七ヶ条御判給リ、建久元年正月十一日立京、二月廿八日日向國真幸般若寺ニ着、三月二日大隅國分府中着、薩隅口廻テ皆人々ヲ手ニ付ケ亦建久三年ノ正月二日上洛、廿二日京ニ着、同月十日ニ頼朝將軍ノ位ニ成給、忠久島津大夫判官ノ上ニ着セ給、行幸ニ諸大夫ニ君等モナリ、御伴仕テ候、同年八月一日忠久三ヶ國ニ下向之御伴仕下着ス、後代為甲斐守親賢此書秘テ書置ト云云、雖不親賢仁ニ頼朝御死去ニ付テ建久九年三月二日致上洛、頼家ノ前ニ伺候申、正治二年之正月下向ス、亦建仁三年正月二日ニ実朝天下ニ成セ給ニ付為喜又致其上洛而候、為後代書置者也、

永仁元年八月十八日

山城守親嵩

所持書寫仕候、

右之書在、本之儘寫之、

在河野造酒承家

覽

一就今度文書改被相細候条、嘸衆へ被致相談、隨分心懸可被尋出候、尤御急用ニ而無之候間、緩々致滞留可被承届事、

一今度諸所へ被遣候文書改、必御直判之書物ニテ無之候共可達御用事ハ可有持參候、就中軍記式古日記是又可為御用事、

一諸所古城・古陣・古今之名銘々承届書付可被參事、

一敦賀城と古昔之文書ニ相見得候得共、何方へ在之儀も不相知候条可被承届事、

一當宮并諸寺ニ從古之書物共在之候、左様成書物之内ニ可達御用物も可在之候間、其所之嘸衆被致同道可被見届候、左候而持參難成物者可被寫取事、

右条々可被得其意者也、

承応四年五月十一日

鎌田筑後印

新納八代 孫四郎
忠勝 忠常

左馬助
忠堅

志布志落去之時如
伊東方被參候也、

佐土原繩之馬場ニ被罷居候人也、後金吾
樣鶴田被召置候也、

伊東權頭妻

伊勢美濃守殿母儀也

女

在丞水川崎藤兵衛

小野氏 横山 狩田 海老名 云々

篁 八世略

資 幸

長元々年八幡殿
盛目役

横山次郎大夫

經 兼

野古院 備

野三大夫

成 任

野五

忠 兼

田原三郎

師 兼

山口五郎

光 兼

刑部丞
野三次郎

成 綱

承久京方

成 南寺修行

成 尋 義勝法橋

子孫改姓等

近衛局

女 子

右大將家御乳母

宇都宮左衛門尉知綱

筑後守宗綱母

寄進

先祖相伝所領三ヶ所事

在菅薩摩内 伊作并日置北郷
同南郷外小野

副進次第調度文書等

右件所領田區等者年来島津御庄寄郡也、而天下騷動之間、公私為軍地、人民百姓併逃散畢、然問庄内兩方課役如何可令勤仕哉、於子今者令寄進一円御庄御領致安堵計畢、有限於年貢所当物等者、為重純沙汰、追年無懈怠可令運上京都之状如件、但為後代証文於下司郡司密公文職者、重澄以子々孫々不可有相違旨為被成下御下文、勒状以解、

文治三年三月 日

平重澄判

谷山佐渡

純 辰

平左工門

実有馬隱岐純勝次男

寛永三年十月四日攝津朝榮居士

純 次

谷山九兵衛

純 真

次左衛門

妻伊地知筑後重房

山田弥左衛門有雪 下金剛院親典女

山崎藤七郎系

盛 秀

号肥後吉兵衛

女子

百高齋長院

俊昌妻

隆 峯

藤兵衛

万治二己亥正月十日改肥後氏復山崎氏也

盛 張

号肥後内藏助

女子

肝付甚右工門妻

盛 貞

四郎左工門

山下宗安猶子

盛 長

吉兵衛

宮里仲右工門猶子

盛純

慶右エ門

谷山宮内左エ門鑑字

寄月蓮 大中様御年忌之時 門司 光空

万境清風共一涼吟心今夜惚無方銀蟾浮水新□静又是池蓮菡萏香
仁者必有勇

武勇有君無比倫又能治國又安民六軍麾下爭先後功在寬仁大度人
仁而勇二難并仰 看君臣道大明惻隱心深古戰將成功万年誰予

肥前守 肥前守 經安

島津立久公夫人道□
性 寿

明徳元五十二卒四十五
右本在和田四郎兵衛

大山伊予広綱女財部伝右衛門盛壽妻
○忠 弘

主薦母龜山又兵衛久儀同腹
宗門奉行 寛文六丙午八月十日卒
葬大徳寺法名性空常法居士

良 兼

寛文六為忠弘嗣実府十七元清左

初忠通三男 甚兵衛 甚七
寛永七年二月十五日生、母面高主馬女
元禄六年西十月四日納殿役

五郎右衛門

頼通頼通松左衛門二男

二男 甚兵衛

寛永二年西十一月朔日初見町田孫七養

正徳五年未十一月十六日分族國老將監伝命、延享二丑十二月晦日自請辭
士籍、如家跡可以嫡子請國老主計、使有川寧右衛門許之、

甚左衛門

初熊助

延享三寅正月十六日為父家跡、
四年卯八月十五日改置左衛門前中紙拜家督恩年尚幼也、
託人

良 閑

初熊次郎 甚八

為伊藤三次後嗣

良 次

定之助 甚七

川上瀬兵衛三男

都之城鬼束常心系因ノ写卷端ニ此正文久保友元謾雜書虛妄紊之者夥矣、
今省之而不写、

正文写在園分士山崎盛右エ門

初峯院無磨守

一平千代松丸が事者徳重嫡子たりし上一子の事に候間云々、

一三ヶ国不慮の世上出来候といふとも千代松が事者一篇に立久御方御用に
可被立候、是より外に別の意見被申候する方ハ野心たるへく候、各の中
より沙汰有へく候、

一徳重時代にはなをつかせ候する者、同徳重時代になをし候ハ人、落人院
内に御入有間敷候、かくれ候で出入時者其用心も入へく候、嘗会を取お
こなひ大安二年に定をかれ候、日記のことく御としはまとの下の儀式御
としかき二人つゝハ各々より出候、鑄流馬六騎初答院六名の役に候、
同的持二人、弓袋さし二人、是も名より門まハりに可仕候、懈怠なきや
うに各仰談られ候て御奔走有へく候、

一院内之田數之事百二十町たりといへ共、久本領之内四百四十四町之ないけんの所也、当季徳元年壬申奥州忠国より三ヶ国筑田候て一反に百つゝの反錢かゝり候、其時入来当所ニハ町田殿・河上内膳殿・伊知地田鳥殿奉行に被越候、あまりいそかれ候間、徳重ハ面津御供任逗留申候へ共、閏八月虎井・柏原・紫尾・久木野々・郷子・後田・湯田之事者留守に算田候、同閏八月晦日やう津より罷帰候、同九月朔日より時吉之穴川口よりはしめててろく田さのほり一手ねずみか城よりやなつめのほり一手舟渡田より上しんかいに向て一手知此はしめて佐志・時吉・中津河・黒木・大村・久富木・山崎・上舟木・下舟木・木洪・蘭牟田・長野まで算田仕候間、十月廿日隙明候、院田の田數本町之内二十四町、水損ふみいたし候分百六十八町八反、已上祁答院五百六十八町八反にて候、此分屋形へも付進上候うへハ院内にてハ其時の田數のまゝたるへく候、我等か童へにて候し時、原口ひたち殿・小栗殿城誘を十ひろつゝあて候へハ、それ持す候とて八ひろつゝせられ候、其後まなみ殿御越之時、日記にはひたち方ハ五町三反、小栗方ハ五町三反、此日記を見せ候へハ口あかず候、雖而へい共ぬらせ候、如此之事をおもひ出し候へハ、千代松童にて候とて申度まゝ申され候方も有べく候、よく御談合有べく、五百六十八町八反の日記文書箱の下ニ取置候、尋得にいかやうの用所候とも五人十人御寄合候て千代松わらハへの程ハ御意見有へくめやすの日記にてちかくかき候て置候、それにて城誘等の事仰付られ、院内五百六十八町八反之内百五町八寺領、百三町八神領とおほえ候、

外數行不写

申中之

寛正五年

平朝臣徳重 在判

于時天文廿一年 壬子 二月時正吉

正文在加治木長谷崎次右衛門

今度言上仕候之趣、別而御懇上意忝面目之至候、併各御召合故候、畏悦不少、殊近比見事御馬被下候、外聞之至不可有此上候、秘藏可異于他候、仍薩州当方和談之儀被成御異見候歟、就夫被仰遣候之様得其意候、於子

細者至新納武藏守殿申談旨候、定而可被問召候之哉、益可被添御心之事所希候、於向後深甚可得御意候、毎年御指南可為大慶候、恐々謹言、

十一月六日 鎮尚 判

喜入撰津守殿

河上前上野入道殿

村田越前守殿

平田美濃守殿

伊集院右衛門太夫殿

進上伊集院右衛門大夫殿 大夫鎮尚

到來 天正五年丁丑 天草

慶長十九年 寅 正月分

日々記

正月三日 丙辰 晴

一新納次郎四郎年頭之為御礼被參候、

進上御酒樽壹荷鴨式ケ御通被給候、

正月六日 己未 巳刻ヨリ晴

一喜入撰津守殿より年頭之為御礼、使者田代源藏被參候、御酒被給候、

正月七日 庚申 晴

一佐多伯耆守年頭之為御礼被參候、進上御酒樽壹荷并目籠吸物ニテ御酒御寄合、

一河上上野介殿年頭之為御礼被參候、進上御酒一荷并目籠吸物ニテ御酒御寄合、

正月八日 辛酉 晴

一星山弥右衛門尉子仲次与名被申候、為御祝儀瓶酒一对進上申候、

一南原助左衛門尉名被下候、為御祝儀御酒錫一ツ進上被申候、

正月廿五日 戌 寅晴

一土持左馬權頭年頭之為御礼參上、御道被給候、

正月六日 己 未 曇 巳刻ヨリ晴

一喜入振津守殿より年頭之為御礼、使者田代源藏被參候、御酒被給候、

二月七日 庚 晴

一松浦肥前守殿より年頭之為御祝儀、使者新敷源介進物之事、

一御太刀一腰 御馬一疋

一書状一通 諸白檣一荷

一右使者より鳥目百足進上候節御寄合アリ、御座ニ喜入振津守殿・渋谷石見守殿・了齋被參候、

一奥州様御繁昌為御悦、伊地知縫殿助被參候、御酒被給候、

三月廿一日 癸 晴

一惟新様御腰物之かね被成御焼せニ付、為御覽氏貞所へ御出也、

四月十三日 乙 未 晴

一上方書物屋之源三郎為御礼被參候、進上泰平記一部并註在之、

四月廿八日 庚 晴

一惟新様御気色卒度悪敷様ニ御座候ニ付而為御見廻使被上候衆比志島紀伊介殿・野州・中書・摂州

六月十日 辛 卯 晴

一正源院へ御状并葉茶壺一ツ仲次焼被遣候、

一喜入振津守ヨリ使被上候様了八壁ぬり御遣被成候御礼被申上候、

六月廿二日 癸 卯 晴

一喜入振津守殿父子參被成候進上物之事

一瓶酒二对并食籠
一爪台一ツ

右父子へ御酒御寄合并御振舞有、相伴了齋

八月十一日 辛 卯 晴

一奥州様へ御茶被進候御座御而殿様・豊後守殿・喜入振津守・別府大舍人助・東郷長門守

九月廿日 庚 午 晴

一小城権現之座主職善乘院へ被仰付候、為御礼被罷出候、鳥目百足進上候

談議所より案内者として使僧被參候、

張紙

本文座主職之事、善聚院由緒帳ニ安養院・成正院頼真より奉願盛伝法印

へ開基ニ而別当職被仰付、其後元和年中勦略之節神領被召上候云々、

右之通御座候而慶長十九年座主職被仰付候訳明白ニハ相見得不申候事、

十月四日 未 晴

一相良清兵衛尉殿より使犬重長介殿、惟新様より兼口鐘の柄被成御所望ニ付、とねりこのゑ二本進上候、清兵衛尉殿より口野内膳正迄書状被遣候

則返礼被申候、右長介殿鳥目百足被成御遣候、并御振舞有、相伴宮原主計助

十一月十二日 庚 申 曇

一喜入振州被參候、南蛮菓子進上、

十一月廿日 戌 小 雨

十一月十五日 甲 午 晴

一上方家塩屋ノ善右衛門尉被參候、鳥目百足進上候、

一塩屋善左衛門尉下向ニ付被參候進物之事

一榻原一束 一木綿踏皮式足

十二月六日 甲 申 晴

十二月六日 甲 申 晴

十二月六日 甲 申 晴

一古江全兵衛尉從江戸罷下候、
一書狀并下緒一具

新納次郎九郎

一書狀二
町田勝兵衛尉殿

一書狀一
吉祥院

一書狀一
江田藤右衛門尉入道

一書狀一
上井次郎左衛門尉

蒲池備中守

十二月七日 乙酉晴

一伊東平右衛門尉入道之内々徳永和泉守内々脇本御飯屋守之女房懸御目候
瓶酒一對宛進上候、

十二月八日 丙戌晴

一伊地知民部少輔被參候様子ハ山野之地頭職被給候為御祝儀鯛一掛・御樽
壹荷進上、御酒被給候、

十二月十八日 丙午刻ヨリ
申陰 雨

一西ノ丸ヨリ御小袖壹ツ御進上、御使新納加賀守御酒被給、其後御振舞
有、

張紙

本文加賀守ハ喜右衛門家之祖ニ而ハ有間敷哉、忠清ハ天和の初頃刑部太
輔と成り、寛永八年比より加賀守と見得たればいつれか是なるか、

正月三日 丙辰晴

一高野伝兵衛尉・佐良々彦兵衛尉・小島三左衛門尉年頭之為御礼參上被申
候、

正月七日 庚申晴

一本由伊賀守 此間廿六人 略ス

佐良良善介 下十四人 略ス

右之衆年頭之為御礼被參候、御酒被給候、

二月廿二日 乙巳晴

一鹿兒島より御使佐良々善介被參候、御意趣直ニ被聞召候、御使ニ御振舞
有、

一山口駿河守殿より御書田畑全兵衛下向ニ參候、但かこしまより御使佐良
々善介持參候、

八月廿六日 丙午晴

一奥州様より御使鎌田左京亮被參候、御意趣ハ直ニ被聞召候付、依御所望
弥右衛門尉燗茶壺三ツ被進候、御使ニ御振舞有、

九月廿六日

一鹿兒島へ御使木田伊豆守被參候、

一万介焼物之事

忠清詣ニ補入濟

尚々御報次第ニ隈元へ滞留申仁へも可申越候、將亦一人ニ付一日ニ銀
子壹匁ツ、隈元にてハ召仕由候、為御存知申上候、以上、
（附カ）

諭令啓上候、仍肥後表之物音申来候、度々ニ相替候間、去拾九日ニ此元
衆中肥後表存知たる仁差越申候、唯今一人罷歸候間、中來候通然々雖無
替儀候申上候、

一隈元城受執衆誰共未相知候由候事、

一竹中采女正殿より使者兩人主從五十人ほどにて隈元へ被罷居候由候事、

一城無異儀可被相渡之様子と見得候由候、諸侍皆々屋敷之掃除普請之由候
事、

一肥後守殿御藏米千式三百石程有是之由候、人数相応さん用候へハ三日之
飯米有之と申説ニ申之由候事、

一諸侍前様方々ニ妻子荷物等被相送候へ共、此比者宿元之様ニ妻子被罷歸
人も有之由候事、

一加藤右馬允從江戸二日路被參候へ共、又々江戸へ被召寄、肥後守殿出合
之儀御變ニ罷成、事能相濟たる由去廿日比ニ江戸より相聞得たると風聞

仕之由候、乍去風説にて御座候ハんと下々も申之由候事、

一筑後・筑前・肥前何とハ不相知雜説申候、隈元待衆之馬買取之由ニ候、筑前守殿家中内乱おこり候へ共、頃者事済たる様ニ申散之由候事、

一求麻より隈元へ為聞取七人罷居候内式人ハ筑前之様ニ參候、式人ハ豊後之やうに參候、三人ハ隈元へ罷居、右馬丞下着ニ而城相渡候を見究可罷歸之由候て滞留仕之由候事、

一隈元分限之衆者荷物等不相送候、式百石・三百石取之衆人躰計屋敷之番ニ被罷居之由候事、

一井手田宮内少輔・正林隼人・加藤与衛門尉・飯田学兵衛尉、新參之衆ニ者田中大膳亮・鎌田喜左衛門尉を始として四十八人程此度一籠可仕之由被申之由候、乍去諸侍就中普代之人數無合点候間、無異儀城可相渡之物音之由候事、

一肥後守殿供之人數又内意も音人も未被、被下之由候事、

一爰元より遣候仁無口能城へ罷登、ゆる／＼と見合候へ共、弓戰之用意とハ不及見之由申來候、大名衆門ニ者手籠二三木ツ、御座候、不紛談合之躰ニ見得候由、

一肥後守殿上洛之刻、水子之内一人罷下候、左様成ニ爰元より參候仁面談仕相尋候へハ、替儀も無御座之由候事、

一此中者今月廿五日ニ城相渡候由候へ共、于今日限不相知之由候事、

一隣國より隈元之様子聞合ニ人を被付置候由候、此元より遣候仁も式人隈元に滞留仕候、來ル廿八九日比可罷歸之由申候、此度遣候仁隈元之様子連々能存候間、城相渡までハ可被召置候之哉、御意次第ニ可仕候、自然城相渡までも被召置候ハ、彼仁も少身之躰にて殊ニ肥後表ハ銀子迄を召仕候間、銀子を被下候様ニ有度候、連々肥後表之様子不存仁者遣候ても然々物音も不承候間申上事ニ候、猶追而一左右次第可申上候、恐惶謹言、

新納加賀守
忠清(花押)

寛永九
六月廿五日

川上左近將監様

喜入撰津守様

人々御中

猶々隈元。八代之城も廿二口ニ相渡之由申候、相良清兵衛尉殿も昨日廿二口ニ夫難百廿人程にて候、如隈本之被參たるよし申候、手まハリ之道具も五六人程にて被參たるよし申候、已上、

急度令啓上候、仍此中隈本召置候者只今罷歸候、去廿一口ニ上使隈本へ御着にて候、以之外多人數之由申候、八代之城請取之御人衆廿一日ニハ川尻被成一宿、翌日ニ八代ニ着せられたる由申候、隨者自然此境上使於被成御覽ハ御案内者可仕由兼日被仰聞候、左様ニ候ハ、兵具等何程ニ持せ申候て能候する哉、御意次第ニ可仕候間、御報可被仰聞候、恐惶謹言

新納加賀守

忠清(花押)

七月廿三日
川上左近將監殿
喜入撰津守殿

参人々御中

覽

黄門様被成御在江戸、別而將軍様御前之仕合能候間、其地も心易可被存事

去年秋新納加賀守殿・最上土佐守殿を以唐へ商賈之儀兩人上着候而其元王位御返事之通承達候間、則江戸へ申上候事

右御中分一段御為可然様子ニ候、無相違唐江銀子過分ニ被差渡、御借銀返済調候様ニ可右御談合候事

御借銀返済不調候は惣御国迷惑ニ罷成候間、琉球之儀も可為同前候、畢竟諸人之知行被召上ニ可罷成候、罷々分別專一候事

冠船当年渡海之事未相聞得、無心元存候事

一鹿井入用之由被申候間、此節可被指渡事
一加藤肥後守殿父子依重科被召上國、遠國へ流罪之事
以上

寛永九年八月十四日

喜入撰津守

琉球

三司官

薩摩国八幡新田官所司神官等

当国官里郷地頭大隅式部三郎忠光相論免田以下事

正応二年八月二日

陸奥守平朝臣

相模守平朝臣

八幡新田官雜掌道海申、島津三郎兵衛尉実忠当官免田老町御供対得事

右如解状者当官常見立用内勢方勤免田御供米南郷地頭実忠元亨三年以来
对捍之条無謂云々、任実忠承伏遂結解可令弁済矣者、依仰下知如件、

元徳二年十月廿五日

修理亮平朝臣

右延享元十月史官召上

一 永正二年 乙 十二月吉日平右馬允重貴寄進五ヶ度御供米

一 十六 己 卯 十二月吉日藤原忠俊御筆法花経于八幡宮御宝前

差出

右往古妻帯座主ニ而候処、依口論所追放ニ被仰付候、寛永十九年清僧座主
ニ被召替、名觀樹院、崩山者先護国院法印全有ニ而候、座主由緒書妻帯座
主追放之砌不殘持參被申候由伝承候、隈之城ニ子孫有之、于今文書等所持
之由伝承及候、靈仏本尊之釈迦脇立普賢文殊新仏ニ而無御座候、是等之趣
各御存知之通被仰上可被下候、以上、

新田宮座主

觀樹院龍意

元禄四年 未

十二月十一日

水引

御變衆中

野田

白山御神領

在口裏

白山御神領

薩州出水郡知識庄村之内

一 浮免

川は九

上田一段三畦十六歩

式石四升

同所 九畝廿四歩ノ内

上田六畦十四歩

九斗七升

合田方三斛一升

已上

慶長十年

覚

一 宝物櫃入

仁和寺宮御代々譜 全

一 入経蔵宝物櫃志

一同二

一 宝物櫃入三

一同四

一 宝物案内記下

一 御文書留記

一 御文書留帳

八冊

右者此節御用見合ニ付孰も出精写方被致候得共、多々書誤、且可書拔件
等も未相済、旁為見合持越度候間、可被聞召置、尤御用済可差返ニ付為
其如此御座候、以上、

文久甲子

三月十三日

一 乘院御房

御同宿中

牧

助九郎

柴川

甚左衛門

家久公御養子御願一件伊地知季安考按

琴月様御代台徳院様御二男駿河大納言秀長卿、また国松様と申上、御養子ニ被申請度思召被為在、其御使伊勢兵部少輔貞昌被相勤候ニ付、貞昌儀者治乱之際倭韓東西ニ致奔走、始終御側ニ被召仕、數十年御家老職被為相勤、當時勤勞拔群、忠誠無双ニ而美ニ為勝輔佐之臣共可申純良之人物候得共、万一右之事御願違被為在候は右大將頼朝公御以求御連統為被遊鳥津家御血脈夫限可被為及斷絶、左候而何程御國勢世上ニ被為振威權候共、被奉對御先祖様候上者無此上茂不忠之罪遁かたき理筋之勤弁無之事共秋水先生国史之書法等ニは別而被評貶候哉ニ伝承居候処、和田子貞昌程之誠忠且學識も乍有之、左程之顧無之事を相疑、我等江承問候趣有之、其時代之時宜共粗考合せ、乍不束屢按左之通書述候、誠ニ誤耳可有之は案中、只博古之同志江追而及吟味度其中暫備遺書計之手扣迄如左御座候、

一右御夫人持明様御事、元龜二未四月廿六日御誕生、御名龜壽様と申上、實明様御姫様三人被為人候内ニ而最季ニ被為生至極之御愛子と相見得、松齡様御書中ニも大形御かゝ様と被為書有之、別而御懸懸之御詞遣候而世并御姫様之御取持ニ者難準御勢第一可恐察事ニ御座候、

一唯様御事、天正元酉年御誕生、又市郎様と申上、松齡様御嫡子ニ而右持明様より二歳之御年少ニ御座候、

一琴月様御事、同四子十一月七日御誕生、松齡様御二男ニ而右持明様よりは五歳之御年少ニ御座候、

一天正十七年實明様御男子不被為在候付、一唯様御事御養子ニ而持明様と御取合、若殿様ニ被為立候由、其時一唯様御年十七、持明様御年十九ニ被為当候、左候而文祿元年一唯様者朝鮮江御渡海、翌二巳九月八日於朝鮮御病死、御年二十壹、持明様御年二十三、右之御凶左右同月廿七日栗野へ相聞得、御舍弟琴月様右御跡ニ被為人候而同三年台許之上、若殿様ニ被為立、又候持明様と御取合被遊候由、其時持明様は御年式拾四、琴月様ニは御拾九歳ニ被為成候、

一慶長五年関ヶ原乱後將軍家と御和談段々往反六ヶ敷、同七年八月比漸々被為調筋ニ成立候得共、何れ實明様歎琴月様歎御上洛不被為遊候ハ、右之御成就も難相調、御談合最中之折柄、伊集院源次郎忠真謀計ニ而平田

増宗杯相話らひての事ニも候哉、國分・鹿兒島方と内乱差起り既ニ御弓箭ニも可成立勢ニ而有之由候得共、内々源次郎儀加藤清正江連和いたし居、御兄弟様御間互ニ表裏之説共申上込全謀計之手筋相頭為申由、其時之事ニ候半、盛香集ニ如左、

伊集院源次郎科之条々、龍伯様江小伝次申上候条々、
一和久甚兵衛尉殿江からくりを以京都の尖否尋究御奉公申上度由候事、
一龍伯様江從内府様御神文被下候を井伊侍從殿・山口勘兵衛尉殿彼兩人前被差下意趣は、又四郎殿を被成御取立、龍伯様一筋を被統候するとの神文參候由を誰人か鹿兒島江言上申候由承付候段被申候、就其御方念比ニ相尋申候得は若は和久殿が被申候覽よし高崎千左衛門申候由被申候事、

一鹿兒島諷訪江御參籠之子細も彼又四郎殿之儀を題目被成候時は鹿兒島方も一途可有御才覚之由御談合ニ付、七人神文被申、其上加藤とのへ内略被成候由申候事、

一龍伯様於御上京は御打立之翌日富之隈之事は從鹿兒島可有御存知之由高崎千右衛門申候由被申候事、

一少將様被成御上落、國替可被成由御望承之由被申候事、

一富之隈御油断ニ而は京都などへも何卒御才覚可被成儀ニ而候由申候事、

一平田太郎左衛門可被成御成敗由承候由被申候事、

一右之条々物語被申候我々前より申候事ニ何ほどの子細を以加様之儀をこまかに被聞付候哉と申候得は其事候、伊勢兵部少輔前々小伝次をからくり付へき由候て高崎千左衛門江懇望被申候付、高崎千左衛門御為ニ白石惣左衛門と申者はいとこの事ニ候へは彼白石惣左衛門を高崎千左衛門前々頼甲候付如斯候由、然共高崎千左衛門江は伊勢兵部少輔より知行契約の切紙を給置候由被申候事、

惟新様江源次郎申上条々

一富之隈より惟新様近日可有御成敗之由御油断有箇敷由申候事、

一源次郎事は於御前可致戦死之由被申候、小伝次事も惟新様江所役別儀由申候、就其富之隈の事を細々申通候事、

一鹿兒島之人数之事は申ニ不及、南方之人数も從富之隈からくり付被成候事

一帖佐之人数も十人程富隈の人数ニ申合候、能々御用心候へと小伝次より申越候由被申候事、

一鹿見島・帖佐より富隈江可有御働候間、源次郎人数可致馳走通被仰付候由、源次郎内山伏富隈ニ而申候由、伊地知九助被申たると承候由、源次郎被申候間、為申開富隈江參候由被申候得共、富隈ニ而は兎角不申被召候事、

一富隈より方々をからくり有候上は帖佐より御からくり被成候而可有御覽之由被申候事、

一龍伯様より於他国も御からくり有之由候事、

一他国より計策之書状致懇望置右馬頭殿相屈候、則依御披露逆心之重辱致頭然候事、

一鹿見島於諏訪之神前被成誓紙、龍伯様を可有御背と之御談定之由深々と被申上、於帖佐は龍伯様以御分別惟新様御生害之由節々被申上候事、

一富隈へ惟新様御越之前日、今度御中之儀は皆以可為御偽候、龍伯様不成御同心様ニと小伝次申上候事、

一先非を改、別而御奉公可申上候由申上付、少将様より御感状被下候処、龍伯様江致持參、別事ニ申成候事、

一靈社之起請敷通上置不致其首尾候事、

一南郷覚左衛門を以帖佐・富隈と之間ニ表裏之事、

一伊勢兵部少輔譽付取候而可致持參候由、龍伯様江申上、格別之墨付致持參候事、

右之条書を伊集院源次郎・同弟小伝次兄弟共関ヶ原弓箭之刻より野心を企有之、御而殿様江計策之儀申上候、其節日皆々相違ニより三年目ニ兄弟四人母共御成敗候、当時阿多一所被下居候處、此惡心故源次郎口州於野尻御成敗、二男小伝次は富隈、三男二郎四郎、四男千次は於谷山御成敗、母は阿多ニ而皆々同日、慶長七年八月十七日之事也、

右之通相見得、且又源次郎・加藤清正江速謀仕居候次第は亦鹿見島被守兼長自記ニ相見得候、如左、

一慶長四年己亥伊集院源次郎殿就謀叛明年之藩城迄庄内江相詰奉公之事、

一慶長五年庚子美濃國関ヶ原江御出陣御供申、閏九月十五日合戦、忽破ちり、某中国を陸地ニ備前因江渡候得は彼表ニは薩摩人之由候而黒田甲斐守殿・肥前龍造寺・立花左近將監殿・加藤主計頭殿、其外諸軍勢出立ニ打交り肥後八代川口村庄屋所江加藤宿禰、軍衆一日逗留候事、

一彼之庄屋先牛御弓箭之刻、某知人之故ひそかに忍び寄致内通、諸大名衆差集り薩摩方軍之評儀有口伝、相談念を入承届、又庄屋所江前川上三河入道殿御宿被成候付、眩枕老へ彼庄屋より御伝言之条々之事、

一伊集院源次郎殿より薩摩方こまか成絵図并所々地頭衆を書立、彼地江被差遣候事、

一からくりハ何時も船手方より入候する間、諸廻船へ御用心之事、

一伊源次郎殿肥後表からくり而度之使衆家名は口伝ニ有之候事、

一川田村とやなき湊より乗、兩度小舟を仕立、使薩摩方江被送届候事、

一川上左京様墓所連々之掃地等鹿屋三右衛門殿見及御存知之儀候事、

一十一月十日ニは片北表江打出、諸軍勢之物頭相しるし置候里数等迄見及、其夜細木浦より山ニ入、前後忘月星を宛ニ心得急キ出水表御番大將紹益様・御地頭本田六右衛門尉殿へ右之条々申入、御道具衆此人も送馬被相出、帖佐江急キ惟新様江彼地之様子細々申上候事、

一伊勢平左衛門殿為御使敵陣之催等態と山くくり被遣候而も是程迄は有間敷候、今度為御家忠節御大慶之御意ニ而後日御褒美可被加之由被仰付候事、

一龍伯様・少将様江早々可申上上候意、則富隈江新納四郎左衛門殿同心を以鎌田山雲守殿・平田太郎左衛門尉殿江申上候処、御而殿様御前、被召出、彼地之様詳具ニ申上忝御礼御使猿渡新介殿ニ而被仰付候事、

此外前後之ケ条略、于時兼長初名三右衛門と申時之事ニ而八代川田村庄屋より川上脰枕江伝言之ケ条ニも三右衛門と有之、源次郎肥後之加藤氏ニ致連謀居、御國中絵図等遺置、船手より討入給候様相頼置、左

候而内々龍伯様・惟新様杯御兄弟御問江右ケ条之反問申上、何卒して内乱起立候節加藤氏杯江内必仕、内外より討勝候半と之計策及露頭候者、右之鹿屋三右衛門関ヶ原掃陣ニ右之庄屋より承付、早々山道忍

帰、右之通為申上比より龍伯様・惟新様杯細々被問召通候事ニ可有御

座、然其關東方と御和談之御往反最中ニ而爾三年は何分共未相片付、御國中御危難之御候故、隱便被差置候半、然者前件通之浮説益申散、既ニ可及内乱砌、亦候相願れ御一和被為成而左之通候歟、

起請文前書之事

今度龍伯様、又四郎殿を少將殿ニ被思召替、京都御朱印御申下候而乍承付不致言上、構疑心申之由被問召通之旨被仰知察存候、就夫拙者事は毛頭不承付候由重畳申上候処、無異儀被問召分、此上は無御別条謂其条々被仰聞誠安堵仕候、於自今以後如何様之讒人有之而如右雖申妨、不殘疑心御察談之上を以御家御長久之調儀可仕外不可存疎略候、若此旨於偽申上は

起請文前書之事

一今度之謂事、拙者毛頭不存寄通申上候処、不殘所被問召分安堵仕候事、
一於自今以後如何様之讒人在之而雖申妨、無腹藏申上、互ニ無御疑心御察談之上を以當家長久之調儀所希候事、

一從京都御慶之儀被仰下候問當家之御為を存御慶可然由申候キ、曾構私曲非申儀候事、

右之旨於令違背は

御神名如常、

慶長七年

八月十日

進上 龍伯尊老様

惟新

右通候而、琴月様弥御上洛ニ被相究、野尻迄御山立被遊、源次郎ニも御供被仰付、同月十七日狩立ニ被差立、前以穆佐地頭川田大膳亮園境・須木地頭利尾松柄重候等へ極内密被仰付置趣有之、穆佐士押川治右衛門・淵脇平馬杯於狩場輕矢之筋ニ而射殺之、其外弟母杯も段々御手筈ニ而同日谷山・阿多等ニ而皆共被討滅候上、御上洛被遊、其年十二月廿八日於伏見権現様江御日見被相濟、弥御和睦之御成就為有之由、然処其後ニも又四郎御養子一件亦候崩立候哉、如左、

一同十五戌五月十六日琴月様初而中山王被召列候而參勤として御莞瀟有

之、反簡計ニも無之候歟、因分御家老平田太郎左衛門増宗事も如何様右之心底哉ニ松輪様被問召上越も有之候哉、押川強兵衛公近ニ極内密被仰付訊有之、同六月十九日於入米上追門桐野九郎左衛門と兩人ニ而増宗通掛候を待受為致城殺趣、押川公近一代記又は盛香集ニ見得候、

一平田太郎左衛門増宗叛逆之根元は偏執より事起れり、其故は幸侃亡ひて後は増宗威勢強して御仕置をも我意に任する事多し、凶書頭御家老職と成、増宗か上ニ居し、自然ニ威勢をおさへらるる、於是増宗思ひけるハ我が家は數代家老職をも勤来れり、今凶書我上ニ居て威勢を奪ひ心のままに凶政をなす事こそ遺恨の次第也、所詮黃門君を奉毒殺ならば、龍伯公御孫なれば相模守護職と成給ふへし、此人ニ忠節せは於凶政者我が儘なるへしと思ふ惡念を起し、又垂水迄を領し給ひても不足なりと竊にすすめしゆへ、佐土原へ移給ハすと、其否は不知、その時風説為有之由、加藤之訊有ゆへ増宗か惡事露顯の後も御隱密ニ而世間ニしれず、慶長十五年黃門様御上洛之節、惟新様御蔵入川内高城ニ有之、為御取持御代官押川強兵衛差越居候を久見崎御飯屋へ被為召、上持平右衛門御取次を以平田太郎左衛門重科ニ付可被相禿思召有之、三ヶ年以前鳴津下総を以入米院衆中桐野九郎右衛門江被仰付候へ共今以討不得候、御留守ニ被召出候儀御念過被思召候間、山賊姿ニ而打果可申由被仰渡、則御請申上候、太郎左衛門事、就御上洛為御馳走人久見崎江相詰候故、其晩旅宿江忍入候得共種子島左近將監咄ニ被參既歸故不遂本意、黃門様翌口御出船ニ而太郎左衛門は地頭所入米之様差越候、強兵衛も加治木江罷歸、齋藤某と申者を入米江置置、太郎左衛門動静ニ氣を付居候処ニ、入来より私領郡山江參候を承付走歸告候付、早速加治木打立候、然共惟新様御代每年六月十九日於御城諸士江御振舞被下候、強兵衛儀御代官ニ而難迎取次を以私姉菱刈表江罷在候、三日前座仕大切相煩候由申来候間御暇被下度且又恐多奉存候得共御茶を頂戴仕度旨申上候得は、上ニも御察候而御暇被下、御茶をも可被下候間御前ニ可罷出旨被仰波罷出候得は大切之科入ニ而候、若討候ハ、一節肥後表江可致欠落候、其内妻子女等は御台所江可被召置候旨御意ニ而候、強兵衛より申上候は他國之儀は不罷成候、自然打損候ハ、大口辺江うらたへ可罷居候、召捕八付被拔候様ニ申上置

差越候、且又入來衆中桐野九郎右衛門、地頭増宗ニ仕違、其比蘭半田へ致中宿罷居候を案内ニ召列、郡山と入來之境土瀬戸越ニ鹿垣を切待かけ候処、同年六月十九日増宗上下七八人を罷通らせやり過し、兩入一同ニ鉄炮放かけ、太郎左衛門江当り、太郎左衛門刀を半分計抜かけまろひ候を見届立退候、扱増宗誅せられし事いまた宿元江不知内討手而妻子残らず打殺ける、下部の逃て近所川上因幡守屋敷へ為參を見たりといふ老人の咄ニ而聞之、増宗ケ屋敷上戸柱辺なりとを、右通見得たり、季安按ニ宿元江討手向られ妻子残らず討殺けると云より下の文八同十七年子四月廿六日増宗弟越前守宗親宅江児玉筑後守利昌杯上意討ニ為被遣時之事を附会いたし候半、増宗討せらる比迄八回分様も御存命極密之事候哉、黄門様御中途ニも相聞得如左被仰進候

追而中人候、半田太郎左衛門不慮之儀ニ而相果候由風説候、於必定は為何者之仕候哉、糺付度事候、御才覚尤候、様子委不知候間重而念比ニ可被仰付候、誠惶敬口、

七月七日

陸奥守

家久判

進上 惟新様

左候而八月六日駿河御着、同八日御登城、凡日數十五日程御滞府、其間ニ琴月様御内々ニ而被仰上候は私妻四拾歳 御恩徳記ニは其時分公御事如 罷成、是迄世統之天子出生不仕候間、午恐御ニ孫御國様を継日ニ申請度奉存由御申候處、権現様御誼ニも琴月様御事未御年も御若御座候條、御息様定而御出来可被成候御領掌無御座候、若又万一も御跡目御事欠候ハ、御一類中成共何分ニも御事欠有之間敷趣を以本多佐渡守正信殿より委被申伝、乍其上同十九日御暇之時分敷、権現様御直ニも被仰談置趣共被為在候而翌廿日如江戸御立被懸候、筋被考合申事候、尤前文委申達との詞は正信之書中ニ有之、愚按仕候處其委訊は外之事ニも有御座間敷、其節琴月様御年三拾五真盛之御齡ニ被為入候間、必召仕之女共御側ニ折角被召置度左候ハ御子様方之事共ハ誠ニ不謂御機遣との趣御直ニ御承知為被遊儀別条有之間敷、諸脈参考被仕事ニ御座候、夫故左条之通成立候半、

同十六亥正月廿一日貫明様於園分御逝去之節、持明様御事は御忌諱として園分江御參越被遊候處、其後御忌明候得共御迎不參候付、別而御腹立為被成趣園分集ニ相見得、此説共決而可為正説と奉存候、子細は前件ニも書述為通琴月様ニも此御年三拾六、別而御壯盛ニ被為居候得共、持明様御事は其御時最早四拾七ニ被為成、御子様杯可被為持御年も大形被為打過、其上世上ニ又四郎殿又は其御忌弱けさ殿を御養子ニ取持向之御家老衆も園分方ニは相殘居候哉ニ風聞等も有之、松齡様琴月様杯尊慮之程今更奉恐察候處、いまた其比御養子成可被遊思召こと毛頭不被為在候半、然共持明様御事は、貫明様不極之御養子様ニ御座候得は右御齡被為越迄候間、御側室等被為置候儀貫明様江被対上何分ニも御不孝之御心入ニ成立事故、深御慎被為居、一切御内妾等不被召置、御時宜合差知候事ニ御座候得共、松齡様御書中ニも被為書候様至此迄子孫無之候間、大かけ道と存候處、思之儘之男子誕生奇特其中々難述言語と御書為被遊御情合ニ而御誕生無御座以前之御心遣奉恐察候處、持明様四拾七被為成御子孫御出来不被遊思、御家督様三拾六御壯盛遙々之御方江右様風聞之通早々數又四郎殿父子杯を御養子との取持仕人有之事故、誠存外至極ニ可被思召、御人情不及中成行御座候得は、何れ將軍家御制をも御承知無御座内は御側女中被召置、向々御内談共持明様御方江可被仰進御都合ニ無御座、夫迎表向將軍家杯江御内妾被召置度旨御願可被遊事も亦人情可被耻御事ニ而幸於駿府へ御參勤之序因松齡様御養子實ニ被為相託、松齡様兼々御内実之御心配を貞昌より得与本多正信迄申移置候而弥御工面之通御側女中をも可被召仕向ニ御内命を被為蒙候事ニ為成立ニは無御座哉、夫故右之上意を松齡様奉初古老之面々被為承知、誠ニ無此上も目出度御沙汰と何も奉慮之、自其御家老衆ニ得与御密談之上、右次第持明様御事は一往園分江御滞留之筋ニ被申上、左候而琴月様御側江は女房衆余多可被召仕ニ御議定ニ而島津備前守忠清女・鎌田播磨守政重女・相良日向守長時入道洞桐女杯右御忌明之比よりニ哉、迫々為被召仕筋ニ可有御座、然は旧公集江持明様別而御腹立と書記候をも只御迎不被進計ニ而も有御座間敷、專右之御側女中為被召仕事を被及聞召而之事ニ可有御座、夫より持明様御事は園分御上様と申上、終ニ園分江御體居為被遊与相見得、是

ハ決而深御實慮被為在而之御取捌哉ニ被考合申事御座候、

一伊地知周防介重康病中書置ニ云、親勝左衛門手琉球都島ニ平打被仰付、慶長十五年罷渡申候、龍伯様同十六年之正月廿一日御死去被遊候、同十五日之晚ニ奥江拙者被召寄承候は、勝左衛門事御かミ様江被進候間御奉公可申之由掃朝申候て我等前より可申聞遣之由直ニ被仰聞候、同六月ニ國分江御服ニ御夫婦様御出被成、直ニ御上様御離別被遊、國分ニ御勅忍被成候、八月八日勝左衛門琉球より鹿兒島ニ罷等候、我等承付候而追付龍越、龍伯様被仰置候様子勝左衛門江申聞せ候、其後中納言様よりも承候は少左衛門事ハ御上様より被進候間無別儀御奉公可申由御意ニ而候、拙者事は若候間鹿兒嶋江可被召仕之由被仰聞せ候、如其罷移候而御奉公申上候、其後勝左衛門事、薩州様御養子御使被仰付、紹嘉老兩人同前ニ其首尾申候事云々、

一同十七年子二月比ニは右御側之内、權現様御内命之通果而録田氏御懷給候御様被相催候処、國分方御家老平田越前守宗親如何様此上ニも猶内存ニ取企候事も有之候哉、國分御上様御姉御島津守右衛門尉彰久之御子、前文又四郎忠仍殿御事は御上様御甥ニ而候故、其御子息菊製殿を龍伯様御一筋と申立、御養子被遊善哉ニ段々世上風聞仕候事有之、畢竟此事増宗弟之右越前守か取企にも候歟、兎玉越後守利昌・三島本覚坊江被仰付、同年四月廿六日右之平田宅江押入、一族都而拾八人誅戮為仕由、乍其上も猶風聞不相消候哉、同年六月比志島紀伊守同貞を以又四郎殿方へ直ニ成行發仰札、同十六日左之通書表迄為被差上筋ニ相見得申候、

起請文前書之事

- 一國分御上様江我々親子進退候儀ニ而御内談申上儀無御座候、勿論從國分茂被仰候儀無之事、
- 一菊製殿事、國分御上様御養子ニ被成由風聞仕候哉、努々不存寄儀候之条國分又何方へも不致御内談候、於自今以後も此等之企申聞敷候事、
- 一何篇奥州様御為ニ可惡儀を存念問鋪候、自然世上於取沙汰も承付候儀は早々可申上候事、
- 右之旨若於偽申者

慶長十七年壬子六月十六日

又四郎

忠仍(花押)

比志島紀伊守殿

きくけき

右之通血判迄御取付候上、同年七月伊勢貞昌を為御使御当地被差立、駿河江戸江被遣、權現様并台徳院様へ被仰上候は、數度之御厚恩ニ而御取立為被下儀何分ニも忘却難仕候間、何卒も奉謝度、然者及四拾歳按ニ此時公ハ三十七、世繼之実子出生不仕、恐多奉存候得共、御国様持明様ニハ四十二被成候、十五年八月中山王被召、列駿河御滞府之時也、於駿河御内証申置候、右之御返事致承知度使者差上候間、御前御仕合を以御披露頼入由之御口上并御狀ニ而同八月駿府江上差、本多佐渡守正信殿江相付成行被申達候處、去比当府ニ而御暇乞之節、將軍様御直ニ被仰談置候通今以御前ニは御失念不被遊、そなた様御事弥御年もまた御若候間、御側女中等被召仕無御油断御様候て御息様決而可有御出生、乍然当十月江戸江御鷹野之箭候間御一所ニ奉伺候半と之御達ニ而御返翰同八日被相渡、自其貞昌如江戸參越、本多上野介正純殿江も被申上候處、同断之向候而同十七日御返翰被相渡下固有之候由、此事乍恐今更愚按仕候處、表面は右様御養子御内願之御返事為承知、貞昌為被遣様御座候得共、内裏之御趣意は去比駿河御參府之御、權現様御慈命之通、惟新様ニ不及申上、國中古老之臣ニ至り是程難有上意は外ニ有御座間敷と皆以至極奉感悦、則より段々内談之上、本御前様は國分龍伯様御跡江御隱居ニ而御側江は年比相成之御内証段々被召仕筋ニ被取計候處、果而最早懷胎いたし五ツ月計相成候女中も有之様ニ成立、誠に御厚恩之上意故、如斯都合ニ為相成趣も極内証より御礼ことく貞昌より正信迄口狀ニ而為被申上置事共ニは無御座哉、左候而貞昌下固有之、無幾程同年冬十二月九日鎌田氏御産有之、御男子様御出生被遊、松齡様御機嫌不斜、直ニ御名をも兵庫頭様と被為付進候筋被相考申事御座候、左候而親夏右成行之御届ことく又候充之通為被仰遣候歟、

一同十八丑五六月比ニも候哉、伊集院伴右衛門久元御使者ニ而亦々御養子
願之御返事聞として被差養候事有之、是又愚按仕候処、先年於駿河權現
様難有御懸命之通其以後御内妾共被召仕御都合ニ成立、去冬果御男子様
迄最早御出生有之、偏ニ御懇命故、御國中内乱之事も無御座、松輪様初
上、故老之者共至極難有奉存候、情合も内分如御礼正信迄久元口述を以
相咄置、表向は矢張去比之御返事被為開向之御使ニ候半、夫故佐渡守殿
御返書ニも第一御息様御誕生之御祝儀被申上、去比駿河御暇乞之時分御
直ニ被仰談候通を以御失念不被遊、去年伊勢兵部殿被登候節も其通申達
置
去年之場ニ 定而言上為被仕管候、此度伊集院殿ニ而被仰越趣も又々申
書置也
上候処、不謂御機遣と一段御機嫌能御息様御一人ニ而は猶御徒然ニ可有
御座候間、無御油断御稼被成、御兄弟如何程も御出来候様ニとの御説ニ
而同年七月左之通御返翰被相渡候半、

御息様御誕生之儀公私之大慶不過是候、去年伊勢兵部殿御越之刻も御
養子之儀被仰下候間其通申上候処、去時分当地へ御下向之節、困様
を貴公様御跡目ニ被仰請度由御申候へ共、未そなな様も御若御座候
条御息様定而御出来可被成候間、御領掌無御座候キ、其上ニも差而被
仰候処、御跡目なと御事欠候て御一類中成何篇ニもそなな様御事望
之様ニ被成間敷候由御内々ニ而候間其段委申達候つる、其上ニも如何
と貴公様被思召候へ、御暇乞之時分御直ニ被仰談候キ、將軍今以御失
念不被成候、其通去年伊勢兵部殿江申達候、定而言上可被成候、今度
は伊集院殿被仰下候間、亦々申上候処、不謂御機遣共之由御説被成、
如何ニも御機嫌一段之御仕合共ニ御座候、御一人ニては御徒然ニ可有
御座候間、無御油断御稼被成、御兄弟衆如何程も御出来候様肝要之御
事候、併御身命御草臥不被成様ニ御心持御養生專一ニ候、此一言之儀
は惟新様江不相聞様ニ御隠密可被成候、恐惶謹言、

七月晦日

本多佐渡守

正信

羽柴陸奥守様

右御状年号も無之愚按仕候処、慶長十八丑七月晦日ニ有相違間敷、御子
息様御誕生らしく同十七年子十二月九日御誕生、兵庫頭様御事ニ相当可
申、左候而去年伊勢兵部殿御越候刻と御座候は右之兵庫頭様御懐録田氏
御妊身五ヶ月計被為成時分、因分御上様御養子ニは御甥又四郎殿御息を
被遊差哉ニ風説等有之、御直札迄も御手を被為付候而弥虚説之証拠ニ又
四郎殿より父子血判迄前文之通被為付候上、同年七月被差立候、貞昌殿
府へ為被參時之事ニ相当可申候、且又去比当地江御下向之節云々御座候
は、同十五戌八月六日琴月様前件之通中山王被召列駿府ニ御上着、八口
・十六日・十八日及三度御登城有之、其間之御事ニ可有御座、扱亦御暇
乞之時分御直ニ被仰談と御座候は同十九日御暇給之時ニも可有御座歟、
果而其通ニ茂御座候ハ、琴月様其時御年三拾五歳、御夫人持明様四拾歳
被為成時之御事ニ而本より又四郎殿御養子一件之内乱等は其以前より有
之、旁権現様御所ニ而も不被為掛候へは抑賈明様御養子ニ而三ヶ回御
讓請何篇御孝義可被為趣は御神文迄被差上置候得は、松輪様御下知迎も
持明様被差置、御自由ニ御内妾等可被進御時宜無御座、彼是御心配為被
遊御情合之程は左之通御書中ニ被奉察事ニ御座候、
一 御家代々と乍申、貴所家督之様譽有之事と寔ニ久敷家は皆々滅却之時節
繁栄候事は二三代之有道、殊ニは神慮先祖之御守護故候間、弥被重天
道、可被祈家之長久機專候事、
一 至此比迄子孫無之候間、大かけ道と存候処、恩之儘之男子誕生、奇特共
中々難述言語候、因茲平生之恩慮肝要存候、其故は一天下之國衆毎度之
御普請を被相勤、又は年々駿府江江上、其苦勞不可勝計候処、当家
は被領教ケ回、君度も御普請不被仰付、又切々出仕も無之、諸人之うら
やみ不淺事たるべく候、如此大果報に被担任、心遣無之候はずは天慶と
申ならし候間備と可被及氣遣可有之候、恐々、

九月八日

海新 御判

陸奥守殿

參

右様大缺通と被思召御心配之初は決而彼是と御慮之上、御子孫様御出

米被遊向々御内談等貞昌・國貞杯古老之忠臣と何角為被是御吟味事は有別儀間敷、左候而御親として内実之御人情は其比琴月様三拾五歳別而御壯盛之御生得ニ候間、年輩相応之御内証様ニ而も御白立御側江被為添置候ハ、必御子様方は如何程も可有御出生と御存付は山々乍被為在、國分方之御時宜何共難被遊御時節ニ候間、表向は御國様御賞請之筋ニ詞を被為託、深き御賢慮を以御願出被遊、内実之場合は貞昌杯より都合能佐渡守殿迄被申移候筋ニ御内々被為承知候上、右通之御取計ニ為成立ニは無御座哉、勿論其時代將軍家之儀も愚按仕候処、台徳院様若君竹千代様大猷 僅御七歳之時ニ相当、其頃外ニ御男子様迎は右之國若様ならて八末被成御座制ニ而御兄弟之内誰様歟、往末御盛長可被遊も難被究知、誠ニ天下之重キ御跡目さへ右通至極無他事御孫様ニ被成御座候、其上此御方様御事関ケ原乱後御和睦も別而六ヶ敷、三四年やうく被為相調、いまた昨今共可被思召程之外様御大名ニ而殊ニ其時分迄は大坂方も秀頼公被成御座、此御方御兄弟杯之内より江戶江は未御買人様迎も不被差出、何方ニ歟無ニ之御味方可被遊程合も流石権現様ニ而も弥之処は御見究不被遊御ニ御座候半、左様之折柄右次第天下ニ無他事御愛子様を敵地同前之遠国江たとへ何程真実ニ御實掛被遊候共却而此御方へ人質ニ被為取付置候内密之計算歟茂難相知跡之御願筋ニ御座候得は万ニ一も御許容可有之御時節ニ無之儀は明白差立居候事を右様御掛幾度も被仰願候事今更愚按仕候処、決而此御方様江御内輸ニ而難被成事有之、段々御吟味之上深キ御計略被為在と之富言ニ御座候半、尤右之通表向御願出被遊候は此御方様無ニ之御心底も被為顯、第一御親厚之基ニ相成、且は又四郎殿方江御朱印被申下など甲触候虚実之程も可相分、何分ニも権現様ニは御仁智被為越候御方ニ候間、必御疑ヒ此御方内証之情実を細々御問合可被遊事は可為案中、其節右次第内々無御疑合被為在是迄堅御慎候而御内装等不被召置、夫故乍御壯年いまた御子孫迎は御一人も御持不被遊、是年誠大かけ道ニ而何其氣之毒千万、就中惟新様此儀ニ付而は日夜別而御心痛被遊候実意之成行を程能向ニ貞昌より正信迄可被申移、左候ハ、決而内妾をも可被召置向ニ難有上意も可被仰出、然上は持明様御納得も可被宜と

之御手筈ニ而如右御願書如斯官御都合ニ成立為申事ニは無御座哉、佐渡守殿文藝得と致玩味其比前後彼是之事考合此向之御趣意ニ而御願為被遊事哉と及愚按申事候、然處是迄先輩只右之一通文面計ニ而被及批判候故歟、貞昌杯取計、至極不忠ニ可被成子細も不被考付、甚存外之御使為被勤様遊臣同前之評判ニ被違候との物咄乍承及秋水先生之確論未及一見候得は如何様子細有之儀ニも可有御座、乍然若佐渡守殿七月晦日返翰を先史被書撰候御恩徳記ニは元和二辰六月二日寛陽院様御誕生之御祝儀為被中上御状之様被書置、此事可有如何哉、其年四月十七日権現様薨御、同六月七日佐渡守正信も卒去と承候へは二日之御誕生同七日遠方ニ而可被聞道法も合不中、況七月晦日之事は猶更不相知、旁不審ニ奉存、粗及愚按候成行如此書述置申候、

- 一慶長十八年島津氏御平産ニ而御姫様御誕生、
- 一同十九寅二月三日鎌田氏御産、北郷山城久殿江御嫁候御姫様也、
- 一同年八月五日相良氏御産、是ハ島津彈正殿江御嫁候御姫様也、
- 一同月廿八日鎌田氏御腹之兵庫頭様御天亡、御歳三ツ、
- 一元和元卯三月十五日島津氏御腹之御姫様御天亡、御三ツ、
- 一同年四月廿日鎌田氏御産、種子島左近忠時殿江御嫁候御姫様也、
- 一同二辰六月二日島津氏御産、則寛陽院様也、同十一月七日鎌田氏御産、是兵庫忠殿ニ而此御兄弟之事左之道旧記御座候、

旧伝集

一寛陽院様御誕生は御舍弟兵庫頭忠期より少早被成御座候得共御屋形江相知申候は忠期より少遅有之候由、然共寛陽院様御嫡ニ而候、六歳之御年迄其儘ニ而被成御座候処、忠朗之母中納言様と御中能被成御座候付、何となく世上兵庫様多分御世継ニ而御座候半と取沙汰区々ニ而候、然二国分ニ而龍伯様御死去被遊候付、國分之御上様國分江御恩請ニ御越被成、御恩明候得共御迎不參候付別而御腹立被成、中納言様・寛陽院様御同道ニ而國分江御越可被成旨被仰遣、中納言様と浜之市迄被成御座候、寛陽院様は國分へ御越被遊候、然ニ御上様より其方は三ヶ国之継ニ而候とて

彼方へ御宝物有之候を被進、御供之衆江も色々引手物被下候而御掃被成候、夫より浜之市ニ而も中納言様と御列立鹿兒島江御掃被遊候、寛陽院様御世継別条無之間人々為申由云々、

右之内愚按、六歳之御年迄を其儘ニ而被成御座と云事は元和二辰年之御生ニ而考候へは、元和七酉年迄は若殿様ニ不被為究と之事ニ可有御座候、一説元和八年持明様御養子ニ被為成候と申説も有之、御恩徳記ニ而考合候得は、国分様御養子ニ被為成候は寛永元年子八月之事ニ可有御座、前文旧伝集之説は只御世継様江被為定候時之事ニ而元和八年一先国分へ御越、右次第之事も為有之ニは無之哉、御一事を兩説ニ申伝候哉、若殿様ニ被為定と国分様御養子ニ被為成と兩事之筋には無之哉、追而博古之衆江可尋事、

一追考、持明様より寛陽公を御養子ニ被遊候事ハ喜入大炊介久正入道紹嘉と伊地知勝左衛門重房兩人ニ而御使為任事、前件重兵衛子周防介重康書置ニ有之、明白之事ニ御座候、

御恩徳記

一慶長十七年壬子之秋伊勢貞昌を以権現様・台徳院様江家久様被仰上候は、数度之御厚恩ニ而御取立之儀忘却不仕候、右之御憐察難拜謝ニ付申上候、四拾歳世継之実子出生不仕候、恐多奉存候得共御恩様を跡目ニ申請度と之儀先年駿河ニ而御内証申上置、早々御返事承度奉存候、御前御仕合を以御披露頼入申之御口上并御状ニ而木多佐波守殿・同姓上野介殿江被仰候処、於駿河正信御返事ニ前々御直ニ被仰問候趣亦其旨不相替得其意申候、来ル十月大御所様為御鷹野江戸江御下向候間、御一所ニ而可奉得御意と之義同八月八日ニ被仰渡、御状之御報被下、追付江戸江貞昌罷下、右家久様御口上同前ニ正純江申上候処、不替御返詞ニ而御返事は八月十七日ニ貞昌江給候、尤達台聴御父子様御返事迄ニ進遣ニ候間、先々可罷上由正純・正信御同前ニ被仰候故、貞昌隨其義江戸罷立薩摩江下着候而右御口達并御返書差上候、左候而以後亦々右之儀伊集院半右衛門を以被仰上候、権現様・台徳院様御返事ニ不謂機遣被仕候、年若候間子共出来候様召仕候女共側江召置肝要之由最早貞昌ニ而被仰下候、此度半右衛門ニ而も不替御口上ニ而候、ケ様成難有儀有御座間敷と而古老之者共

奉感、就中義弘様此上意被問召女房余多可被召仕ニ相定、就此上意義弘様鹿兒島家老衆江御内談ニ而御簾中隅州国分江御隠居也、寛永元年光久様御九歳之時江戸江御下向国分江御越御隠居之御簾中江御参会御子之御契約也、

無程御子御平産候、雖然不幾日夭亡也、元和二年内辰六月二日、光久様御誕生、為御祝儀佐渡守殿七月晦日之御状被進候、前々之首尾迄細々相見得候、誠ニ権現様・台徳院様御賢慮御失念有間致御事候、

此所へ佐渡守殿状写載御座候へ其前件慶長十八年丑年之場江載置候間爰ニ略也、尤佐渡守正信は元和二年六月卒去ニ而七月ニは死後ニ相当不台前ニも并置通也、扱此事御恩徳記ニは先史為被載置分ニ而候、真実国松様御賞之御趣意ニ無之事ハ明白差知居申事候、子細は真実国松様を御養子ニ可被遊御懇望ニ而御願為被遊事候ハ、亦不相濟方ニ被仰渡候御皆様別而御力落ニ而御嘆息こそ可被遊候処、いまた御若年ニ而御子共出来候様召仕之女共被召置肝要と之上意を御承知候而却而皆悦候、ケ様成難有儀は有之問敷注家老共奉感、就中惟新様此上意ニ而家老衆江御内談ニ而御簾中は国分江御隠居させ上られ、御側江は女房衆余多可被召仕ニ相定と申事ニ而御国様御養子は被願出候御真実之本意第国分様御隠居之事を表面ニ難被仰上故ニ深御計略之御取計明白ニ相知居申事候処、秋水先生此外何様之悪意被見出深く貞昌を被吃候哉、不審之至御座候、我等式浅隨より見申候而は無ニ之忠臣と被相考、乍恐も如此書置也、且前文之下注ニ寛永元年、光久様国分江御参会と御座候は左之通御書有、亦其時之御書ニ候は八月ニ御参会候半、追而可相考候、

一書申遣候、然者虎寿丸之儀為国分之御子、当家於相統者龍伯様御一筋弥無別儀候間於御納得は大慶ニ存候処、別而被成満足之由候条如右著着候、因茲来月吉日次第虎寿丸国分江相越祝儀可有之ニ相究候、連々我等内存候つれ共国分之儀相慮候御同懐ニ而祝着不過之候、猶竝入横津守・伊勢兵部少輔可申遣候、謹言、

七月十二日

家久(花押)

鳥津久元

下野守殿

右御文言ニも龍伯様御一筋亦無別条と被為書候事乍恐愚按仕候処、慶長七寅八月比又四郎殿を御養子哉ニ世上取沙汰為仕時分より国分御付之衆よりは右様龍伯様御一筋と申詞は為申触説ニ茂候半歟、抑又四郎殿御祖父右馬頭久殿より些御留意ニも被為見及候哉、天正十七丑正月松齡様より新納武州江為被下御書中共考候へハ其比又一郎様初上武州二男新納左

京亮 弥太右二門 杯人質として在洛ニ付、松齡様種々雖被為申尽候御暇不相濟、右馬頭殿ニは石田治部少家老安宅三郎兵衛尉馳走迎御暇相濟下向之事、松齡様一円御得心不被遊、然共直ニ御朱印頂戴之仁候間迎も被為任公義との趣相見得、又幸侃惡逆別而相寡、難被為及御手刻、貫明様・松齡様御密談等被遊ニも能々御心安被仰聞人之外は御油斷難被成、御一家之内ニ而も右馬頭殿ニは余程近方ニ被仰知候事伊勢貞昌披露状ニ相見得、又於国分龍伯様御系圖統之節、右馬頭殿於御前自家之印乙を為被申事旧記ニも相見得候出、且又慶長八年佐土原江被移候ニも嫡孫右之又四郎殿

は御家ニ被殘置、二男堯彦房 右馬頭 時年五歳成人を被召列候心底其比世評之通少將様ニ被思召替候而又四郎殿ニ京都より御朱印御申下之善ニ候哉ニ為申触も何ぞ無御不審事ニは有之問敷、然共慶長十五戌四月九日於伏見右馬頭殿病死、五月十六日琴月様中山王被召列御国御立、駿河江御參勤ニ而四松様御實之事被仰上候を、右御朱印御申下と之実否御札之計略敷難相知事候、其御留守ニは六月十九日押川公近、平田増宗を賊殺いたし旁内混被想像事ニ御座候、左候而又四郎殿事は相模守久信と改名ニ而寛永七年四月大猷院様・台徳院様松田御屋敷江御成之節は江戸江被為請取御日見揮領物も為被仰付事共御成之記ニも相見得候処、其時分伊勢右京亮貞則も御納戸役ニ而相請取、御成ニは拜領物奉行等相勤、貞昌様智ニ候処、相模守殿事幼年より世評も為有之人ニ而被聞召上候事も御座候哉、左之通書詞被仰付候、

天雲電社起請文前書之事

一事新敷様なる雖申上事候、奉対家久様・光久様連々毛頭別心を不奉存候、亦以守其旨縦親子兄弟縁者之類たり共御面殿様ニ別心有之輩ニ曾以申談問敷事、

一御成之時分相州宿所江毎夜出入申たる由被聞召入候由被仰出候、我等宿近所候付両度見廻為申かと存候、一度之儀は覺覚申候、今一度之儀はしかと覺不申候、此外豈而參不申候、巨細者為參由中人御座候、是非共御糺明所仰候、誠御年来之儀候故被聞召入候儀被仰候事奉奉存候、此上者連もの儀ニ御糺明所希候事、相州江見廻申候とて何にても入魂かましき儀互不申合候事、

右条々雖為一事偽お申上者 如此自筆ニ可被為書候、

右之通右京子孫当伊勢伝三左衛門家藏貞昌と申事候、光久様と有之候得は寛永八未四月朔日御元服以後之事歟、外ニ如左野村氏手紙存之同時之物候半、

伊勢右京様

野村大学助

御報

元綱

猶々從是無音ニ罷過候処御音信御礼難申尽候、御伏辱候、仍貴老御申分共御座候、新納右衛門佐殿可被達上聞申候付、拙子相添可申候段御老中より被仰付候、右衛門佐殿同前ニ可然之様ニ可申上候、御心遣在之問敷候、將又雖一送給候思召寄之儀別而添存候、尚期面上之時入候、恐惶謹言、

十二月十二日

元綱判

猶々此程御前仕合無御座候而上聞連々仕候、聊我々非疎略候、以上御伏辱候、此間御申分之儀昨日新納右衛門佐殿被達上聞候、御心静ニ被聞召上候、御返事之様子は御而老迄申入候、定今日も可被仰出候ハハ哉、我々聞可申達之由候は右衛門佐殿同前ニ可令申候、尚期面上入候、恐惶謹言、

十二月廿一日

元綱

伊勢右京様

野村大学助

御報

右按ニ寛永八未十二月之事ニは無之哉、同年十一月廿五日相模守殿宅江西侯億右衛門踏入却而何歟彼方へ注進いたし御仕置為被仰付事新城様御状ニ如左見得候、其比之事候半、

伊兵部少輔殿

おはより

一相模守江先年寺領可仕由山田民部少輔殿を以被仰付候間、川越三右衛門殿ニ而福昌寺を被頼存候処、其後長谷場兵右衛門殿御使ニ而被仰聞候は先々被成御指置候間、寺領は入問敷由被承候、又其後ニ而候哉、家久様より御神名を為被遊入御書被下候而忝被申候事、

一未之年十月廿五日之夜相模居屋敷ニ西侯億右衛門先立候而踏入、二重之垣を破、憚を申掛候、其時分相模をしつめ可申企かと被存候処ニ何かし殿を其夜ハ同心申候由億右衛門此方江注進申候、其後億右衛門事何之科ニ而候哉被相果候事、

東款本ノマ、

一倅者之内安田孫右衛門・小浜寛六・浜崎源六左衛門・木次郎右衛門此四人は遠嶋寺領ニ而被相果候、其外坂本権兵衛殿・吉田半兵衛殿・中馬助四郎・山とめ彦七、此四人ハ去々年被召置候、主人を乍被召置如此御公義より御暖之事迷惑ニ連々相模被申置候事、

一相模毒銅以前より誰々も無御見廻処ニ鹿見島之曆々兩人居所江不断被成見廻候、是を不審に被申候、右兩人外玄性は不被存候得はとて無心元柴を吞被申則被相果候事、

一毒害ニ相被申候後わか身前より喜入休右衛門殿を頼申御公儀江申上候、相模不忍儀成仕合、世上珍敷存候間御礼明被遊、相手も知れ候ハ、可忝申上候得共其沙汰無御座残多申候事、

右条々相模連々被申候を親子之間ニ而候得は乍若輩大和守承、連々無念存、今度氣違ニ罷成致他同候哉と存候、能様ニ可被仰上事奉願候、

一先年銀玉百貫日相模前より御用罷立候付、年内為御返弁御知行被下候、

是ハ最前貴老様御取成ニ而候、為首尾鹿見島御家老柴江被仰置相調候処今度被召上候、迷惑ニ存候、龍伯様より被下候知行不殘御妹様江進上申、女養子と申定候得共小高ニ而諸事不調候条御知行杯被下候ハ、相添諸事相統候様ニと相模兼々被申置候間、如其菊千代丸を可被相立由御い

もとさまへ御内談申様ニ候、被仰上無相違被ニ頼上候事、

已上、

辰九月廿二日

新城

右年号無之、可為寛永十七年と存候、新城様とは龍伯様御二女ニ而右馬頭御嫡子鳥津守右衛門尉彰久之奥方ニ而相模殿御母堂ニ而大和殿之為ニは御祖母ニ御座候、御妹さまとは寛陽院様御妹ニ而大和殿奥方ニ而御座候、菊千代殿とは御妹様之御腹ニ而大和殿御息鳥津又助忠清事也、大和守殿氣違ニ相成、他出とは此辰五月十七日京都より行衛不相知逐電之事ニ御座候、細事如左、

尚以大和殿題目之御道具等被成御持せ候、書立別紙ニ進上申候、乍然唯今ニ而も御帰宅候ハ、追々可申上候、以上、

一恐惶謹言、
五月廿六日
伊地知奎右衛門
重政(花押)
相良権兵衛尉
頼貞(花押)

野村大学助殿

仁礼主計助殿

頼桂左馬頭殿

新納右衛門佐殿

参人御中

衆書

一五月廿二日昼四ツ時ニ大和殿儀申来候条々々
一五月十七日之八時分ニ大和守殿侍井上慶左衛門、御草履取才七兩人被召

列候而御宿を被成御出今日廿二日迄無御帰宅候由御役人伊地知大蔵助殿木之下御蔵本江為注進被參候、初而左右衛門承則大和守殿御宿三条江參候事、

一十七日より今日迄六日御留守ニ候、此子細木之下江早々可有注進候廻ニ延引如何之由何も御内衆江相尋候得は無御帰宅様子由出度存候得共、与風御帰宅もや候半と存ひかへ申候、役人大蔵助殿大坂江被參候間彼方計ニ廿一日ニ注進申候由候事、

一御つゝら三ツ自身封シ被成候而被召置候、いつもなき事ニ而候由候、又御帰宅之日数も余程経候、御道具被改候而能候半由出合候而被相改候得は違々御秘蔵之御腰物大小拾一腰、小袖六ツ、帷子五ツ、其外小道具見得不申候、御書置無之候事、

一十七日之昼時分ニ御挾箱對三九郎と申夫丸江持せ慶左衛門御宿を罷出候而寺町筋四條之辻江右之はさみ箱を召置則持夫は相帰候、聽而慶左衛門御宿江罷歸、喜三兵衛尉と申夫丸江被申付候は四條之辻江挾箱召置候才七相付候而居候間可持歸由被申付候、則はさみ箱明候を持歸候、才七も御宿江罷歸候、夫より才七老人被召列大和守殿御宿を寺町之方角へ御出候、御跡より慶左衛門參候と御内衆被申候事、

一池田左伝次と申御小姓此中御荷物所存候廻御宿を被成出ル三日前より御草履取才七御荷物之取履為仕由候事、

一 大和守殿五月朔日ニ江戸より御上着被成候、御宿三条通中鳴町之筑前屋長左衛門と申亭主ニ而候、此所江御宿之事前々之御宿在之間、三条より八町上り町下たち売より式前日ニ罷居候さや師二右衛門と申者ニ而候、彼者江石部より池田二左衛門・才七被道御宿之儀被仰越候付右三条之御宿かり申たる由候割木之下御蔵本江不相知事、

一 五月十六日ニ如大坂御下、可被成御迎舟之儀いかか可有之と伊至右衛門江御道ニ被仰候ニ付、十六日之昼時分ニ伏見江御迎船巻上着之様ニと大坂江相良權兵衛尉殿迄申越候、然処ニ御迎舟入間敷由大蔵助殿大坂江被參候時分御留候由ニと承候事、

一 狩野栄甫宿三条近辺之間大和殿御宿江可參由申談合候而御宿肝煎候二右

衛門江有馬左近允殿、入江休次郎殿を以申候様子は、大和殿御筑前屋長左衛門所江被仰上候付大和殿十七日ニ何方江歟被成御出于今無御帰宅、一入心遣ニ可被存候、被成御出たる方角被存候ハ、可被申出候、自然於被隠置は為ニも鵜成問敷候由申候、其返事ニ被成御出候方角不存候、五月二日御宿江御見廻申候へは清水江御參候由承候付御跡より參候、御下向之刻見なれる坊主老人被召列候、彼坊主江御酒可被下由候而茶屋ニ御入候、右坊主も我々も殊之外被下酔なしちか／＼に罷歸候、其後御宿へ節々御見廻申候得は御遊山に御出御留守ニ而候、其以後御遊山之所江不罷出候、被成御出候方角念を入可承候、御内衆權之允節々被相咄候間子細可相尋由申候事、

一 三条之御宿長左衛門江も右向人を以申候は大和守殿御帰宅遲候、一入心遣ニ被存候半、被成御出候方角念を入可被承由儘ニ被申届候、其返事ニ御宿を上ケ候而迷惑ニ存候、あまり之事ニ方々うらかなといたし申候ニ候、被仰通承届被申候事、

方々江立聞ニ被參候衆

一組 清水建仁寺辺 有馬左近允殿 堀新介殿

一組 東福寺大仏稻荷 川村正右衛門殿 木場鉄助殿

一組 四条辺 ふしの森 赤崎六右衛門殿 入江休次郎殿

一組 東寺中道寺辺 日高源藏殿 堀六左衛門殿

一組 六条辺 赤崎宮内左衛門殿 葉屋与右衛門殿

右六条江五月十七日八ツ時分ニ一刻大和守殿才七老人召列被成候而御立帰被成候由おけ屋之亭主十三郎と申候、

右之人數帰宅候、何を被承立子細無之由候

一組 鞍馬木舟辺 赤松宮内左衛門殿 田中伝兵衛殿

一組 ひろい山坂元辺 木場鉄介殿 堀六左衛門殿

一組 加茂大徳寺黒谷辺 有馬左近允殿 横田長右衛門殿

一組 妙真寺北野辺 日高源藏殿 堀 新介殿

一組 六条四条辺 入江休次郎殿 葉屋与右衛門殿

右之人數為何儀も不被承立候、

五月十七日二大和守殿御内衆六人帷子肩衣袴被下候、子細別紙ニ書立進上申候、

寛永十七年

辰五月廿六日

伊地知李右衛門判
相良権兵衛尉判

覚

五月十七日二大和守三条宿被立出候而不被罷居ニ付申分之事、
江戸を四月廿日ニ被罷立、戸塚江被泊候迄は本陣宿ツニ供衆何も罷居候、左候得は宿も二三口間宿ニツニ分可申由被仰候処、小田原より御宿老ツ又我々宿老ツ供衆少々ツ、分罷居候、其中兩度は宿せき候故一ツニ罷居候事、

於赤坂泊中津野幸右衛門承候は我等事篠原渡右衛門召列直ニ大坂江罷下候而可然候、頓而可為上京候条下物杯多可有候、左候へは銀子も無之由候、此比は国元より仕登船可參候、無其儀候は借銀を仕篠原渡右衛門江持せ登可申候、大藏丞は直ニ大坂江可罷居由承候、我等申候は京具服所江前々より出入之算用方今度究申度候条可罷登由申候、重而承候は先銀を早々相登、大藏丞罷登候は校量次第と承候、就其間之地蔵より先江罷通五月朔日ニ大坂江罷着、志布志屋三郎右衛門殿江銀子三貫弍百五拾日借用申、江戸替銀大坂ニ而丸屋庄右衛門と中人江相払候、其上借銀仕京都江可寄登と取組候処、国元より銀子三貫八百日余參候条則京都、五月三日ニ使吉田半兵衛尉、又大藏丞・渡右衛門同前ニ罷登候、定而御宿所之下辺ニ而候すると存、葵屋与右衛門殿所江參尋申候事、

赤坂より大坂へ被召下候ニ付池田早兵衛尉ニ同名ニ右衛門を以申候は申ニ不及儀ニ候得共、若宿脇ニ被成候而は可惡敷候、木之下御藏奉行衆江被仰候而可然候由申置候事、
一葉屋与右衛門殿江尋申は五月朔日ニ大和守從江戸被罷登候間定宿木之下辺ニ可被申付と存候、御存有之候条御訓可被成由申候、与右衛門殿被申候は扱者御上洛ニ而御座候哉存不申候、木之下ニ可相知候、尋可申由被申候、夫より人江久次郎殿、又有馬左近殿状を以被尋候へ共此辺ニは御

宿ニ而無之由被仰候、使罷帰候刻諸町ニ而供衆内前田主税助と申者ニ篠原渡右衛門行合同心ニ而与右衛門殿所江參候而宿三条之由相知候事、
一我等事則御宿ニ可罷出候得共、国元より指合有之由大坂ニ而承延慮申候事、

一國許より參銀子使好田半兵衛尉直ニ三条御宿江持參被申候事、
一五月三日篠原渡右衛門を以承候は御前様御召料御ひとへもの御かたひら御袋様御單物ハ帷子御姫様御曹子様御帷子又兄弟衆かたひら女房衆帷子其外御下物大藏丞手前より調可申由承候間与右衛門殿所へ罷居候馬道具等は御手前より調可被成由承候事、

一五月十日ニ申候は大方御帷子共出来申候条御下可被成由申候、被仰候は木馬道具うるしひさる由被聞召候間出来次第御下之由被仰候事、
一同十三日申候は御帷子皆々出来申候、早々御下向可被成由申候、被仰候は下物相調候哉一段之儀候、京都江長々逗留ニ而候条大坂二下直二舟ニ可被召候、大藏丞は早々罷下大坂御藏奉行衆御船奉行衆江申入船を調相待可申由承申候、五月十五日は悪日ニ而候、十六日は早朝打立可被成由候、於其儀は一段之儀候間追付御下待上候由申上候事、

一同十四日ニ大藏丞台所役人池田早兵衛尉次之荷物才領安田次郎兵衛尉・篠原渡右衛門如大坂罷下候事、
一同十五日ニ御馬式足罷下候ニ中津野幸右衛門を以承候は十六日ニ御下可被成候由候得共十七日十八日之間ニ必御下可被成由承候事

一同十七日ニ御下可有之敷と存待上候得共御下無之条無心元存同十八日ニ大坂より仙光坊御登三郎右衛門殿被仰候状其のほせ候而詔可給由承候間細々状調早々御下向之由池田二左衛門迄状登申候事、
一廿一日ニは余りおそなをり候間鰐脚を仕立、心の及状を調好田半兵衛・池田仁左衛門・財部権之丞までのほせ候事、

一廿一日之戌時ニ京都供衆中より喜之助と申者を以我々江申下候は大和守殿十七日ニ見物ニと申罷出被成候而于今無御帰候、追而可申上候得共今も御帰被成御しかり可有之と存延引申候、余程延候故を以一人右之適申下候由被申候、其左右承驚夜中ニ大坂より罷登三条宿へ參尋候へは未帰

候故池田久左衛門を同心仕追付木之下江罷出伊地知左右衛門殿江御披露
申上候事、

辰五月廿六日

大和守内

伊地知大蔵丞(花押)

伊地知左右衛門殿

相長権兵衛殿

大和守殿御内衆口柄聞者

好田伴兵衛申分之事

一御国許より銀子持せ五月二日之曉ニ罷上り申候事、伊地知大蔵丞殿大坂
江被參候而同道申罷上り申候事、

一何日とは覺不申候、清水寺江御參被成候由ニ而三条之御宿を被成御出候

へ共清水江は無御參候而直と茶屋江御出候、御供衆好田伴兵衛・池田二

左衛門・中津野孝右衛門・財部權之丞・安田次郎兵衛・才七御供仕候、

一右之日六条之けいせい五人右之茶屋ニ召寄候内吾人おりべと申女は大和

様召寄候、半兵衛よひ申候けいせいハ出雲と申候由被申候、残女三人之

名不存候、右五人之衆江銀子相渡候ハ半兵衛かけ被渡候、

一右之後又清水之右茶屋へ御出候、半兵衛・權之允・才七御供申候、けい

せいよひニ半兵衛被遣候へ共半兵衛申候はけいせいは無隙之由申候て召

列不申候、然処ニ權之丞・才七又被參候而けいせい四人召列被參候内吾

人おりべと申女大和様召寄候、半兵衛ニ被下候女ハおやまと申女ニ而

候、残名不存候

一又右之後清水之茶屋山伏所江御出被成候、權之丞・半兵衛・才七御供仕

候、けいせい四人召寄申候、大和様御よひ被成候おりべと申女、残けい

せいハ名不存候、

一五月十七日ニは半兵衛・二左衛門御物かや買ニ罷出候、又其後半兵衛・

二左衛門・權之丞此三人私之買物ニ昼は罷出候、其留守之間ニ大和様御

差出被成候事、

本ノマ、

一同十八日ニ罷出六条ニ未おりへと申女房江大和様様子尋申候へハおりへ

申候は昨日七ツ時分御出候而一刻御立帰被成候、又前々才七よひ申候女

こふしへ尋申候も右同前申候、一刻あけ屋へ御出候而蓋被成候由申候、

それよりあけ屋へハ何かたニ前候哉と申候へハこふしあけやへ引付申候
付あけ屋ニも尋申候得共則御尋被成候由申候、

一五月十七日ニ銀子百四拾式外五分御用之由ニ而差上申候、かやうに過分

ニ銀子入間敷と申候得は御書物被下候間早々あけ申候へと被仰候而才七

江相渡申候、

一慶左衛門・才七私之買物少も不仕候、

池田二左衛門申分之事

一石部より御先ニ京御宿取ニ被遣候、様子は京之ニ右衛門と申人江參候而

かり可申由被仰付候、二右衛門不存候ニ付才七と申者案内者と被仰付候

ニ付二右衛門所江參候、就夫二右衛門前より今之三条宿筑前屋長左衛門

所かり候而被渡候、

一何日とは覺不申候、清水寺へ御參候、下向ニ茶屋ニ御出候、半兵衛・權

之丞・才七・二左衛門御供申候、けいせい五人召寄申候、二左衛門よひ

申候女むくら、残之女名不存候、

一五月二日ニ清水寺へ御參被成候時中途清水とぎおんとの間ニ而年比五十

程ニ罷成候入道ニ行逢被成候而清水之様子無御存候間案内者可仕由被仰

候ニ付案内被申候、下向ニ茶屋と而右入道ニ御酒給候、よひ申候而入道

は跡ニ罷居候、又御宿をかり申候而あけ申候、二右衛門も跡より被參候

此二右衛門と入道ハ跡ニ被罷居候、大和様は御先ニ御立ち成大仏見物ニ

御出候而それより御立帰被成候、

一銀子百目余大和様御手前ニ半兵衛より御請取被成候ハ朝かや買候而罷歸

候而又私之買物ニ罷出候時半町程參候を半兵衛召寄銀子あけ申候へと

被仰候而御請取候由被申候、

一五月十七日ニ朝ハ御かや買ニ被仰付半兵衛同心申候而罷出候、屏私之買

物ニ權之丞・半兵衛・二左衛門三人暇申候而買物ニ罷出候跡ニ大和様御

差出被成候、

道具持喜兵衛申分条々

一五月二日ニ清水寺江御參候時御供申候へ共御道具御持せなく候、

一五月十七日ニ大和様御指し候刻は慶左衛門はさみ箱持せ御先ニ被罷出

候、其跡より才七罷出候、頓而慶左二門罷歸候而はさき箱取ニ夫丸參候
得と被申候、其跡より大和様才七召列御出候、

夫丸三九郎申分

一五月十七日御はさき箱取荷慶左エ門持せ被召列候付持候而寺町筋四条上
ル町迄參候時そこへ召寄候而可罷歸由被申候ニ付罷歸申候、夫より大和
様才七召人めしつれ御差出被成候、頓而慶左エ門被罷歸候而先之はさき
箱取ニ參候へと被申候而喜兵衛と申者へ夫よりやかて慶左エ門罷出被申
候、

池田左伝次申分但御荷物衆年比十六七程

一五月十六日ニは御暇申清水見物ニ權之允同道ニ而罷出候、清水之茶屋ニ
可罷居由權之承被申候付罷居候、跡より大和様御出候而才七、左伝次兩
人ニけいせいよひ被成被下候、其内は大和様は建仁寺江御參候而御歸宅
之刻はや仕廻申哉と被仰候而頓而御歸被成候、

一五月十六日ニ左伝次御暇申候跡ニ内衆皆々ニ帷子上下共被下候由候、十
七日ニ承申候、

一五月十七日三日前より御荷物才七ニ被仰候、取あつかひ被申候、

一五月十七日ニ御差出前ニはさき箱取明候而返り申候を大和様よりなをし申
候へと被仰付候付なをし申候、最前御はさき箱出候時は不存候、

渡辺權兵衛申分

一 台所を調申候間尙度も御供不申候間世間之様子不存候事、

一 老度夜之四ツ時分ニ御歸候事御座候事、

一 五月十七日ニはさき箱出し慶左エ門持せ被參候事、

一 不審成人御見廻為被申人無御座候、

夫丸喜兵衛申分

一 はさき箱取ニ可參由慶左エ門被申候、然共有所不存候間難成之由申候へ
は寺町ニ才七はさき箱ニ相付居候間可參由被申候付參候へハ四条之かと
に御座候を持歸申候、才七も同前ニ歸り被申候、

一 頓而大和様は才七召人めしつれ御出候、其跡より慶左エ門被罷出候、五
月廿四日ニ大坂より罷上候、

中津野孝右エ門申分

一 一番ニ清水へ御參之時は跡より主税助同心申參候而清水ニ而迫付申候、
茶屋ニ御立寄被成候、孝右エ門・主税助兩人は供不被仰付候処ニ為何儀
ニ而參候哉と承候ニ付御先ニ罷歸候、跡之儀不存候事、

一 右之後御供可仕之由被仰付候付御供申候、然者茶屋之奥ニ入候而可罷居
之由被仰付大和様は才七召人召列御差出被成候、頓而權之丞・半兵衛尉
兩人ニ而けいせい六人めしつれ被參候、半兵衛尉・權之丞・孝右衛門・
才七・喜兵衛尉・次郎兵衛へ被下候、大和様は御よひ不被成候、

一 大和守様ハ連々被仰候はだはんニ而候間女共ちかく不被成召寄候、

一 道中ニ而も大藏助殿ハ別宿を被仕候得と被仰付候得共宿なとせき申候時
ハ同宿又別宿をも被仕候事ニ而候、不審成人ニ御見廻無之候、

財部權之丞申分

一 五月十七日ニ大和様御宿御出被成候刻は御暇申買物ニ罷出有合不申候
事、清水通之茶屋又三年坂之茶屋以上四所ニ度々御遊山ニ御出被成内ニ
式度ハおりへと申女六条より我等吉田半兵衛尉召列候而參候、又尙度ハ
ふくしまとやらん申女是も六条より我等と才七兩人ニ而めしつれ候而參
候、其刻我々江も女御買せ被成候而被下候、茶屋之亭主又日限なと覺不
申候事、

一 五月十七日之夜入時分迄無御歸宅ニ付人足喜兵衛召列六条へ参りおりへ
と申女ニあい大和守様此辺ニ無御出候哉と尋候へは今日八ツ時分ニあけ
屋ニて掛御目候、明日は早々御下向ニ付御暇乞ニ御越被成候由被仰御盃
被成、やかて御立歸被成候由申候、

一 十八日之昼迄無御歸宅候ニ付半兵衛、我等致同心六条江參前様才七買候
女房とふしと申女ニ逢尋候へはおりべ同前二昨日あけ屋ニ參候由申候、
其あけ屋をおしへ候へと申候へは人を付候而あけ屋ニ參尋候へハ昨日御
出被成候御方やかて御立歸被成候、其後無御見得候由申候、あけ屋之亭
主は名不存候、

一 建仁寺脇寺禅居庵江五月十一日相模様御命日ニ付樽錢老買文持せ被成自
身御出被成候、御供申候、又其後尙度御見廻ニ而候、

一 はしめけいせい呼ニ参候ハ半兵衛・權之丞兩被仰付参候、而罷成申上候得は才七申候は我等参候而召列可申由申候ニ付權之丞相付兩人参めしつれ候、

一 大和守様は三度女房召寄候、權之丞ハ四度、才七ハ五度、半兵衛三度、二右衛門一度、右伝次一度、孝右衛門一度、次郎兵衛一度、傾城召寄被下候、

一 權之丞よひ申候女はせんと申候、才七よひ候女ハこぶち、殘女名は不存候、

一 はしめ清水寺江御参候時權之丞は大和様江四條ニ而追付申候而見申候ハ坊主老人相付罷居候而清水案内者被仕茶屋迄相付被申候而酒ニよひ被申跡へ被罷居候、其茶屋ニ女老人宿之才七覚申候ニ右衛門前よりよひこみ被申候而しやくとらせ被申候、

一 江戸ニ而又兵衛所へ罷居候うらかた杯仕候者ニ慶左エ門度々被参候、一 江戸又道中并京御滞留中地下衆など見廻無之候、

辰 五月廿四日

聞手 伊地知本右衛門重政

同 相良權兵衛頼貞

同 奈須五左エ門祐直

赤松宮内左エ門義隣

有馬左近將純実

覚

一 前々御けいづ入申候箱は御座候へ共けいづハ無之候、国本も参候哉、又者不参候哉、不存候得共御尋ニ付前々様子申上候、以上、

辰 五月廿四日

篠原渡右エ門(花押)

京都

御藏御奉行衆中

猶々申上候、大和殿御行衛相知不申候ニ付御内衆荷物共跡ニ見被申候へハ御国元より御持せ候御道具内無御座候具御座候間、以別紙申上候、將又委細之段幸此度富山弥一兵衛殿下国ニ而候間、委申合候条可被聞召上候、以上、

懇令啓上候、仍大和守殿江戸より為御帰国五月朔日ニ京三条江御着、御宿被成候、而京都江私之御用等被成御調候ニ付御逗留候、然処同十七日昼時分何方へ歎御差出被成候而無御帰御行衛相知不申候由大和守殿役人衆伊地知大藏丞、伊地知本右衛門尉在京詰前ニ而候処、木之下江五月廿二日ニ参候而如此之仕合之由被申出候、就其本右エ門尉より相良權兵衛尉大坂江罷在候注進承候間、則致上京候而方々手分仕相尋申候ニ候へ共、今日迄一円ニ御行方不相知候付御注進申上候、江戸へも右之通有馬左近將曹殿を以巨細之様子申上候、大和守殿御行衛相相知候ハ、追々御注進可申上候、誠惶誠恐謹言、

寛永十七年 六月二日

相良權兵衛尉

頼貞判

伊地知本右衛門尉

重政判

録 出雲守様

三 左衛門佐様

川 因幡守様

下野守様

彈正大弼様

参人々御中

(以上)

一 書令啓候、然者大和守殿去月此元御暇ニ而京都江五月朔日ニ被成上京(着)三条江宿候而同十七日迄被成逗留、十七日之昼程ニ殿原一人、さうり取一人にて何所共なく御出候、惣内衆も七日八日程被相待候得共御座所不相知候間、伊地知本右殿道正江被罷居候ニ注進被申候付則三条之御宿江被懸付候而從御家中之細工稽古衆与中衆御家江致出入衆にて方々相尋候へ共五月廿五日迄は御行衛不相知候ハ此方へ注進被申上候、自然不慮之儀共候而被成御果候共從其所選申出候ハ、可及大事候条少も無断断板倉殿江可致披露候処ニ無其儀候間御果候ニ而は有之間敷候、定次第ニは御座所可相知と被申候而内衆も先一節は御行衛可承由ニ而京都江逗留可

申由候間大坂江被罷下候而被承合候様ニ申渡候、御氣違ニ而も候はんかと存候、内々御荷物なども少々御退身にて被召列候兩人ニ計御知せ候つる由申候、如此存之外成儀無之候、薩州様も被成御驚候、先は當時之様子申下候、市來備後守殿迄各より内証ニ而可被申渡候、もはや殊之外程久候而御立帰は有之間敷候かと存候、猶委細は五代正助・山田十左エ門(尉)被罷下候間口上ニ可申達候、恐惶謹言、

六月十日

伊勢兵部少輔

貞昌(花押)

山田民部少輔

有栄(花押)

北郷佐渡守

久加(花押)

三 左衛門佐様

兼 治部少様

川 因幡守様

下野守様

彈正大弼様

參人々御中

一自江戸去月十九日之書状ニ貴殿可被參之由被仰出候間急度可差上せ由候内々申合せ候と存候、今度ハ在江戸之可為用意候条其御心得尤ニ候、別而江戸御仕合能分申來候、明朝可申談候、恐惶謹言、

六月十三日

久慶(花押)

彈正 久慶

新納二右衛門殿

猶々ふしき千万之儀申來候、大和殿五月十七日京都より被走候由申參候、誠に其身の不肖は不及申、御外聞と申、次ニは御一門中之嘲口惜次第三候、絶言語候、不入事ながら筆之次ニ申候、火中、

一加世田小川監物日記如左、

寛永十七庚辰年 辰六月小

一十九日嶋津大和守様江戸より御下向之時京都江長々御逗留候而何方共不知御うせ候由案内膳殿と出衆儀ニ付御地頭ニ使ニ被參候便ニ被承候、其後高野山江御塙忍之由しれ候て度々御迎に諸人御登御下向被成、熊之嶽江御入候、何ぞ上儀悪くハ無之候得共御述懐ニ而候はんやと聞得候、

尚々不思儀之仕合ニ候、已上、

今口申ノ刻ニ大和守殿蓮金院江御登山候、早々蓮金院より飛脚差下候、其元可然様ニ因州江被仰上候而可然候、予や有合候間先々懸御目候、御存分之体一向不承候、蓮院より可被仰候、十六日ニ罷下可得御意候、先以早々如此候、恐惶頓首、

(宋カキ寛永十七年)

夷則十日

一乘院

在判

相良権兵衛尉殿

伊地知奎右衛門尉殿

人々御中

尚以御存分ハ如何様共不承届候へ共先は一左右申上候、蓮金院へ直ニ御付被成候、是以為御心得候、以上、

熊以飛脚致啓上候、然者大和守殿今日申之刻ニ当地江御越被成候様子内々被仰聞候之間則以吾人申遣候、委曲御返事ニ承度候、恐惶謹言、

(宋カキ寛永十七年)

七月十日申ノ刻

蓮金院

秀伝在判

相良権兵衛尉殿

伊地知奎右エ門尉殿

參

(以上)

追而申入候、今日未之刻ニ高野蓮金院より爰許御藏衆迄以書状被仰越候、大和守殿去十日ニ蓮金院へ御出被成候、兎角之様子ハ未被為聞候へ共先御注進被成出候、一乘院も土蘭盆を高野可被成様由候而于今被地へ逗留被成候、同前ニ書參候間うつし差下申候、此元へ和州役人伊地知大藏丞被罷居候間御藏奉行衆付衆之内一人相附明日高野へ差

上せ何とぞ御爾へ御下向候様ニと申させへき由談合申候、數日無御出候間御前を心遣ニ被思召様子ニ候て因分之三光院を相付可申候、其上ニも重く被思召候ハ、一乘院可有同道哉ニ狩野介殿・権兵衛尉殿・本右エ門殿談合申候、江戸江も則飛脚を以申上候、委細五右エ門(尉)江申達候間可被聞召達候、恐惶謹言、

(朱カキ寛永十七年)

七月十七日

川上因幡守

久因(花押)

彈正大弼様

下野守様

三原左エ門佐様

鎌田治部少様

人々御中

今度御因本江不罷下ケ様之身上ニ罷成候事ハ前々相摸何之罪も無御座廻如何様之儀ニ而候哉、度々切腹ニ相極候得共、中納言様御存分無相違間頓而被召直候、其後毒害ニ逢致死去候得共、終ニ無其沙汰生涯此旨其子としてハ遺恨ニ存候、少も無別儀候、

七月十四日

大和守

久章在判

小川監物日記

一正保二年酉雪月大朔日己卯
十一日

一島津大和様數年熊之嶽門前江御堪忍被成候、遠鳴可被成由候而谷山へ御下り寺へ御宿候、為何御心中ニ而候哉、谷山衆入番之衆を主従三人ニ而切付主従共ニ御はまり候、御手から働之事無双由申候、内衆一人跡より荷物取持參候、奉行新納二右エ門殿を切候、則二右エ門殿被切果候、二右エ門殿其後被相果候、

猶々手所之様も中神内蔵允より細々申越候、涯分御養生肝要ニ候、

一此度就島津大和守殿流罪各々指越既従一之瀬如障子川大和殿発足之以

後相殘郎等二人被召列婦之中途ニて一人対貴所相働候処、組伏被刺留之由無比類儀ニ候、舍兒甚右殿迄は申入候得共、數ヶ所刀疵之痛為可承如此候、恐々謹言、

二款
十一月十四日

島 圖書頭

久通(花押)

新納二右エ門殿

御宿所

猶々極寒之時分ニ而疵も痛候ハんと念遣存候、御養生之時分書面御六ヶ敷候ハんなから遠候故以状令申候、以上、

一態用飛札候、大和守殿御事ニ付彼地へ被指越之処ニ不慮ニ出合數ヶ所被手負候由承驚入候、何程之手ニ御座候哉、為可承用飛札候、乍不申疵御養生肝要ニ候、遠方之故見廻不申候、殘多候、其場之仕合承、乍案中之儀候、我々大慶存候、御而之節細々御咄可承候、猶重而可申入候、恐惶謹言、

十二月十六日

新納加賀守

忠清(花押)

新納二右衛門様

人々御中

旧伝集

一島津大和守久章ハ尾張様へ參り致奉公さんと被申上候、彼方より島津支族ならば系図を持參被致候へと有之、其儀難叶して夫より高野へ入り居住候、漸々御圍へ呼下し谷山の清泉寺江被召置候、其後物頭之三原伝左衛門尉手ニ被遣候、大和殿案内申入候へハ寺之客殿脇ニ被出候処を伝左エ門上之山より弓ニ而真中を志し射けれ共誤て高股を射られ候得者久章大にいかつて武士の勝負を決せんニ飛道具ニ而するものか寄れやかくれとの、しり大庭に飛出られて其勢ひ天魔鬼神の如し、中々寄る者なし、伝左二門ニ之矢ニてみ間の真中を被射候、其時皆々寄せ掛打果候と也、久親系伝

一島津大和守雖為貴戚深有犯罪而屈居于川辺郡山之寺者有年於茲矣正保二年甲申十二月十日使久親往其地伝達流之命、大和守無障已ニ以到于谷山翌日久親引大和守之家臣三次者欲歸跑兎鳥、未退山中之際不意三次忽然拔短刀切久親、久親欲生捕之、已ニ雖与伏以初太刀自腕至指頭深所切傷不得生捕而遂刺殺矣、久親婦私宅加療養亦非驗、同月廿四日死畢、享年四拾一也、

肝付縫殿助兼佳系伝

一谷山江致居住御奉公相勤然延島津大和守殿被蒙御勤氣谷山清泉寺江蛭居次時為警固番奉谷山県令命相勤之節大和殿正保二年西十二月十一日及殺害刻遂戰死、依之福昌寺戰亡帳被記之、

右元禄七戌九月十七日肝付伊左エ門書出也、

右之通写集前文之事考合候処慶長七寅八月又四郎殿一件風説ニ付、松齡様御誓詞被遊候以後同十七子六月ニも誓詞又其後は寺領ヲも被仰付又其後も御神文共被下、又其後は番付如く度々切腹ニも被為及程之事共有之、終毒殺等敷被相果、其御二男大和殿ニ而是ハ乍庶子も寛陽院様御同腹之御妹様を龍伯様御二女新城様彰久後室御養女として御取合有之、光久公

御事は右新城様御妹なからも御前様ニ為被為立、持明様御養子として御家督為被遊御事候へハ龍白様御一筋も猶宜被為統差次ニは大和殿も右通ニ而格別成御取持と相見得候へ共抑御祖父右馬頭殿佐土原移之時分より彼一城之肥近ニさへ不被召列、為被殘置又四郎殿故ニも候歟、却而其後は佐土原ニも為劣一所共ニ而は何歟不足ニ被思召事も有之、右次第被相果候歟、就は大和殿ニも同様述懐被為受継、何れ不忠之御身持難被及是非、右為躰ニ而被為殺候歟、然は慶長七年より正保二年迄四拾四年目右馬頭殿より大和殿迄四代相掛幾度も御隔意等敷事共不相止、大和殿限二頓テ平治為仕筋ニ被相考、漸々勢ハ微少ニ成行候へ共初発之比は決而御内輪ニ而難被成訳も有之、表向因松様御貴之御計略ニ為成立事ニは無御座哉、治乱之境ニ而只今太平之人氣ニ而は難心得事共可有御座、兎角誠忠之事ハ一旦は晴曇有之候へ共跡ニハ頭れ申習候間、前件貞昌杯御使為被相勤も誠忠之計策ニ可有御座、夫故ニ社琴月様御血筋如唯今被為盛候

半、誠忠之蹟れ候証拠と奉存候、然共秋水先生國史江正論為被仕置も誠忠識見ニ可有御座、夫故ニ社此度世評ニ申やう御城代衆御都合能被仰渡候も先生之正論被為聞届候故、是亦誠忠之御勤被為尽候半、然は此三人皆向々事は相替候へ共為御家誠忠ニ相叶為中は同前歟と相考乍恐極内分為吟味写集且愚按書述置もの也、可秘、

天保六年乙未二月廿六日

平季安(花押)

既刊史料名

刊行年次	史料名
三十四年	薩藩政要録
三十五年	丁丑口誌(下)
三十六年	〃 (上)
三十七年	薩摩國新田神社文書
三十八年	一向宗禁制關係史料
三十九年	薩摩山田文書
四十年	諸家大概・職掌紀原
四十一年	薩摩國阿多郡史料・山田聖栄自記
四十二年	御登道中日帳御下向・列朝制度
四十三年	明治元年戊辰戦役關係史料
四十四年	伊能忠敬の鹿兒島測量關係資料並解説
四十五年	管窺愚考・雲遊雜記伝
四十六年	川上忠塞一流家譜
四十七年	本藩人物誌
四十八年	薩陽過去帳

鹿兒島県史料刊行委員会

五十音順

川越政則	南日本新聞社
芳即正	鹿兒島県立図書館
北川鉄三	鹿兒島女子短期大学
桐野利彦	右同
桑波田興	鹿兒島大学教育学部
五味克夫	鹿兒島大学法文学部
郡山良光	鹿兒島短期大学
小西四郎	前東京大学史料編纂所
岸川稔吉	鹿兒島県教育庁文化課
竹内理三	早稲田大学
原口虎雄	鹿兒島大学法文学部
福満武雄	南日本放送 K・K
宮下満郎	鹿兒島県立鶴丸高等学校
村野守次	鹿兒島県立青少年研修センター
桃園恵真	鹿兒島大学法文学部

非 売 品

昭和五十年三月三十一日

鹿児島市城山町一の一

発行所 鹿児島県立図書館

印刷所 鹿児島県教員互助会
印刷 不動産株式会社